

UCLA

UCLA Previously Published Works

Title

ASIA-KEI JOSEI SAKKA RON CHINMOKU-NO KOE-WO KIKU

Permalink

<https://escholarship.org/uc/item/6349q2gp>

ISBN

9784779121425

Author

Cheung, K-K

Publication Date

2015-09-01

Peer reviewed

King - Shok Choung

Articulate Silences

Hisaige Yamamoto,

Maxine Hong Kingston,

Goy Kogawa

キンコック・チヤン

【著】

アジア系女性作家論

沈黙の声を聴く

和泉邦子 + 小松恭代 + 中根久代

【訳】

彩流社

アジア系女性作家論

沈黙の声を聴く

キンコック・チヤン

【著】

和泉邦子

+ 小松恭代

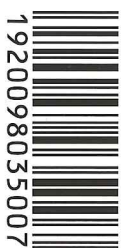
+ 中根久代

【訳】

彩流社



9784779121425



1920098035007

ISBN978-4-7791-2142-5

C0098 ¥3500E

定価(本体3,500円+税)



彩流社

【Historical Silences】

Hisaige Yamamoto

"Sevenben Symples"

"Yonko's Carthquake"

"The Legend of Miss Saegawara"

【Povocative Silences】

Maxine Hong Kingston

"The Woman Warrior"

"China Men"

【Artistic Silences】

Goy Kogawa

"Obasan"

King - Rok Cheung
Articulate Silences

Hiroye Yamamoto,
Maxine Hong Kingston,
Soy Hogawa

キンコック・チヤン

【著】

アジア系女性作家論
(沈黙の声を聴く)

和泉邦子 + 小松泰代 + 中根久代
【訳】

彩流社

謝辞

本書を世に送り出すことができたのは、米国諸学会評議会ならびにカリフォルニア大学人文研究所（UCIRI）から特別研究員奨学金を頂いたお陰である。その援助によって、私には読んで考えそして書き上げるのに必要な時間を得ることができた。大学評議会およびUCIRIのアメリカ文化財研究所とアジア系アメリカ研究センターから受給した研究助成金で、アレクサンダー・ヤング、ロバート・クワン、ジェームズ・リ、レイチェル・リ、クリステン・ルーシエナー、リサ・モーター、ライアン・ニヤ、シャロン・パークの方々から熱心な心強い助力を頂くこともできた。セレスト・スケンクとバーナード・クンドラーは当初からずっと本書の企画に関心を寄せ、的確で刺激的な批評を下さった。バーバラ・スミス、シェリー・フレイシャー、フレイキン、エレイン・ヘッジズ、ゴードン・ハットナシ、キヤサリン・ペーテイング、レナータ・スタンダールの皆さんは、編集に関しても惜しみなく専門的な助言を下さった。

ナンシー・R・ミラーの「フレイミンガムの課題」セミナー（ダートマス大学批評理論講座、一九八八）からは多くのことを学んだ。私はミラーの誤りを恐れぬ探究心を賞賛し、彼女の励ましを心に銘記している。一九九一年から九二年にかけてUCIRIアーバイン校で開催された「フレイミン

Articulate Silences: Hisaye Yamamoto, Maxine Hong Kingston,
and Joy Kogawa, by King-Kok Cheung
Originally published Cornell University Press
Copyright © 1993 by Cornell University
This edition is a translation authorized by the original publisher,
via Japan UNI Agency, Inc., Tokyo
Published in Japan in 2015 by SAIRYUSHA

第二章の一部は、次の論文に違う形で発表している。"Double-Telling: Intertextual Silence in Hisaye

ジェラードには言葉で言い尽くせないほど感謝している。

メイアラン・タンは、うんざりするような私の自信喪失話に我慢してつきあってくれた。ラストレクションのために素晴らしい俳句を送ってくれた。エリザベス・キム、ジェフ・スピルバーグ、ソ・ブリエツァには慎重で簡潔な報告を送ってもらった。ヒナ・イジリとカナ・イジリは、本書のイシてくれて、私のためにスロークカンでの「アイルドブーク」を買って出してくれた。遠方にいるスーザ友達からは行き届いた気配りをもたらした。ロザリント・メリスは、一度ならず原稿を綿密にチェックしながら話し、聴き、書くことが私の学問への刺激となっている。彼ら学生からはひとかたならぬ恩を受けている。彼らのお陰で私の口や耳や頭が活発に活動している。彼

教えて下さった解釈法のお陰である。

足と見ることは決してなさらなかった。また私の読みが常に豊かに深まってくのには、これらの先生がノーマン・ラズキン諸氏にもまたお礼を述べたい。私の話し方がゆとりだからといってそれを能力不足が以前に指導いただいたジョン・アンソング、ジェームズ・アデベリ、ステイブ・グリス

めて頂いた時はいつもお言葉どおりに受け取ることにしていた。

あった。リチャード・ヤボロウには特別感謝を捧げたい。滅多に褒めて下さることはなかったが、褒本の出版はいつだね?」と問うてプレッシャーをかけて下さったが、それは私には大いに必要なことで

ダートンは簡潔なアドバイスを授けて下さった。ジョン・ボスト学科長は定期的に「それで、君の

4

言説」の参加者から、温かい親交と厳しい批評を頂戴した。緻密に読んで下さったアン・ダネンバグとアグワトル・ジャンモハメッドに特別にお礼を申し上げる。

アジア系アメリカ文学の領域は規模が小さいがゆえに、専門家たちとの交流はより一層貴重なものとなる。スタン・ヨギとサウリン・ウオントは常に知的な付き合いをしていただいている。フランク・チン、C・ロック・チェア、ドナルド・ゴールニク、エレイソン・キム、エイミー・リン、リサ・ロウ、ゲイル・サトウの各氏から論文を送っていただき、また私の論文も批評して下さいましたことに感謝申し上げます。テルヨ・ウエキは、『失われた祖国』に描かれた「愛」を表す二つの漢字を解明して下さい、シユメイ・シーは、本書のためにその二文字を書いて下さった。

UCLAの同僚たちは様々な面で私に寛大であった。私がアジア系アメリカ文学研究を始めたとき、ダニエル・コールド、ルイシー・チェン、ハバート・モリス諸氏は、私には新しい分野を探求していく力があると信頼して下さいました。マイク・ローズは私が時間を上手く使えるようにと配慮して下さいました。ナカニからは言い尽くせないほどの精神的・物理的支援を頂戴した。ザレリー・スミス、カレン・ロウ、ステイブ・エンサーは原稿の一部を読んで心強い示唆を与えて下さった。ケネス・リンカンは、ご自分の担当分以上を読み、私の文章が余りにもトリカルになり過ぎたり、言葉足らずで分かりにくくなり過ぎたりしたとき指摘して下さいました。ユウジ・イチオカ、ザレリー・マツモト、ラツセル・リオンの各氏はアジア系アメリカ人の文化と歴史の幾つかの点に関してご教示下さった。マーサ・バンタは優しく気遣って下さり、かつ畏敬すべきお手本を自ら示して、私を鼓舞激励して下さいました。ヘンリー・アシカガ、ケリーからはその博識な知識の一端を頂戴した。ウォルター・アン

Yamamoto's Fiction," *American Literary History* 3.2 (1991): 277-93. と "Trice Muted Tale: Interplay of Art and Politics in Hisaye Yamamoto's 'The Legend of Miss Sasagawara,'" *MELUS* 17.3 (1991-92): 109-25. 第四章の1

部は以下に掲載予定である。"Attentive Silence in Joy Kogawa's *Obasan*" in *Listen to Silences: New Essays in Feminist Criticism*, edited by Shelley Fisher Fishkin and Elaine Hedges (New York: Oxford University Press, 近

刊)。これらは許可を受けて本書に掲載している。(*一九九四年上梓。一三頁一二九頁)

「マキシン・ホーン・キンダストンの父上の覚え書きが余白に書き込まれた中国語版『アメリカの中国

人の本の表紙とページの複写は、作者とバークレイ校バンクローフ図書館の許可を受けたものである。

左記の作品から引用の許可を頂いたことにお礼を申し上げます。

Maxine Hong Kingston, *China Men*. Copyright © 1977, 1978, 1979, 1980 by Vintage/Random House, New York, and Schaffner Agency, Inc., Tucson, Arizona.

Maxine Hong Kingston, *The Woman Warrior: Memoirs of a Girlhood among Ghosts*. Copyright © 1975, 1976 by Vintage/Random House, New York, and Schaffner Agency, Inc., Tucson, Arizona.

Joy Kogawa, *Obasan*. Copyright © 1981 by Joy Kogawa.

Hisaye Yamamoto, *Seventeen Syllables and Other Stories*. Copyright © 1988 by Hisaye Yamamoto. Reprinted by permission of the author and Kitchen Table: Women of Color Press, P.O. Box 908, Latham, N.Y. 12110.

(*この訳書では「愛・戀」の文字、俳句、父上の覚え書きの図版は複製した)

キンコック・チャン

用語

本書では、祖先がアジア人である北アメリカの作家たちに言及するのに「アジア系アメリカ人」と言う言葉を使用する。アメリカとカナダのアジア人たちは似たような経歴をした。例えば、真珠湾攻撃の後、両国の太平洋岸に住んでいた日本人子孫の人々は自宅から強制的に退去させられた。アメリカとカナダの市民であった人たちは憲法に定められた権利を否定されたのだ。

「アジア系アメリカ文学」という言葉は、中国、日本、韓国、フィリピン、東インド、パキスタン、ベトナム、タイ、カンボジア、ラオス、太平洋諸島という多様な出身国を持つ作家たちによる作品のことを一般的に指す。私が選んだ一人の中国系アメリカ作家と二人の日系アメリカ作家が代表的な作家であるということでは決してない。また、これらの作家の言語表現や非言語表現に対する姿勢は、彼女たちの祖国の人々とも必ずしも共有するものでない。他国の人々と異なっていることは言うまでもないことである。

「マインリテイ」、「人種」、「エスニシテイ」という言葉には不満を私は抱いているけれども、肌がある色の人たちを述べる際に、多かれ少なかれ互換的にこれらの言葉を使用している。アメリカの多くの地域では有色の人々はおそらく多数の上でマインリテイではない。「人種」という言葉も、アジア系アメリカ人に適用した場合、はつきりと区別できる民族集団を同一化してしまう。「エスニシテイ」という言葉

は、人種によって生じる差異を曖昧にするが、創造力豊かなこの三人の作家について私が論ずるときには、この言葉は大いに柔軟性を与えてくれる。人種と異なつて、エヌニシナイは「世代間で単に受け継がれるものでなく」ダイナミックで絶えず再創造されているものだからだ（フイッシュヤー一九五）。

本書で使用した他の用語

- 日系 日系アメリカ人。文字通りには、「日本人の血統」
- 一世 日本人移民。文字通りには、「第一世代」
- 二世 一世の子供。文字通りには、「第二世代」
- 三世 二世の子供。文字通りには、「第三世代」
- 帰米 一時期日本で養育されるかもしくは教育を受け、その後アメリカに戻つた二世。文字通りには、「アメリカに戻ること」

アジア系女性作家論——沈黙の声を聴く☆目次

序 章 沈黙と発話の架け橋

13

第二章 沈黙の修辞性を読む

57

——ヒサエ・ヤンモトの「十七文字」「ヨネコの地震」
「ミス・ササガワ伝説」

第三章 沈黙に揺さぶりをかける

125

——アキシリン・ホン・キンダストンの『チャイナタウンの女武者』
と『アメリカの中国人』

第四章 気遣いの沈黙

211

——ジヨイ・ユガワの『失われた祖国』

結 び 彼女らが明らかにした沈黙とは……

279

訳者あとがき 286

書 誌 17

日本語英語表記対照リスト 13

索 引 1

凡例

- (1) *マークは訳注を示す。
- (2) 「」は、原文の引用文で著者チャンが補った言葉を示す。また、() 内の西暦かページを記すときにも使用する。
- (3) 「」は著者チャンの注をしめす。
- (4) 原文でイタリック体や太字で書かれている語句には傍点を入れた。

序 章 沈黙と発話の架け橋

『アジア系女性作家論——沈黙の声を聴く』は、暗黙のうちに、随時、三方向と対話している。エ・ヤブモト、マキシン・ホン・キングストン、そしてジョイ・コガワの作品を分析しながら、私は女性の詩学についての近年のフェミニスト理論、とりわけ語りのギャップや省略に関する理論、フェミニンに關わる学問と対話している。本書は、フェミニストやアジア系アメリカ人批評家たちのこれまでの研究をもとにして、加えて、私は西洋中心主義を前提としていると思われ部分の修正もしている。見境なく声と発話を正当化するアンソロポソシア系アメリカ人のフェミニストたちと、沈黙を真つ向から拒否しステレオタイプに反駁する修正主義的なアジア系アメリカ人男性批評家たちの両者にも、私は異議を唱えている。フェミニンに關して、学者たちが抱くある種の主義にも私は疑問を投げかけている。その主義の一方は、統一された「フェミニン」の「自己や文化的「信憑性」を力説しすぎる傾向にあり、他方は、フェミニンに完全に超越しようとする衝動に駆られがちであるからだ。

西洋中心主義の前提について語るときに私が主に思い浮かべることは、北アメリカ社会での発話と沈黙に關わる社会規範のことであり、とりわけ教育制度や社会全般で自己主張に高い価値が置かれていることである。それに対して、沈黙は発話の不在であるとか、「意識に上からぬ現象——語りの図 (figure) が認知される背景となる地 (ground)」（タシネとサピル・トロイクス＊認知言語学用語）として、否定的に理解されがちであった。そのようなロクス中心主義的な傾向は、沈黙もまた、文化から文化へと変容しなから、多くの言語を語りうるのであるという事実を覆い隠している。

しかし、私は発話への過剰評価がヨーロッパ系アメリカ人に限定されるとか、彼ら全体の特徴であると言っているわけではない。多くの女性や人種的マイノリティも、発言力が権力とみなされ、伝統的に沈黙を強いられるアメリカで育つたので、社会において発話の機会を得ようと沈黙を否認してきたのである。さらに、通常「西洋」と明示されるものにも、矛盾する概念やそれ自身の自己批判が含まれている。聖書は、「黙るに時があり、語るに時がある」（伝道の書 三章七節）と明記している。理論哲学的領域においては、アウグスティヌス、ニーチェ、ハイデガー、ピカール、ヴァイゲンスタイン、フーコー、ダウエンハウアー、デリダなど多くの思想家たちが、各自のやり方で、言語化されえないものを救い上げ、ロクス中心主義をずらしてきた。文学では、アイロニーや控え目な表現は、他の間接的コミュニケーション様式と同様に常に評価されてきた（例えば、ポーチ、ソング、スタウト、J. A. ウォードを参照）。北アメリカでは、社会的領域においてさえも、状況的、地域的差異が存在する。J. ヴァーノン・ジエンセンが述べているように、「沈黙は、軽蔑、敵意、冷淡さ、挑戦、厳格さ、そして憎しみを伝えることができるが、尊敬、優しさ、承認も伝えるのである」（二五二、ホールも参照）。カナダ人は、アメリカ人よりもぶっきらぼうであると言われているし、ニュー・イングランド人の控え目さも伝え聞くことである。北アメリカのこうした比較が的確であるかどうかはさておき、それらが道徳面に

おいて一律的な評価で判断されることはめったにないのである。

それよりもずっと審判にさらされやすいのはアジア系アメリカ人の沈黙である。発話と沈黙に対し、西洋哲学的な伝統にはさまざまな見解があり、北アメリカの内野でも地域によって見方が異なる。にもかかわらず、アジア人やアジア系アメリカ人の控え目に對しては特に批判するか、見下したような見方がされてきた。物静かなアジア人は、女性が神秘的で理解不可能と思われているのとは同様に、ひねくられていて、臆病で、ずる賢く、とりわけ「不可解だ」と見なされるか、物静かな女性も伝統的に賛

フェミニスト批評家たちは、とりわけ女性作家に特有というわけではないけれども、支配的言説からの排除が原因となつて生じる共通の特性が女性作家の間にはいくつもあるのだということを認識している。第一に、女性の書き物は、テーマとしても方法の上でも沈黙によって特徴づけられると言われている。テーマとしての沈黙は、女性が表現することには多くの障害があることを代弁する。テイリー・オルセンの『沈黙』で列挙されている障害のよう^④に。一方、沈黙という手法は、アイロニー、はぐらかし、コード化された言語、無言のプロットといった多様な「控え目ざと^⑤いう戦略」(ジヤニス・スタウトの言葉)を含んでおり、禁じられたことを語り、語ることができないことを訴えるために、多くの女性作家たちによって使われてきたのである。第二に、多くの女性作家たちは継承されてきた言語に不信を抱

きえることを示している。

言葉を用いないジェスチャーや著者の躊躇による沈黙も、語りの作法や登場人物を通して、明確に表現を与えていく。同時に、(道徳的、歴史的、宗教的、政治的権威への抵抗としての) テクストの省略といった形を取って、自分自身や自分たちの民族に押しつけられた沈黙を暴露することで、沈黙に明瞭なる。彼女たちは、文化的な女性の礼儀作法、外的検閲や自己検閲、歴史的不可視性や政治的不可視性^⑥とわけ歴史としてまかり通っている言語)、沈黙の危険のみならず沈黙が持つ力についても取り上げて沈黙の価値を過小評価する見方に異議を唱えている。三人の作家は、言語の権威に疑義を差し挟み(とりよつて押しつけられることもある。しかし、彼女たちの作品は、発話を全面的に是認してはいても、沈黙によって課せられる場合もあるし、アイロニイの経験にいかなる声をも与えまいとする支配文化に

家族によつて押しつけられることもあれば、文化的礼儀を遵守しようとするエスニック・コミュニティ問題を明らかにし、沈黙を破ることの重要性を強調している。沈黙は、威厳と秘密を保持しようとする沈黙の様式は異質化される必要がある。三人の作家の作品は、言葉を奪われていることに潜む多様ないた様式と言葉を用いない様式を必ずしも階層的にとらえているわけではない。

人種に特有の障害を克服していかなければならぬことを示している。しかし、彼女たちは、言葉を用いた様式と文化によつて容許する他の機能や意味合いが含まれる^⑦。ヤモト、キングストン、そしてコガワは、多くのアジア系アメリカ人が男女を問わず言葉によつて自己主張していくには、ジェンダー、文化、個人や文化によつて容許する他の機能や意味合いが含まれる^⑧。ヤモト、キングストン、そしてコガワを無視してしまうものである。沈黙は発話の禁止に対する直接の結果になり得る。しかし、沈黙には、点とは、沈黙の原因を家父長制の女性性構築にのみ求め、沈黙させることと沈黙していることの問題点^⑨なっている。自民族中心主義的でロス中心主義的な視点^⑩が、同時に問われなければならない。その視点のナラティブに焦点を当てようとする作品においては、いまだに主流のフェミニズムの主な特徴とどんなにそのような言葉が読んでいる文学作品に不適切であろうとも(五四)。アジア系アメリカ人^⑪べているように、一般の読者は、「外国文学を自分たちが知っている言葉で理解しがちである。たとえばそのような見方は、アジア系アメリカ文学の読みに影響を与えている。ポーラ・ガン・アレンが述

美されてきたように、御しやすく、服従的で、従順で「モデル・アイロニイ」のラベルにふさわしいと見なされる。(オリエンタリズムの言説では)「東」は「西」との関係において女性と関連づけられて

いているので、真実を示す絶対的声として自己主張することを拒むのである。^⑤ポスト構造主義者たちに先んじて、これまで一般に認められてきた知に疑義を差し挟むばかりでなく、自分たち自身の虚構性も強調している。ナラナイザの権威を弱めるために、頻繁に夢やファンタジーや信頼できない視点のような手法を用いたり、著者としての不安を狂った登場人物に投影させたりもしている。^⑥

第三に、言語やテクニクの権威に対する懐疑主義のせいで、女性作家たちは自分の小説にオープン・エンドや多様性を好んで取り入れてきた。どれか一つの「マスタール・ナラナイザ」(リオタール)を支持する代わりに、彼女たちは、レイチエル・ブ라우・ドアップレシスが「両義性という見方(ambivalence and vision)」(一九八二／一九八五二七六)と呼んだものや、デイル・バウアが(M・M・バフチンから派生して)「フェミニストの対話(feminist dialogics)」と名づけているもの、グロリア・アンザルダ(一九八一)とアエ・ベンダースの両者が「複数の言語で語ること(speaking in tongues)」と説明しているものを例証している。逆説的ではあるが、言葉を差し控えることや間接的な表現というのは、しばしば多様な読みと結びつくのである。ジョン・ラドナーとスーザン・ミアダール・ランサーが述べているように、「多様な読みはコード化の曖昧性によって可能となる」(四三三)からである。

女性の詩学についてのこのような理論は、私が探求しようとしたテクニクを分析するにあたって刺戟的な道を開いてくれている。しかし、土台となっている前提の幾つかを絡み合わせたり、提示したりしていかねばならない。女性の沈黙化というモチーフは、ヤモト、ユガワ、キングストンの作品全体に見られるのであるが、ジェンダーばかりでなく、文化や人種が原因で声を失っている登場人物を精査してみると、そのモチーフに関して三作品は特異に共鳴し合う。ヒサエ・ヤモトの「十七文字」では、

母親のハヤシ夫人の作家としてのキャリアは、俳句に夢中になつてゐることに夫が激怒したために突然終わつてしまふ。しかし、彼女が選んだ十七文字という俳句形式自体が文化的な抑制を示している。ユガワの『失われた祖国』の語り手であるナオミは、子供の頃に彼女にいたずらをした老人のことを回想する。彼は秘密にしておくようにと命じ、そのために彼女は母との絆を引き裂かれるのだ。そして、第二次世界大戦中に、彼女の家族が強制的に退去させられた政治状況と絡み合つて、彼女は恥辱感を一層つらさる。性的虐待と人種的虐待という二重の虐待が与えた衝撃は、二十年にわたる抑圧された罪悪感を彼女にもたらすことになる。キングストンの『チャイナタウンの女武者』の語り手であるマキシーンは、中国移民のコミュニティの中で成長していくのであるが、女性蔑視主義者のごわざによつて発話を禁じられている。^⑦しかし、彼女の沈黙が「最もひどく」なるのは、「アメリカの」学校に入學して、英語が話せないという理由で知恵おくれとの烙印を押されるときである。その後マキシーンは、学校の先生たちの規範を内面化し、もう一人の押し黙つた中国系の少女の口を開かせようと彼女をいじめてしまふのだ。

この最後のエピソードは、アジア系アメリカ人が支配的な規範に従つて生きていくことで被る心理的トラウマを実際に表しており、声を出すことを過度に強調する危険性を指摘している。能力についての文化一元論的な規範やフェミニニストが抱く沈黙に対する反感は、エスニック・グループの感受性を完全に無視しているだろう。声の重要性に議論の余地はないが、沈黙を発話と正反対のもの、あるいは発話の従属的なもの、と断言してしまうことも、抑圧的なほどに一義的になり得る。『チャイナタウンの女武者』は、疑う余地なく、語り手が言葉を失つている状態から発話に向けて成長していく様子を記録し

「東洋人」はアメリカの文化的政治的領域において長い間声を持たない存在だった。だから、今日のアジア系アメリカ人は沈黙を完全に拒否することによって、ステレオタイプを一掃したい気持ちになっている。^⑩「沈黙はハワイ地域のアジア人に固有の性質ではない。まるで、ハワイ地域のアジア人は高貴な野蠻人と高貴な賢人を具現していて、一方は言葉を所有していないので頑強で無口であり、他方は言葉が必要としないので賢く無口であるかのようだ」とステイナー・ヴン・H・スミタは論じている。「そうではなく、沈黙は権威によってハワイのアジア人に強制され、おそらく何者かが不従従の声をあげたことで、処罰される状況で強要されてきたものだ……。ハワイの文学作品やレネットを描かれる沈黙は美德なのでなく敵なのである」(一九九一―二二七)。批評家の中には、さらに表現を強めて、控え目を誇張するアジア系アメリカ人は単に白人の命令を内面化したにすぎないと示唆するものもある(例えば、

チン他 xxi-xxiii; 1997: 293。

この国のように言葉によって計られる社会において、言語が奪われたままの状態であることは、認知されるアジア系アメリカ人の文化規運が欠如したままであり(せいぜい、アメリカ生まれのアジア系アメリカ人は「アメリカナイズされた」中国人や日本人であると思われているだけである)、^⑪ 知られるアジア系アメリカ人の男性性のスタイルも欠如したままであることに手を貸してきてしまったことになる。……言語は、人々の共通体験のシンボルを組織化し、体系化することによって人々とコミュニケーションを結合させていく。言語能力の発育を阻止すると、文化や感受性を切り落としてしまったことになるのだ。(チン他 xxv-xxvi; xxxvii; xliii)

白人の人種差別の成功を計る尺度の一つは、人種のマイノリティが沈黙しているかどうか、その沈黙を維持し強化するために必要な白人のエネルギの総量がどれだけあるかである。中国系アメリカ人の問題は無視されたり排除されたりすることではなく、おとなしく異質であるという問題なのだそう……。^⑫

文化的不可視性を永続化させてきた。によれば、アジア系アメリカ人たちの「部分的にリアルで、部分的に神話的な沈黙」は人種差別を強め、生し、定義した最初の作品集の一つである『アイイイーアジア系アメリカ人作家選集』の編者たち「他の者(たち)」がその民族に代わって語ることを許容することにもなる。アジア系アメリカ文学を再な東洋人というすでに深くしみ込んだ西洋概念の信憑性に手を貸してしまっことになる。また、沈黙はその子供が女の子で他者と見なされている場合にはそうなのだ。^⑬しかし、無口なままでいては、不可解なものであるために、子供には声を出して主張していくという心構えがほとんどできていない。とりわけ、^⑭ 上で、それぞれ移民コミュニティで人種差別に対する生き残りの戦略として強化されているものであり、その上、中国文化においても日本文化においても頻繁に教え込まれている言葉に出すということを控えることは、中国文化においても日本文化においても頻繁に教え込まれている。沈黙についての社会的評価が否定的であるために、多くのアジア系アメリカ人が孤立し困惑している。

切望することと同様に憂慮すべきことである。キーンが受け入れることは、トニ・モリスンの小説で黒人少女ベコローラが「最も青い眼」を哀れにも

母たちは)家庭やエスニック・コミュニティという比較的完全に隔離された環境で生活を送り、たいへん自分たちへの敬意を要求しつつ彼らの異質性を拒絶した。こうした状況において、女性は(とりわけ)移住者たちは、新しい国で文化的優雅さよりも物理的な生き残りを優先した。例えば、「十七文字」のハヤシ夫人は、彼女にとって特別な芸術表現の手段であり旧世界との繋がりを示す俳句を詠むことに関心がある。彼女の俳句への関心がいくつかの点で夫を脅かしているにもかかわらず、最後の場面で夫が爆発させた怒りは一家のトラト収穫の緊急性と関連づけられ、それが唯一の怒りの理由として語られている。しかも、移民の男性は白人社会とつき合っていくかなければならぬ人々であり、白人社会は彼らに自分たちへの敬意を要求しつつ彼らの異質性を拒絶した。こうした状況において、女性は(とりわけ)母たちは)家庭やエスニック・コミュニティという比較的完全に隔離された環境で生活を送り、たいへ

私は沈黙に伴う否定的な側面を問題にするが、一方で、沈黙の美德の擁護もする。多くの修正主義的な批評家たちは、アメリカで言葉に与えられている権限を知らず知らずのうちに受け入れてしまっており、その結果、控え目であることが持つアラブ面の文化的価値に対して盲目になってしまっている。発話の特権化する傾向は、例えば、ジョイ・コガラの『失われた祖国』に偏向した読みを招いてしまった。オバサンの控え目を単なる受動性や犠牲者性の印としか見ない評論家たちは、ゲイル・K・フジタが「沈黙の感受性」と呼んだものをとらえることができない。そのような感受性は、小説の中で日系の文化遺産の一部として認められているものである。このような遺産は社会的なものである。一般的な欧米文学と同様に、あるいはそれ以上に明示的なものよりも黙示的なものにも価値を置いている。その結果、政治的な書物でさえコード化されている場合が多い¹²¹。しかし、若い世代のアジア系アメリカ人の多くは、社会的不可視性と闘う手段としても甲高い調子を好むようになってきている。さらに、文化政治学的な視点から美的尺度にも波及してきている。例えば、「男性的な」言語を主張しようとして、『アイアイ』の編者たちは、ルイス・チェーの「一杯の茶を喫べよ」やジョン・オカダの『フー・フー・ボーイ』のような小説を評価している。この小説はどちらも、声高なスタイルで書かれている。男性優位主義的な好みで、沈黙という申し分のない演技を通して間接的に伝達しているような作品は軽んじられてしまっている。「おそろく、「男性的」スタイルと「女性的」スタイルという区分がそれぞれ自体が社会的文化的に構築されたものにすぎないのであろう」。この編者たちはアジアの英雄伝説や「男らしい」スタイルを再生させる試みを継続中であるが、そのような試みとつり合いをとるために、私は「私には「女性的な」詩学も公平な扱いをしよう」と決めたのである¹²²。

同様に、大抵のフェミニストの議論や『アイアイ』の編者たちの論説に欠けているのは、ありとあらゆる男性の沈黙に対する認識である。性の非対称性は、時には非常に強くヤマモト、コガラ、キングストンの作品の表面上に現われているが、家長長制支配、男性的な不屈の精神や去勢はすべて、これらのテクニカルにおいて特殊な沈黙の形をとっている。日本的なストロクな振る舞いのコードに支配されて、ヤマモトの「十七文字」と「ヨネコの地震」の父は、鬱屈した感情が暴力となって爆発するまで嫉妬や不安感を抑え込んでしまう。さらに人種差別が感情表現を抑圧する。『失われた祖国』では、強制収容の惨害に耐えてきたオオミの叔父は、彼が定期的に焼く「石のように固いパン」同様に頑固になる。『アメリカの中国人』の語り手の曾祖父は、自分が働くハウスのプランテーションで、文字通り話すことを禁じられる。

こうした批評家の反応は、エスニック作家、つまりアジア系アメリカ人作家には特別な責任が負わされてきていることを示唆している。アジア系アメリカ人の歴史は隠蔽され、操作されることが多かった。だからこそ、読者は「本物」の説明を生物学的内部者（*同じエスニック集団の一員である者）に期待するの

いる。

この作品をアジア系アメリカ人のリアリティを映し出す鏡、またはリアリティを曖昧にするものと見ての女性作家と共有し、自分たちの作品の虚構性に気づかせようとしているが、大多数の批評家は彼女の歪曲しているとして非難する。この三人の作家は、言語や受け入れられている知に対する懐疑主義を他のキングストンに対しては多くの批評家が中国の神話を参考させているとか、中国系アメリカ人の経験をの書評は、日系カナダ人の「真実」の物語を描いているとしてその小説をほめたえている。しかし、学的なタイムカプセル—日系アメリカ人の個人史（タジリ二五七）と呼ばれている。『失われた祖国』的基準あるいは文化人類学的規準に照らして行われている。ヤマトの『十七文字と他の物語』は「表現している。それにもかかわらず、彼女たちのテクストに対する賞賛や批判はほとんどの場合、歴史ヤマト、コガワ、キングストンは言語によって伝達される「真理」の捕えどころのなさを繰り返しアリティを伝えていくことの難しさを強調している。

ている情報の中で抜け落ちていく部分や、自分自身の記憶の間違いや不一致を指摘することにより、リ刑務所が「内陸居住プロジェクト」として歪曲され得るからだ。キングストンは、一般に受け入れられて一八九八、一六。コガワは、『失われた祖国』において言説の欺瞞の性質を強調するが、それによって話、悪口といった行為が間接的に日系アメリカ人を不当な収監へと導くことになったからである（ヨギ

る。それはコシツアやうわざ話、悪口が持つ侮れない影響力を誇張する鏡である。コシツアやうわざ

ス・サカガラ伝説」において、狂女とうわさされる女性の物語を「皮肉な鏡」として使用しているホスト構造主義者に比べてずっと重い⁵⁶。ヤマトはあからさまに強制收容所を舞台に設定した「ため、これらの作家が客観的知識の伝達者としての言語に疑いを抱く理由は、多くの女性作家やアインリテイの経験は多くの場合ゆがめられ、主流の「歴史」には全く記録されてこなかった。そのを通じて取り戻そうとしているのは、アジア系アメリカ人の失われた年代記の一部なのである。

を焼却しなければならなかった。ヤマト、コガワ、キングストンが記憶や想像力、散在している記録は手紙や写真から文学的な書き物や先相伝来の家財にいたるまで、自分の出身国に関わる物品のすべて的に奪い取られた。真珠湾攻撃後、FBIとアメリカ兵士が日系アメリカ人の家宅搜索を行い、彼ら憲法に定められた権利を剥奪され、不公平な法のもとで声を失った。日系人からは文化的な歴史が暴力中国系アメリカ人男性全体に押しつけられた不可視性を示している。過去の世紀のある時期、彼らはも忘却に付されてしまうことに気づいたのである。『アメリカの中国人』の語り手の父の引きこもりは、が合法化された差別（例えば、東洋人は法廷で証言できなかつた）によって消し去られ、彼らの貢献アジアでの過去の抹殺はアメリカで認知されても補いきれない。初期の移民たちは、彼らの「存在」

いる。「物語もない。過去もない」(一九八〇/一九九一四)。

だつたにもかかわらず、アメリカでは「読み書き能力のない」洗濯屋に娯楽したが、ほとんど沈黙して

は二世への文化の伝達者となった（ゴールニク一二九一、二二三、この点に関しては、ヤナギサコとキタ

ラムも参照）。マキシソンの母が娘の耳に「中国を注ぎ込む」一方で、彼女の父は、中国では詩人／学者

だ^⑩。アジア系アメリカ人はこれまで、大衆の無知や堅固なステレオタイプにさらされ、アジア系作家はすくなく、エスニック・グループ全体のスポークスマンと見なされてしまうのである(ライアン・T・ニーヤとE・サン・フアン・丘は出版業界に関わる他の問題について議論している)。

三人の作家の作品に見られる要素のために、ミメティックな分析が行われがちであるのは議論の余地がない。三人全員が、歴史的资料や公文書や自分のフイクションや記憶のなかに自由に組み込んでいる。また、彼女らのナラティブが実体験に基づいているのは確かである。「私には全く想像力がなかった」とヤンフトは控えめに述べる。「私に起こったことや、誰かが話してくれた出来事に脚色しただけだ」(クロウ、一九八七、七四)。「失われた祖国」では、批評家は自伝的なことや歴史の細部に注目することが多い。キングストンの『チャイナタウンの女武者』は長い間もっぱら自伝として分類され、『アメリカの中国人』はノンフイクション扱いされてきた(この二冊の本については、現在、ザインテージ・インターナショナル版の裏表紙に『文学』のラベルが追加されている)。

私は、これらの作家のリアリティを再構築したり、真実味を創り出す能力を軽視するつもりはない。しかし、彼女らが行った過去の再構築は明確な歴史と混同されてはならない。完全な過去、必ずしもすでに言語を媒体としてはいない過去を取り戻すことは不可能だ。フーコーによれば、「起源は、避けられない喪失の場所、物事の真理が真実の言説に一致した地点、言説が覆い隠し、最終的に失ってしまったつかの間の発話の場にある」(一九七七、一四三)。「チャイナタウンの女武者」の冒頭の章、語り手が想像上の話をいくつか作り上げることと名前のない叔母に実際には何が起こったのかを必死で探ろうとする

この章は、この点を見事に具体化している。しかし、この三人のアジア系アメリカ人作家全員が言説上の中立性や透明性に関わる懷疑主義を共有しており、彼女たちの「歴史」の再構築方法はフェミニズムとフーコーの理論によつて理解することが可能である^⑪。

ヤンフト、キングストン、コガワは、黙示的または明示的に、ライオンの権威ある歴史を取り戻す可能性を問題として捉え、自己満足的な過去への回帰を避けている。疑わしい公的な歴史を別の重要な歴史と置き換えようとするのではなく、三人の作家は自分が作家であること、つまり権威を、寓話的な手法や超現実的な技法を用いて自ら弱体化していく。「ミス・ササガワ伝説」、「アメリカの中国人」そして『失われた祖国』のような作品は、リンダ・ハッチョンが称する「歴史編纂的メタ・フイクション」であり、それらの「人間の構築物としての歴史とフイクションの理論的自己認識は……過去の形式や内容を再考し、修正するための根拠となる」(一九八七、二二)。歴史とは拒絶されるのではなく、再考され、再び焦点を合わされ、再表現されるものである。ラリー・マッカフエリはガブリエル・ガルシア・マルクスの『百年の孤独』について、「文学的遺産とミメシスの限界に非常に意識的である……それでもやはり、読者とペーじの外の世界をなんとか結びつけようとしている」と述べているが、この言葉は三人のアジア系アメリカ人のテクストについても同様に当てはまるだろう(二六四 ハッチョンに引用、一九八七、二二)。これらのテクストを単なるミメティックとして読むことは、三人の作家の芸術的才能を曇らせ、オ尔特ナナイヴな「歴史編纂」を曖昧にする。

私は、この本を通じて、社会歴史的な文脈とそれぞれの作家の独特なナラティブ戦略を説明しようとした。フレドリック・ジェイムソンは、第三世界のテクストはそれがどんなに個人的なものに見えよ

第二に、この用語は女性の書き物、つまり多くの場合ゴード化されたリ（ラドナーとランサー）、^②「支配的な物語や「沈黙させられた」物語から成る作品と直接に関わっている。「オートドックスなプロットは後退し、もう一つのプロット、これまで無名の背景に沈没させられていたプロットが押印のようにくつきりと浮き彫りになる」^③（「シヨウオクター三四」）。さらに、多くの黒人フェミニスト（ヘーゼル・カービー、デボラ・マクドウェル、ヴァレリー・スミス）は、どのようにアフリカ系アメリカ人女性作家が、隠されたメッセージを伝えるために、曖昧な言葉を使用しているかを示してきた。私が論じている三人の作家（誰もが何らかの方法でゴード化戦略を使用している）のなかでは、特にヤモトが沈黙のプロットを用いている。彼女のテクニスト上の沈黙は、黒人女性作家の二重の声と同様に、人種の政治

的なナレーションを避け、「真実」と「歴史」の不安定性を表すのにこれらの手法を使っているが、そのなかには思春期の子供と大人の視点の並置や、ジャーナリスティックなもの、詩的なもの、「記憶」と「対抗記憶」の挿入が含まれる。^④

第一に、二人の作家が使うさまざまな手法をまとめるのにこの用語を用いる。彼女らは権威を置く。両方の位置づけを考えるために、私は三つの様式の「二重の言説」にある隙間に自分の分の話のサインは、女性でありエスニック・マイノリティの一人語であるという周縁的位置づけに根差している。ヤモト、コガワ、キングストンはしつこいほど一人語によるリアリティを打ち壊す。彼女らの対多重表象によってであるうと、フェミニストが「重ね書き」手法と称するものによってであるうと、

楽しんで見るのを見ることが出来る。

作家の背景は私たちの理解に重要ではあるが、ヘンリー・ルイス・グイツ・IIが言う「人類的的誤謬」を犯さないために、アジア系アメリカのテクニストを文脈に溺れさせないようにすることも同様に大事である。今日の批評では、アジア系アメリカ文学の形式のおよび比喩的側面は相対的に無視されているので、私はナラティブ戦略について詳しく論じることにした。歴史的、文化的な要素は三人の作家の作品のいたるところに見受けられるが、それぞれが特異なサインと創意を示している。結局は、イケル・フレイシャーが指摘するように、エスニシティも「各世代の各個人によって再構築され、再解釈される」のである（九五）。私たちは、歴史的信頼性や総称的差異という名のもとに文学的想像力を抑えてはならない。小説、自伝、ノンフィクション、短編小説の相違と同じくらいに異質なテクニストを一冊の本でカバーするという戦略は、伝統的な総称的区分に対する私の疑念を反映するものだ。三人のアジア系アメリカ作家は人生と芸術を結びつける。文脈づけによって、彼女らがどれほど見事に（または下手に）「経験」を映し出しているのかだけでなく、逆に、どのように「リアリティ」を再構

想う。

なものであり、丹念な分析の対象であるテクニストそのものがその差異を曖昧にしていることを示そうと歴史的、文化的背景をテクニスト分析に組み入れるときに、私はこれらの伝統的カテゴリー自体が不安定扱うときは特にそうである。マイノリティの文学の主題とは社会史である」と主張する（チン他 〇〇）。同様に、「アイアイー」の編者たちも、「社会史と文学の間の差異は微妙である。新しい感性の文学を^⑤「公正な第三世界の文化や社会の苦境を表すアプロプリートな」^⑥（一九八六、六九）と述べている。私的な個人の運命の物語が必

多くのアジア系アメリカ人 (Asian American) はアジア人が先験的によそ者として位置づけられていることにひどく意識的になり、この複合語の右側 (すなわち「アメリカ人 (American)」) を強調し、ハイ・メンを完全に取り除くようになってきた。キングストンは同様の見方を示し、「私たちは『中国系アメリカ人』が生まれた国です」とよそ者のままなのだ。(中文他訳: 1997)

このように、第四代、第五世代、第六世代のアジア系アメリカ人は、この二重の遺産、つまりアジア系アメリカ人はアメリカ人の部分とアジア人の部分に分解され得ることを意味する二重人格の概念のために、まだ外国人と見なされているのである……このいつまでも続く内部仕様のために、アジア系アメリカ人は自分が生まれた国です」とよそ者のままなのだ。(中文他訳: 1997)

そのような区別をアジア系アメリカ人に適用すると、アメリカ人としての一体性と社会的地位に疑問を投じることになる。

そのような区別をアジア系アメリカ人に適用すると、アメリカ人としての一体性と社会的地位に疑問を投じることになる。

東洋人と西洋人のようなカテゴリーを分析の開始点および終点として使う時……たいていは両者の差異を二極化させ、東洋人はもつと東洋人に、西洋人はもつと西洋人になる結果となる。さらに、異なる文化、伝統や社会での人々の出会いを制限することになってしまう。つまり、近代史の最も初期の時期から現在まで、異質なものを扱う思考形式としてのオリエンタリズムは、全く嘆かわしい傾向を典型的に示してきたのだ。その傾向とは、そのような厳格な区別に基づく知が……思考を西洋か東洋かに分けることである。(一九七九、四五―四六)

の側面からだけでなく、ジェンダーや文化的感性の点からも取り扱われなければならない。

多文化文学の批評家が提唱する二重の声の言説の第三の形式は、特にハイ・メン付きの作家の二重の系譜と関わっている。グイツは次のように述べる。「アフリカ系作家の場合には、彼女または彼のテクニクは少なくとも二つの伝統の場を占有する。ヨーロッパやアメリカの文学の伝統と、関連はあるものの全く別個の黒人文学の伝統のうちのひとつである。だから、西洋の言語で書かれた黒人の各テクニクの遺産とは、言わば二重の遺産、一つの音韻を持つものとなる」(一九八四、四)。ここでグイツが「一つの音韻を持つ」言語と呼ぶものは、移民の子孫の書き物において特に明らかだと私は思う。彼らの多くの二つの文化を併せ持っているだけでなく、バイリンガルでもある。この理由から、私は二世作家だけに限定して論じてきた。ヤマモト、コガワ、キングストンを研究するのは、彼女たちの作品において沈黙が全般的なテーマであると同時に修辞上の戦略でもあるからだ。アフリカの女性として、これらの作家たちはより大きな社会で白人の視線にさらされているだけでなく、コミュニティの視線にもさらされている。(アフリカの沈黙を維持しつつ) 言論の「自由」をモデルとする支配的な文化と、控えめさの礼節を求めるエスニック文化の間で調節をはかりながら、三人の作家のいずれもが女性、一種、二つの文化という遺産を反映した間接的手法を展開している。

しかし、アジア系アメリカ人の「二重の声」を拡大していくには危険が伴う。その危険のなかには、古くからある西洋と東洋の差異や二重人格という概念を強めたいという衝動が含まれる。エドワード・W・サイードは人々を東洋人と西洋人に分けることの悪影響について仔細に述べている。

リカ人 (Chinese-American) のハイフンを取るべきだ。ハイフンは、二つの名詞をつないでいるかのよ
うに両方の言葉を同等に強めるからだ……ハイフンがなければ、「中国系 (Chinese)」は形容詞、「アメ
リカ人 (American)」は名詞であり、中国系アメリカ人 (Chinese American) はアメリカ人の一つのタイ
プとなる」(一九八二六〇)。

アメリカ人として認知されたいという願望は理解できるが、アジアとのつながりを犠牲にしてまでそ
のような正当な認知を得る必要はない。アメリカを主張したいという衝動は、移民とアメリカ生まれの
アジア人に「相互排除」をもたらすだけではなく、オリエンタリズムのひとつの形式として出身国と結
びつくすべてのものを棄却する結果となる²³。確かに、実際の行動範囲が「他者」のステレオタイプが認
めるよりもずっと広い場合に、文化的差異を誇張するのはあまりにも容易だ。アメリカとアジアの文化
において発話と沈黙に対する態度は相反しているにもかかわらず、この二つを対比すると、率直に発言
するアメリカ人 (白人や黒人) と寡黙なアジア人やアジア系アメリカ人という対立がはつきりと現れる
場合が多い。不可解なオリエンタルというイメージを明確にしないために、私は、控え目さはアジア人
すべての特徴では決してないことを指摘しておかなければならない。分析するテクストの中では、「チャ
イナタウンの女武者」のグレイヴ・オキッドは「話し手のチャンドオン」、「アメリカの中国人」のバ
ク・グーンは「話中毒」、そして『失われた祖国』のエミリーオバサンは「言葉の戦士」である。キン
グストンの『トリップアスター・モンキー』の中国系アメリカ人の主人公、ウイットマン・ア・シンは
あらゆるアメリカ文学のなかで最もおしゃべりな人物の一人である。

とし穴があることを承知しているが、そのステレオタイプを覆すにはもっと微妙な危険があると私は思
う。沈黙を全面的に否認することは、アジア系アメリカ人たちの間の「許容される」振る舞いの範囲を
狭めることになり、彼ら特有の文化遺産の一部を覆い隠してしまう。コガワはインタビューで、『失
れた祖国』の中の「沈黙の言語」について尋ねられたとき、こう返答した。「それは日本的な特徴だと
いうわけではないけれども……もつと寡黙で、口数の少ない、おそらくは直観に信頼を置く文化、そし
て非常に多くの色々な身振りで思いを表す文化があるのです」(レテコップ一七)

コガワと同様に、私は沈黙をアジア人の特性として具象化することは望まない。ここに選んだテク
ストの中の無数の偽装された沈黙や沈黙の意味を探究し、沈黙のステレオタイプを解明し、アメリカ
人やカナダ人であるには多くの方法があるのだということを示唆したのである。「アジア系アメリ
カの書き物には、テーマの焦点が自分のアイデンティティをアジア人ではなくアメリカ人として主張
することに置かれているものがあまりにも多い。そのため、このことが『私たちの祖先を隠したい』
という強烈な願望を作り上げているのではないかと思ひ始めるかもしれない」と、エレン・キムは
思いを巡らす。「あるいは、実はこれは私たちの周縁性を賞賛することであり、支配者による定義づけ
に対する反抗を示す深遠なる表現なのであろうか？」ともキムは考える(一九八七、八八)。私の考えで
は、私たちの周縁性の賞賛に必要なことは、まさしくアジアとアメリカの両方の文化の様々な面を受
け入れることであり、「私たちの祖先を隠す」ことではない²⁴。『失われた祖国』でエミリーオバサンが
力説したように、「モモタロウ [日本の寓話] はカナダのお話よ。私たちはカナダ人よ。……カナダ人
が行うことはすべてカナダのことだよ」(五七) ということだ。アジア系アメリカ人は、自分たちの

単なる二項対立を避けるために、発話と沈黙がどちらも色々に表象されていることを私は強調する。言語は人を解放することもできるが、それはまた、今日広く認識されているように、抑圧し、歪曲し、規制することもできる。沈黙が依然として過小評価的な解釈を受けやすいテマであるがゆえに、私はアジア系アメリカ人のテクニストに描かれた沈黙を前景化する。しかし、沈黙をロマンティックなものまたはエキゾチックなものにしたとは思わない。または、沈黙を発話より上位に置き、それによって既存のヒエラルキーを転覆させようとも思わない。言語と同しく、沈黙にも多くの醜悪な面がある。しかし、私が望ましくない沈黙だと解釈するものにさえ、例えば、恥辱感と罪悪感が誘因となって無言になること、家族の中で抑圧的に沈黙するために沈黙してしまうこと、そして、公的な歴史の中で明らかに見落とされ語られていないものにさえ、十分検証可能な動機があるのだ。さらに、

三人の女性作家は、二重人格という型も一元的自己という型も偽りであると示す。彼女たちの作品の中に示された複雑な感受性は、アジア人と白人アメリカ人の規範（例えば、発話と沈黙についての規範）の双方に向けてられる多面的価値を有する態度から生まれている。多様な形態を取るアジア系アメリカ人の沈黙に関する辛辣な批判と共感的な理解、支配者の言説に向けられる深い懐疑と聴いて貰わなければならぬという切迫した思い、これらが同時にこの三人の作品に見受けられる。彼女たちの独特な語り方は言葉が持つ権威を弱める。彼女たちは、アジア人のそしてアングロ・アメリカ人の文化の伝承や慣習の書換えに似たようなやり方で、発話と沈黙、ナレーションと省略、自伝とフィクションを織り交ぜる。様々な認識が織り込まれているがゆえに、彼女たちの作品は対話形式という点でより一層「新世界」的になっているのである。

祖先の文化からできるだけ距離を取ることによって、自分たちのアメリカ人性を証明しなければならぬということであってはならない。典型的にアジア的なものに逆らうことでアメリカ人であるということとは、支配文化が定める規範を強化するだけである。白人からの視線に過敏になると、その結果は、支配文化から押し付けられた定義を内面化しようとして、それを恣意的に反転しようとして、自己を萎縮させることになりかねない。

アジア系アメリカ人の感受性は「アジア人的でもなく白人アメリカ人的でもない」(チン他 8)という点で、私は「アイアイ」の編者たちと同意見であるのだが、その感受性は両方を幾分か帯びることがあるのも確かである。フランク・チンは『ビツク・アイアイ』で「偽の」アジア系アメリカ文学と「本物の」アジア系アメリカ文学を峻別したが、私はこの区別を特に危惧している。チンは、アメリカのキリスト教伝道という伝統から生まれた作品は偽物であり、「アジアの児童文学と歴史」に忠実な作品は本物であると考えている(一九八一九)。文化的絶対性に関心を寄せる際に、彼は一般的なアジア系アメリカ文学とエスニック・アメリカ文学にある最も明白な特徴の一つを無視している。それは、異種混雑性である。(キングストンの作品にはアジアと西洋の古典が混雑している。「ミス・サカワラ伝説」と『失われた祖国』ではキリスト教と仏教が共存している)。「アジア性—アメリカ性の一体化」を強烈に主張するときに、「アイアイ」の編者たちは、一元的自己という西洋の概念に屈してしまっただけかもしれない。そしてまた、一貫性がないのもなく、東洋と西洋に二分できるのでもない意識、祖先の文化をただ保存するのでもなく主流文化に融合するのでもない意識、そのような多元的意識の可能性を過小評価してしまっただけかもしれない。

私はこの「文化的相互作用」と「文化的合併」に関しては全面的に賛同する。しかし、アメリカでは多様な考えの往来はこれまで大部分が一方通行であった。民主的な「同意」を絶えず目指しているにもかかわらず、アングロ・アメリカ人の見方が今なお優位にある。トリン・T・ミンハが述べるように、「直接支配によって以前は機能していた文化的・性的優位の形態が……今はしばしば同意を経て作動する」(一九八九四九)のだ。文化的ヘゲモニーが最優先されるので、有色人が抱く「内なる」思考は、外側から押し付けられる思考に時には危険な程に似通っていくのかもしれない(この問題点については第三章で詳述する)。そのような状況のために、アフリカの人は対話的思考の獲得が困難になるといっただけでは必ずしもないが、相互作用の質を損なうこととなる。一方的に有利である覇権文化の立場から読むことを止め、そして多様性を単一性に還元することを止めなければならない。そうしてこ

作家の血統を全面的に強調すること、つまりエスニック的認識としばしば呼ばれるものだけを考慮すると、芸術活動はほぼ壊滅するのだ。……どちらかと言えば、エスニック文学の歴史は、異なった背景を持つ作家たちの間での文化的相互作用や接触を、つまりアメリカで起きた文化的合併と分離を、私たちに深く深く理解させるはずである。これがすべて成し遂げられ得るのは、作家をエスニック・グループの一員として分類することは、せいぜい、非常に偏った、一時的な、そして不十分な特徴づけなのだということが理解される場合のみである。(一四一五)

有するまでには到らない。

36
これらの沈黙は純粋にアジア人的特質では決してないのだが、祖先の規範と北アメリカでの排除の強制力の両方が重なって、しばしば過剰規定されている。またある時には、人に行動を起させる力を持つた沈黙 (the enabling silence) が存在する。それは、キングストンの作品に描かれた傾聴すること、ヤマトの作品の中の言葉を省略して語る行為、そしてとりわけ、コガワの作品の中に見事に表現されている、黙っていても「確に敏感に認識すること」である。こういった沈黙は、作家にも読者にも同じように最大限の用心深さを要求するので、受動性とはまさに正反対のものなのだ。

このような沈黙の多くは異文化からの刺激とも関係している。ヤマトの婉曲的なナレーションは、モダニストが実験する限られた視点だけでなく、日本文学の文体の簡潔性と二世の間接的表現への嗜好から影響を受けている。コガワは、氣遣いと直観的認識という日本人の遺産と仏教的かつキリスト教的瞑想を融合する。従って、私の言い方では、「二重の声」というのは沈黙の言説を内包する。故に、「アジア的な」と「アメリカ的な」という言葉のどちらもが、一つの固定された、同質の、または唯一の感性を表してはいないという理由からだけでなく、「二重の声」とは特に「二」というよりも「二つ以上の」声を意味するのである。このような条件は、多様な血筋を持つアメリカ人が異なる民族を受け入れるために「アメリカ的な」という伝統的概念を改変しつつある時に、特に必要とされる。アメリカ人が抱く多文化の可能性を実現したいと熱く思う作家たちは、多様な文化遺産をますます主張して多言語テクニストを産み出している。

多くの声で語るダイナミックな自己には豊かな可能性があると私の信念は、フーナー・ソリアスが擁護する「文化の融合」と十分一致する。しかし、私は彼の「エスニック的認識」に関する批評を共

私のような背景は「アジア系アメリカ人」という位置の複雑さを示す。エリン・キムが論じるように、もし「アジア系アメリカ人」という語が、「文化よりむしろ人種を主に基にして他のアメリカ人と私たちを区別することで、私たちを定義しようとするための外部から押しつけられたレッテル」(一九八二、三)であるなら、それはまた別の土地で行われた闘争を巡って、この国の中で以前は敵対関係にあった民たちのグループ間に存在する歴史的对立を解消する機会を与えてくれる。ヤモトやコグワのような作家が描く小説の風景に入るとは、私の中国の過去の亡霊を「追ひ払う」(C・ロック・チャウ「一九八一」が使用した言葉を借用)ばかりでなく、ただ分裂があっただけのところに繋がりを見せてくれる。もっぱら中国人であることからアジア系アメリカ人へと変わることは、このように私にとって心理的、地理的、政治的な移転を同時にすることである。

知的には、私は、多彩なフェミニズムの提唱者たちとの間の、フェミニズムとナショナルリズムの主張者たちとの間の、エスニシティと人種の擁護者たちとの間の、どこかにいるのである。この立ち位置は、いくつかの主義や思想に対する多面的な忠節と、それらの主張に対する深いアンビバレントな思いから生まれて来ている。私は、フェミニストやアジア系アメリカ人が闊歩している場や学界全般に目下流布している好戦的な言説様式はとらない。私は一つの思想学派とすぐ手を組むこともしない、それを即座に拒否することもしない。それ故に、私の声は回避的であるとかまたは抑制されていると思われるかもしれない。しかし、執拗に声高に対決するよりも気遣いをしてつかつかつ協働しながら関わっていくほうが、うまく私の議論に噛み合おうと思う。それ故、私は、誰も沈黙させられることのないそして誰もが耳を傾けることができる会話を選択する。

そ、私たちは「エスニシティを越えた」ところに足を踏み出すことができるのだ。また、流れを逆にして、越えて自分たちの声を見つけたのである。非アジア系の読者は、沈黙もまた明瞭に語ることができるのだと、彼女たちの書き物から学ぶことができる。

しかしながら、この『アジア系女性作家論—沈黙の声を聴く』は、アジア系アメリカ人女性の詩論への入門書を意図したものではない。また私はそのような「分野」を提唱すらしない。アジア系アメリカ人の感性は、ナショナルリテリ、出生地、年齢、社会的背景、個人の資質によって様々である。むしろ、私の目的は、この三人の作家それぞれが独自の二重文化的な語法を開発したこと、そしてそのニエアンスをつかむために、「西洋的」想定を時々一時的に中断して中断しなければならぬということを示すことである。英国の植民地で育ちアメリカの大学の大学に通った者であるので、私もまた幾つかの前提条件を「捨て去る(leave)」ように苦闘しなければならぬし、またソラズの言う「生物学的内部者主義」(二三)を主張せず、私が受けたアジア的な養育が私の批評の仕事に影響を与えてくれるよう努力しなければならぬ。ここで検討するテクニストとの関係において、私は閩に居るにすぎない。広義でアジア人と定義される私の家系からすれば、私は真の内外部となるが、香港からの移民として、私はアメリカ生まれのキンクストンとは全く違った目で広東文化を見る。中国系アメリカ人であるので、日系の文化を直接知ることができない。ただし、中国系アメリカ人文化と日系アメリカ人文化には共通の言語的特徴があることは分かる。中国と日本の間の歴史的对立のせいで、事実私は日系の人びとを敵対する「他者」として見るように教えられたのである。

題にしたものと重複することもある。これらの章は、はっきりと言わないうい形態について探究するだけでなく、ナラナイザに内包された意味に耳を傾ける。語りの省略は、しばしば自信満々の声を、歴史の声であらうと、権威者の声であらうと、そして「周縁の声」であらうと、その声を無効にする。「沈黙の修辞性を読む」はナラナイザと構造の両面で広く行われているフェミニスト批評の範囲を広げる。ナラナイザの面では、女性の抑圧ばかりでなく男性の抑圧にも注意を払う。構造面では、ヤマモトの物語の中の「無言のプロット」が、ジェンダーに劣らず文化と人種を軸にして展開していること示す。この章の初めの部分では、「十七文字」と「ヨネコの地震」に焦点を絞り、日系アメリカ人の二つの家族の中の禁止と抑圧を吟味する。ヤマモトが、気持ちや動揺させる物語を隠蔽したり暴露したり、声を潜めて社会文化的規範を非難するのに、どのように無邪気な語り手を使っているかを示す。後半で論じる「ミス・ササガラ伝説」では、家庭内の抑圧、共同体の抑圧、政治的抑圧を連結する「入れ子の箱」を作者がどのように構築しているのかを示す。芸術と政治の間の、また文学と社会史の間の厳しい対立を論駁する。日系アメリカ人の強制収容の歴史を知り、緻密に読み込むことを通じて、「ミス・ササガラ伝説」の中に押し込められた幾重もの意味の層を開き、ヤマモトの積み重ねられた「作家であること」の不安(anxiety of authorship)を顕わにしていかなければならない。

さらに、外部からの圧力への反応という観点だけで、女性のテクストの中にあるナラナイザのギャンブルを解釈しないようにと私は警告する。ウイリアム・フオクナー、ヘンリー・ジェイムズ、そしてジェイムズ・ジョイスというような男性作家が使う間接描写は巧みな技法だと思われ、女性作家が用いるのと同じ特徴をよむを得ず生じたものだと考えることは、不公平であると思われる。私は、女性作家

要するに、本書の目的は次の四つである。(一) 発話と沈黙についての西洋中心主義的な見方を攪乱すること。特にこの見方は、アジア人やアジア系アメリカ人に関して分極化、階層化、ジェンダー化されていると思う。(二) 三人のアジア系アメリカ人女性の二重の声を鑑みて、今のフェミニスト理論を再検討し再配置すること。(三) 「西洋対東洋」モデルとか「二重人格」モデルから離れ、その代りに、相乗作用を引き起こす考えを強調するアジア系アメリカ文学への多価的な取り組みを提案すること。(四) エスニック作家が持つ複数の遺産と個々の才能の両方を発掘することによって、歴史主義とフオリアリズムを調停すること。

しかしながら、これらの四つの目的が示すほどはっきりと区別して批評を実行できるわけではない。私は、「理論」と「テクスト」を分けることを意識的に避け、バーバラ・クリスチヤンが「ナラナイザ形式での……理論化」(五二)と呼んだ、各作家に特有の戦略に忠実であらうと努力する。全ての作品に包括的な理論を適用する代わりに、テクストが自らの理論を生み出すようにしてきた。特に、「作者の死」というロラン・バルトの修辞的答えは、フーコーの「作者とは何か?」という修辞的な問いかけを予測させるものだったが、特にその問いが発せられた後となつては、作者個人という概念は最近疑わしいと私は認識している。作者が「死んだ」状態であるなら、まずは生きていたにちがいない。アジア系アメリカ人作家は今ようやく誕生しようとしているところである⁽⁵³⁾。

「沈黙の修辞性を読む」「沈黙に揺さぶりをかける」「氣遣いの沈黙」という主な三つの章の題名は、便宜的な指標にすぎない。各々の章では多種多様な沈黙が検証されている。中にはその章以外の章で問

している。しかし思春期の語り手の少女が支配的な思考法を内面化することは、文中では語られないままである。この内面化によって、彼女は自分自身を知覚遅れ、同じ民族の人々を逸脱者と見なすようになる。このテクストは、人種に対する隠された侮辱が女性の抑圧よりもずっと表面化していくことを暗示している。さらに、いわゆる内部者の思考が外部から形成され歪曲されうる限り、語り手が言明した視点を、彼女が属する文化の客観的な解釈であると捉えてはならない。読者はその代わりに、語り手と作者の一貫性のない立場とテクスト内にある矛盾に注意を払わなければならない。キングストンはナラティブ技法としてトーク・ストーリー様式を用いているが、これは語り手が母親のやり方だといって率直に嘆いているものである。「中国的」教養と「アメリカ的」教養を併置することによって、両方の権威を暗に弱体化させる。同様に、『アメリカの中国人』でも中国の家父長制と白人の家父長制を同時に崩壊させるフェミニスト的戦略を用いている。この作品の中では、アメリカで中国人男性移民が人種差別主義者によって迫害されることと、まさにこれらの中国人男性が伝統に則り（中国人）女性を隷属させようとするが、暗黙のうちには比較対照されている。キングストンは二重の政治的な動きによって、人種差別主義者と性差別主義者による虐待を擦り合わせる。フェミニストの範囲を広げて、歴史の記録では声が消されている男性をその中に加えたが、ナシヨナリズムという名のもとにフェミニストの関心を下に置くということには抵抗しているのである。

「気遣いの沈黙」は、コガワの『失われた祖国』で描かれた様々な沈黙をすべて同一視し非難する批評に異議を唱えるものである。これまでの批評傾向は、チャンドラ・タルベイト・モハンナイが第三世界に対するコロナリズム言説と呼ぶものを反映しており、「あらゆる複雑さやあらゆる矛盾を表す点

ヤイノリナイの作家が特に直面している特別な障害を否定せずに、沈黙が持つ説得力のある修辭力をヤイノリナイのように打ち出しているのかを示す。彼女が感じたかもしれない文化的・政治的強制がどのようなものであれ、それは美的な抑制へと変容させられている。同様に、テクストそれ自体が誘発する社会的文化的批評とナラティブ技法を区別する必要がある。作者のヤイノリナイ自身の沈黙は、登場人物たちが受ける抑圧の中に綿密に再現されているが、その二つを一緒にしてはならない。ヤイノリナイが描く無口な登場人物たちを気の毒だと感じながら、同時にヤイノリナイの沈黙の技法を賞賛することができる。^⑨

「沈黙に揺さぶりをかける」は、キングストンの『チャイナタウンの女武者』と『アメリカの中国人』の中の矛盾に言及する。これらの作品では、両親の沈黙と歴史の沈黙が創造力を駆り立てる。名のないおばさんの話を話さないようにグレイザ・オキキッドの命令と、オキキッドが情報を故意に保留することに反応して、『チャイナタウンの女武者』の語り手はその話から変形した話を幾つか作り上げる。『アメリカの中国人』では、語り手に父の人生の話を創作させるのは父の無言である。同様に、アメリカの公的記録における中国人男性を取り巻く記録の欠落も、語り手に国家的叙事詩を創作させる。どちらの例においても、情報の不在が芸術的自由を生むための元テクスト (pre-text) として使われる。それによって、作家はもの言わぬ者に声を与え、そして家父長制と歴史の正統性を転覆させることもできる。しかし、「修辭的な沈黙」もまた、キングストンが心情を吐露したかのように見えるこの二つのテクストを特徴づけるのである。つまり、両方のテクストは、フェミニズム批評家が提唱した「二重の声」のモデルの変種として見ることができる。『チャイナタウンの女武者』は、女性が書いた物語の中し

(1) そのような文学研究と十分に携わっていくのは本書の範囲を超えることであるが、言語のミメティックな力に疑義を差し挟む特定の問いかけを行うつもりである。

(2) トン(一九七一)、スズキ、オサジマのような学者は「モデル・ライクネス」というラベルが、それほど従順ではないと思われる他のライクネスたちよりもアジア系アメリカ人を上位に位置づけ、ライクネス間

に不和を生じさせる支配的文化による封じ込め戦略を覆い隠していると指摘してきた。他の人種のライクネスも同様に差別されているが、『ライクネス』の編者たちによれば、アジア系アメリカ人は従順な扱いやすい

注

は、発話の難しさを自覚していること、公的記録に疑念を抱いていること、史料編纂のメタ・ライクネスに關与していること、そして声なき者の声を聞こえさせる能力があることで繋がっている。彼女たちの作品の中で特に注目すべきことは、話し表現と書き表現の関係が逆転していることである。登場人物の多くが(そして多分作者たち自身も)抱える声に出して言えない思いはペーシジの上に滲み出ている。「十七文字」のハヤシ夫人や、「ミス・ササガラ伝説」のミス・ササガラや、『チャイナタウンの女武者』と『失われた祖国』の語り手たちはすべて、話すことあるいは自分の人生の物語を語ることに問題を抱えている。しかし、彼女たちは書くことにおいては優れている。彼女たちの語られない感情は砕けて、詩や自伝や小説として活字となる。沈黙と発話との架け橋として、これらのテクストは、人生と同じく芸術においても沈黙と発話の両方の必要性を訴えている。

「史料編纂のメタ・ライクネス」として、『失われた祖国』は内容と形態の両面で声と無言の間を航行する。もの言う政治活動家のエミリーオバサンに具象された正義を求める声と、語り手の伯母であり保護者であるオバサンによって例示された愛と許しの「表に現れない」言語の両方に同時に耳を傾けるように、この作品は読者を誘う。テクストにはエミリーのかなりの量の日記が組み入れられている。それには、日系カナダ人を強制収容させたカナダ政府の言語による迫害と政治的な迫害が赤裸々に綴られている。エミリーにせかされて、語り手もまた自分自身の過去を記録しようとするのであるが、この叔母の確信を抱く声を採用しない。途切れない語りで国民を定義し客体化する伝統的な歴史家による歪曲を心に留めながらも、それとは対照的に、ナオミは途切れ途切れの回想記を提供する。それは、第二次世界大戦の戦前、戦中、戦後の彼女の家族の体験を微視的に虫瞰するものである。読者は行間を読んで、夢、お伽話、出来事を繋ぎ合わせ、「記憶の断片」の間も繋ぎ合わせるように強いられる。ヤマート、キングストン、コガラのナラネイが戦略は著しく異なっている。しかしながら、彼女たち

それらを個別に評価する。ない。私は、抑圧的沈黙、禁止の沈黙、保護的沈黙、ストイックな沈黙、そして気遣いの沈黙を区別し、して服従的だと非難してはならない。また、それらを気遣いのあるものとして全面的に是認してはならない。質を永續させることになるだろう。この小説の中で非言語行為が取る多くの独特な形態を十把一絡げに払って描くような沈黙の推移の違いを「植民地化」し、彼女が慨嘆する文化的言語的帝国主義の本質である。この小説の中の多くの沈黙のグラデーションを無視することは、コガラが細心の配慮を

(8) 批評の便宜上、『チャイナタウンの女武者』の語り手をマキシーンと呼ぶ。実際、排除された叔母のように、語り手はこの本の中ではずっと名づけられないままである。彼女の名前を控えることによって、キングストンは、

(7) 女性の「書くことへの不安」についての議論は、ギルバートとグラーバーを参照。女性がフアンタジエなどのように利用しているかに関する分析については、ナシニー・ウオーカーを参照。
見ていく。

している。私たちは、三人のアジア系アメリカ人作家たちが作品の中で類似の懐疑主義を表現していることを北米の小説家たちは、「表象についての懐疑主義を表すこと」(一九八三、二〇五)によって、この疎外感を表現している。マリン・フレンチ、アリス・ウオーカー、トニ・モリスン、マーガレット・アトウッドのようになっている。同時に排除されていくという女性の位置の特殊な曖昧性によって特徴づけられている」と論じられている。とりわけ原因と考えられる言語からの疎外という要素は存在している。その疎外感、覇権的グループと共謀のために支配的言説を占有できる、と信じている。一つの学派を仲介しようとして、ホフマンは、「ジェンダーがオストライカー、イエーガー）、言語は伝統的に家父長制に貢献してきたが、女性たちは自分たち自身の目的からである。反対に、アメリカの批評家たちの多くは(例えば、マックス、コロドニー一九七五、一九八〇)よって表象をさえないと考えているが、それは伝統的言語は女性を不在にすることで繁栄する男性的構築物にリグライ「一九八五a、一九八五b」、クリステヴァ「一九八〇」、ウイッティグ)は、女性性が伝統的言語にニスト理論家を分断してきた。多くのフランス系フェミニストたち(シクス、クレメント、ゴシエ、イエ)言語が女性のリアリティを表象できるのかどうかという論議は、フランス系フェミニストとアメリカ系フェ

キヤップや沈黙について詳しく述べている。

(6) キヤップや沈黙について詳しく述べている。

(5) 女性作家による沈黙という技巧を精査したフェミニスト批評家には、フリードマン、ギルバートとグラーバー、ホフマン(一九八三、一九八六)、ジョンソン、カマー、コロドニー(一九八〇)、クリステヴァ(一九八〇)、ランサー(一九八一、一九八九)、ミラー(一九八一)、オレンスタイン、オストライカー、ラドナー、レイン、ウオーター、レイン、ロウ、シヨウウオーター、スタウト、ワシントンがいる。この批評家たちの中には、マシエリやイーグルトンのようなマルクス主義批評家たちに影響された人もいる。この二人はナラティヴの

(4) オルセンの例の中では、文壇による拒絶、モデルの欠如、押しつけられた抑圧、自己検閲といった矛盾し合う要求が扱われている。女性の沈黙というテーマは、アンガルドヴァー(一九八七)、バウアー、カステイロ(七一、九五)、クライスト、グリフィン、グーバー、リッチ、ラスでも詳細に扱われている。

(3) タネとサビル・トロイクの書籍に収集されたエッセイは、文化横断的で学際的な視点から沈黙を考察しているが、そのエッセイの執筆者の誰一人としてアジア人やアジア系アメリカ人の沈黙を扱っていない。

そしてリで論議されている。

※(2) この「去勢」にまつわるもつれた問題も、チンとチャン、ホアン(一九八九)、チャン(一九九〇b)、シア系アメリカ人の控え自きは、受動的で、秘密主義で、「全く男らしさがない」と解釈されてきた(チン他)部の「英雄の寡黙さは、用心深さや勇敢さを持った行動的男性という英雄評価に完全に一致するのに対し、アのように、ジェンダーによってはかりでなく、人種によっても屈折している。ジョン・ウエインのような「西ている」(チン他 ※2)。アメリカで沈黙が一般的にどのように評価されてきたのかという点は、すでに指摘した点から鑑みても……中国と日本に先相を持つ人々は、白人の人種差別の唯一の成功例として際立つインリネイと位置づけられたことで最も抑圧されてきた。アメリカでは、文化的特徴を完全に消し去られてしま

語り手と彼女の叔母を象徴的に結びつけるばかりでなく、若い語り手のアイデンティティが不安定であること
を提示している。この語り手は、安定したアイデンティティを明示するのではなく、異なる主体位置の間を移
動しているのである。

(9) 発言を控えがちなアジア系アメリカ人の学生たちも、自分たちの方が多数派であるような授業では、次第に
自己表現することを学んでいくが、白人の学生たちに「教の上で圧倒される」授業では黙ったままであるとス
チュエン・チャンは述べている(一九八九二七〇、二七二)。彼女の観察は、私自身が教えた経験においても確認
されていることである。チャンは、さらに、この学生たちは「二重の抑圧」に打ち勝たなければならぬと述
べている。「二重の抑圧」とは、若者を(特に、女の子を)おとなしく、従順で、素直であるようにしつけるア
ジアの伝統と、そして「立場をわきまえる」ことがない場合には、アイリナイの人々を悪意で脅そうとする
アメリカの人種差別である。「立場をわきまえる」とは、黙ったままでいることを意味する(二七六―七七)。キ
クムラは日系アメリカ人の沈黙のもう一つの理由を示唆している。「パパ」(彼女の一世の父)も、子供達に、適
切な行動や振る舞いに迷った時は、黙って周囲の様子を観察するようにと教えていた(九四)。しかしながら、
アジア人やアジア系アメリカ人の沈黙はいつも服従や回避を表すとは限らない。もともと、アメリカ社会では
沈黙は服従や回避と見なされがちであるが。

心理学者のベンジャミン・R・トンは、中国系アメリカ人の特徴を権威への服従、抑制、従順と見なし、そ
の特徴の原因を儒教の影響だけに帰する傾向があると指摘してきた。彼は、このような特徴は、実は、白人の
人種差別への対応としてアメリカで育まれたのであり、初期の中国移民の大多数を占めていた教育を受けて
いない広東省出身の農民たちは、儒教倫理に染まっておらず、大胆で反抗的であつたと論じている(一九七一、

スズキ 三五二―三八も参照)。トン(一九八五)は、さらに、中国系アメリカ人の従順な特徴をキリスト教に起
因するとしている。トンやチャンが、広東省出身の初期移民の民衆文化と「偉大なる支那の伝統」を区別してい
るのは正しい見解である(トン一九七一、四)。しかし、その一方で、主流の中華思想がどれだけ民衆の想像力
にまで浸透しているのかを過小評価していると私は思う。民衆の想像力には、英雄的なエピソードが仏教信仰や
儒教の教えと共存している。これらの信仰や教えが、自制心と親や国の権威に対する従順さを勧めているので
ある。中国系アメリカ人の「従順な」特徴の原因を白人の人種差別やキリスト教のみに帰することは、中国系
アメリカ人の複雑さや広東文化の豊富な矛盾点、および初期の移民たちに必然的に求められた柔軟性や適応力
を考慮にいれていないことになる。

(10) ジョセフ・アールツック編『沈黙を破る―現代アジア系アメリカ人詩人選集』、ロジャー・W・アックス
フォード著『あまりにも長い沈黙を強いられて―日系アメリカ人が語る』、ジャニス・ミリキタ二者『沈黙を脱
ぎ捨てて―詩と散文』などの作品のタイトルは、沈黙を断固として否定しようとする傾向が支配的になつてい
ることを裏つける。

(11) 中国語や日本語で「沈黙」の反意語は「発話」ではなく、「騒音」「動揺」「騒動」であることは注目に値す
ることである。この点について、私は、第四章で詳しく述べている。クニヒロによれば、「日本人の言語に対す
る態度の特徴の一つは、明白な言語表現をさほど重要視しないということである。日本人にとって、言語はコ
ミュニケーションの「つ」手段にすぎないのであるが、他の多くの文化圏の人々にとっては、言語は唯一の「手
段」である。日本人が寡黙になりがちなのは、ほんの少しだけ言葉で言い、残りを非言語的な手段に頼って伝え
ることが美德であると考えられているからである。言語表現は、情緒的で共同体共有型のコミュニケーションなので、

(14) キングストンはあるインタビューで、女性と男性の登場人物を比較しながら、「女性は記憶を持ち、男性は記憶を持たないように登場人物を描いた。男たちは何も覚えていない。たとえば、私の父の人物には記憶が全くない。彼は樂いていくべき現在を埋めるのに忙しすぎて、過去とつながるための時間を持ってない」(ラビ) ウイツ(一八〇)。また別のインタビューで彼女は、男たちの物語の多くが「元々女たちから聞かされたものだった」と明かしている(キム一九八二〇八)。

男性ではなく女性が文化的連続性の担い手となる他の理由としては、伝統的にアジアの文化に三重連環があること、アジア女性のアメリカへの移民が比較的遅かったことがあげられるだろう。『チャイナタウンの武者』の名前のない叔母について、キングストンは、「彼女は一人娘だった。彼女の四人の兄弟は彼女の父、夫、叔父とともに『旅に出て』幾年かを西洋人となって過ごした。……彼らは叔母だけに伝統的なやり方を守り、とを期待した。今や野蠻人の中にいる兄たちは発音することなく、その伝統的なやり方を台無しにすることもあるからだ。兄たちが安心して帰宅できるように、力強く、深く根をおろした女たちが洪水から過去を守つていくことになった」(八)。さらに、グレイヴ・オーキッド、ハヤシ夫人、オバサンなど、私が論じる様々な移民の母は、全員が夫よりも何年も遅れて北アメリカにやってきた。だから、この女性たちは夫よりもずっとアジアの文化と親密なのかもしれない。

(15) ヴァレリー・スマイスは同様に、支配言語のリテラシーがいかにアフリカ系アメリカ作家に危険をもたらしているかを指摘している。「リテラシーは社会の組織化と統制の道具であり、学習者に権威への敬意を抱かせる。従って、読み書き能力はそれ自体としては表現の自由や洗練さを保障するものではない。言説の構造それ自体が人の支配を回避するような価値や仮説を具現化している」(四)。ヘイトン・ホワイトは、歴史自体が、さまざま

(12) 暗示的な表現やほめかす言い方は、伝統的な中国詩の顕著な特徴であり理想でもあった。「言語による表現を嫌う」という典型的な日本人の態度」はミヨによって強調されてきた。「日本の文化は、その志向において、主に視覚的なもので、言語的なものではない、社会的礼儀作法は雄弁さではなく、寡黙さが報われるように規定されている、と言えるかもしれない。芸術においても同様に、価値が置かれるのは、発話よりも静寂という繊細な技巧である。俳句は、この精神を最も完璧に具現化して、視覚的でもある」(三)。俳句の詩学については、ウエグとヤスタを参照。サン・ツェ著『戦争の芸術』におけるコード化されたスタイルについては、チン(一九八五)も参照。

(13) しかし、アジア系アメリカ人の男性たちは決まってオープンな表現を好み、アジア系アメリカ人の女性たちは省略を好むと結論づけるのは正確さに欠けるであろう。ジャニス・ミリキタニがトシオ・モリよりもずっと声高であるのは確かであり、ジェシカ・ヘグドンはエンヴェエド・サントスよりもずっと声を大にして言い立てていくし、マキシン・ホン・キングストンはグレイヴ・ウオン・ルイよりも言葉で捲し立てていく。ミリキタニとモリ、ヘグドントサントスのペアでは、女性の方が男性よりも一世代若いので、世代的な特徴が文体にも影響を与えていることを示唆している。「女性的な文体」(七七)を相定することの危険性については、コロドニ一九七五も参照。

私は思う。

断片的で非体系的なものになりやすい」(五六)。クニロの意見では、「中国人は……水墨画では、墨を筆で散らして描くことで空白が生み出す美に価値を置くが、「それでも」表現し尽くし、際限なく議論することを好みがちである」(五七)。日本人と中国人をこのようにクニロが対照的に説明しているのは、多少誇張し過ぎた

- また文彩によって形作られた言葉による虚構と見なされなければならぬと論じている(一九七八)。
- (16) 信憑性を含む規準の問題は、ダニール・サンテイアゴの『町中で有名な』(一九八三)において最も劇的に例証されている。これは本物のチカーノ小説と思われていたが、実際は白人のダニエル・ジエイムスによって書かれたものであった。もっと最近では、チエロキ族の自信と思われていたフロレスト・カーターの『リトル・トリ』(一九九一)は、実は「クイー・クランクス・クラン団テロリスト」のアサ・アール・カーターによって書かれていた(グライツ一九九一、二六)。
- (17) フェミニズムとフーコ어의他の収斂点に関しては、ダイアモンドとクインビーを参照。文学批評ではフョルリスムのプロトチと歴史主義的プロトチに二分されるとされるが、キャロルはその間違いに一言触れて、次のように注意を喚起している。「真に批判的な歴史への回帰とは、今日覇権を争う様々なフョルリスムの代替であると気取るよりもむしろ、敵対する様々なフョルリスムに疑問を投げかけるために、自らが使っているのと同じ言葉で、自らを問い質さねばならないことである。すなわち、歴史回帰主義は、形式(フォルム)という概念を閉ざされ、完全に自律的で、内省的なものと位置づけて弱体化させているが、自らも語りえない過程であり、目的地に到達することができず、完全には回帰することはない。それは回帰する場が全くないからではなく、唯一つの、究極的な、全体を決定づける場、場の中の場というものが不在からである」(六六、バートン、バトラー、レントリッキア、ラドハクシエンナムも参照)。
- (18) ハッチオン自身、歴史編纂的メタ・フイクションの概念を入念に仕上げるにあたって、『アメリカの中国人』を含めて考察した(一九八七)。ゴールニク(一九八九、二八八)やジョージズ(二二四)は両者とも、その歴史編纂的メタ・フイクションという包括的なラベルを『失われた祖国』に添えた。
- (19) ジエイムスの見解は、第一世界と第三世界の二分法的対立を強め、第三世界として十把一からげに文学を均質化するとして、アーツによって批判されてきた。にもかかわらず、国家的寓話についてのジエイムスの意見は、新興文学の見方に貴重な視角を提供している。第二章で見えていくことになるが、『ミス・ササガララ伝説』では、個人的な物語と公的な物語が縫い目も見えないほどに密接に結びつけられている。
- (20) フーコ어의この用語の使用について私が理解する限りでは、『記憶』とは、『真理』に値しない地位を所有し、伝達され、銘記され、容認される知である『伝統的歴史』に奉仕するものである。対照的に、『対抗記憶』とは歴史の連続性という公的解釈に抵抗し、『知としての歴史に反対し』、『見解としての知』の正体を暴いていくような『効果的歴史』に奉仕するものである(一九七七/一九八〇、一六〇、一五〇)。
- (21) ショウオクターは、その現象を女性の文学的アイデンティティのせいにしてしている。そのようなアイデンティティは、大抵は支配的な男性文化と見えなくされた女性文化によって形作られており、さらには沈黙したエスニック文化と混合されているだろう。彼女のバラダイムは、シャリー・アードナーとエドウィン・アードナーの『女を理解する』(シャリー・アードナー編)で概説された文化的モデルにその起源がある。女性作家の重ね書き手法を探求してきた他のフェミニスト批評家には、ミラー(一九八一)、ギルバートとグーバー、フシントンがいる。ヨギ(一九八八、一九八九)は、『埋もれたグロット』という言葉をヒサエ・ヤマモトとフコエ・ヤマウチの作品における類似の現象を説明するのに用いている。
- (22) ハインツ付き作家の文化的二重性を検証してきた多民族文学の学者には、他にベイカー(一一二六)、カステイロ(特に、二六〇一九二)、キム(一九八二、三三五七)、タルバット、リンカン(一九八三、二四一四〇)。

- のがある。人種差別主義は文化を継続することと政治的に忠誠であることを同一視しているが、それを受け入れるのではなく、それに抵抗しなければならぬ。
- (25) キングストンは、『ビツグ・アインイー』(チャン他一九九一)の編者たちが作成した捏造作家のグラフィストの筆頭に挙げられている。「ミス・ササガラ伝説」は『ビツグ・アインイー』に入れられており、『わたれた祖国』は抜粋が収録されている。編者らは自分たちのイデオロギ―声明を越えて文学的判断を下すことがよくある。文化的二重性に対する彼らの論駁に関する明示的及び暗示的な評論については、リム(一九九〇)とリンを参照。
- (26) ヤーロロウが指摘するように、「もし血統志向の学者がいなかったら、現在やと認識され、ある程度の客観性をもって扱われつつある様々な文化の多くの側面はなおざりにされたままになるか、あるいは、さらに悪いことには、誤って解釈されたままになるであろう」(八六五)。ポールハワ―は別の言い方でこう述べている。「エスニックの主体たちが、絶えずそして敏速にアメリカの公的な記号を局地文化(*エスニック共同体文化)の必要に応じて再解釈していた間、全体文化(*白人支配文化)は、それ自体の内部にある権民地にも、それ自体の生き生きとした豊かさにも気づかず安穩としていたのであった」(八三―八四)。「エスニシテイ学派」に関する論評についてはワルドも参照。
- (27) アジア人がそれぞれの出身国のアイデンティテイよりも集会的呼称を優先する最も強力な動機は、政治的なものである。そうでなければ、彼らは合衆国の政治舞台でさらに不可視的存在となってしまうであろう。「アジア系アメリカ人」という語の限界と可能性については、ロウトとサン・ホアンもまた参照。
- (28) フェミニスト間の分裂については、ハアシェとクラ―を参照。アジア系アメリカ文学におけるジェンダー対

- リン、リオネット、サルディザアル、ザアトリ・スミス(特に、一三二―一八)、そしてラレーズ(二四九―五四)がいる。
- (23) アメリカ生まれの者と移民の相互軽視は、ホム(一九八四)によって議論され、ホアンの『FOB』(Frish 母 the Boat)で劇化されている。チンとチンも参照。『アインイー』の編者たちは、「アジア系アメリカ人の感性はこの時点(一九七四)ではあまりにも繊細なので、あなたにはアジアで実際に生活した記憶がないという事実にもかかわらず、あなたをアメリカ生まれ(アジア系アメリカ人であること)と区別するには、中国か日本の生まれであるという事実だけで十分なのだ」と論じている(チン他区)。同じ編者たちは、最近、アジアの英雄伝説を取り戻し、中国と日本の叙事詩を普及させようとしている。そうすることで、彼らは大衆読者がアジア系アメリカ文学を形成してきた非西洋的な古典と向き合うように促している。しかし、彼らは白人文化やキリスト教の刷り込みの結果として、決して「英雄的」(すなわち好戦的)ではないアジア(系アメリカ人)の特徴を排除し続けているのである。
- (24) 他の人種的アイリテイたちも、自分たちの多様な文化遺産を一層主張するようになってきている。例えば、近頃は「アフロ・アメリカン」から「アフリカン・アメリカン」へと用語が変わってきたが、それはアフリカの祖先を誇りに思う気持ちを持つ黒人たちの間で高まっていることを反映している。同様に、チカーノであると自認するメキシコ系アメリカ人は、自分たちの文化遺産は三つに分かれていると主張する(*アフリカ系、ヨーロッパ系、ネイティブ・アメリカン系の三つの文化群)。人種的、文化的、政治的類似性を不当に融合させられた結果生じた歴史的トラウマ(とりわけ、第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容が最も顕著な例)のために、アジア系アメリカ人の中には自分たちのエスニック文化遺産を取り戻すことが特に困難になったものがある。

- 立については、チャン一九九〇b、キム一九九〇を参照。
- (29) アジア系アメリカ人作家に関する私の心情は、ミラーが主張するように、「アイデンティティからの逃避をもてあそぶ費沢」(一九八六、二七四)をいまだ持たない女性作家について多くのフェミニストの批評家たちが抱く心情に似ている。プロズキ、シエンク二八八も参照。
- (30) 一人の登場人物の沈黙を著者が模写することに対する異なる反応に関しては、ウシントンを参照。

第二章 沈黙の修辞性を読む

——ヒサエ・ヤズモトの「十七文字」「ヨネコの地震」「ミス・ササガワ伝説」

フェミニストたちは女性作家が用いる様々な間接的手法を問題にしてきた。これまでに私が言及したのは、ジョアン・ラドナー、スーザン・ランサー、エレイン・シヨウオスターの議論についてである。ラドナーとランサーは女性作家が使うコード化の戦略について述べ、シヨウオスターは女性が書く小説を「二重の声の言説」として読む可能性について論じている。ごく最近では、スーザン・スタンフォード・フリドマンが、女性のナラティブを、「抑圧されたものの回帰」(フロイトの用語)、つまり、家父長制の社会秩序によって検閲を受け隠蔽されてはいても繰り返して表出する記憶の記録、として読む「精神の政治的解釈法」を提示した。「女性(または女性のテクスト)は発話と沈黙の弁証法を用いながら、禁止されたものを暴露するのか、それとも隠蔽するのにかんして、テクスト上のごまかしによって意識的、無意識的に折り合いをつけようとしている」と彼女は主張する(一四二)。こうした解釈上の戦略は、分析手段としては有効だと私は思うが、隠されたプロットと無邪気なごまかしによるコード化に秀でた二世作家、ヒサエ・ヤモトの小説に書き込まれた幾層もの沈黙を説明するには、フェミニストの理論を越えて考える必要があると感じている。フェミニストの批評家は人種的マイノリティの女性か二重に抑圧されていることを公然と、または暗黙のうちにも認めているが、発話と沈黙の文化的表象の差異をほとんど考慮していない。パトリシア・J・ウェッツェルによると、実際には「日本の標準語」である言語を、アメリカの言語学者(例えば、レイコフ、アバートとトキンス)は「女性の言語」と見なしている。伝統的な日系アメリカ人の家族、少なくとも一世や二世の家族においては、非言語コミュニケーションや間接的な発話はよく見られる現象である。彼らの沈黙という文化的傾向は強制収容のトラウマによりさらに強まったと言われている(ラジタ三四、キタムラ 九八、ミヤ

私がここで言っている沈黙とは自然なものではない。姿を現そうともがきながらも現れ出さずとができないものを不自然に押さえつけ、閉じ込めてしまう。

テイレイ・オルセン、『沈黙』

女性の作家は作品のなかにすぐに隠れたがるし、そうしなければならぬと言われているように感じる。女性は言語を盗む者として、「父を暴いていく」のを恐れるために、誰にも見られることなく、また盗人らしく見えぬように、盗む技を学ばなければならぬ。

トリン・P・ミンハ、『女性・ネイティブ・他者』

我が胸は畏敬の念に包まれる
掲げられた旗の栄光を目にし

太陽の赤

アモントの花の白

晴れ渡った夏空の青

ヒサエ・ヤモト、『我もまたアメリカに生きぬ』

モト一九六七年七月三十一日、チャンその他一九八二(二六)。したがって、二世の女性作家が沈黙や間接的手法を用いるのは、ジェンダーだけがその要因ではない。また、フェミニストが家長制下の女性の沈黙を重点的に議論する場合には、沈黙を我慢強さと関連づける文化においては、特に男性も伝統的な男性性の定義に縛られ、ひどく感情を抑えていることを考慮に入れないことが多い。

一九二二年、カリフォルニア州リンドビーチで日本人移民の両親のもとに生まれたヤマモトは、十代で執筆活動を始め、日系アメリカ新聞に定期的に寄稿していた。第二次世界大戦中はアリゾナ州のホストン収容所に三年間収容されたが、『ホストン・クロニクル』(収容所で発行されていた新聞)の記者やコラムニストとして活躍し、連載ミステリー小説「死がホストン行き」の列車に乗って」をその新聞に掲載した。一九四九年「ジョン・ヘイ・ホイツトニ財団機会提供奨励金」を授与され、ヤマモトは戦後、まだアメリカ国内に反日感情が荒れ狂っていた時期に、アメリカで評価された最初の日系アメリカ人作家の一人となった。短編小説の「ハイヒール」「茶色の家」「祝婚歌」はマーサ・フォリーの「秀作短編小説」の目録に掲載され、「ヨネコの地震」は、『アメリカ短編小説傑作選一九五二』に収録された。一九八六年には、ビフォア・コロムブス財団の「生涯の功績に対する全米図書賞」を受賞した。「十七文字」と「ヨネコの地震」をもとにエミコ・オオモリが監督した映画、『暑い夏風——Hot Summer Wind』は一九九一年五月に、PBS (*アメリカ公共放送サービス)の「アメリカン・プレイハウス」シリーズの一つとして放送された。³⁾

ヤマモトは幅広い読者と自分の体験をもとに、アングロ・アメリカン文学と日系アメリカ文学の両方の

伝統に従って作品を書いている。彼女の作品には、表面的には一つの物語に見せかけて、実際には二つの物語を伝える「二重の語り」が見られるが、その技法は信頼できない視点というよく知られたナラティブの間テクニク的な使用の方と密接に関連している。彼女の作品のうち最も心に残る三つの物語、「十七文字」「ヨネコの地震」「ミス・サカガラ伝説(これ以後「伝説」)には明らかにならなアプロットと隠されたアプロットがある。「十七文字」と「ヨネコの地震」の明らかにならなアプロットでは、少女の視点から実際に起きた「出来事」が語られ、隠されたアプロットでは彼女の両親である一世夫婦の不和が問題にされている。「伝説」は噂と何かを問い、狂気の社会的定義を問題にしているが、信頼できない語り手の使用は、テーマとの関わりはもちろん、戦略としても重要である。制限された視点を用いるモタニストの実験にヤマモトが影響されていることは間違いないが、日系アメリカ人の文脈に合うように彼女はその手法を改造させている。

彼女のストーリーでは、一世夫婦の間(ヤナギサコを参照。一〇五、一一二)と二世と二世の親子間の会話の少なさがうまく生かされている。一世の親(特に父親)は自分の子供に権威的で保護的な態度をとる傾向があるため、多くの場合、親子の自由な会話は抑えられている(キタムラ九八)。「十七文字」と「ヨネコの地震」では、一世の含みのある沈黙に対して二世の無邪気な視点を使うことで、ヤマモトは隠されたアプロットを構築し、不吉なメッセージから注意をそらしている。³⁾ サスペンスが生じる理由のひとつは、両親が自分たちの問題を子供に明らかにしないことである。二世の娘の無邪気な語りから、大人の沈黙が持つ暗いニュアンスを感じるしかない。私たちは登場人物を通して沈黙の痛みとフラストレーションを味わい、語りによってその修辭的な力を感じ取る。

ヤマモトは省略技法を使うことで、人々を沈黙させる社会的、政治的な力を問題にすることを避けて

この文化的な影響という問題について、ヤマモトは間接的に答えている。「私はほとんどの二世と同じように、ガブやエンリョという日本の考えや日本的な礼儀作法の中で育っているため、そのような日本のな行動様式が私の書いたものに影響していると思う。それは当然のことであり、何も不思議ではない」〔著者のチャンに宛てた手紙、一九八八年六月、許可により引用〕。エンリョやガブとは適切な振舞いに関する日本語である。日本人の家庭では、エンリョ〔敬意〕(deference)、「ひかえめ」(reserve)「内気」(timidity)と訳されることが多い〕にかかわるルールは幼い頃から身につけられる。「子供は

人の差異を明確にすることは重要であるけれども^⑤。二世の文化)に連続性が存在することを強調したいと願っている。もちろん、日本人と日系アメリカ人や簡単に説明することでステレオタイプを打破し、日本文化と日系のエスニック文化の間(特に一世シオンや間接的コミュニケーションを好む日系アメリカ人の傾向を否定するのではなく、その傾向を分の差異を曖昧にする危険を冒すことになる。しかし、私の意図は全く逆である。非言語コミュニケーションや簡単に説明すること、私は「不可解なオリエンタル」というステレオタイプを強調し、日本人と日系アメリカ人主張すると、私は「不可解なオリエンタル」というステレオタイプを強調し、日本人と日系アメリカ人しかし、実際の人間の行動範囲は既存の文化が規定するよりもずっと広い。日系の礼儀作法について

とも表面的には、自己主張をさらに抑制する傾向にある。女性はどう一つの伝統である文化的礼儀作法によって女らしい控えめさが強化されているため、少なく

たち二世は控えめで用心深く、他の人がどう思うのかを非常に気にする」と述べている(一九七六、

二六)。アメリカでは一般的に、女性は男性よりも丁寧な言葉で話したり書いたりするようにしつけられていて、ロビン・レイコフが主張するように(スタウトも参照。一〇一一)、日系アメリカ女性はどう一つの伝統である文化的礼儀作法によって女らしい控えめさが強化されているため、少なく

「人々が自分のことをどう思うかを非常に気にする余裕はない。しかし、私

「争いや面と向かって反対することを控える傾向にある。二世作家が少ないことについて、彼女は「世の性格の何か」が書くことへの衝動を抑制していると、「作家というのはひとつの考えを伝えたいという衝動から書くもので、一般の人々が自分のことをどう思うかを気にする余裕はない。しかし、私

「作家であること不安」をさらに強く感じただであらう。終戦とともに十一万人以上の日本人を祖先にもつ人々の強制収容は終わったが、支配文化からの政治的、社会的締めつけは続き、身体的な拘束が解かれたあともテラクト上には束縛が残った^⑥。ヤマモトは「伝説」において、「気のふれた」女性のリアルな描写と強制収容の異常さへの言及を表面下で重ね合わせている。政治的サブテラクトがどのくらいばかされているのかについては、「クニオン・レビュー」誌にこの作品が最初に掲載されたのが一九五〇年、戦後五年しか経っていない時期であったことと関係しているであらう。

ヤマモトは日本の礼儀作法に従うように育てられた二世であり、自分のエスニック・コミュニケーションの「つきあいの作法」(フランク・ヤマモトの用語)の影響を受けているであらう。日系コミュニケーションの争いや面と向かって反対することを控える傾向にある。二世作家が少ないことについて、彼女は「世の性格の何か」が書くことへの衝動を抑制していると、「作家というのはひとつの考えを伝えたいという衝動から書くもので、一般の人々が自分のことをどう思うかを非常に気にする余裕はない。しかし、私

人種的アイリテイの一人として、特に真珠湾攻撃後は反日感情が表面化したために、ヤマモトは「作家であること不安」をさらに強く感じただであらう。終戦とともに十一万人以上の日本人を祖先にもつ人々の強制収容は終わったが、支配文化からの政治的、社会的締めつけは続き、身体的な拘束が解かれたあともテラクト上には束縛が残った^⑥。ヤマモトは「伝説」において、「気のふれた」女性のリアルな描写と強制収容の異常さへの言及を表面下で重ね合わせている。政治的サブテラクトがどのくらいばかされているのかについては、「クニオン・レビュー」誌にこの作品が最初に掲載されたのが一九五〇年、戦後五年しか経っていない時期であったことと関係しているであらう。

自身の「狂気へのおわび」のためだそうだが、この意味ありげなペンネームから、彼女が女性作家としての自意識を持ち、自分の言葉の力を自覚していたことが推察できる(ヤマモト一九七六、二八)。

の共感を表現した。彼女は以前テラクトというペンネームを使っており、それは「ちょっとした」自分の書き物として、驚くようなサブテラクトを表面下に隠すという非攻撃的な方法を使って、フェミニストである(一四五、ローターも参照)。ヤマモトは、フェミニスト的な作品の出版が難しかった時代の女性の

「十七文字」

手は、若い主人公が家族とありふれた日常を過ごす様子を語りながら彼女に最も関心のある事柄——明らかなプロットを構成する出来事——を観察し、それを私たちに打ち明ける。しかし、行間には主人公の両親に焦点を当てたもう一つのプロットがひそんでおり、私たちはその二人の抑圧された感情に引き波のように引き寄せられる。「伝説」には、誰もが気がふれていると見なしたミス・ササガラをめぐる多くの噂話が織り込まれている。しかし、物語の最後で、ありふれた解釈や私たち自身の解釈を問いただすようなさらなる情報を与えられる。そして、読者はこのストーリーの本当の「要点」は何なのだろうと考えさせられる。

フェミニストの批評家たちには、女性作家の間接的手法を主に男性の視線を避けるための手段と見る傾向がある。ヤズモトの場合には、確かに、文化的な背景や厳しい白人からの視線も重要である。しかし、私の意見は、言語的な抑制を社会的な制限から必然的に発生する障害と見る批評家とは異なる。私は、言語的な抑制それ自体が多くの目的をもった戦略である⁽⁵⁾と考える。ヤズモトのスタイルは作品が書かれた時代に特有の外的な制約を反映しているが、彼女のストーリーは間接的な沈黙の表現のために一層感動的なものになっている。

「十七文字」のオープニングは「見明るく開放的である」。

二世の間では率直な話し方は長所とは見なされない。……日本に住む先祖たちと同様に、二世はすぐに話の核心をつくことはしない。……二世の会話はほとんどの場合、一見したところ、お互いを煙に巻くかのようにして行われる礼儀を守る人々の間の情報ゲームのようなものである。聞き手の役目は自分が聞いている話の文脈を確認し、その文脈と話し手について自分が持っている知識を用いて、何が話の重要ポイントなのかを導き出すことである。(一九七―五三)

「十七文字」「ヨネコの地震」「伝説」において表面的に語られているのは語り手のその場の観察であり、私たちにはそれを解説することが求められる。「十七文字」や「ヨネコの地震」では、語り

会学者のスタンフォード・ライズンが指摘した会話的技法を戦略的に使用している。ヤズモトは文化規範を文学の戦略に用い、社会的な儀式を微妙な修辞に委ねさせている。例えば、社私つても最後までやり抜く力⁽⁶⁾があつたからである(「キタムラとキタ五五」)。

世が困難、失意、孤独に見舞われながらも生き抜くことができたのは、ガベンする力⁽⁷⁾いかなる犠牲性を抑え込み……内に秘めること」を意味し(「キタムラ」三六)、非常に堅固な忍耐力を表す言葉でもある。「一に対する安全で中立的な態度として、意識的に沈黙することであつた」(五三)。ガベントは「怒りや感情人と白人のつきあいにおいて、「エンリヨ」を最もよく表現しているのは、きまりの悪い、漠然とした状況行動、自己中心的な態度は罰せられる」(「キタムラとキタ」五四)。日本人の部下と上司や、日系アメリカ控えめ、慎み深さ、遠まわしな言い方、謙虚さの重要性を早いうちに学び、自慢、攻撃的な態度、派手な

だからロージーと父はしばらく二人の女性と暮らすことになった。彼女の母とウメ・ハナゾノである。ロージーの陽気な語りにはほとんど差がない。ロージーは母の新しい趣味に興味を感じてはいるが大喜びを反映して「明るい (isy)」ため、中断されたプロットの重大さは弱められている。(語り手とロージーの陽気な語りにはほとんど差がない) ロージーは母の新しい趣味に興味を感じてはいるが大喜び

アメリカ新聞に「熱心に何度も投稿している」ことが明らかにされるが(九)、語り手の口調は娘の性望——に関わるプロットである。ストーリーの最初から、母がウメ・ハナゾノというペンネームで日系は、俳句を詠み、それについて議論したいという母の強い衝動——セックスとほぼ同じくらいに強い欲第一のプロットはロージーの思春期の経験、特に芽生えたばかりの性の喜びと不安を語っている。第二娘の直接的な視点と母の隠された視点がこのストーリーの二つのパラレルプロットを動かしている。さて、それは同時に母の隠された感情を遥まわしに伝えている。

「か、また次の俳句を考え始めた、と私たちは知らされる(八)。そして娘とともに、「であったに違いない」と「うか、あるいは」の表現が示唆するあいまいさを感じるようになるが、娘のジレンマによって母も同様の苦境にいてはならないかと想像することになる。ロージーが英語で書かれた俳句を母と分かち合えないことは、日本語で書いた俳句を娘と分かち合えない母が感じるさらに大きな不満を暗示するからだ。母は創作活動の大部分を一人でやっているに違いない。自分の俳句について娘や、後にわかるとだが、夫と話し合うことができないからだ。このストーリー全体において娘の反応は明確に描写されているが、それは同時に母の隠された感情を遥まわしに伝えている。

著者もまた間接的に母の詩に対する娘の印象を伝えるものの、母の思いを明らかにすることはなく、私たちが悩ませる。娘は、「イエス、イエス、分かるわ」、「とても素晴らしい」と母の作品を絶賛するが(八)、日本語能力の限界を母に知られないように口先だけで言っているに過ぎないことがわかる。娘は以前に英語で書かれた俳句を読んだことがあり、それを母と分かち合いたいと思っているが、そのためには日本語に訳さなければならず、気が失せてしまう。娘には「イエス、イエス」と言っていた方が無難だった(九)のである(九)。対照的に、母の気持ちには推測の言葉でしか表現されない。母はロージー

物語が始まった途端、私たちは「情報チーム」に立会い、それに参加させられる。母の新しい趣味にまっわる逸話から、モチーフと間接的手法の両方を知らされる。母と娘は如才なくごまかしあい、二人の間のコミュニケーションの問題を認めあったり、それに向き合おうとはしない。娘のロージーは日本語能力の限界を隠し、母がそのことを指摘して彼女をまっつかせることもない。

母が詩を書いているのをロージーが初めて知ったのは、ある晩母ができて上がつた詩を讀み上げ、なかないでしよう? と同意を求めてきた時だった。それは猫を詠んだものだった。ロージーは心を偽って、よくわかるわ、いいじゃないの、と言った。ここ何年か、毎週土曜日に……日本語学校に通っているのに日本語があまり上達していないことで母をがっかりさせたくない気持ちもあつたからだ。しかし、ロージーがその詩を深く理解していないと母が思っているのは、自分が書こうとしている詩の形式について説明し始めたことから明らかであった。(八)

母(本名トメ・ハヤシ)は家事を引き受け、食事を作り、洗濯をし、夫と一緒に……うだるような暑さで汗があふれる畑でトアの取り入れをした。……ウメ・ハナヅノが生きて居るのは、夕食がすんでからである。まじめな顔つきで何かぶつぶつと呟く別人であり、話しかけられてもしばしば返事をしなかつた。真夜中まで居間のテアトルに向かってメモ用紙に忙しそうに鉛筆で走り書きしたり、薄縁の太いパーカー万年筆で上質の紙に文字を一つ一つ丁寧に書き写したりしていた。(九)

トメ・ハヤシとウメ・ハナヅノはうまく共存しているように見える。トメ・ハヤシは家事と農作業と、いう大変な量の仕事をこなしているが、それは俳句を詠むことの妨げになつてはいない(オルセンを参照。三四一四〇)。後で振り返つて考えると、そうではないというほのめかしがあることに気づくが。形容詞の *extensive* (贅沢) が示唆するように(*この引用部分の前に、「母は贅沢な (*extavagant*) 投句者となつた」という表現がある)、家族は母の創作活動を「汗があふれる畑」での差し追つた仕事とは相いれない贅沢なことだと感じている。「ぶつぶつと何かつぶやく別人」という表現は、俳句を詠む母が娘と夫にとつてよそ者のようであり、二人とも母の芸術活動に近寄りたさを感していることを示している。母の俳句は夫の日常的な関心事からはかけ離れたものであり、母がつぶやく言葉は娘には外国語のように聞こえる。

ペンネームを持つことは日本の俳人たちの慣行ではあるが、このような状況下のペンネームはミセス・ハヤシにとつて別人格の獲得を意味する。彼女が俳句を詠むのは、夫から独立した独自のアイデンティティをもつことができる時だけである。皮肉にも、ペンネームそのものに不吉な意味がある。ゼノ

ピア・バクスター・ミストリが指摘するように、「日本語のウメ・ハナヅノのウメは早春に花を咲かせ、春の終わりまでに実をつける優美な花木であるが、その花の命は三カ月しかない。ハナヅノとは『花の庭』の意味」である(一九八)。ウメの花はウメ・ハナヅノの「寿命」を予言しており、「とても短い、だんせいせい三カ月」と書かれているように(九)、季節ひとつ分しかないのである。

読者は、母がなぜ俳句を途中で断念しなければならぬのだらうとその原因に思いをめぐらせるが、娘の思春期の出来事のように「気をそらされて」しまう。両親は娘の生活とかわる時にしか出てこない。例えば、ハヤシ一家がハヤシの家を訪問した時、ハヤシ家の十代の娘の一人が買ってもらつた新しいコートが言説上の関心事となり、大人たちは背後に追いやられる。ミスター・ハヤシとミセス・ハヤシは俳句について話し、ミスター・ハヤシは雑誌を読み、ミセス・ハヤシは一人でずわつている。ロージはハヤシの家の娘たちの会話に引き寄せられ、その夜はおだやかに過ぎていく。その時、突然にミスター・ハヤシが妻やハヤシ夫妻に声もかけずに立ち去る。ロージは当惑するが、それは私たちも同様である。

このエピソードは、ラドナーとランサーが称する「気をそらすこと (*distraction*)」つまり、「非常に注意深く聞いていない」とミッセージが伝わらないように、雑音、妨害、曖昧な表現でフェミニスト的ミッセージの響きを消すこと」を示す良い例である(四一七一八)。この場合、「雑音」は娘たちの洋服をめぐる大騒ぎ、つまり女性にふさわしい関心事であり、夫を立腹させるほどのミセス・ハヤシの俳句への「異常な」執着と暗黙のうちに対照を成している。

他の作家ならできるだけ短時間でサスペンスに仕立てる場面で、ヤズモトは一見無関係のような細か

つきあいには焦点が置かれている。ヘイスター・カラスコ（彼女の家族の下で働くメキシコ人夫婦の息子）と約束の場所で会い、定石通り彼女は我を忘れる。「ヘイスターのキスを受けながら、ロージーは生まれてはじめてなんともいえない甘美な無力感に囚われた」（二四）。ここでは並置というコード化の戦略、つまり「ある場面で明確に見える事柄が、別の場面での偏同した意味レベルを發展させる」技法が使われている（ランドナー・トランサー、四一六）。若い二人が約束の場所であつて、それ自体は愛の始まりを示しているが、ロージーの両親のプロットを思い返して考えると、彼女の平生えだばかりのロマンは不吉を予感させ、最初からうまくいかなことが運命づけられている。また、「犠牲者」、つまり母が、内にたぎる激しい感情を声に出して表現できない瞬間が来るであろうことが予想される。ロージーが新たな経験をした後で家にもどると、母は俳句コンテストについて親類の人と話をしている。風呂場に行く途中で父に会い言葉をかけるが、無視される。彼女は父のつっけんどんな態度は自分に向けられていると思う。しかし、慎重に考えれば、父が不機嫌なのは母がまだ俳句に熱中しているからだと推測できる。情報源がロージーであるために、父の無言がどのくらい母の俳句への不満を表しているのかが私たちには分からない。娘と母はミスター・ハヤシの不機嫌にほとんど注意を払わない。二人とも恋愛や芸術を通して自己発見に夢中だからである。

最後のセクションで二つのプロットは最終的に絡み合う。ロージーは学校で、「まじめに勉強したり、ふざけたり」しながらヘイスターのことを夢想する（二五）。父が迎えに来て、「この暑さはトロトロにくない。今日は休む暇はないぞ」と話し、家に着いたらトロトロの仕分け作業を手伝うようにロージーに言う（二五）。ミスター・ハヤシが二以上の文を話すのはこの時だけである。何の変哲もない内容だが、

い事柄に私たちの注意を向けておいて、いきなり緊張状態に落ちて、新しいコードをめぐって少女たちが陽気に騒いでいるために、私たちはミスター・ハヤシの煮えだきつている怒り（これがもどて突然に帰宅することになる）に気づかない。ミセス・ハヤシは驚き、ハヤシ家の人々に夫の非礼を詫言るだけではなく、夫に追いついた時には、「俳句のことにになるといつも夢中になつてしまつて……何時なのかも忘れて」と言い訳をする（二一二）。この夫婦の内面の思ひは私たちには明らかにされない。一人は沈黙し、もう一人はその人の怒りを静めようと言ひ訳をしているだけである。

しかし、著者は娘の気持ちを通してこの場面に私たちがどう反応すべきなのかを示している。ロージーは両親を見ながら、「突然彼らに対する憎しみ、母には父に許しを求め、父に対しては母を拒否する態度に憎しみを覚える」（二二）。ヤマトは、母の見えすいた言ひ訳の裏に娘と同様の言葉では言ひ表せない感情が潜んでいること、また沈黙しているにもかかわらず父の支配力はやはり絶対であることを示す。さらに、ロージーは怒りを感じながら、交通事故で放り出された二つの血だらけで折れ曲がつた死体、そのうちの一つは自分のものである場面を想像する（二二）。ここで私たちは両親の不和を遠まわしに知らされる。そして、それは三人の人生が実際に絡まる暴力的な最終場面へとつながっている。この時、ロージーは、心は激しく揺れ動いているにもかかわらず、表面的には何事もなかつたかのように控えめにしている。子供のいる前で本音を言わない両親と同じように、彼女も感情を抑えることを学んでいる。

著者もまた真相を明らかにすることを避けている。両親の不和をほめかすとすぐに娘の出来事に話を切り替え、両親の問題は背後に置かれる。次の二つのセクションでは、ロージーの異性と初めての

この場面の後で二つのプロットは巧みに重ね合わされる。消えゆく炎を母と娘がいつしよに見ている間に、はじめは別々の撫り糸に過ぎなかつた二人の人生が絡み合い始める。初めてのキスでまだときめいているロージーは、母の不幸な結婚をまざまざと見せつけられ、思春期を迎えた彼女のバラ色の世界をミセス・ハヤシのあと知恵という暗いレンズを通して見直さなければならぬ。「どうしてお前のお父さんと結婚したか知っているかい？」と母が聞いた時、「その話が暑い午後の今見たばかりの暴力的な行為と結びつき、自分の人生をすっかり破壊してしまっただろう」という子感かして、ロージーは両親の結婚のいきさつを聞くのを恐れる（一八、強調はチャーン）。母はこれまで、我が身に起こった悲しい出来事を心の奥底にしまい込んでいた。この時、母の口から秘密の告白を聞いて、幻滅したくないと

妻の絶望を表現している。⁽¹⁶⁾ 版画の焼却というその劇的場面は、怒りの叫び声や哀れな泣き声よりもずっと効果的に夫の憤怒と暴力的な行為に置かれている。読者は、母や娘と同様に、恐怖のうちにその場面を見つめなければならぬ。主な登場人物たちがかわす会話が少ないことに合わせて、クワイアップクスは言葉による対立ではなく衝突の終焉を告げている。母の詩人としての寿命がなせんなに短いのかを私たちがここで理解する。いままでの母の冷靜さは彼女の苦悩の深さを表し、焼かれた版画は怒りと絶望感が母の心を焼き尽くすまを象徴している。「火葬」という言葉は版画と人を結び付け、芸術作品の焼却は芸術家としてのキャリアの終焉を告げている。母の詩人としての寿命がなせんなに短いのかを私たちがここで理解する。主な登場人物たちがかわす会話が少ないことに合わせて、クワイアップクスは言葉による対立ではなく衝突的

父は絵がすっかり燃えてしまったのを確かめると、畑の方にもどってきた。(一八)

間もなくミスター・クログが一人で家から出てきた。……次に父が、まだ一人で出てきた。手で何かを抱えていた(あの絵だね、彼女は気がついた)。風呂の薪が積んであるところへ行くど、父はその絵を地面に投げつけ、斧を取りあげた。それから、ガラスの額もとともに絵を打ち壊し(ロージーのところまでその音がすかすかに聞こえた)、風呂のたきつけに使う灯油に手を伸ばして、ばらばらになつたその絵の上にかけた。夢を見ているんだわ、とロージーは思った。夢を見ているんだわ。しかし、

72 彼の言葉は不吉な前兆を表している。新聞の編集者のミスター・クログの訪問で、急がなければならぬ。彼は最近の俳句コンテストでロージーの母が一等賞を取ったことを知らせに、賞品である広重(一七九一八五八)の「繊細な躍動感で描かれた『浮世絵を』持って訪ねて来たのだ。ミセス・ハヤシがお茶を出そうとミスター・クログを家に招き入れると、ロージーの父は自分の妻に、というより彼女の芸術的な情熱に対して、初めて率直な意見を口にする。「なんだってー お前のお母さんは頭がおかしい!」(二七)。父はロージーに、すぐに家の中に入り、トアの収獲のことをミセス・ハヤシに伝えるように言う。ロージーは母が編集者の俳句理論の説明に聞き入っているのを見て、父からのメッセージだけを伝えて畑に戻り、父と共に無言で仕事をしる。「しかし突然、父がビンのコルク栓がポんと抜けるような奇声を発した。そしてロージーは、父が怒りながら大またで家に向かって歩いて行くのを目にした」のである(二七)。

また、「ビンのコルク栓がポんと抜けるように」、「これまで沈黙していたプロットが心の締め付けられるようなエピソード二つとなつて爆発する。

思うのは娘の方である。しかし、母は秘密を話す。もはや心の思いを俳句に詠むこともできず、母は嫌がる娘に自分の過去の秘密をよどみのない口調で打ち明ける。父の無謀な行爲と同様に、母の口から言葉がほとぼり出る様子は、これまでストリーリの中で遵守されてきた感情や言葉を抑制する作法（登場人物と著者の両方に当てはまる）から外れているため、ロージーも読者も驚かされる。

ミセス・ハヤシの告白は彼女の苦悩の原因が悲しいロマンスにあったことを示し、性に目覚めたばかりのロージーには警告の物語となる。日本に住んでいた若い頃、ミセス・ハヤシは恋人の子供を妊娠するが、社会的身分の違い（ヘイスタースはハヤシ家に雇われているメキシコ人夫婦の息子であり、ロージーとの仲を引き裂く要因となり得る）によりその男性とは結婚できなかつた。自分の家族にも冷たく扱われ、自殺する代わりにミスター・ハヤシと結婚したのだ。子供は死産であったが、生きていれば十七になつてゐるだろう。この数字は過去と現在における喪失をつなぐ。毎晩母はその悲しみを俳句に詠み込もうとしていたのかもしれない。しかし、彼女の芸術、つまり十七文字の俳句もまた時期尚早に死に絶える運命にあつた。

母の痛恨の念とは対照的に、娘には夢や望みがある。二人の相反する心の動きがストリーリの劇的な最後の一節で巧みに重ね合わされている。

突然、母が床の上にひざまずき、彼女の手首をつかんだ。「ロージー」と迫るように母は言った。「約束して。絶対に結婚しないで」その懇願の言葉は母の告白以上にロージーにとつて大きな衝撃であつた。彼女は母の顔をじつと見つめた。ヘイスタース、ヘイスタース。心のなかでそう叫びつづけた。

クラスコ家の息子に助けを求めているのか、スペイン語で神の子を指すヘイスタースに助けをもとめているのか、彼女には確信がもてなかつたが、やがて、ヘイスタースの手が彼女のどこをどのように触れたかが、甘美な記憶としてよみがえつてきた。手がしびれるほど娘の手首を強く握りながら、母はまた返事を待つていた。ロージーは手を振り払おうとした。約束して。小さな鋭い声で母は言った。約束して。イエス、イエス。わかつたわ。約束する。ロージーは答えた。しかし一瞬、彼女は母から顔をそむけた。その聞き慣れた口先だけの同意を聞いて、母はロージーの手を放した。ああ、あなたはあんなは。目と歪んだ口がそう言つていた。あんなは馬鹿な娘だよ。ロージーは手で顔を覆い、こらえ切れなくなつてどう泣き出した。抱擁と慰撫の手を感じたのは、期待していたよりもずっと後のことであつた。（一九）

この一節は見事な二重の語りになっている。母の懇願は、結婚を義理（他人に対する恩義）や「人生の自然な局面」（ヤナシコ九五）と見なす日本人の考え方に照らすと、非常に不自然であり、彼女が男性に完全に幻滅していることを強調している。日本で恋人に捨てられ、アメリカで夫に抑圧されて、ミセス・ハヤシは娘が自分と同じ運命をたどらないようにと願う。しかし、彼女が突然ひざまずいて娘の手首を強く握りしめ、「約束して」と何度も言う様子は、奇妙なことに、また皮肉なことに、熱心に求婚する男性の姿勢や仕草、願いと重なり合う。娘の胸にもその皮肉な連想が浮かぶのではないかと思われる。母の懇願に耳を傾けないわけではないが、ロージーは、独身でいてほしいとミセス・ハヤシが懇願するまさにその瞬間に、ロマンスチックな夢

「ヨネコの地震」

「ヨネコの地震」も「十七文字」と同様にパラレルプロットが巧みに使用されており、探偵のような

ある心の動きを比べるだけでも彼女の成長ぶりがうかがえる。娘の「聞きなれた口先だけの同意」とミセス・ハヤシの一時的に引き下がった態度は、(ロージーがまだ未熟で日本の俳句の微妙な趣を理解できないと母が思った) ストリリーの冒頭場面を思い起こさせる。叱責の言葉はないが、それは娘がこれから人生のごたごたに向き合っていかなければならぬことを示唆する。ストリーを始めた屈託のない語り口が、最後の文章では心配ごとを抱えた大人へと成長している。ストリーの見終部分で、ヤマトは「手」を描写の手段として使い、ミセス・ハヤシの「抱擁と慰撫の手」——ロージーの成長を、微妙に、また控えめに伝えている。触手のイメージ——「抱擁と慰撫の手」は再びロージーとヘイスターのデートを思い起こさせるが、ここではそのタイムミングによって多くのことが語られている。ロージーの不誠実な返事に傷ついて慰めが得られない母は、すすり泣く娘をすぐに抱きとめる気持ちにはなれない。しかし、スタン・ヨギが述べているように、母の抱擁が遅かったという描写は「大人の生活に対するときめき、痛み、そして幻滅に気づき始めた娘がさらに成熟するようにミセス・ハヤシが期待していることを示唆する」のである(一九八九、一七四)。二重の語りの手法と非言語による人々の関わり合いの描写によって、エンディング、およびストリー全体が効果的に創られている。

想の世界へと入っていく。母の懇願に対するロージーの反応は、始まったばかりの彼女の性的自覚めを思い起こさせる言葉で表現される。「ヘイスター——legs」は(少なくとも活字の上では)無意識のうち発せられるヘイスターの呼びかけの言葉であると同時に、ミセス・ハヤシがしつかりと彼女の手首をつかんでいるのとは対照的に、性的刺激を呼び起こすように彼女の手首を握っていた恋人を意識して発せられた言葉でもある。「ヘイスター、ヘイスター。わかったわ」という返事は、俳句の出来栄を理解しているかのようなふりをして、同じように答えたストリーリーの冒頭での返事とともに、ヘイスターとのデートを思い起こさせる。「彼が何も持っていない彼女の手を握った時、抗議する言葉は何も見つからなかった。言葉が悲惨なほど委縮してしまい……無傷のまま残っている言葉といえば、ヘイスター、ヘイスター、あ、三つだけであり、しかもその言葉さえもうまく口からでてこなかった」(一四)。肯定を表す返事は求婚行為をも類推させる。肯定的な返事は結婚を申し込む多くの男性が聞きたいと望むものであり、恋する女性たちが、良くも悪くも、口にしてきた言葉だからだ(『エリシイズ』の最後の部分でモリー・ブルームが口にする有名な返事を参照)。しかし、この場面での肯定的な返事は、母によって強制され、娘がしぶしぶ応じる空ろな同意である。この最後の一節は、結婚しないと約束してほしいという必死の懇願および求婚のパロディとして、皮肉ともどれるミセス・ハヤシの知恵と、挫かれながらもなお消えることなく持ち続けている娘の希望とを、対照的に描き出している。ロージーはついに子供から大人に成長する。「ヘイスター、ヘイスター」という言葉を、(ストリーリーの冒頭では、自分の日本語の未熟さを隠すためのたわいのないウソとしてたやすく使っていたが)口にするのが次第に難しくなる。冒頭と最後の一節で、「ヘイスター、ヘイスター」と彼女は同じ返事をするが、その裏に

ヨネコはストリーターの視点人物であり、表題にもなっていることから、私たちは地震と地震が彼女に与えた影響をストリーターの中心と考虑してしまいがちだ。ストリーターの終わり近くに初めて、地震はヨネコの両親とアトボにも身体的、精神的影響を与えていたことに気がつく。ミスター・ホソウメは働き、用事を済ませるようになる。一人の不倫関係を私たちがうすうす感じ取るようになるのは、ミセア・ホソウメが、「おとうさんにどこで手に入れたと聞かれたら、通りで拾ったと言いなさい」と言いながら、ヨネコには大きすぎる指輪を彼女に与える時である(五二)。もうひとつのヒントは、ヨネコに

とつぶやいてみる。ヨネコはストリーターの視点人物であり、表題にもなっていることから、私たちは地震と地震が彼女に与えた影響をストリーターの中心と考虑してしまいがちだ。ストリーターの終わり近くに初めて、地震はヨネコの両親とアトボにも身体的、精神的影響を与えていたことに気がつく。ミスター・ホソウメは働き、用事を済ませるようになる。一人の不倫関係を私たちがうすうす感じ取るようになるのは、ミセア・ホソウメが、「おとうさんにどこで手に入れたと聞かれたら、通りで拾ったと言いなさい」と言いながら、ヨネコには大きすぎる指輪を彼女に与える時である(五二)。もうひとつのヒントは、ヨネコに

多差多才の男なら、子供のヨネコだけではなく、大人の女性にとっても非常に魅力的だろうと想像がつく。私たちはミセア・ホソウメとアトボが二人きりでいるところを見たり、相手について何か言っているのを聞くことはないが、ヨネコの二人に対する崇拜の気持ちから、この二人の大人が互いに惹かれ合う可能性を感じ取ることができる。彼らの不倫関係は地震の頃に始まったか、またはその時に最高潮に達していたと思われる。ミスター・ホソウメは地震が起きた時に交通事故で負傷し、どうも性的に不能になるようである。

推理力が必要である。明らかでプロットは、農場使用人に抱いた少女の淡い恋心と短命に終わる彼女のキリスト教への信仰を語る。隠されたプロットは、少女が惹かれた農場使用人と母との秘密の情事や母の最終的なキリスト教への回心を暗示する。しかし、「十七文字」においてストリーターにそって流れるから最後に姿を現す第二のプロットが、「ヨネコの地震」では最後まで完全に隠されたままである。この不透明さを可能にしているのは第三者に限られた視点である。ストリーターは表題にもなっている主人公、十歳のヨネコ・ホソウメの視点を通して語られる。場当たり的な子供の態度をまねることで、語り手は横直にそれた話のように見せながら、意味深長なヒントを漏らすことができる。例えば、冒頭で、ヨネコがお祈りしている姿を弟のセイゴが泣いていると勘違いするといふ一見ささいに見える逸話が語られるが、それは子供には物事全体を認識できないことが多いと伝えている。セイゴが姉の祈りの姿勢を誤解したのと同様に、ヨネコも大人の振る舞いを誤解する。

隠されたプロットの各ヒントを集めてつなぎ合わせるために、読者はすべてのヒントや沈黙に関心を寄せなければならぬ。ヨネコの母とアトボ(家族の農場で働くフレイビング人)に対するヨネコの評価から、二人とも非常に魅力的な人たちであることがわかる。ミセア・ホソウメはどのようにやまらまに見る美人のようだ。「ヨネコ」自身がずっと小さかった頃……母の美しい容貌に魅せられて思わずひざまずき、黙って母の両足を自分の手でしっかりと抱きしめたことがよくあった……。また以前誰かが母のことを、『露に濡れて、半ば開いているバラのつぼみ』にたとえる人がいたことも思い出した(五三)。魅惑的なミセア・ホソウメには娘のほかにも賛美者がいる。ヨネコはアトボを偶像化し、クリスマサン、農場労働者、運動選手、音楽家、芸術家、マジック技師としての彼の多様な特技を長々と列挙する。これほどの

れている。私たちに求められるのは、表面的には語られていないことに反応することである。

「ヨネコの地震」では、含みのある沈黙は最後まで破られない。ヨネコが中絶について知ることはない。また、アトボがいなくなつたことと病院に行つたことを結び付けることもない。ロージーが自分のロックスに夢中で両親の不和に気づかなかつたように、ヨネコはアトボが「突然いなくなつたこと」にあまにも傷つき(五五)、「母の絶望を感じ取ることができない。セイコが突然病気で亡くなつた時にやつとヨネコは、「その後数週間、朝には泣き腫らした目」をしていた母の癒されない悲しみに気づくのである(五五)。ヨネコはセイコの死が母の苦悩の原因だと考えるが、著者はもう一つの原因をほめかす。ヨネコのアトボに対する怒りは——他の登場人物には隠されているが、読者には明らかにされる——母の終わることなき悔恨の情を屈折的に表している。彼女は、亡くした一人ではなく、二人の子供と突然にいなくなつた恋人を求めて、悲しみに暮れている。

最後に、ミセス・ホソウメは娘に教訓を伝えようとして、二人の早すぎる死を何気なく結びつけてしまう。しかし、母の謎めいた教訓は娘には通じない。

「決して人を殺してはいけないよ、ヨネコ。もしそんなことをしたら、ヨネコの愛する人を神様が連れて行ってしまふから。」

「ああ、そのこと」と、ヨネコは早口で言った。「そのことなら、私は信じてない。神様のこと信じてないの。」……彼女は一瞬母がああ指輪について今にも聞いてくるのではないかと思つた(悲しいことに、もうその指輪はアスタモソンの横を流れる用水路に落ちて、なくしてしまつたのだ)。(五六)

アキユアを塗る権利があるかをめぐつて両親がけんかをした場面にある。ミスター・ホソウメが妻を殴ると、それまで「かなり内気な青年であり、ホソウメ夫妻の前では口もきけないほどおとなしかった」アトボが間に入り、子供たちが見ていることをミスター・ホソウメに思ひ出させる(四九)。アトボの仲裁は父親のような心遣いを表すだけでなく、騎士道的な意味合いをも持つている。

その後、続く重要な出来事は、薄暗い紗幕の内側で起きているかのようには曖昧に語られ、無邪気な語り手が伝えるばらばらの話をつなぎ合わせることで、私たちはその出来事を理解する。ある日、アトボが「ヨネコとセイコにさよならさえ言わずに」突然に姿を消す(五四)。その日、ホソウメ一家は週末でもないのに珍しく町に出かける。ミスター・ホソウメは極端にスピードを上げて運転し、コリー犬を轢く。「車は衝撃で揺れたが、ミスター・ホソウメはそのまま車を走らせ続けた」(五四)。病院に着いた時、子供たちは車の中で待つように言われる。長い時間が過ぎて両親がもどってくる。母は「明らかに痛みを感じて」おり、それは「仕方なくきつい治療」を受けてきたからだと言ふ(五四)。父は、町に来たことは誰にも言ふなど子供たちに言い渡す。

「ヨネコの地震」には、ミスター・ハヤシが贋品の版画を焼却するような爆発的な場面はないが、病院へと向かう場面の描写は夫婦の内面の動揺を映し出している。コリー犬を轢いても何事もなかつたかのような父の態度は、アトボとミセス・ホソウメの不倫への激しい怒りと、病院でこれから奪い去られることになる生命に対する無関心さを表している。対照的に、ヨネコが心の内で感じたコリー犬への哀れみの気持ちは母の内に秘めた悲しみを映し出している。コリー犬の運命が生まれざる母の子供の運命を予感させるからである。版画の焼却の場面と同様に、非常に激しい感情が極端に少ない言葉で伝えら

シヨールオスターが「二重の声の言説」と呼んだものは確かにヤマモトの作品を特徴づけるものであり、「見えないものを見えるようにし、沈黙を発話させる」ように構築されている(三一)。「十七文字」と「ヨネコの地震」では、母たちの抑圧された苦しみは物語の最後になってやっとその姿を現す。しかし、ヤマモトのプロットは男性の沈黙をも描いている。支配的なフェミニストの考えとは対照的に、男性の沈黙は女性の抑制よりも強い場合があり得る。この二つのストーリーでは母と娘はよくちぐはぐな会話をするが、父と娘、夫と妻の間のコミュニケーションは実に限られている。父が娘に話しかける数少ない例では、命令しているか、非難しているような口調である。夫婦間の会話においてもほとんど同じである。エレン・キムはヤマモトの小説におけるジェンダー関係を論じており、一般的に女性は、「家という、大部分が平凡でつまらない牢獄のドアの見張りとして、陰にいたる善良だが、軟弱で鈍感な夫とともに、閉じ込められている」と見ている(一九八七、九九)。夫たちは表面的には家という牢獄のドアを護衛しているが、固く口を閉ざした彼ら自身が愛のない結婚に関じ込められ、より大きな社会の中で置き去りにされ、特に男性性という家長制の規範に縛られている。

82

ミセス・ホソウムの「決して人を殺してはいけない」とミセス・ハヤシの「絶対に結婚しないと約束しようたい」は、どちらも娘たちの教訓であると同時に、夫たちへの遠まわりの非難である。言語上の構成は「ヘッジング (hedging)」つまり「メッセージについて言葉を濁したり弱めたりする」ための戦略というカテゴリーに入る(ラドナー及びランサー四二〇)。ミセス・ハヤシとミセス・ホソウムは明確には夫について述べてはいない。しかし、一人は遠まわしにではあってもカテゴリー上の男性全体を非難し、もう一人は本意であつたと思われる中絶を夫による殺人行為と見なすことによつて、夫への非難を強めている。ミセス・ホソウムは自分自身を殺人者と呼んでいるようだが、家長制のもとで家長の命令に従つて行動しているだけである。「あなたの愛する人」という言葉はセイヴを指しているとも、アトボを指しているとも考えられ、曖昧な表現になっている(クロウ一九八四、二〇二)。ミセス・ホソウムは後悔してはいるものの、失つたものを不倫ではなく、中絶に対する神の罰と見ているようである。

「十七文字」の結末と同様に、このエンディングは少女と大人のプロットを巧みに一つにまどめ上げている。ヨネコはアトボによりキリスト教に改宗していたが、すぐに信仰をなくす。一方、母は最初神を信じていないが、セイヴの死後敬虔なキリスト教徒になる。アトボが母も改宗させたのではないかということは明らかにされない。アトボがいなくなつて母も娘も悲しむが、ミセス・ホソウムの悲しみは東の間のヨネコの悲しみよりも長い。ヨネコはうっかり指輪を失くしてしまつたことにかつかりていて、それは母の内面の喪失感を表しているのが私たちにはわかる。指輪は以前、母と娘による恋人の共有を象徴していたが、失くした指輪は二人が共有する喪失感を表している。「十七文字」では、不幸なエンディングが遅れた抱擁で和らげられている。その抱擁は、どんなにためらいがちであろうとも母と娘の結びつきを暗示するが、「ヨネコの地震」では、母から娘に与えられた喪失の印としての指輪のイメージは「断ち切られた絆」を示唆する(ヨギ一九八九、一七八)。娘には指輪は価値のないものであるが、母にとつてはヨネコの信仰を打ち砕いた地震と同じくらい、激しい心の動揺を象徴するものである。

性的な社会的地位の低さにもその原因をたどることができる。ミスター・ハヤシとミスター・ホンは、敵対的な環境の下で必死に生き残ろうとしている農民であり、非常に現実的である。この傾向はミスター・ハヤシがトートの収穫を極度に心配していることや、ミスター・ホソウメが、「アアジは砂糖を使い過ぎる、砂糖はおもちゃとは違うのだ」と言つて(五一―五二)、ヨネコと友達のアアジ作りを断固として拒否するところに表れている。当然、俳句作りは「贅派」に、化粧は「派手」に見える。人種差別によりアメリカ社会で周縁化されているため、この二人の男性は家庭で余計に自分の権威を主張しなければならぬと感しているようであり、家庭内で自分の立場が危うくなっているのを察すると、それに過剰反応するようだ。白人支配のアメリカで、アジア系アメリカ人男性が歴史的に去勢されてきたことを背景として考えれば、法律によってであらうと、文化的表象によってであらうと(チンなど *Chin*)、ミスター・ホソウメの性的不能は象徴的な意味を帯びてくる。

厳しい自己抑制を求める男性性の規範に支配されているため、最初この二人の男性は心配事を自分の胸に秘めている。寡黙さは伝統的に日本人の男女ともに教え込まれる。特に男性は、「騒々しく、過度に情緒的で、見るからに情熱的で、明らかに怯えたように見える態度は……人を不愉快にし、それ自体恥ずべきことで、たぶん子供にだけ認められるものである」と教えられてきた(ライオン一九七―五二「ハソカチ」において、九歳の主人公であるベンジの社会化について説明する時、この男らし

日系アメリカの家父長制は、日系アメリカ人の沈黙と同様に、歴史と文化によって変容させられていたため、各作品における父の隠されたプロットの輪郭を歴史的、文化的背景に照らしてたどる必要がある。日本人移民の第一陣(一八五―一九一〇)は主に单身男性から成り、新天地での生活が落ち着くと、彼らは日本に帰るか、または太平洋を挟んで写真を交換することで結婚相手を見つけた。アメリカにやって来た「写真花嫁」(主に一九一〇年から一九二〇年の間)は、一般的に夫よりも十―十五歳年下であった(イナオカ一九八〇、三四七)。ホソウメ夫妻の結婚状況はわからないが、「半ば開いているバラのつぼみ」にたとえられたミセス・ホソウメの年齢は、おそらく夫よりも三十六歳のマーボに近いだろう。夫は新しく雇った農場の使用人を常連の遊び相手にするが、その人は、「年取った日本人で、白髪混じりの髪を軍人風に短く刈り上げていた」とある(五四)。「写真花嫁」の長距離結婚では、ごまかしはめずらしいことではなかった。男性はよく、「若い頃に撮った写真を送ったり、実際の年齢を隠すために写真に修正を加えたりした」(イナオカ一九八〇、三四七)。しかし、女性もまた「汚点」を隠すことができたであろう。「十七文字」の最後でミセス・ハヤシが打ち明ける秘密から判断すると、ミスター・ハヤシは偽りの結婚の犠牲者そのものであった。「まだ会ったこともない婚約者がなぜそんなに結婚を急いでいるのか、決してその理由は知らされなかった」のだから(一九)。

また、夫が厳格に儒教の規範に従っているのがわかる。その規範の下では、妻から夫、子供から親への黙黙の尊敬が求められるが、夫の若い妻や子供たちは新世界でもっと大きな自由と独立を要求し始める。その違いは年齢や性格の差異によるものかもしれない、アメリカの環境が女性や子供たちに与える影響のせいかもしれないが、当時のアメリカは極度に反オリエンタルであり、アメリカでの日本人男

んだ手がかりがわかり始める。¹⁵⁾

父の物語は母の物語よりもさらに遠まわしに語られる。娘の反応から押し殺した母の情熱に気がつき、娘の何気ない観察が父親の悲しみをほめかしている。その上、ヤマモトは両方のナラティヴに、普段の無神経さではなく、高じた男性性の不安が暴力を引き起こすことを示す十分なヒントを含めている。ミスター・ハヤシは非情に見えるが、実際には孤独、無力さ、性的な嫉妬に苦しんでいるかもしれない。しかし、これらの感情について、ミスター・ハヤシが表立って認めることも、語り手が述べることもない。著者がコード化した言説を求めて、もう一度、語り手の率直な描写の下に隠されているものを読み取らなければならぬ。ミスター・ハヤシとその妻は、床につく前に二人で花札をしたものだったが、ミセス・ハヤシが新しい趣味を持った結果、夫は「一人でやる」しかなかったと私たちは知らされる(九)。ミセス・ハヤシは夜遅くまで俳句作りをするため、夫は一人で床につくことが予想される。ハヤシ家を訪問している間中彼はいらいらしているが、その苛立ちは、間違ひなく知的な会話から排除されていることから生じている。しかし、読者にはさらにもう一つの怒りの原因を見つけてことができるだろう。ミセス・ハヤシはミスター・ハヤシと「小さなテラブルで」俳句について話し込んでいる。ミスター・ハヤシは、「ソファアの端に座って、『ライヴ』(写真はかりの雑誌であることは重要)を讀み、時々ミセス・ハヤシに二言、三言、話しかける。「小さなテラブル」は活気に満ちた(そして、おそらくは親密な)会話を生みだしているが、「ソファアの端」は隔離されている。ミスター・ハヤシの目には、「ハンサムで、背が高く、がっしりとして」見える(一〇)。省略されたものを考え

ベンジは自分が幸せでないことや孤独であることをパパに話してみようかという気持ちになつた……いや、そんなことはできない。孤独は弱さであり、男がそんな軟弱な面をさらしてはならなかつた。パパは完璧な男だつた。強く……寡黙で、めつたに感情を表に出さなかつた。パパに五セント硬貨や一〇セント硬貨がほしいとか、図書館まで車で送つてほしいと頼んでも、返事は、「いいよ」だめ、「後で」……の一言で、二言以上の言葉や説明はなかつた。几帳面。乱雑さは表面下に、皮膚のちやうど裏側、痙攣したまふたやべとべとした筆の裏側に隠されていた。「クガをした」と言うなら、それはパパに見えるもの、ギギギの傷、でなければならなかつた。(一四六―四七)

この男らしさの考えは日本人と日系アメリカ人に特有のものではないが、日本人男性と白人男性の男らしさについての規範の差異は、どの程度感情の表出を弱さと関連づけるかにあるようだ。イギリスの作家、カズオ・イシグロは、「イギリスと日本の社会では、感情を抑制できる人が威厳と気品を備えた人と考えられている」と述べている(「エナントロ一八」)。しかし、対外的な控えめさは、アングロ・アメリカ人にはそれほど浸透してはいない。彼らは感情を表すかどうかにかかわらず、自分の思いを率直に述べることにずっと慣れている。ミスター・ハヤシとミスター・ホソウメの無口な態度は、男性に女性よりも、「超然としていて、感情をむき出しにしない」ことを求め(「ヤギサコ一八」)、「沈黙の抵抗」を行つように社会化する文化的規範だけでなく(「アラとアラ四三」)、人種の政治学によつて過度に強化されているようだ。この二人の男性が、内面の痛みを告白するよりも外面の傷を認める(または負わせる)方が楽だと感じているかもしれないと考えると、彼らの隠された苦悩を伝えるために、著者が仕組

定さには最初から原因があつたことを示唆している。) 著者は「ヨネコの地震」においても同様に、ダブルテイク(＊後で気がついてはと驚くこと)を効果的に使っている。再びストリーを振り返ってみると、読者は地震がミスター・ホンウメに与えた心理的影響がわかるようになるからだ。「地震がおさまり……以前と同じような生活にもどつたが、ミスター・ホンウメはほとんど四六時中家にいるようになった。時々……ミセス・ホンウメが畑から帰つて来ると、彼は夕食をコンロで作つていた。今ではミセス・ホンウメとトランプが畑仕事をすべてやつていた」(五一)。伝統的な夫婦の役割が逆転している。ヨギが述べているように、このジェンダー役割の逆転は、一世家族の文脈において考えると特に重要である(一九八、一七六)。一世夫婦には厳密な労働区分があつた。「妻は家庭内の仕事を行い……夫は家庭外の仕事の責任を負つた」(ヤナギサコ九七)。家庭の外の仕事を行うことができず、一世の間では、「女らしいとされる役割や振る舞いを男性がすることには……考えられない」にもかかわらず(ヤナギサコ一〇二)、ミスター・ホンウメは家事をせざるをえない。その屈辱感だけでは不十分であるかのように、今や他の男性が妻と一緒に働いているのである。ミスター・ホンウメのその後の行動は、生活の変化や口にはできない障害である性的不能によつて、彼の男性としてのプライドが傷ついていることを示している。男性性が損なわれたと感じているために、彼は家族に対しますます怒りつぽく、専制的になつていく。子供たちが言うことを聞かないのは自分の病気のせいだと思ひ、「わしが今病氣だからといって、親に従わなくていいわけがない」と妻に言う(五三)。また、ミセス・ホンウメの口答えにも我慢ができな。彼女が夫に「生意氣だ」と言われたことに対し抗議すると、彼は平手打ちをくわせる。読者は「彼が妻を殴つたのはこれが初めてだ」と

88 合わせるど、ミスター・ハヤシを突然立ち去らせたのは疲れ(ミセス・ハヤシが提示した理由)ではなく、怒りと嫉妬であると示唆されているのがわかる。思い起こすと、ミセス・ハヤシの元の恋人は、彼女よりも社会的地位の高い家の息子であつた。対照的に、ミスター・ハヤシは農民で、妻の家族よりも身分が低い。彼は妻の洗練された言葉使用に悩んでいるかもしれない。妻との社会的地位の違いを思い出させるからだ。特に、おそらく彼は自分の妻とミスター・ハヤシの相性の良さ——身体的にも知的にも——において——を感じているのだろうか。その相性の良さはどちらの夫婦にも欠けているものだ。劣等感と性的な嫉妬についてのほめかしは、ミスター・クロダが運命的とも言える訪問をした際に繰り返され、その訪問はやがてミスター・ハヤシを混乱へと陥れる。編集者のクロダは、「ハンサムな男」で、「ロージ」が聞き慣れている日本語よりもっと上品な日本語で「話す(二六)。彼の前ではミセス・ハヤシも「すぐに彼と同じ話し方になる」。話し方の変更は、彼女の日本での社会的地位を再度示すことになる。ハンサムで都会風の編集者がミセス・ハヤシの俳句の受賞を知らせに来ることで、間違いなく夫の嫉妬心と羞恥心は強まる。その感情は、トランプの収穫を間に合わせなければならぬ緊急性よりもミスター・ハヤシを苦しめるものだ(肉體労働は彼の適性を象徴する活動かもしれないが)。「どのコルク栓がほんと抜けるように」(二七)という彼の怒りの爆発を伝える直喩は、鬱積した憤りの高まり(そして、おそらくは性的な欲求不満の度合)を示している。同様に明らかなのは、広重の版面を破壊させることになる彼の無言のヒステリーである。洗練された編集者が社会的地位の低いミスター・ハヤシを苛立たせるなら、精巧優美な版画もまた彼の芸術的才能の欠如をからかうこととなる(ストリー)の最終場面におけるミセス・ハヤシの告白は、認識されてはいないものの、夫の情緒不安

知らされるが(五三)、このことは彼の短気な行動が習慣的なものではなく、身体的な障害と関わっていることを示唆している。それから彼は、自分を落ち着かせようとしたヤムボに対し、「病気になるから、わしに對しずいぶん厚かましく振舞うようになったものだ」と言つてヤムボを責める(五四)。ミスター・ホソウメは、自分に対する人々の行動を、自分が病気で無力である点から見る傾向にあるが、これは彼が極度の不安状態にあることを表している。また、彼の異常なほどの怒りつぼさは、男性優位を回復しなければならぬという差し迫った感情から生じていると判断できるだろう。

ヤムボトは、二重の語りによつて、ある形式の家長制の下で男性權威を維持しようとする時に、男性が耐えなければならぬ非常に大きな心理的圧力を明らかにしている。ミスター・ホソウメが自分への輕蔑から家族が自分に背を向けていると考へるなら、妻の不倫とその後の妊娠は彼の男性性に対する最大の侮辱となるはずである。病院へ行く途中彼は非常に攻撃的であるが、男性として屈辱を受けていることを考慮に入れると、その攻撃性を理解できるであろう。広重の版画がミスター・ハヤシに嫉妬心を起こさせ、彼の無能さからかつかつたように、胎児は、ミスター・ホソウメの不倫と妻の不倫を不愉快にも思ひ出させるものである。

ミスター・ホソウメは中絶後すっかり優しくなる。地震の間、ヤムボが引き継いでいた「庇護と慰安を与える者」という役割を再び取り戻すことができたからである(ヨギ一九八九、一七五)。夫婦が病院から車まで歩いて戻るとき、文字通り彼は弱っている妻を支えている。「彼女は非常に小柄で、ゆっくりとした足取りで歩き、彼が体を支えていた」(五四)。セイゴの死後、ミセス・ホソウメは長い間失意の底にあるが、この間夫は彼女に對して「とても優しく」なり(五五)、ヨネコに母を「笑わせて、セイゴのことを忘れさせる」ように促す(五六)。残念なことには、ミスター・ホソウメがこのように優しくなれるのは、遠慮なくものを言うミセス・ホソウメが身体面や情緒面で弱つていて、彼女の反抗的な態度に、夫としての立場が脅かされることがない時だけである。彼は息子の死を悲しんでいないのではなく、男性性なので悲しみを表に出さないようにこらえているのである。セイゴの死は、母にとつても父にとつても打撃であり、男性性の不安という沈黙のトラマにおけるもう一つの皮肉な転換点となっているだろう。ミセス・ホソウメは玉置について警告するが、生命が枯渇するといふ報復を夫は受けている。たった一人の男子の跡継ぎを失い、今後生まれることはもうありえないのだから。

ミスター・ハヤシとミスター・ホソウメに最初に感じた否定的な印象を和らげることは、二人の行為を許すということではない。二人に同情を寄せながら彼らの振る舞いを分析することで、ヤムボトが男性を悪人、女性を犠牲者とする単純な二項対立を避けようとしていることがわかる。男性二人の抑圧的な沈黙と女性や子供に求められる服従的な沈黙は、区別されなければならないが、彼らも日本とアメリカの文化が規定する男らしさのイメージに応えようともがき苦しんでいる。もし彼らが弱さをさらけ出すことができたなら、悲劇的なエンディングは避けられたかもしれない。彼らは逆に、怒りが高まり暴力となつて爆発するまで、我慢をしてしまふ。二人の沈黙が妻との間の溝を広げている可能性が高い。彼らの妻はミスター・ハヤシ、ミスター・クロダ、ヤムボといった人たちに惹きつけられるが、それは驚くにあたらない。身体や知性における魅力に加え、これらの男性は言葉で彼女たちとコミュニケーション

「十七文字」と「ヨネコの地震」の二つのストリーにおいて、女性と男性の状況をコード化して描き出したのである。

これまで論じてきた二つのストーリーでは、無邪気な語り手にもかかわらず、二つの日系家族について詳細に検討することができた。「ミス・サカガラ伝説」の構成はもと複雑であり、中心人物は読者からずと遠い位置に置かれている。作者は信頼できない視点と非常に曖昧な表現を用いて、二世の女性についての心に残る物語を語っている。それは、家族、日系コミュニティ、そしてアメリカ社会全体で、「他者」として見るようにと行使された複合的な圧力によって、その女性が「狂女」にされてしまふ話なのだ。鎖状につながる要素を引き出して、このストーリーの入れ子式の箱の構造を明らかにするために、家庭、コミュニティ、政治との関係を見ていくことにする。根底にある巧妙に隠された歴史的状况を具体的に知らなければ、このストーリーの形式構造を十分に評価することは不可能である。

「ミス・サカガラ伝説」

ナツフシヨットのような言葉で表現されている。ヤマトは、広重の版画を故意に破壊する場面や、コリー夫の冷酷な働き逃げをクロースアップすることで、登場人物の押し込められた内面の感情を修辭的な沈黙によって伝え、それを添答させている。

写するヤマトの手法は、女性の書き物で称えられるオーブンエントと重複の良い例となっている。しかし、西洋中心主義の視点を超えることで、著者の広大な認識をさらに評価することができる。読者は、自分自身の文化的信念にたがって登場人物に反応しがちである。男女を問わず、日本生まれの読者は、アメリカ生まれの読者よりも常に夫に同情的であり、妻に批判的である。私の場合は、読み返すたびに新しい読みが広がっている。夫婦の考えや動機を直接知ることができないので、かえって読者はテクニートのニアンスをもとに、彼らの隠された人生をもっと自由に作り上げることができる。

ヤマト自身は自分の文化的遺産に両義的のようだ。無邪気な語り手は若い二世の自由な精神を具現化しながら、一世の男女の生活を規制する型古しい伝統を強調している。家長長制は程度と方法において異なるものの、男女両方を窒息させている。彼女のストーリーに登壇する女性は、芸術的にも性的にも自分を表現することを妨げられる。しかし、彼女たちの抑圧者である男性は男性役割に関し込められ、もっと抑圧されている。やがては母の遺産に向き合っていかなければならない二つの文化を生きる娘の驚きの目、何が起っているのか理解できないでいる目を通して見れば、母の個人的な悲しみと父の鬱積した怒りが、不吉にも響き合っているのがわかる。ヤマトは家庭内のドラマを描いているが、彼女のフェミニスト的な視点は、読者にそれとは異なる脚本を書くようにと誘っている。^⑤

また、ヤマトの抑制の効いた文体は、少ない文字数で多くのことを語ることができる文化的先駆者、つまり、十七文字に大きな意味や感情を注ぎ込むことができる先駆者に対する敬意を暗黙の内に表している。^⑥彼女の二重の語りという戦略は、特に抑圧された感情を呼び起こし、表面的な言葉の下に隠された不安や心の傷を表すのに適している。それぞれストーリーの静まり返ったクライマックスは、ス

「十七文字」と「ヨネコの地震」は両方とも、情熱的な母が娘と向き合う場面で終っている。「伝説」では、キクが「風変わりなほど輝いていて……じれったいほど曖昧である」(三二)と思つて、ササガワの詩は、娘と感情に動かされなない父との間の困難な関係を表す、最後に残された手がかりである。狂信的な信仰心をもつ僧侶の父が、「ほかの誰か」——彼の娘——の人間的な欲望を抑えているのを私たちは察する。では、一体正気でないのは誰なのだろうか？

ストリーリの中にササガワ僧侶を表す描写がいくつかある。キクは、「いつも何かに心を奪われた様子で、人に面と向かつて話しかけることもなく、僧侶らしい姿勢であり続け、一瞬足りとも高次元の人生についての臆想をやめられないようだった」と僧侶のことを語る(三二)。また、キクの祖父の葬式に出席した三人の僧の一人だったこともわかる。

(三三)

しよう。ほとんど欠点だとは思えないような欠点でさえも、すでに輝いている自己の魂から拭い去らうと至福の境地で努力する聖人は(というの、完全無欠な人間であれば、自分の完全無欠さを謙虚に疑わないであらうか?)、同じ部屋の中で、おそろくは苦悩に満ちた静寂のなかで、頭をもたげては消え、また頭をもたげてくる人間的な情熱に目を閉ざし、耳を貸さないといいことにならないうか? この詩人は、もちろん他の人の代弁はできないだろう。自分のために口を開くだけだ。しかし、この男の人の信心にある種の狂気として、それ自体純粹であるが、心をかき乱すような、お香の漂う情景を相手の人の眼りのなかでよみがえらせる奇怪な狂気として、彼女は描こうとしたのだろう。

この男の人は実に気高く、もはや非難の対象にはなりえない、と詩人は詠んだ。彼の存在が世界を疑いもなく豊かにする。しかし他の誰かが、感受性豊かな誰かが、感服しきっている誰かが、この崇高な境地に達しえず、到達したいと願いもしない誰かが、このような人につきそうように求められたと

その詩の中で語られる人物は、確かにササガワ僧侶に似ている。

式の箱の中心に位置づけられる。^②

のパラフレイスがストリーリの最後で語られるが、それはミス・ササガワ自身の声を含んだ、入れ子される。戦争が終わった時、キクは掲載されたミス・ササガワの詩を偶然に見つけるが、それは、人間の感情を気にもとめない聖職者のすぐそばで暮らす者の苦悩を詠んだ詩であった。キクによるその詩養所に送られる。収容所に戻ると以前より社会的になつていくが、程なくして再発し、精神病院に収容される。中年のバリーナ、マリ・ササガワは母の死後、別の収容所から仏教の僧侶である父とともにポストン収容所に移って来た。風変わりでもよそよしく見える彼女の振る舞いは、ポストン収容所のうわさの的になる。彼女は、初めのうちはキクにとつてもそうであったように、収容所内の人々の見世物になる。何度か収容所の病院に入れられた後、ミス・ササガワは療養所に送られる。収容所に戻ると以前より社会的になつていくが、程なくして再発し、精神病院に収容される。戦争が終わった時、キクは掲載されたミス・ササガワの詩を偶然に見つけるが、それは、人間の感情を気にもとめない聖職者のすぐそばで暮らす者の苦悩を詠んだ詩であった。キクによるその詩のパラフレイスがストリーリの最後で語られるが、それはミス・ササガワ自身の声を含んだ、入れ子

情報が与えられるだけである。二十歳の語り手、キクの視点はロージーやヨネコと同じように限られているが、それは年齢というよりは距離のせいである。彼女はササガワの近い親戚などではなく、第二次世界大戦中に日系アメリカ人が収容された強制収容所の一つ、アリゾナ州のポストン収容所に共に入

らられていたというだけの間柄である。中年のバリーナ、マリ・ササガワは母の死後、別の収容所から仏教の僧侶である父とともにポストン収容所に移って来た。風変わりでもよそよしく見える彼女の振る舞いは、ポストン収容所のうわさの的になる。彼女は、初めのうちはキクにとつてもそうであったように、収容所内の人々の見世物になる。何度か収容所の病院に入れられた後、ミス・ササガワは療養所に送られる。収容所に戻ると以前より社会的になつていくが、程なくして再発し、精神病院に収容される。戦争が終わった時、キクは掲載されたミス・ササガワの詩を偶然に見つけるが、それは、人間の感情を気にもとめない聖職者のすぐそばで暮らす者の苦悩を詠んだ詩であった。キクによるその詩のパラフレイスがストリーリの最後で語られるが、それはミス・ササガワ自身の声を含んだ、入れ子

拒否する父と賛美する娘という個人的な事柄が、コミュニケーションの人々の批判にさらされる。僧侶とミス・サガワラは二人ともコミュニケーションから幾分距離を置いているが、明らかにジェンターの違いによって、日系コミュニケーションは父と娘のよそよそしさを別々に批判する。伝統的に男性性、宗教であるうと他のものであるうと、個人の目標を追い求めるように社会化されるが、女性性は単に社会化されるだけである。したがって、僧侶の無表情が気高くて宗教的と見なされるのに対し、娘の無表情は不健康で愛想がないと言われるのは驚くにあたらない。父の態度は尊敬され、娘の態度は疑われるのである。

ミス・サガワラは華やかに姿を見せたり、引きこもったりを交互に繰り返す。引きこもりは彼女の職業を考えると特に注目に値する。パレリーナとして、観客からの真剣なまなざし、彼女のすべての文字通り、一歩ごとに注目を集める。「彼女の歩調の整った歩きぶりは、あたかも歩くことがありふれたことではなく何か特別なことであるかのように」「ほら、私歩いてるの」と言っていた(二〇)。

しかし、彼女はひどく自意識過剰になつてきているようだ。食堂で食べることを好まず、自分の部屋で食べたことではなく何か特別なことであるかのように、「ほら、私歩いてるの」と言っていた(二〇)。

「香りただよう情景を……相手の人の眠りのなかで」という言葉が並置され、性的な響きがほのかさいている。

「香りただよう情景を……相手の人の眠りのなかで」という言葉が並置され、性的な響きがほのかさいているように思える。詩には、「連れ」「同じ部屋」「高まつては消え、再が高まつてくる人間の情熱」非社交的な面としてとらえられたかもしれない努力——は、彼女の隠されたセクシュアリティを高めてが要るもの、もつと身体的な芸術である。芸術家が父の面前で行う自我の抑制——一般的には彼女のバレエのコスチュームが暴露する。仏教には断固たる精神の集中が必要であるが、バレエも不断の鍛錬

舞儀の場面は、自伝的な詩で明らかにされるミス・サガワラの苦悩への伏線となつている。サガワラ僧侶は娘の身体的、心理的苦しみがわからぬように見える。娘が入院している時も、苦しんでいることが誰の目にも明らかでさえも、彼は明らかに娘のそばにはいない。心いづもそこにあらずの父の存在は、母の死後彼女の喪失感をいっそう深めたかもしれない。母の死は父を高潔さの追求へと解放し、「つまらない欲望を心の中で消し去る」ことを可能にした(三二)。その結果、母に先立たれた娘は生きていた父にも構ってもらえず一人にされる。その上、聖人のような禁欲主義は、ダンサーである娘のはなやかな感受性とは相いれない。彼女は長い「つややかな髪」「赤い唇」「輝く目」「短く、細いウエストにびつたり合った合つたつも着ている上着……人目をひく鮮やかな色を組み合わせている」ことで有名なのだ(二〇)。父と娘の外見の違いは際立っているに違いない。仏教徒の袈裟が隠しているものを

悲しみが明らかに表出している場において、僧侶の様子は冷酷無常な印象をも与える。いことが崇高な境地への到達、つまり高次元の人生に専心できる能力を証明するからである。人間の甲問客の悲しみが、僧侶の日常性からの遊離を浮き彫りにしている。彼らにとつて、世俗的な悩みがな

涙、涙、涙で、あちからあちからも堰を切つたようにすすり泣きがもれてきた。その間、袈裟の三人の男の人が壇の上にはいた……そしてその三人は耳慣れない、流麗なお経を遙切れることなく唱和していた。時々、驚くほど大きなドラの音が広いお寺じゅうに、お経やすすり泣きや、線香の香りの上に響き渡つた。(二三)

誰も彼女の主張を真剣に考えない。自動的にヒステリーだと退けられてしまう。この却下は理解できる。圧倒的に男性が多い医師の世界は、疑う余地のない権威の場として神格化^(註)されてきた。権威に異議を唱え、文字通りそれに背を向けた女性患者は、これ見よがしに裁きの対象となる。

ゾラ・ニール・ハーストンの『彼らの目は神を見ていた』のジエイニー、トニ・モリスンの『スーラのスーラ』、グロリア・ネイラーの『グリュエスタター・プレイスの女たち』のレスビア・スカツラ、ロレインとテレサと同じように、ミス・ササガラは日系コミュニティのジエングター規範と対立し、周囲からの批判的視線にさらされることになる。シヨシヤナ・フェルマンが指摘するように、ジエングター役割への女性の抵抗は精神的逸脱と解釈されることが多い。「誕生後の家庭での養育からその後の成長期を通じて、女性にあてがわれる社会的役割は男性の持つイメージに合うように振舞うことである。女性とはなによりもまず、娘／母／妻である」(六一七)。彼女はフイリス・チェスラーを引用して、『狂気』と見なされるのは、価値を貶められた女性役割から逸脱して行動することか、または性別役割のステレオタイプを全面的、または部分的に拒否することである」と述べる(五六、フェルマンに引用)。ミス・ササガラは二十九歳の女性で、明らかに美しく、独身である。結婚を義務(Obligation)と見る日本の伝統的基準で評価しようと、女性がフイリス・チャイミングとの関連で自分自身を定義する西洋のロマンチック・ラブで評価しようと、彼女が独身であることは他の女性との差異を際立たせる。(キクと友人のエルシーは二人とも、「心がきれいで素敵な青年、望ましくはハンサムで、できればお金持ちで、生涯ずっと私たちを大事にしてくれる青年をそれぞれに見つけたい」と、従来通り

る。誰かほかの人がいる時には、決して自分からシャワーを使おうとはしない。ここで興味深い矛盾として提示したことは、確かにごく自然なことであるかもしれない。人前で絶えず演技しなければならぬ人にとって、プライバシーを求める気持ちは特に強いだろう。しかし、ストリーが示唆するのは、同じ収容所にいる人々の詮索好きな監視が、ミス・ササガラへの悩みの一つの原因になっているということだ。コミュニティの関心は、彼女が何度目かに病院に「容態を見るために入院した」時にピクに運ぶ(二六)。

病院じゅうの職員がミス・ササガラを人目見ようと部屋に集まっているようだった。他の患者も……高く狭い白いベッドの上に身体だけ起こしてじっと様子をうかがっていた……彼女はみんなからじろる見られているのを……彼女のベッドのそばを通ってみようとなにか口実をつくって、きままり悪げにそそくさと入っては出て行く人々に気づいているにちがいない。(二六)

ミス・ササガラは病院から逃げ出そうとし、理由を聞かれて、「お医者さまにさわられるのはもうたぐさんだ」と言った(二五)。医師に「さわられる」という彼女の主張には一通りの解釈が可能である。(ストーリーの全登場人物のように)、もし彼女が過剰反応していると考えるなら、彼女は「誤解」といって罪を犯していることになる(ヨキ一九八、二一八)。医師の行為を彼女が誤解したとするなら、その後起こる事件で、彼女自身の行為が誤解される可能性があることを暗示する。彼女の身体的な美しさ

を考慮すると、診察の間に行き過ぎた行為があったのではないかとという疑いが起きるのも当然だ。だが、

もうひとつの噂はミセス・ササキが流したものである。彼女は、近所に住むヨシナガ家の十代の男の子たちが空き地でバスケットボールをしている時に、ミス・ササガワが彼らに色目を使っているのを見たと言う。ミセス・ササキは、ミス・ササガワが、「男の子たちが遊んでいるのを見て、うっとりとした表情を浮かべていた……」[彼女は]このばか騒ぎにすっかり夢中になってしまい、恥ずかしがり屋の子供が驚いて見入ってしまったように、頭をかしげ、実際指を一本口にくわえてじっと見ていたと主張する(三一)。「一体どうしたのですか？ 男の子たちをそんな風に見たりなんかして。あなたはあの子たちの母親ぐらいの年齢でしょう」と(三二)、ミセス・ササキは注意した。ミス・ササガワはびつくりして、あわてて自分の家に戻ると、壁をたたき始めた。この話の続きはそのヨシナガ家の子供の一人、ジョー・ヨシナガによつて語られる。ジョーはよく寝る前に本を読むのだが、ここ数日間前の晩にうっかり柵の上に放り出しておいた雑誌が次の日にはきちんと柵の中に片付けてあったと言う。ある晩彼が目を見ますと、そばにミス・ササガワがすわっていた。「彼女は長い髪をだらりとたらしっていた。白いナイトガウンを着て、両手を合わせて膝の上のせていた。彼女はただそこにすわってじっとジョー・ヨシナガを見つめていた」(三三)。ジョーが悲鳴をあげると、彼女は入り口から逃げ出した。これらは、異性にひそかに夢中になっているが、その「事実」を決して認めたくない一人の女性についての口頭による詳しい報告である。この憂慮すべき「兆候」が彼女を永遠に精神病院に閉じ込めることになる。「それからまもなく、ミス・ササガワはいなくなつた」のだ(三四)。

(当時のアジア系アメリカ人にとつて)非常に特殊な職業に就いたために、戦前は日系コミュニティから離れて暮らしていた。収容所の人々は最初から彼女を部外者と見ていたようだ。ミスター・ホソウメがヨネコの朱色のマニキュアを見て、「アイリディン人みいだ」と言ったことを思い起こしてみると(五二)、特に日系アメリカ人もっとも注目されたくない時期でもあり、自分自身の美学に合ったものであつても、ミス・ササガワの服装に収容所の人々が眉をひそめたであらうことは察しがつく。コミュニティの人々は、「彼女のフリーストームのアイリという簡単でどちらかというと愛らしい響きのある名前」を使わずに「ミス・ササガワ」と呼ぶことで(三二)、彼女から微妙に距離を置いている。

つまらない噂の的として注目を浴びるにつれて、彼女の孤立は深まっていくなか、ミス・ササガワは話しかける相手としてはふさわしくなかつたとしても、噂をするにはもつてこの人だつた。単調な日々を送る人々に尽きることのない話題を提供した(三三)。独身女性には風変わりという評判があるが、言いふらされた噂は彼女をその評判どおりの独身女性として描き出している。最初は、彼女と父が収容所に着いた直後に起きたと言われる出来事に関する噂である。同じ新参者のミスター・ササキは、父と娘にあてがわれたバラックの掃除を手伝おうと申し出たらしい。すると彼女は叫び声を上げ、「何をしようとするの？ スパイするつもり？ 出て行ってちょうだい。でないところの水をかけるわよ」と脅し(三二)、本当に水をかけたぞうだ。「氣のふれた女」というのがミスター・ササキの結論である。このミスター・ササキからの話をキクに伝えたのはエルシーであるが、彼女のミス・ササガワに対する直接の印象は異なり、「とても感じのいい人」だつた(三一)。

怒るのは当然である。

しかしその一方で、ミセス・ササキはバリーナナの目に真の願望を読み取ったのかもしれない。語り手は、「ごく最近、人間の心という未踏の領域に文献を通して踏み込んだ」ので、「ミス・ササガラはきつと、ジョー・ヨシナガの中に亡くなった恋人が亡くなった息子のイメージを見ていたのよ」と大胆にも説明する。しかし、自信を持ってこう言ったあとですぐに、「口先だけでもを言っているのか、氣づいて、不安な氣持ちになった」と(三三)、自分の意見を奏せしめる。ミス・ササガラはどこか麥だと主張する人だとは異なり、少なくともキクは自分の意見は間違っているかもしれないと認めている。キクのこの態度のために、彼女の説明は非常に興味深いものになる。先にミセス・ササキは、ミス・ササガラが少年たちの母ぐらの年齢であると言った。「十七文字」と「ヨネコの地震」では、失くした恋人と亡くした息子の二重のモチーフがストリーナの最後で明らかになる。若い頃にミス・ササガラも恋愛をして妊娠したのかもしれない。意欲的なバリーナナとして自分のキヤリアを心配したが、または父の反対やコミュニケーションからの非難を恐れたために、彼女は中絶に追い込まれたのかもしれない。いずれにしても、「生涯の目的は涅槃の境地に達すること」である彼女の父は、「若くて人生経験も乏しい頃に、扶養すべき家族を持つてしまった」ことを深く悔んでいる(三二)。そして彼女の亡くした子供は、

妻であり、夫の結論を裏付けようとしているようだ。恐らく、彼女は母になれない不満をミス・ササガラに向けているのだらう。ミス・ササガラはバリーナナとして、バスケットボールをする男の子たちの身体の動きに魅了されていただけかもしれない。理由はどうであろうと、ミセス・ササキの大げさな叱責はいわれのないものであり、非常に失礼である。そんな無礼な態度に対し、ミス・ササガラが怒るのは当然である。

エルシーの話の出所は、私が普段あまり気にとめない二人だった。ミセス・ササキは、クスクス笑いをする小太りの若奥さんで、たずねられもしないのに、子供はほしくないので、と説明しなければならぬと思っている人だった。ジョー・ヨシナガは話を大きくするコツを心得ていて、あの思わせぶりなゆくりした口調で、自分が大してかわつていない出来事でもまことしやかに話す(チャースとばかりに、この事件を種に大げさにしゃべる様子は想像できた)。(三三)

一九八八、一八。これらの話は、エルシーが他の人々から聞いてきたものをキクがまた聞きしたものである。エルシー自身が信頼できる情報提供者というわけではない。彼女はミスター・ササキから聞いた話をした後で、「あの、本当に気難しいわ。収容所に入れられる前、バリーナナだったからだと思うんだけど。パレスタンサーっていうのは気難しいそうよ」と大声で言う(二〇一一)。ヨギが述べているように、エルシーは、「ミス・ササガラらの行動を説明するのに、ステレオタイプを使うこと」を厭わない(一九八、一九)。彼女は「ミス・ササガラについてなんでも知っている」ことになっているが、語り手は、「彼女はどこでそんな情報を集めてきたのだらう? おそらく、あちこちで少しずつ聞いてきたのだらう。情報源を聞き忘れたけれど」と(二〇)、彼女の話の信憑性を疑う。語り手が聞いた話の出所は疑わしい人物たちであることがわかる。

分の愛想の良さが報われなかつたことに腹を立てていて、聞こえなかつたようだった。だから、それで終わりになつてしまつた」(二三)。他の人々とは異なり、キクはミス・ササガララに対し風変わりな人という印象は持つていない。ミス・ササガララは誰かと知り合いになりたいたい、見世物ではなく一人の人間として見てほしいと強く望んでいるようだ。しかし、エルシーは彼女があいさつを返さなかつたことに氣を悪くして、彼女への方を変えろことにはない。彼女を排除するエルシーの態度は、彼女が療養所から別人となつて来た時に人々が見せた態度を先取りしている。多くの人は依然として彼女に不信任を抱き続けた。「彼女は会う人みんなに、こんにちは、お元気ですか？と気軽に声をかけた。あいさつされた人はだいて、以前の彼女の素気ない態度を思い出して、驚いたり、いぶかしがったりした。愛想のよいミス・ササガララにどうしてもなじめない人もいた。」(二八)。

しかし、ヤマモトはこれまでに言われてきた結論を擲るがすことに成功している。たとえば、私たちは収容所生活を全く「正常」だと考えるように仕向けられている。キクの快活な口調に表れているように、ホストン収容所での生活は一見したところ、そう悪くはなく、快適そうである。しかし、そうした印象は、実状を表しているというより、苦しい状況にあつても表面的にはなんとか正常な生活を送らうとした収容者たちの努力を反映するものである。キクやエルシーのような収容者たちは強制収容所がサマキヤンブであるかのように、そこでの生活をなんとかこなしている。収容所を出て自由を取り戻した後も、二人は収容所生活を、「食堂で一緒に働いた昔の懐かしい日々、病院で一緒に働いた昔の楽しい日々」として思い出す(三〇)。ここでの表現が多少皮肉な調子に聞こえるにせよ、強制収容という屠屠体験に色をつけた人たちのサバイバル戦略を表していることは確かである。

生きていればジョーと同じ年齢だったのだろうか。しかし、キクと同様に、私はこのような安易な臆測をするのに少し後ろめたさを感じざるを得ない。療養所から帰つてしばらくは「正氣」であつたにもかかわらず、ミス・ササガララはますます引き籠つてしまふ。それはまさに根柢のない臆測への彼女の反感、つまり噂話や干渉的な視線から自分を守る手段であつたのだろう。

衆人監視にはやる氣を失わせる効果がある。このことが、ミス・ササガララの指導のもとで行われた子供のダンス教室のクリスマス発表会でユーマラスに語られている。「小さな女の子たちは、ミス・ササガララ一人だけの前では優美なお辞儀をし、ステップを踏んでいたかもしれないのに、収容所のグロックの一五〇人以上の人の目が注がれているのを感じると、緊張してカチカチになつていた」(二九)。滑稽な描写は、ミス・ササガララの日常的な試練と絶え間ない監視が精神のバランスに与える影響を私たちに再認識させる。

ミス・ササガララが先生となつて自發的に子供たちにダンスを教えたということは、彼女が生まれよそよそしいわけではないことを示唆している。彼女が玄關にすわつてグレイプフルーツの皮をむいているのをキクとエルシーが見かけた話に示されているように、とそよそしい見かけの下には人間的な結びつきを求めた願望がある。最初彼女はエルシーのあいさつに答えない。「誰だかわからない様子で、顔を上げて、じつと見つめる」だけである(三二)。しかし、エルシーには聞こえなかつたが、キクはしばらくしてパレリーナが発した言葉に氣がつく。「ほとんど声が聞き取れないところまで歩いて来た時、『私はあなたたちを知つていたから』という彼女のかすかな声が聞こえてきた。積極的に何かを言いたがつているというほどではなくても、返事を期待しているようだと私には思えた。でも、エルシーは自

が全くないことであつた。語り手はサガワ家の「アパート」の前を通りかかった時に、それは「本当に小さな部屋で、前に空いていたバツクを二人家族用に六つに仕切つたものだから」と述べている(二二)。正確な大きさについてはミチ・ウエグリンの記述から知ることができる。「収容所の建物はある程度画的に作られていた。二〇×二四フイートの部屋は、一六×二〇フイートで少数数の家族向け五〜八人の家族が押し込められた。バツクの端の部屋は、一六×二〇フイートで少数数の家族向けだつた。一つのバツクには四〜六軒の家族が住んだ」(八四)。ウエグリンはまた、他の場所でもアラバシ¹⁾がなかつたことを非難している。「収容者は共同で食事をし、共同でシャワ²⁾を浴び、共同で排便した……トイレの間には仕切りが設けられていなかった——そのためどの収容所でも大規模な便が發生した。白人教会のグループからの抗議で、やがて部分的な仕切りが作られたが、ドアは決して設置されなかつた」(八〇)。こうした点を考えれば、ミス・サガワが一人で食事をし、シャワ²⁾を使うと決意したことは非常に理にかなつたことであり、彼女が非社会的なということにはならない

ヤマモト自身として強制収容は決して笑いごとではなかつた。彼女は収容所で二十一歳の誕生日を迎え、家族のほとんどが収容所に収容されているにもかかわらず、弟はアメリカ兵として戦い、戦死した。およそ三十年後に書かれた強制収容文学に関するエッセイの中で、ヤマモトは次のように述べている。

収容体験は……私たちが認識している以上に私たちにひどく苦しめた集団生活の中の出来事なのだ。何年前か、ウォルター・クロナイトがソフトな声で語る収容に関する初期のテレビ・ドキュメンタリーのひとつを見ていた。その時にはじめて、収容体験が私の潜在意識の中でどんなに大きなこりになつていたのかに気づいた。驚いたことに、涙が頬をつたつていた。びくりして見ている夫や子供たちになぜ泣いているのかを説明しようとしたが、声があらずり、³⁾どうにもならなかつた。(一九七六 a、一一)

私たちには、キクとエルシ⁴⁾の愉快な思ひ出話が、厳しい現実をほとんど反映していないことを「伝説」の端々から感じ取ることができる。まず、ストリー⁵⁾の最初の文章がバリー⁶⁾を乾燥した不毛の地に位置づける。「風が強く、暑い砂漠という似つかわしくない場所でも、ミス・サガワが着飾つてパレエを踊る姿は容易に想像できた」(二〇)。この気候が収容者の身体的、精神的健康に悪影響を及ぼすことを予告している。また、収容所の病院もあまり治療が期待できるものではないことがわかる。実際、キクが何気なく語る話から、病院のスタッフ⁷⁾が間に合わせの人たちであるという少々背筋が寒く

行われた」と述べている(タカキ三八七)。
 日系アメリカ人に対する偏った情報、ミス・ササガララの噂と同様に、雪だるま式に増加し急速に広まっていた。報道陣に発表された公式声明——後に誤りだつたことが証明された評価に基づいて行われた——は、「ハワイ」の日系アメリカ人が破壊活動を行ったとする噂に火をつけた。それは、「オ
 容が軍事上必要だという主張は、『実際のデータを基にしたのではなく、主に世論や政治の圧力によつて呼ば誤解とパラルドである(三七九)。FBI長官のジェイ・エドガー・フーヴァーは当時、「強制収容
 る多くの誤解、ロナルド・タカキが「日系アメリカ人の強制収容に対する軍事上の必要性という神話」
 く、ミセス・ササキの結論は信憑性に欠けるが、それは公的機関が行つた日系アメリカ人の活動に対す
 人に対する偏見と一致している。ミス・ササガララのうろつろな表情についてのエルシーの解釈は疑わし
 うに、強制収容を正当化した「証拠」の多くが、主流文化により歴史的に構築されてきた日系アメリカ
 ミス・ササガララについての噂の内容が、バハリナや未婚女性のステレオタイプとよく似ているよ
 に対する答えに矛盾している、と私は思う。

を関連づけ、「伝説」の現表面とアレゴリーの次元を結び付けるというナラナイヴ上の重要ポイントに
 は作品の分析に役立つだろう。最初の意見は、「一番目の質間である「内的状態」と「外的な社会状況」
 述べている(一九七六a、一五)。ヤマモトは批評家が指摘したこの二点を特に強調しており、このこと
 ミス・ササガララなのか、それとも収容所生活を受け入れている人々なのか」と問うと、「ごく簡単に
 心は外側の社会状況の重要性よりも登場人物たちの内面状態にある」と批評し、「気がふれているのは
 エッセイの中で、ヤマモトは「伝説」について、「このストーリーを讀んだ人類学者たちは、『著者の関

思われる。
 その他にもストーリーが沈黙していることがある。狭苦しい私的な空間といつも混雑していた公共の
 場の周りには、鉄条網がはりめぐらされていたことである。ミルトン・アイゼンハワー元戦時転任局長
 官は、ロイズヴェルト大統領に宛てた手紙の中で、「収容所の生活は到底快適とは言えません。収容者
 は有刺鉄線に囲まれ、武装した憲兵隊の監視下に置かれています……この状態で激しい憎悪が生まれな
 い方が不思議です」と述べている(一九四三年四月二十二日付、ウエグリンに引用一八)。ここで読者は
 次のように思い始めるだろう。ミス・ササガララは、収容所の管理の下で、「正常」な振る舞いに欠け
 るとしてコミュニティから逸脱者と見なされる。しかし、彼女は収容所での「昔の楽しかった日々」を
 大事に思うエルシーやキクよりも、また、収容所に収監された時、「状況が変わり、あくせく働いて生
 活費を稼ぐ必要がなくなり、あの静謐な八正道に専心できるようになった」ために、「長い人生で初め
 て自由を感じた」彼女の父よりも本当に異常なのだろうか、と(三三三三)。
 そのように問い直してみると、入れ子式の箱の一番外側——政治的文脈——について考えることが必
 要となってくる。フレデリック・ジェイムソンが述べたように、第三世界のテクストには「必ず政治的
 問題が国家のアレゴリーの形で表現されている」(一九八六、六九)。当時の政治情勢がミス・ササガラ
 の苦悩の直接的原因になっているだけではなく、アレゴリカルにストーリーと間接的に結びついて
 いる。収容所の過密によりミス・ササガララの監視の視線は強まり、噂は加速的に広まってい
 好きで誰かを悪者にして非難するコミュニティの人々が、アレゴリーとして、偏見と噂に影響され、日
 系アメリカ人の強制収容を認めた多くの白人を表している。先ほど私が引用した強制収容文学に関する

アノ島の日本人労働者がサトウキビ畑やパイナップル畑で草刈りをしながら日本軍の爆撃機に合図を送り、軍施設に誘導した、車の通行を妨害するために日本人が高速道路を横切るように車を止めた、日本人が敵の飛行機に合図を送った」というものだった。メデア、地方や国の政治家、愛国の組織、「農業者団体からの声」が日系アメリカ人の排斥を求める大合唱に加わっていた(タカキ三八〇、三八九)。

日系アメリカ人が有刺鉄線の下に送られても、噂はやまなかつた。ウエグリンが明らかにしているように、「収容される必要ありと判断されたという事実のために、あまり教育のない収容所の職員の間で、日系アメリカ人を価値のない、道徳的に劣る者たちと見下す傾向が一般化していた」(二六七一七)。彼女は、社会アナリストのアレクサンダー・H・レイトンのホーストン収容所で実施した行動に関する研究から、次のように引用している。

FBIは完全な安全対策を行っていたにもかかわらず、政府職員の中には、暑さから食物を守るために作った地下の食物貯蔵庫を日本の落下傘部隊の隠れ家だと思込んだり、コックを変装した海軍大將だとか、陸上競技のチームを日本兵が訓練している姿だと確信している者がいた(レイトン二七九、ウエグリンに引用一七)。

私は、パレリーナを取り巻く噂と日系人全体につきまとう噂の一致を議論しているのではない。「伝説」は個人の悲劇を超えたストーリーであり、政治に関し何度も間接的に言及していることから、ス・サカワラについての記述をもう一度解釈し直さなければならぬと思う。密かに見張られている

ことに対する彼女の過剰反応は、大多数の白人が示した戦時ヒステリーとパレリーナを表現しているだけではなく、当時の日系社会全体の窮状を反映している。彼女が目立つことと監視に対して示す感受性は、外部社会からの監視が非常に強まった第二次世界大戦中の日系アメリカ人の苦境を物語る。日系人を狡猾いスパイと見なしたことで共振する。ミス・サカワラの孤立と最終的な精神病院への収容は、日系人種の排斥と最終的な強制収容所への収容と重ねられている。

収容所内のコミュニティが誰かを悪者にして非難している点は、政府の治安維持政策の文脈で考える必要がある。歴史的には日系人同士が互いの密告者になった。絶え間ない監視状態に置かれ、密告者たちは不正な逮捕や隔離につながる扇動的な報告をした。ウエグリンは、抗議にもかかわらず単調な日常生活が続くにつれて、収容者の「従順な忍耐」が「怒れる戦意」へと変化したと述べている(二六)。いわゆる多くのトラブルメーカーたち、つまり、密告者に脅しや暴力を加えたり、政府に対する不満を明らかにした反体制的な人たちは、裁判もなく逮捕され、警備が厳重な収容所、特にモアブ収容所(ユタ州)やシリアン隔離収容所(アリゾナ州)に収容された(ウエグリンを参照。二二二八)。当時、『日系人』に対して奇妙な道徳基準があり、これまで無実と考えられていたものが、その時には都合よく罪と見なされるようになった」(二八)。ミス・サカワラについても、当時の家父長制の規範で考えれば、彼女が何をしようとも常軌を逸しているように見えることだろう。コミュニティによる彼女の扱いは、政府が「不服従の市民を捕らえ、隔離した気まぐれで一慣性のないやり方」を反映している(ウエグリン二二六)。

専制的であったことについては、シリアン隔離収容所の所長、ポール・G・ロバートソンが極めて明

確に指摘している。彼は、収容者のほとんどが「手に負えない者たち」ではなく、「なぜ八十人の収容者を百五十人の武装部隊が見張らなければならぬのか、理由が分からなかった」と述べている。やがて彼は「その収容所の人々をとても気に入るようになる」。そのうちの一人は彼の家の庭師となった。「その男は私の子供たちと度々いっしょに遊んだが、少しも危険人物ではなかった」と語っている(ケヒグリンに引用 二八一—二九)。

キクも、ミス・ササガラは気がふれているという噂をもう一度考え直すように促す。他の収容者から疎外されることで、ミス・ササガラは自らを犯罪者のように感じ、子供たちに「私を恐がらないでね。あなたたちを痛めつけたりしないから」と言って安心させようとする(二八)。キクがミス・ササガラととも長い時間話した時——「彼らがいかに会って言葉と交わした唯一の時——」笑顔でキクを迎えた「ミス・ササガラはとても愛想がよく、陽気でさえある。キクがバイオリンを始めてみたがうまくいかなかったことを話すと、「ミス・ササガラは声を上げて笑った——きれいな響きだった」(二八)。そして、自分のスペインギターの経験をキクに話す。キクがミス・ササガラと直接会って話をすることの場面で、気がふれているような様子は全く見られない。

政治的状況を考慮に入ると、ササガラ師への私たちの私たちが変わるだろう。彼は娘の気持ちに鈍感であるが、それは市民(収容者の三分の二)に対する政府の冷淡さとパラルドである。しかし、このパラルドはあまり明確ではない。師はこのテクストではほとんど沈黙していて、娘と同様に謎めいている。彼の仏教が「西洋」の二項対立——精神(男性)を身体(女性)より優位に置く——の男性側に彼を位置づけていようと、「東洋」の宗教として仏教は、支配文化の宗教が持つ押しつけがましさに対

し、ひとつの文化的抵抗様式を形成している。例えば、「収容所のアロックのクリスマスパーティーの時、子供たち一人一人が「収容所の外の教会の人々」から送られた「慈善の包み」を受け取り、「受け取った子供はみんなお礼状を書かなければならない」(二九)。クリスマスは収容所で公然と行われているのに対し、ササガラ師の仏教は自分の小さい部屋に閉じ込められている。日系コミュニティの有名な僧侶として、彼は真珠湾攻撃後すぐに逮捕されて取り調べを受けただろう。政府は二世にこのような「疑わしい」人物を収容所内で監視するように仕向けた。(したがって、パリーナがササガラ師の娘として監視の目を警戒するのは無理もない)。この父親は特権ある家長どころか、差別的な法律の支配下にある。宗教的成熟の境地に到達するという決意は、彼を疑わしいよそ者と見なす新世界で体験してきた苦勞への埋め合わせなのかもしれない。しかし残念ながら、宗教的な絶対性を追求し娘の情緒的な求めに目を背けると、彼も残酷な暴君者同然になっている。

父の異常なまでの精神性は「非難の対象にはなりえない」と見なされるのが普通である。アリ・ササガラだけが彼の狂気に気づき、非難の気持ちとそれをなく、ためらいがちに詩の中に書き込んでい

「この詩人が……語ることは自分自身だけなのである」(三三)。「十七文字」のミスター・ハヤシの妻に対する態度とは大きく異なっている。ミセス・ハヤシの俳句への熱中、家事への責任逃れや異常な執着(「お前のお母さんは気がふれている」と受け取られる。一つのストリーにおいて父の精神性の追求は神聖化され、別のストリーでは母の芸術性の追求が非難されている。「狂気」の定義とは主に家父長制の規範からの逸脱であることが分かる。

ミス・ササガラは三重の抑圧——父から受ける娘としての抑圧、コミュニティから受ける未婚女性

理想主義」の監察から逃げるために（ワグナルドとニエマン二八）。
 二つのストリーには、現代の皮膚の色をめぐる政治との不吉な関連性が隠されている。スーザン・ランサンは長い間見逃されてきたギルマンの表題にある形容詞に注目した。「ギルマンは『黄色の壁紙』を書いている時カリフォルニアに住んでいたが、そこでは『黄禍』に対する大衆の不安が強まり、一八八二年の中国人排斥法のような法律がすでに制定されていたのだ」（一九八九、四二五）。ランサンは挑発的に尋ねる。「それなら壁紙とは、アフリカ人女性の狂気が…『黄色い』女性、しかし、恐れられる外国人でもある女性に投影される文化を政治的に自覚していない人のことなのか？」（四二八）
 二九。この言葉の以前にランサンは、テクストでは人種についてのほめかかしは完全に抑えられているので、自分の解釈は「読み過ぎ」かもしれないと警告している。ヤマモトは白人の人種差別主義者のヒステリーに言及することを極力抑えているため、「外の世界の状況」を無視していると非難される。私

の「読み過ぎ」では、逆に、ミス・ササガワの心理状態はストリー空間的配置と深く関わっている。現実との接点を失うまで彼女の想像力を抑え込んでしまう。ササガワ師の精神修養も同様に彼の娘を混乱させる。しかし、医師の妻が監察される屋根裏部屋は、ササガワ家の住まいよりも広い。娘は、文句なしに彼女を狂わせたかもしれない状況となるが、彼女の父のすぐそばにすつといなければいけないか、または、退屈しにぎにセンセーショナルな情報ほしコミュニケーションの詮索好きな視線に自分をさらけ出すか、どちらかを選ばなければならぬ。内科医の夫も僧侶の父もかれと思つてしているが、ひたすらひとつのことを追い求めているために、妻や娘の不幸な状態に全く気がつかない。二人の女性がその状態から自由になるには狂うしかない。医師の妻は想像力を解放するため、僧侶の娘は「仏教の

「伝説」は詩と政治の複雑な関係について語り、女性の書き物についての既存の理論にもっと批判的に関わるように促す。先に論じたパリンツェスト（*重ね書き）の技法から考えると、これは三重に沈黙させられている物語である。父との直接の対立はなく、日系コミュニティへの明らかでない非難もなく、アメリカ政府に対するあからさまな反抗もない。ジェンダーと人種を複雑に提示している点は、シャーロット・パーキンス・ギルマンの「黄色の壁紙」に匹敵する。どちらのストリーも女性の抑圧と抑制を間接的に扱っている。ギルマンの物語では、内科医の夫の科学に対する絶対的な信頼が妻を物象化し、

「十七文字」と「ヨネコの地震」では、無邪気な語り手の使用により、この二つのストリーには視点的限界があることに私たちはすぐに気づかされる。「伝説」は人を魅了する噂の力を十分に再現した後で、噂の疑わしさを問題にしている。表題となっている登場人物に対する私たちの見方をずらし続け、彼女に詩を通して最後に語らせることで、ヤマモトはすぐに偏った意見を受け入れて判断しがちな読者の良心に刺激を与えている。彼女が「伝説」に書き込んだ疑念、特に情報源を問いたださずとする彼女の姿勢はキングストンやコガワの中にも執拗に見受けられるものである。

114
 としての抑圧、迫害された人々の一員として政府から受ける抑圧——に直面し、その状況に唯一ふさわしい反応を示す。つまり、彼女の「狂気」は異常な状況からの逃避なのである。ミス・ササガワの詩は、狂気、崇高、逸脱や無垢について以前の認識に異議を唱えるものであり、日系アメリカ人たちが「彼ら自身と国家による噂の犠牲者」（ヤンその他一九八二、二九）になったあの「屈辱の歳月」（ウエグリン）に、罪を負うべきは誰だったのかの問いを私たちに突きつける。

文化的、社会学的な思考が芸術的判断の非常に重要な要素となっている。主題上の沈黙と戦略上の沈黙が連結しているため、ヤマトのフイクシヨンは文学と社会史間の差異や、美学と政治の差異についての議論を再考するように促す(例えば、コロドニー一九七五、ジエレンを参照)。人生と芸術の関係の場合と同じように間接的であるため、彼女のテクストは細部まで慎重に読む必要があり、またそのよ

うな読み値するものである。しかし、テクストを文化的、歴史的文脈にしっかりと位置づけなければ、ジェニーソンの『ガフ楯』や『イロン・デニソグイチ』を参照)。時に、収容所生活を快活に描くことで、白人編集者の検閲官のような視線をそらしたのである(ソル差異への不寛容と排除のメカニズムに関して、日系コミュニティとより大きな社会を批判している。同噂を詳細に演出し、語りの権威を奪い、危険な政治的項目をアレイでコード化することで、著者はか見えぬ。著者の隠された社会的主張のトゲがスムーズに流れる語りの表面を突くことは一度もない。ど曖昧である(三三)。外的背景は、ある興味深い人物についての個人的な回想録に付随する状況に政治的アレイを織り込んでおり、一読した限りでは、「異常なほどに見事であるが……じれったいほ性役割への期待(誰が正常か異常かを規定)に対するフェミニストの批判、および人種偏見と迫害の政のかもしれない。ミス・サカワラの詩のように、「伝説」は、人間の情熱や高德な無感覚、伝統的な作品をなかなか出版してくれなかつたからである。この点でヤマトのナラナイザの曖昧さが役立ったの場を見つめるのが難しかった。白人の出版社は一般に、明らかに支配文化に異議申し立てをしている両方から拒絶された。それ以前は、二世が自分たちの怒りや恨みを率直にぶちまけたと思っても、その

ボート』はこの両方を行っており、一九五七年に発表されたときには、日系コミュニティと白人社会の両方から拒絶された。それ以前は、二世が自分たちの怒りや恨みを率直にぶちまけたと思っても、その場を見つめるのが難しかった。白人の出版社は一般に、明らかに支配文化に異議申し立てをしている作品をなかなか出版してくれなかつたからである。この点でヤマトのナラナイザの曖昧さが役立ったのかもしれない。ミス・サカワラの詩のように、「伝説」は、人間の情熱や高德な無感覚、伝統的な性役割への期待(誰が正常か異常かを規定)に対するフェミニストの批判、および人種偏見と迫害の政治的アレイを織り込んでおり、一読した限りでは、「異常なほどに見事であるが……じれったいほど曖昧である(三三)。外的背景は、ある興味深い人物についての個人的な回想録に付随する状況に政治的アレイを織り込んでおり、一読した限りでは、「異常なほどに見事であるが……じれったいほ性役割への期待(誰が正常か異常かを規定)に対するフェミニストの批判、および人種偏見と迫害の政のかもしれない。ミス・サカワラの詩のように、「伝説」は、人間の情熱や高德な無感覚、伝統的な作品をなかなか出版してくれなかつたからである。この点でヤマトのナラナイザの曖昧さが役立ったの場を見つめるのが難しかった。白人の出版社は一般に、明らかに支配文化に異議申し立てをしている両方から拒絶された。それ以前は、二世が自分たちの怒りや恨みを率直にぶちまけたと思っても、その

ボート』はこの両方を行っており、一九五七年に発表されたときには、日系コミュニティと白人社会の両方から拒絶された。それ以前は、二世が自分たちの怒りや恨みを率直にぶちまけたと思っても、その場を見つめるのが難しかった。白人の出版社は一般に、明らかに支配文化に異議申し立てをしている作品をなかなか出版してくれなかつたからである。この点でヤマトのナラナイザの曖昧さが役立ったの場を見つめるのが難しかった。白人の出版社は一般に、明らかに支配文化に異議申し立てをしている両方から拒絶された。それ以前は、二世が自分たちの怒りや恨みを率直にぶちまけたと思っても、その

日本の家族関係がアメリカに伝わった。日系アメリカ人は日本人家族とは別に形成されたどころか、最初から一世の結婚は国境を越えた家族のなかに組み込まれていた」と述べている。

(6) ヤマモトは一九七九年四月に、「日本の伝統が私の書き物に大きな影響を与えているのは確かである。両親が日本から持ちこんだものであり、私たちにそれを伝えようとするのは当然だからだ。もしこの伝統がなかったら、私は作家になっていただろうか、とぎえ思う。ほとんどの物語が日本の伝統とアメリカでの体験との相互作用を扱っているように思われるからだ。私はアメリカの体験を偏見の(黄色い)目で見ることが、英語でコミュニケーションをとることができ、今日、この場所ですべてにただ感謝している」(マクドナルドとニエーソン二三)。

(7) ライツンの記事は相当の論争を巻き起こした。フランク・S・ミヤモトは、ライツンが行った二世の交流スタイルの説明に基本的には賛成している。しかし、その二世のスタイルをライツンが「否定的」に捉えているとして批判している(一九八六年七月、四〇)。この批判に対し、ライツンは、それは違うと強く否定している(ライツン一九八八年a、一九八八年b、ミヤモト一九八八年を参照)。控えめさの理由のひとつを、現代の日本人女性作家、津島佑子がうまく説明している。「沈黙は非常に重要である。沈黙を維持し、他人の領域に立ち入らない限り、私たちにはいかなる時でも交渉を再開する可能性が残される」(四三)。

(8) コード化について登載的な議論をした後で、ラドナーとランサナーは、「コード化が必要だということは完全に自由ではないことを常に意味する」と結論づけている(四三三)。対照的に、イサーガーは批評家に女性の書き物を「遊び」の場と見るように求めている(三七)。ヤマモトのフレイクシヨンの「情報ゲーム」には確かに遊びの性質があり、それは彼女のミステリイ好きに端を発しているのかもしれない(彼女は、なにして、『ホスト

著者の形式上の複雑な構造を明らかにし、省略したものの中に埋め込まれた感情の層を読み解くことはできない。

注

- (1) ラドナーとランサナーが提示するコード化の戦略とは、占有、並置、間接的手法、注意をそらすこと、矮小化、無能力の六つである。ヨギは「埋め込まれたプロット (buried plot)」という言葉を使用して、ヤマモトとヤマウチの作品に見られるパラル現象を説明した(一九八八)。
- (2) 日系アメリカ人の歴史と文学の関係については、キム(一九八二、二二七)を参照。歴史的背景をもつと知りたい場合には、イナオカ(一九八八)、マツモト、タカキ(一九九二、二九)を参照。
- (3) ヤマモトの技法は、『アイジ・ミラー』のような作品で、ヘンリー・ミラーが使用した新世界と旧世界の社会的関係についての表現方法を想起させる。
- (4) スーザン・シユヴァイクは、そのような「社会テクニクス上の束縛」(アン・ロザリンド・ジョーンズから彼女が借用した用語)を別の二世作家、トヨ・スエモトの作品において議論しているが、説得力がある(八九)。収容所での出版物は当局からの厳しい検閲を受けた。しかし、多くの日系アメリカ人が行った自己検閲は戦後も長く続いた。また、ヤマモトが無邪気な語り手を使っているのは、著者である自分から注意をそらすための「無邪気なまかし」と考えることができるかもしれない。
- (5) シルヴァイア・ジュンコ・ヤナギサコは、「一世の結婚によって日系アメリカ人の家族が形成されたと同時に、

- ン・クロニクルの連載「ステリーの著者なだから」。
- (9) ここでの私の議論は、ほかの農村地帯の文脈においてソウ・リン・ウオンが行った「贅沢」と「必要」の両立可能性に関する分析(一九八八)に負うところが大きい。また、タカキもこの二つの言葉を使ってアジア系アメリカ人の移民について論じている。
- (10) 焼却の場面で私が思い出すのは、真珠湾攻撃後、一世たちが戦時転住局に破壊活動の容疑者と疑われないうに、祖国との結びつきを示すすべての物を焼却したり、処分したことについて語られてきた多くの痛ましい話である(例えば、ソネ一五五五六、ウチダ六三)。
- (11) この結婚方法は日本の社会的風習を拡大したものであるが、アメリカの排他主義者によって不道德であると非難され、一九二二年に終了した(イチオカ一九八〇、三四一四三)。現代の私たちがすると、見知らぬ者同士の結婚は不可解に見えるかもしれないが、アジアなどではお見合い結婚が広く行われてきている。伝統的な日本の結婚は義理、「拘束力のある義務」に根ざしており、夫婦はロマンスチック・ラブよりも義務感によって結びついていた。愛情は結婚生活を送るうちに育っていくかもしれないが。(ヤナギサコ九六一九七)。
- (12) カリフォルニアでの一九三三年と一九二〇年の「外国人土地法」や他の西部の州における同様の法律は、日本人と他のアジア人を帰化不能とし、土地の所有を妨げた。移民のなかにはアメリカ生まれの子供名義で土地を買った者もいた。
- (13) ルイス・チャートの『一杯の茶を啜べよ』は、字義通りおよび象徴的な意味において不能というテーマを扱っている。その時代に支配的だった、日本人男性は「性的能力なし」、フィリピン人やメキシコ人は「性欲過剰」というステレオタイプを考えると、ロージーやヨネコ、ミセス・ホノウメがヘイスラスやワープのような非日人男性に惹かれるのは単なる偶然ではないだろう(このことを示唆してくれたスーチェン・チャンに私は感謝している)。社会的階級の違いが異人種間の力学をさらに複雑にしている。貧しい農場労働者として、ヘイスラスもワープ(おそらくはミスター・ホノウメに解雇される)も日本人のホスのなすがままである。
- (14) 心理学者のダイアン・M. スーとダイヴィット・スーはその差異について、「中国と日本の文化では、感情は潜在的に家族の絆を破壊する力があると考えられているので、感情の抑制が重視される。この抑制のために感情表現は未熟さのしるしと見なされ、抑えられる。これに対し、ほとんどのアメリカ人が感情表現を、自分自身を受け入れていく成熟したひとりの人間であることを示すもの」と感じている(二五三)。
- (15) ヤマモトはあるインタビューで、ミスター・ハヤシは男性としてどう振舞うべきなのか、躰けられたように行動しているだけだと語っている(クロウ一九八七八〇)。
- (16) 日本生まれの学生は、ミセス・ホノウメの夫に対する態度(マニキエアをめぐって二人が口論している時)を無礼で横柄だと感じることが多い。子供の前でミセス・ホノウメが夫に反対するのは、現代の日本社会でも非常に無礼な態度であると考えざるを得ない。
- (17) 書く事について尋ねられたとき、ヤマモトは、「衝動は別にして」世代から世代へと伝えられるときに失われていくように見える。だから、繰り返し同じ間違いを犯すことになってしまいが、基本的な真理を再確認するために書いていくと思う。読者が楽しんでくれたら、うれしい。何かを学んでくれたら、それはホノウメだ」と語っている(シユウとバルビンスカス一一三)。
- (18) ヤマモトは、「十七文字」の細部は創作ではあるものの、基本的には自分の母の物語であると述べている。彼女の母は川柳「十七文字で創られる風刺的な詩」をやっていた(コッペルマン一六二)。また、ヤマモトは父

- について、「女性が教育を受けることにあまり賛成していなかった。女性は結婚して子供を産み、夫を支えるべきだと考えていた。父はもつと伝統的な日本人男性だった」と語っている(ポルト一九)。
- (19) スタン・ヨギの修辭論文のお蔭で、「伝説」に政治が反映されていることについて認識を深めることができた。しかし、ヨギとは異なり、この暗示的な物語の「出来事に何か一つの真の意味」があるとは思わなかった。(一九八八、一七)この物語は、主観的な解釈を確実なものとして受け入れないように執拗に警告しているからである。
- (20) ヤマモトによれば、ミス・サカガウラは「実在の女性をモデル」にしている。このストーリーを書いた時にはヤマモトも知らなかったが、この女性も「実は作家であった」(クロー一九八七、七九―八一)。
- (21) 私の二つの目の解釈は、一部の読者に、加齢するセラシヤル・ハラスマントのメディア報道に過度に影響されていると感ぜざるかもしれない。しかし、私が知る限りでは、ヤマモトはこの問題を最初にオランダに扱った作家である。「ハニヒール」回想「で(名目上ではなく実質的に)セラハラの問題を扱っている」。
- (22) ウカコ・ヤマウチの「そして心は躍る」と「母が教えてくれた歌」もこのモチーフを扱っている。
- (23) 同じエッセイの中でヤマモトは、現実には収容所生活について苦しみを思い出す日系アメリカ人もいれば、「心配ごとのない楽しさ」を思い起こす人もいと述べている。彼女は二つのタイプを詩人とコラムニストの逸話によって比較している。「私はこの『例』を持ち出して、創造的な人格になるために有効な手がかりを指摘したいと思う。収容所生活の苦しみを思い出すヒロシタ・カシロギは詩人になった。そして、楽しい思い出だつたと主張する他の収容所仲間運動と係わるキヤリアを求めた」(一九七六a、一三)。
- (24) ヨギが指摘するのは、強制収容を正当化するために政府が作成した二つの重要文書、つまり、ジョン・L. プライツト将軍の「最終報告」西海岸からの日本人排斥(一九四二)と、司法省のヒラバヤシ対合衆国に関する報告が、「一連の誤った解釈を根拠にしている」ことである。例えば、日本語学校は日本のプロパガンダの温床と考えられていたが、実際には、多くの学校が福音主義的な目的もとでキリスト教と仏教の教会によって運営されていた。婦米(日本で育った二世)は脅威となり得ると言われたが、そうした子供たちの多くが母の住み、破壊活動を行う可能性があるとして述べたけれど、彼らは戦前からずっとそこで生活していた。司法省は二世の二重の市民権を彼らの合衆国への忠誠を疑う根拠として挙げたが、二世が日本の市民権をもつのは選択というより世襲によるものである(一九八八、二二―二五)。この二つの公文書に関わるさらに詳しい議論や異なる意見については、オザワ 一九二〇、サンキスト、テングロクなど 二六八―八二を参照。
- (25) フーコーはジェレミー・ベンサムにより考案された規範的監獄、パンテライコンのアナロジーを援用し、容赦ない監視、つまり「それによって可視性が畏になる」監視について説明した(一九七九、二〇)。
- (26) ここでの議論はバーバラ・ロドリゲスの解釈に負っている。彼女は博士論文(ハーヴァード大学で執筆中)の中で、お札状を書かせるという要求は非常に屈辱的なことであると指摘している。
- (27) 私がこの点について述べることはアライアン・ニイヤのお蔭である。第二次世界大戦中の日系アメリカ人教僧の苦勞を述べた伝記の記事については、マツウラを参照。
- (28) ヤマモトの「ラスベガスのチャリ」の表題となっている登場人物は、収容所のせいで身体障害者になるが、表面的には収容所生活を歓迎しているもう一人の父である。「彼はこれからの人生、この収容所に残っているという一向に構わないという気持ちだつた―無料の食事、無料の住居……。片方の耳が少し聞こえにくくなって

いることは確かだ。どうしようもない灼熱の日々、あの熱い料理釜のそばに立ちつめたつたせいである。だが、それはちょっとした苦痛にすぎない。収容所の病院は無料で治療してくれ、無料の薬をくれるし、悪い耳につめる綿も無料でくれる」(一九六二)一九八八〇)。二人の父が収容所に感じる愛着は、収容所の「外」の生活に対する意味ありげな発覚となっている。

(29) ここでマリー・ダグラスの「二つの身体」についての洞察が思い出される。「社会的身体は自然の身体の認知方法に制約を与える」(九三)。表現手段として、ミス・サカグラの身体は文字通り、コミュニティと国家の社会的身体によって制約を受けている。

(30) ヤモトは自分自身を一度ならず「異常」と診断している。先に私が述べたように、しばらくの間は「自分の軽い狂気を詫げるために」ナポレオンというペンネームを公けの場で使っていた。また、黒人の週刊誌、ロサンゼルス・トリビュンにレポーターとして雇われたのは変わった性格のためだと言っている。「彼らは、私の性格について自分たちと同じように神経過敏であり、ビーン・タケタ「仕事に応募した仲間」はあまりに普通すぎると感じたのだと思う」(グラウケルト)。彼女はここで特に、人種的マイノリティの一人として不安に言及しているようだ。

(31) 「ノノイ・ボーイ」とは軍隊への入隊を拒否した二世のことであった。この呼び名の由来は、軍への入隊志望と合わせて収容者に実施されたいわゆる忠誠審査に、「ノ」I」と答えたことにある。

第三章 沈黙に掻きぶりをかける

—アキシソン・ホン・キンダストンの『チャイナタウンの女武者』

と『アメリカの中国人』

本書で分析している三人の著者のなかで、マキシム・ホル・キングストンは最も率直にフェミニスト的志向をあらわにしている。押しつけられてきた沈黙、これまで信じられてきた知識への不信任、その多重の声といったフェミニストのトボスが、『チャイナタウンの女武者』と『アメリカの中国人』では、強烈に表現されている。同時に、これらのテクストにおけるジェンダーとエスニシティを絡める語り、他に例を見ないほど共鳴し合う二重の言説を生み出している。その二重の言説は、女性と男性、東洋と西洋、寓話と事実、口承で伝え継ぐことと書き記して伝えること、語り手と聞き手、歴史と歴史観に対するダイアリティ（とその修正）といった二項対立に揺さぶりをかけているのである。

ヤマモトやコガラの作品と同様に、キングストンの作品においても、沈黙は多様な形式を取っている。『チャイナタウンの女武者』では、その沈黙の様式は、女の子が誕生すると誰も何も言わず落胆の雰囲気漂ったこと、語り手の不貞な叔母が家族史から抹殺されたこと、語り手が第二言語を話すことができなかったこと、性差別的な格言に息が詰まるほど怒りを覚えたこと、白人のボスに言い返しても彼女の言葉は無力でしかなかったこと、なにも主張できない中国系アメリカ人であることへの自己嫌悪によって長期間にわたり病気になることなどのエピソードに見出される。『アメリカの中国人』では、その沈黙の範囲は、女性の排除を超えて、ハワイにおける中国人男性労働者たちが文字通り言葉を奪われてきたことと主流のアメリカの歴史から中国人の子孫である男性たちが排除されてきたことを表す歴史的象徴性にまで広げられている。

歴史の沈黙の大部分は回復不能である。キングストンにとって、中国系の人々について歴史が何も言及していないことは堪え難かったため、彼女の語りを煽りたてたことになつたのである。その語りは歴

マシエリにとって、ある書物がイデオロギイに拘束されていることがわかるのは、述べていることよりも述べていない箇所によってである。イデオロギイの存在が明確に感じられるのは、テクストの重要な沈黙部分、テクストのギャップや不在箇所においてなのである。

テリー・イーグルトン、『マルクス主義と文学批評』

真理とは言わば論駁されえないような誤りのことであるのは疑問の余地がない。というのも真理とは歴史という長い時間をかけて焼き上げていくようなプロセスにおいて、容赦不可能な形式へと固められてきたものだからである。

ミッシェル・フーコー、『言語、対抗記憶、実践』

我々を陵辱してきた幾多の声やイメージに取り憑かれ、過去の痛みに耐えながらも、イメージを与え続けようとするイメージや記憶を容赦させる道具を我々は徐々に獲得しつつあるのだ。そのようなイメージや記憶を自己肯定的なものに置き換え、我々の過去を再構築し変化させていくことによって——というのも、現在と同じように過去も見方によって容赦しうるはずなのだから。

クロリア・アンザルдуа、『顔を作り、魂を作る』

置は、批評家のまなざしから見落とされがちなのである。スリー・W・ラビネとステイヴン・H・スミダは、これまでの批評家の例外として注目に値する。ラビネは『チャイナタウンの女武者』は二重で同時的な動きで構造化されている。つまり、「自分の民族について書くために、その民族にある意味ではすでに帰した作家が……帰することが可能な少女として書いている声」(四七七七八)を含んでいると説明している。スミダは、キングスタンの自伝は恐らく「信頼できない」語り手ではないとしても『ナイヴ』な語り手を筆者が使っている『虚構』作品であり、……その『ナイヴ』な語り手が……『中国』の歴史や文化を……誤解し誤用していること自体が、著者が批判的に描く語り手の人物像であり、語り手が正しい認識を持つことを妨げてしまう狭量な『アメリカ』社会に対する批判を、部分的に示しているのである」と示唆している(一九九一五四)。スミダが「誤用」と呼ぶものには一つ以上の理由があることと、ナライヴの戦略自体が語り手の明白な断言と矛盾することについては、のちに検証する。

批評家たちは通常『チャイナタウンの女武者』を「フェミニスト」テクストとして、『アメリカの中国人』を「エスニック」テクストとして分析する。マリニ・シエーラーが「女性性であることとエスニック・アイデンティティとの間の重複性と関係性」と呼ぶものや、キングスタンが「弁証法的転覆」(四二二)と呼ぶものは、『チャイナタウンの女武者』だけでではなく、シエーラーが説明してきたように、『アメリカの中国人』も特徴づけている。アンチ家父長制の口調があらさまに——中国系移民のコミュニティに対して最も声高に向けられ——『チャイナタウンの女武者』における支配的なコードを構成する一方で、無言で白人支配のアメリカにおける文化二元論的規範を糾弾する。それとは正反対の戦略が、『アメリカの中国人』では作動しているように思える。相対的にフェミニスト批評家たちから無視され

年代記編者を困らせるこの沈黙こそ、創造的な作家が、昔からの権威に囚われずに、これまでよりもっと勇敢な世界を作り出していくことを可能にさせる。キングスタンのナライヴの戦略は、テクストの沈黙の色合いとともに多様ではあるが、歴史についてのナライヴやかつ歴史修正主義者としてのナライヴを創り出したという切なる願望を例示している。彼女の「過去についてのヴイジョン」は、いわば、深く現在に「はめ込まれて」いる。

抑圧のテーマと含致するヤマトの省略のスタイルとは違って、キングスタンの言語は決してその声を押し殺していないように思われる。実際、彼女の作品はすべてが、あまりにも事実に証として読まれてきた。その結果、彼女のポリフォニックなテクストの基盤となっているとらえ所のない変化に富んだ主体位

史から失われたものを回復させようとする試みではないが、その代わりに、彼女は、誰にでもはつきりと分かる語られていない部分を誇張し、フレデリック・ジェイムスンが「現実の政治的社会的矛盾への象徴的解決」(一九八〇)と述べているものを提示し、エドヴァール・グリップサンが「過去についての予言的ヴイジョン」と呼ぶものを練り上げていく。

我々が服従してきた過去であり、我々のために歴史としてまだ出現していない過去は、実は、憑きまとって離れずに現存しているのである。作家の義務は取り憑いたこの過去を探し出し、取り憑いた過去が今現在と連続的に連関していることを示すことである。それゆえに、この模索は、体系的な年代学とも回顧的な嘆きとも連関していないのである。(六三六四、強調はチャン)

二重の声の言説の二つの主要な形式が『チャイナタウンの女武者』と『アメリカの中国人』を活性化している。キングストンは、第一の視点と第二の視点との狭間で往還しながら、フェミニスト意識とエスニック意識を上塗りする。そうすることで、内的な矛盾を引き出すのである。さらに、事実と寓話を融合していくことによって、認知された彼女自身の葛藤を再生産していくことができるし、彼女の民族の「歴史」を再配置していくこともできるのである。ロバータ・ルーベンスタインが述べているように、「このようなナラティブ・カテゴリーの融合は、『チャイナタウンの女武者』の独特な形式を生んだばかりでなく、語り手が実際に体験したナラティブ上の困惑を劇的に反映してもいる」(一六九)。事実と寓話をそのように融合させる手法は、『アメリカの中国人』においても同様に広く行われていて、さらに語り手が歴史の沈黙を明るみに出し、歴史の歪められた部分の仮面を剥がし、峇谷の見取り図を描いていくことを可能にさせていく。二重の声の二つの形式は、連続的に作用することも多い。例えば、『チャイナタウンの女武者』においては、中国系移民のコミュニティが女性蔑視的な偏見を抱いており、語り手も支配文化の視点を内面化しているために、圧倒的にアンチ中国に見えるようなナラティブを生み出してしまっている。しかし、もつと年を重ねて賢くなった著者の感受性を反映しているこの本の構造は、中国系アメリカ人の遺産から受ける恩恵の深さを明らかにしていくことによって、語り手が露骨に主張する「真実」の効果を弱めていく。二つの作品において、語り手は最終的に、中国の正統性とアメリカ白人社会の正統性に亀裂を生じさせ、ジェンダーとエスニック・アイデンティティを生まされ変わらせるために、支配に基づくのではなく相互関係性を基本とした性や人種や国際間の政治のため

のスペースを作り出そうとしているのである。

たこの作品は、何人かのアジア系アメリカ人の学者たちからは、中国の家父長制の復権を試みるものと解釈されている³。キングストンが試みていることは、そのような解釈とは全く正反対のことである。白人の歴史によって沈黙させられた祖先の男性たちに声を与えようと模索すると同時に、キングストンはアメリカ白人社会における中国人男性の格下げと伝統的中国社会における女性の抑圧とのパラレルな関係性を描くことによって、暗黙のうちには、家父長制の下での女性への虐待を暴露しているのである。どちらか一方のテクニストを排他的にフェミニスト的であるとか、排他的にエスニックな感性を扱っているとかと解釈することは、混合された二重の声の言説を巧みに操るキングストンの技巧を無視することである。このような声の多義性は、中国とアメリカ白人社会の両方の家父長制に対するキングストンの不満と二つの「サプカルチャー」を持ったマイノリティの女性としての執筆活動を反映するものである。

この二つのテクニストを、沈黙の挑発に答える自意識的なナラティブとしてではなく、純然たる民族誌として読もうする傾向は、アジア系アメリカ人批評家たちの間に、「信憑性」に関わるなかなか解決のつかない論議を巻き起こしてきた。キングストンは、人種差別者が唱えるステレオタイプを強化し、中国の神話や歴史を偽り伝えていると批判されてきたのである。彼女の視点の推移や虚構の出来事と経験上の出来事との入念な融合という戦略を見分けることができなければ、著者の芸術的手腕は見逃され、彼女のテクニストが伝えようとしている「幾つかの真実」そのものも曖昧になってしまう。著者はこれま

で信じられてきた虚偽や歴史的な沈黙に直面して、事実と想像という二分法に断固として抗っているのである。彼女は伝記と詩学を統合し、中国の神話を修正しアメリカの歴史を神話化することによって、フェミニスト的な対話法を達成しているのである。

伝を弁護する傾向にある。この自伝への文化人類学的アプローチに悩まされたキングストンは、「結局、私は、歴史や社会学を書いているのではなく、プルーストのような『回想録』を書いているのです」(一九八二・六四)と抗議している。「幽霊に囲まれていた少女時代の記憶」と副題がつけられた『チャイナタウンの女武者』は、全部というわけではないにしても、大部分は思春期の混乱した少女の視点から語られている。この作品がミヌネイックなものとして解釈されうる限り、それは客観的事実を映し出し、矛盾する規範に囲まれて、人種的アイリテの一人として成長していく想像力豊かな少女の主観的経験を映し出している。テリ・イダルトンが作家全般について述べているのは、語り手は『彼女』自身のこと、とりわけ、『チャイナタウンの女武者』の語り手に対してあてはまる。語り手は「彼女」自身の手で真実を語ろうとして……書いているものの中に、イデオロギーの限界を暴露させていく(三五)。娘を蔑視する広東省からの移民文化と女らしさ・美しさ・知性についての単一の(白人)標準を押しつけてくるもう一つの文化の間に囚われた幼い少女マキシンは、彼女の見え方を粹つけるイデオロギーの力をあらゆる場合において気づいていないのである。成熟した大人の著者はもっと分別がある。幼いマキシンの部分的で暫定的なものの見方と大人である著者の洞察力とを平衡させながら、キングストンは、一人の芸術家の心理的成長の記録を記していく「自伝」を創造しているのである。最もつきり分かるレベルにおいては、成長とは私が別の論文で(一九八八)詳述したように沈黙から発話への旅路のことである。本書では、マキシンの認知的葛藤やその葛藤を再現するナラティブの戦略にもっと焦点を当てている。彼女の認識上の軌跡は、エスミンネイを回避して同化の方向に向かつていくように見えるのであるが、にもかかわらず、彼女の軌跡は「アノーパルな」(村八分にあつたり、

『チャイナタウンの女武者——幽霊に囲まれていた少女時代の記憶』

最初、彼女は好奇心から質問をした。しかし彼女の父は質問されるのが好きではなかった。彼は、食べ物食べていたり、ものを考えていたりするときは、語らないことになっているし、食っていないときにものを考えるべきだと言った。食えることも考えることもしないのは、ベッドにいるときぐらいだった。

ジェイト・スノウ・ウォン、『五番目の中国娘』

もしも、語をしなければ、人格も持たないことになるのだ。

マキシントン・ホン・キングストン、『チャイナタウンの女武者』

アジア系アメリカ人の知識人たちは、『チャイナタウンの女武者』の「信憑性」について、これまで際限もなく議論してきた。リアリテイトとファンタジの境界を曖昧にしているとキングストンを攻撃する批評家たちは、語り手が、作り話をこしらえるのが大好きで、事実と虚構を区別することができないと、何度も告白していることに注意を払っていないように思える。著者を擁護しようとする批評家ですら、語り手の経験は彼ら自身の民族とよく合致しているという民族主義的な観点から彼女の自

押し黙ったままであったり、気が狂ったたりしている)中国の女性たちと同一化したり、または獲めたたえられてきた中国のヒロイン像とも同一化したりして、何度もその間を戸惑いながら立ち止まりつ進む道なのである。中国の社会評価基準の両極に置かれているこのような女性たちは、たぶん、中国とアメリカの両方の世界で片隅に居るマキシーンらしさを最もよく表現している。語り手は、やがて、対立する文化的なイデオロギイに打ちのめされた状態から、自分自身の思考を統合した道を切り開いていくまでに成長するのである。

著者の弁証法的なヴィジョンは、マキシーンが通った成長の各段階を伝えている。キングストンは、矛盾する命題を取り入れたり、彼女自身の語り方でマキシーンが言したことと否定したりしながら、家父長制の「真理」や文化一元的な「真理」と闘っていく。彼女の方法はフェミニスト批評家たちが女性の書き物全般と関連づけてきた戦略を想起させるものである。それは、支配的言説の占有と転覆(アリス・ジャイロインの言葉では、「象徴界の鎧を身につけ、象徴界の法を名乗りつつ、その同じ法を用いながら攻撃する」[二三]という選択)であり、ジャニス・スタウトが「寡黙の戦略」と呼ぶ手段である。最初の方法は公然と戦闘を宣言し、明確に抗議をし、神話を修正しながら、伝統的な格言に対して露骨に挑戦していくやり方である。二番目の方法は、ギリラの戦略に加わり、アイロニー、間接的表現、控え目な表現を用いて、テクスト内で行われた断言の効果を弱めていくやり方である。

キングストンは、これらのフェミニストの戦略を人種差別に対しても性別と同じように用いている。彼女は中国の家父長制に対して公然と戦っていくのであるが、ギリラの戦略の方は、アメリカ白人社会の抑圧的な文化一元的論の慣習を暴いていく。それとは異なる別の策略では、少女時代のマキシーンと経

験を積んだ作家との間の見方の距離を映し出す。マキシーンは、家族やコミュニティより大きな社会の文化的偏見よりも、自分の家族やコミュニティの女性差別的な偏見の方に遥かに自覚的である。しかし、少女時代のマキシーンの感情を再現している著者の方は、アングロ・アメリカ社会のイデオロギイによってこのような感情が形成されることに注意を促している。ジェンダーと人種この特殊な配置にあつて、女性の書き物に書き留められた二重の声の言説が置き換えられている。中国の家父長制に対して最も激しく向けられていたフェミニストの声が主要なプロットを支配しているのに対し、白人規範への批判はテクストの片隅へと引つ込められているのである。

マキシーンは、母親が語る中国と文化一元的論のアメリカによって、幼い頃から困惑している。何が伝統的に中国のどのようなものが彼女の家族に特有のものであるのか区別するのは厄介なことである。「中国系アメリカ人は、あなたがたのどの部分が中国のなかを理解しようとするとき、子供時代や貧困や狂気のや家族に特有なことを、そしてあなたの成長を物語で刷り込んだあなたの母親に特有なことを、どのようにに中国的なものと区別するのでしょうか? 中国の伝統と映画で描かれる中国をどのようにに区別する益な部分である」(六)と見なすものだけを選択する母親のグレイヴ・オーキッドの習慣があつた(ので娘は自分の想像力で細部を埋めなければならなかつたのである)。

幼稚園でマキシーンはアメリカ人の少女になることの代償を発見する。(マキシーンの言葉使いでは、「アメリカ人」とは、いつも「アジア人ではないこと(big-Asian)」あるいは「アジア人ではなくなること(big-white)」と同じ意味だからである。)その代償は沈黙である。

この一節ではいくつかの矛盾する語りの位置が巧みに操作されている。第一に、自分自身の豊かな想像力と自分に下された否定的評価を同時に探り観察する子供の両極的な意識がある。その子供が「舞台のカーテン」として想像力豊かに想い描く絵の黒さも、彼女たちには、彼女が全くコミュニケーションを取ることができない暗い証拠と見なされてしまう。

学校で描いた絵面を黒い絵の具で塗りつぶしていた三年間、私の沈黙は最も深みに嵌っていて、完璧な沈黙であった。私は、家や花や太陽を幾重もの黒で塗りつぶし、黒板に描くときは、黒板の表面をチョークで塗り重ねていた。私は、舞台のカーテンを描いていたのだが、その絵はカーテンが左右に開いたり、上がったりする直前の瞬間の絵だった。先生たちは両親を学校に呼び出したのだが、そのとき、丸まってしまったりひび割れてしまったりして、どれも同じように真つ黒な私の絵を先生方は全部とっておいたのだと知った。先生方は絵を指差し真面目な顔で、真剣に話をしていたのだが、私の両親は英語が理解できなかった。(「犯罪者の両親も教師も処刑された」と父は言った。)両親はその絵を家に持ち帰った。私は、その絵をいっぱいに広げて(あまりにも真つ黒だったので可能性に溢れていた)陽光のもとで、カーテンがゆめきながら、次から次へと舞い上がるように開いて、力強いオベラが始まりますよといったふりをしてみせた。(一六五)

いう形式で反発している。

しかしながら、キングストンは、マキシーンが抱える問題に対するもうひとつの理由も示唆している。アメリカの学校で、中国人であり、しかも女の子であることは、その子の口をかたくぐませてしまうのである。グレイザ・オキッドは細に入った空想話を少しずつ聞かせて娘を教育したけれども、マキシーンのアメリカー人の先生は、生徒たちを知能テストで測定する。英語を話すことができなかったのでも、マキシーンは「IQゼロ」という成績をもらうことになった。彼女は、そのテストに、自己抹殺と

おしゃべりなマキシーン之母でさえ、娘の舌を滑らかにすることができない。グレイザ・オキッドは「どの言語を話すときでも動く」(一六四)ようにマキシーンの舌の小帯を切るうと主張する。それに対してマキシーンは彼女がしゃべれないのは舌の小帯を切除してやるという母の脅しのせいであると非難する。⁽³⁾

幼稚園に通うようになって、初めて英語を話さなければならなくなったとき、私はしゃべらなくなりました……学校が惨めなものになり、沈黙が惨めなものになったのは、話をしなければならなくなっていくことがわかったときだった……一年生のとき大きな声を出して読んでみただけのもの、小さなきしむような音が私の喉から飛び出してくるのを聞くことになった。『もつと大きな声で』という先生の声で、私はまたしても怖じ気ついて声を出せなくなりました。他の中国人の少女たちもしゃべらなかったので、沈黙は中国人の女の子であることと関係があるに違いないと気づくことになった。(一六五)

がかった気質に沿って、真面目に、自らを「犯罪者」と見なす。彼女は成長するにつれ、彼女が無能だとされる責任は自分の家族やエスニックな起源にあるのだとする。「私が幼稚園で落第した唯一の原因は、あなたが私に英語を教えることができなかったからで、あなたが私にIQテストをくれたようなものです」(二〇一)。しかし、著者は、その責任は文化併存のアイデンティティを認めようというアメリカの教育システムにあることを示唆して、母たちに向けられた非難を覆していく^⑨。何のコメントもつけずに、彼女は中国人学校では、沈黙していた子供たちが、いかに羨望するか描写している。

アメリカの学校が終わると、私たちは……中国人学校へ通った……。ここでは私たちは、声を高めたり低めたりし、大きな声や小さな声を出したりしながら、一緒に歌ったのだ。男の子たちの中には叫び声を上げる子もいたが、誰一人として一つの声に押し込められず、みんなが一緒に朗読した。暗記テストがあると、先生は私たち一人一人を机のところに呼んで、先生だけに勉強したことを暗誦させた。……女の子たちも黙ってはいなかった。お休み時間の間、金切り声をあげたり大声をあげたりして遊んだのだ。(二六七)

中国人学校での中国人の女の子たちの騒々しさは、「沈黙は中国人の女の子であることと関係があるに違いない」というマキシンの推理と矛盾する。中国の文化は一般的には、若者に声を出す行為を推奨しないのは確かであるが、マキシンの混乱は、沈黙に対する文化的評価の差異に由来する。アメリカの学校の教師たちは、彼女の沈黙を愚かさの証拠と見なしているが、彼女の空想の中の中国の指導者

は発話に対して注意するように警告している。「あなたが最初に学ばなければならぬことは……いかに静かにしているかということですよ……あなたが騒々しくければ、鹿は水を飲まないうちに逃げて行ってしまいますよ」(二三)。そのような正統的な中国の教えは、実際では常に守られているわけではない。広東人は、事実、騒々しいことで悪名高い。「彼らはオペラを聞くのにラジオをめいっばい音量を上げ……しかも、だれもが大きく腕を振り回し、唾を飛ばしながら同時にしゃべって、太鼓の音よりも大きく泣き叫ぶかのように歌う歌手の声よりも大きな声でわめく」(二七一)。マキシンは、彼女の母のことを「話し手のチャンピオン」と呼んでいる^⑩。このように、女性が話さないように仕向けているのは、中国におけるジェンダー期待値であると同様に少なくともアメリカのものであるのだ。「普通の中国人女性の声は大きくて親分ぶっている」と語り手は我々に述べている。「私たち中国系アメリカ人の女の子たちが、アメリカ的な女性らしさを演ずるには囁くように話さなければならなかった」(二七二)。「アメリカ的な女性らしさ」という礼儀作法に対して、マキシンもロビン・レイコフも同様の理解をする。レイコフは、「荒っぽく話す」アメリカ人の少女は、通常では叱られることになり、ためらいながら自己表現する少女は社会では軽蔑されることになるので、「少女は話をするに非難を浴びるし、話をしなくても罰せられることになる」(五五六)と論じている。確かに、中国だけではなく、白人アメリカ社会でも同じように、語り手にとってダブルバインドの規範が提示されるのである。レイコフはさらに「適切な状況(例えば、授業中や教授と話をする時や就職の面接)のもとで、女性の言葉使いから中性的な言葉使いへと切り替えること」を学んでいく女性のことを説明し、女性の状況とバイリンガルものを比べている。「多くのバイリンガルの人たちのように、どちらの言語も自由にあやつる力は

語り手はこの作品中ずっと中国人女性として自分のアイデンティティに対して公然と闘いを言っているのである。

語り手は、何度も発音に失敗したため罰せられる。彼女の意見では、一人称代名詞を指し示す一つの言葉の違いは、音声学を超えた自己定義にまで及んでいて、自らを単一のものとするのかそれとも関係性を持つものと見なすのかに関わる選択の問題となる。文化的にも言語学的にもジェンダリ的にもアイデンティティが混乱状態であるので、彼女は両方の「自己 (I's)」から発話するようにさせられるままとなる。彼女のナラティブは、中国人としての自己から語り手が益々疎外されていくことをほのめかすが、この中国人としての自己こそ、彼女がフアンタジエを通して再構築していくものなのである。

力に對して著者が抵抗していることにも、読者は気づくことができる。黒いカーテンの背後には、「構想に託し込まれた」(一六三) マキシーン自身が作つた物語が存在する。母の方法を奪い取り、自分自身に對して「有益な部分」に裝飾を施していく。シドニー・スミスが述べているように、「彼女の文化が女性について語っている数々の物語を通して自分自身を実存へと読み込んでいくのである」(二五二)。

これらの物語が、彼女にとつて「自己啓明」(アイキソ) のための元テクニクスとなっているのである。このような戦略は、村人たちから村八分にされて、非嫡出子の赤ちゃんとともに自殺してしまつた中国の名前のない叔母さんについて書かれた最初の章に、最も明確に示されている。語り手の父親は叔母さんのことを話題にすることさえ断固と禁止して、母親の方はただ事実しか伝えてくれないので、マキシーンは、叔母さんの物語を様々に脚色した話に自由に作り上げていく。キングストンは、このよ

ほとんどの目的に十分能力を発揮するであろうが、女性ほどどちらの言語も本当は使いこなせないかもしれない……一つの言語からもう一つの言語へと切り替えていくには、社会的状況が孕むユアンスに対する特別な自覚が必要であり、自分が否認されてしまふ可能性に対する特別な警戒が要求されるためである」(六十七)

女性として隱喻的に、そして二つの異質な言語と格闘する一人の生徒として文字通り、二重にバイリンガルであることにマキシーンは暗黙のうちにも挑んでいるので発話ができないのだ。語り手は次のように思ひ出している。

声に出して朗読することは発話よりも簡単だつた……しかし私はしょつちゅう途中で朗読をやめたので、教師は私がまた黙つてしまつたと思つていたものであつた。私は「私 (I)」を理解できなかつた。中国語の「我 (I)」は七面で複雑である。アメリカの「私 (I)」は、大胆にも中国語のように帽子を被っているが、なぜ、三画しかないのに真ん中がそんなにまっすぐな線なのだろう？ 中国人の女性が自分の名前を小さく丸めて書かなければならないように、その文字を書いた人が何画かを省略したのは礼儀正しさからであらうか？ いや、それは礼儀正しさからではなかつた。「私 (I)」は大文字で「あなた (you)」は小文字である。私はその真ん中の線を凝視して、その黒い中央線が細い線と点へと分解していかないかとすいぶん待ち続けたので、その文字を発音するのを忘れてしまつた。(一六六―六七)

人の——伝統を先導するものである。

このように中国の伝統を意識的に変化させることは、キングストンの顕著な特徴であつて、彼女はオリジナルに固執するつもりはないために融通性のあるオリナルな伝統の方に近づいていきたいと宣言している。中国の民話のせ物をでっちあげているという批判に対して、キングストンは「私たちは神話を記録する以上のことをしなければならぬのです……そうであつてこそ、ただの祖先崇拜以上のことをすることになるのです。私が古い中国の神話の命を繋げていく方法は、新たなアメリカ的な流儀でそのような古い神話を語っていくことによつてなのです」(パフニク)と答えている。彼女のテクニクを民族誌学として読むのではなく、キングストン流の意匠で彩られた語りに耳を傾けるべきなのである。その語りは、伝統的權威の衣をはぎ取ることにまさしくねらいを定めたものであるから。

キングストンによれば、そのような柔軟性のある語りに、口承性を回復していくというさらなる利点がある。「口承の物語は語られていくたびに変化していく。聞き手の要望により、その日の必要性やその時の関心にしたがつて変化していくので、口承の物語は日々異なることもありうるのである……書物は静的である……言葉がページの上で読むたびに変化すればすばらしいであろうが、書物ではそれは不可能である。この問題を解決しようとした私の方法は、常に書き物に曖昧さを残しておくことであつた」(イスマス一八)。しかし、筆者は口承の伝統を単に再現する以上のことをしていると、私は思ふ。(つまり)筆者が口承技法を使つていると主張している時でさえ、書くことで口承を転覆しているのだ。いかに口承の伝統に柔軟性があるうとも、与えられた語りの機会にはひとつの語りしか起こりえない。語り手が叔母の物語を語り直していく際に、矛盾し合う色々な話が並存することになり、グレイ

うな様々な異なった語を通して叔母さんに主体性を与えているのだと批評家たちは評価してきた。しかし、実際には、叔母は、このような脚色された物語の全部に宿ることは不可能で、必然的に黙つたままである。この取り憑いている沈黙こそまさに、姪の想像力に翼を与えていくものである。それによつてマキシーンは、トーク・ストーリーを用いる自分自身の力を試し、異なるアイデンティティと戯れることができるのだ。叔母の主体性というよりも、語り手の主体性の方が広げられているのである。

しかし、語り手は、逆説的ながら、自らの自己成型の行為を先祖崇拜の行為として枠付けていくのである。「叔母に何ページにもわたる紙面を捧げたのは私だけだ。家や衣装の形に折り紙を折るといった先祖崇拜という行為ではないけれども」(二六)。中国の慣習を想起しながらも、彼女は親孝行に基づく伝統的儀式を過激に転覆していくことに注意を向けていく。第一に、叔母のことに言及すること自体、親の命令に背くことになる。第二に、叔母のことを、彼女自身の「先駆者」(八)と主張することは、父系を母系にすげ替えていくことになる(ラジネ)……しかも、服従心ではなく反抗心から生じている。第三に、先祖は慈悲深く情けを施してくれろと考えられているのであるが、マキシーンは、名のない女の生前の無力さを埋め合わせるかのように、彼女の叔母を報復的な幽霊として想像している。「彼女は、飲み水の井戸に身を投げて溺れるような恨みに満ちた自殺者であつた。中国人は常に溺死者をひどく恐れる。すずり泣く溺死者の幽霊が……身代わりを引き込めようと無言で水際で待ち伏せているからである」(二六)。最後に、語り手は、折り紙で折つた供え物の代わりに、彼女自身の手による何ページもの書き物をお供えして、これまで男性に支配されてきたテクニクの特権を占有していく。継承されてきた筋書きではなく、彼女自身の言葉が詰まつたこの何ページにもわたる書き物は、新たな——中国系アメリカ

ヴ・オキッドが伝えた口承の話が損なわれていくのだ。口承と文学伝統の両方を活用しながら、キングストンの作品は双方の権威に挑戦しているのである。

しかしながら、伝統的権威は、別の方法を身にとって、その支配力を維持しようのである。語り手によって提示されたシナリオは、二項対立という家長制の秩序を反復しているかまたは反転しているにすぎないという危険を時には犯す。その場合、彼女が慎重に反転させたものは、ジュリア・クリスタヴァが「對抗備給」(一九八二、四)と呼んだものになってしまう。マキシーンが、家長長制の拘束から逃れようとするほど、「同一性という法」(別のコンテキストでルイス・イリガライが用いた表現を使えば)に何度も捕えられてしまう。同一性と平等とを混同してしまうからである。女武者についての空想も、家長長制に対する想像的な闘いの一形式ではあるとしても、彼女を「主人の道具」に引き渡してしまうことにもなるのである。自分自身が伝統的な女性剣士フア・ムトランになったかのように幻想を抱くとき、マキシーンは、文字通りかつ象徴的に男性の甲冑を身にまとう。武者としてのマキシーンは、男性兵士になりすますだけではなく、両親が彼女の背中に彫った言葉から力も得ていくのである。

家長長制の権威を占有するスリルと身震いの両方が武者の冒険に伴うことになる。フアンタジに よって、少女期のマキシーンは自分自身を自ら作り上げたヒロインとして思い描くことができる。「女の子なんて米の中のウジ虫だ」とか「娘を育てるよりもガチヲウを育てた方がずっともうかる」(四三) といった言い回しで娘の価値を言葉によって貶めていく家族の中で成長していくという不愉快な現実から逃れることができる。母によって娘に語られた伝統的な神話を単純に喚起していく以上に、マキシーンは彼女自身の願望をその武者に投影しているのである。伝説のオリジナル版が親孝行を賞賛している

己肯定の方法の扉を解放する。

他方、自分自身に力を与えるフアンタジは、自己挫折を招くものもなってしまう。というのも、 そのようなフアンタジは、家長長制規範の執拗さを実証するように作用していくからである。真摯な 評価を得るためには男性のペンネームを採用しなければならぬ女性作家のように、女武者が力行使 できるのは、男性として変装しているときだけだからだ。本当のアイデンティティを取り戻すとすぐに、 彼女は、義理の両親にペコペコとお辞儀をし、息子を産むという役割を再び始めて、もう一度人の言い なりにならない。「公的な義務を終えたので、あなたと一緒に暮らしながら、農作業や家 女の軍事的偉業自体、無慈悲で暴力的で「男のように戦う」能力を賞賛する家長長制の社会慣習に内包 されている主権の証拠となってしまう。想像する中国社会の女性の理想像と男性的理想像の双方に調和 しようとして、武者としてのマキシーンは、二重の拘束規範と格闘する。

表面的にはもつと過激に見える行動を、もう一つ別の女性戦士集団が取っている。邪悪な豪族の首を 放す。はねたあとで、武者としてのマキシーンは、「すすり泣く女性たち」の集団を鍵のかかった部屋から解

のである。これらのエピソードは、例え想像の領域であっても、家長的の思考を完全に超越することの難しさを強調している。皮肉なことに、家長制小説がまとっている衣裳に隠された正体を語り手が見抜くのは、まさに自分の「日常生活」の中である。「私が観察してきた戦いや殺し合いは、ちょっとした光に満ちたものではなく、汚いスラムのようなものであった……けんかというのは、だれが勝ったのかよくわからないものだ。私が見つけた死体は丸められて捨てられ、警察のカーキ色の毛布にくるまれ、た悲しげで貧相な汚れた死体であった……そして、武術といえば、それは蛍光灯の下ではねまわる自信のない少年たちのためのものだ」(五一五二)。

武者としてのマキシンは、日常生活において自ら拷問者になっていく。背中に彫られた魔法の言葉は、教室ではわけのわからないおしゃべりに逆戻りしてしまう。ある痛ましい場面で、彼女は、自分の分身とも言えるおとなしい中国人の同級生を拷問するように無理に話させようとする。彼女の髪を引っ張り、鼻や耳をひねり、ほほをつねって、「こんな風に……生きている間中ずっと……黙っていたいの？ あなたにも人格や頭脳があるってことを人々にわからせてあげなきゃいけない」(一八〇)といった言葉でやり込めていく。そのもう一人の女の子は泣くだけで話すことを拒否したので、それにマキシンは刺激されて、もつと必死になり暴力的になってしまう。

おとなしい東洋の乙女という陳腐なイメージを壊したい少女期のマキシンの強烈な願望を反映している出来事として読むだけでは、マキシンの刷り込まれたものの深さの度合いは曖昧なままになってしまふ。沈黙とはIQゼロに等しいのだから。「もし話さなければ」とマキシンは唾のように押し黙ったままの少女を脅す、「あなたは人格を持つことができないのよ」(一八〇)と。願望に引用されるこの

のちに、この女性たちは武装した金目当ての女武者集団になったと言われている。彼女たちは私のように男装はしなかったが、黒と赤の服を着て女性として馬に乗った。彼女たちは、女の赤ちゃんを買ったので、多くの貧しい家族は彼女たちがやってくるのを歓迎した。奴隷の少女たちや嫁が逃げ出すと、魔性の女武者たちの一団に加わったのだらうと人々はうわさしたものだ。彼女たちは男性や少年たちを殺した。私自身は、一度もそのような女性たちに遭遇しなかったので、それが事案なのかどうか断言することはできない。(四四―四五)

シドニー・スミスは、このような語りや「女性のエンパワメントに関わる真に転覆的な『物語』」(ア・ムランのオリジナル版や修正版の物語と比較すると)と見なしている。「家長制社会で認められない力を振っているが、彼女たちは父親や兄弟たちの不正に報復しているわけではない。家長制秩序の根源自体をやっけながら、娘たちが父親や息子たちに刃向かっていけるように導いているのである。さらに、彼女たちは仮面をかぶることによってではなく、攻撃的に性差を暴いていくことによって、導いているのである」(二五九)。このエピソードは「真に転覆的」なのであろうか？ 少女期の語り手の言葉で表せない怒りを確かに表現していったとしても、この物語内物語は、中心的なアングラよりも解放的であるとはとても言えない。父や息子に刃向かうように娘たちを導いていくことは、ただ家長秩序を裏返したにすぎないように思える。「名のない女」の章で提示されていたように(そのような「性差」は、もう一つの性を力づくで押さえ込むという同一性の教多くの例証を演じているにすぎない

くだりは、成熟した著者が確信したものであるとしてすつと解釈されてきた。紛れもなく、作家としてのギンダストンは言葉や自己表現の重要性を信じているに違いない。そして、『チャイナタウンの女武者』は、沈黙した子供から言葉の戦士へと彼女が成長していく過程を年代記的に確かに記している。しかしながら、話すことと書くこととの間には微妙ではあるが重要な区別がなければならぬ。語り手が、学校時代には話すことの出来ない出来事の子であったと自分自身で雄弁に書き留めている証言から見ても、無口な生徒でも考えはつきり表現できる作家になれるのは明らかであろう。マキシーンが母に立ち向かったときに、マキシーンの「どが破裂するように開いた」(二〇一)という場面を除いて、語り手自身が沈黙を破っていくという作業は、発話よりも書くことでより明白に成し遂げられている。一人の大人になっても、「押し黙っている」と、恥ずかしいことに、自分の声はまだ二つにひび割れていく(二六五)と彼女は書いている。彼女は主に母の話を聴くことを通してストーリーテラーとしての見習い期間を勤め上げている。実際に、狭義のフェミニスト分析では、発話と知性とを民族中心主義的に相関関係にあると見る見方を永続させ、英語を母国語としない話し手の成長上の閉塞状態を深めてしまうかもしれないのである。

少女期のマキシーンが発話の価値を定めていくこのエピソードは、大人になつた著者の考えを示しているというよりも、著者がアメリカの規範を疑問の余地なく受け入れていくことを物語っているのである。私が既に指摘したように、このような苦痛に満ちたコンテクストにおける発話には、トニ・モリスンの『青い眼が欲しい』という小説における「最も青い眼」と似たような(白人の価値観の内面化へと導く)同化力が存在する。この作品はいかに「支配文化が教育システムを通して、その覇権を行使して

いくのか」(ギンダストン二〇)ということを示すもう一冊の小説である。「押し黙つたままの」少女に対するマキシーンの残虐さは、「アメリカの」学校で辛辣に振るわれるのであるが、白人の標準が至るところに備在しているせいでペコラが苦しむことになる心理的な暴力を思い起こさせる。マキシーンがその少女をそれほど激しく嫌うのは、単に彼女が話すことを拒絶しているからだけではなく、「彼女の中の人形のような髪型」(二七三)や「かわいらしい女の子たちのように横で揺れず、頭と一緒に回転するまっすぐな髪」(二七六)のせいでもあるのだ。それよりもっと驚かされるのは、次のような告白であらう。「もし彼女が纏足していて、爪先が拘束靴の下で折り曲げられていたとすれば、私はジャンプしてその足の上に飛び降りてやつただらう……パリッ……私の鉄の靴で踏みつけてやるんだ」(二七八)。いわれのない残忍さは、中国人であるということに対するマキシーン自身の辛辣な自己侮蔑という点から観たときのみ理解できる。その少女になんとか話させようとして用いたその言葉にこそ(「あんだ、チャアリーダーになりたいたいと思つたことないの? ポンポン・ガールは?」(二八〇)、語り手が白人女子学生社交クラブの一員でありたいと思う熱望が示されているのである。

その中国人の女の子が押し黙つたままであることと頭脳や人格が欠如していることを同一視することとで、マキシーンは学校の先生たちの評価標準を採用してしまっている。彼女の暴虐さは、名のない叔母をシイプしたと彼女が想像する中国の男、人種差別主義者の白人のボスたち、元妻のアン・オキッドを捨てた男など、彼女の人生に登場してくる多くの想像上の暴漢や現実の暴漢を反映している。そのもう一人の子に対する決定的な彼女の脅しは、それら暴漢たちが言つたのと似た言い回しで終わっている。「意地悪したなんてだれかに言つたら承知しないからね」(二八二)。この出来事のおとで彼女

はなかなか治らない病氣にかかり、皮肉にも、この病氣のせいで一年間ずっと発話することもできなくなってしまう。このような事態が示唆するのは、アメリカの学校の指導の下での発話には代償が強いられるということであり、威圧的な言語を身につけることはマキシンの言語障害を一層悪化させるだけであるということなのだ。振り返ってみて、成人になった作家は、その中国人少女への乱暴な振る舞いを「彼女が」他の人に対してこれまでしたことの中で最悪のこと（一八一）と見なすようになっている。空想上の武者が男性の鎧を身につけているときだけ、軍事的偉業を遂行することができるように、子供時代のマキシンは彼女に自己蔑視の思いを抱かせる西洋の前提を模倣することではじめて西洋言説の中で自己発言することができるようになるのである。彼女のエスニックな二重性との奮闘は、語り手の人生におけるある段階を表現しており、それは、彼女が人種的自己嫌悪に最も強く襲われ、表面上は彼女が完璧に白人基準を受け入れた時なのである。

彼女の疎外感政治状況によって悪化したのだと私は思っている。啞のように沈黙した少女にまつわる出来事は「朝鮮戦争の間に」（二七四）起こったと知らされていくからである。マキシンの沈黙したままの少女を苛む地下室は、生徒たちが「空襲訓練」（二七四）のときに隠れるところでもある。もしもその出来事を『アメリカの中国人』に描かれた同時期の表現と並列してみるなら、その当時のアジア人としてのマキシンの精神状態をもっとよく理解できるであらう。

朝鮮戦争の時には、私たちは認識票をつけ……認識票に影りつける内容を明らかにするために、書類に記入しなければならなかった……私たちの認識票では、宗教は〇となっていて、黒人でも白人でもなかったのだ、人種も〇となっていた……子供たちの中には、〇つていうのは「オリエンタル」のことだというつもりだが、私はそれが「その他」のことだとわかっていた……ゼロは日本の戦闘機の名前でもあったので、私たちは慎重にしなければならなかったのである。（二七六）

この一節は、明らかに、ルイ・アルチュセールが「呼びかけ（interpellation）」すなわち「仲間として）迎え入れること」と呼んだものを効果的に例示している。支配的イデオロギーが「個人々人（individuals）の中から臣民（subjects）を『募ったり』……個人々人（individuals）を臣民（subjects）へと『変容』させていく」（二七四）やり方のよい例である。韓国人や日本人や中国人は集合的に「その他」として分類され、暗黙のうちには、取るに足らない人とか敵として分類されるので、マキシンは（当然のことながら）否定的に認識されたいとは思わないので）支配文化と同一化して、自分自身を親戚や彼女の同類から分離するように「教育」されていく。彼女は後になって、「アメリカの」教育とはまさしく、中国系コミュニティから抜け出すためのチケットであったと見なす。自分の喉がどうとう「ばつと開いた」ととき、彼女はアメリカの理想や制度の方が好きであると言葉に出して言う。「私は出て行きます……大学に行きます……大学に入るのに十分なだけの生徒会活動やクラブ活動をします。もう、中国入学校は我慢できません」（二〇一二）。マキシンの声が上げて言い切った言葉の中に暗示されているのは、啓蒙や自由や機会均等の縮図としての一つのアメリカである。

対照的に、マキシンは中国人や中国的な習慣に対して批判的距離を持って眺めていく。彼女は若い

下の振る舞いを完璧に説明のつくものと思うであろう。それに対して、極めて目立っていると思えるのはマキシンの無知の方である。神様に供えたあとの食べ物(この場合、シークラマフ)をもう一度使うのは、ごく普通の習慣である。多くの中国人は、亡くなった先祖や神様の祭壇の前に食べ物をお供えして、宗教的祝祭日を定期的^①に祝う。いったん、象徴的礼拝が終わってしまえば、食べ物や飲み物は参列者で食べたり、別の礼拝で使うために蓄えられたりする。キングストン自身が記しているように、中国人は「実用性と想像力とを見事に融合している」(タルボロー①)。大部分が中国人である集団の一員として育った子どもは、多くの家族が守ってきた慣習で、途方に暮れることはないのである。

白は中国文化では喪の色なので、白いリボンについてのタグ^②も簡単に説明されるであろう。髪につけた白い(ワール)の造花は、親が最近亡くなったことを示している。それゆえに、娘が白いリボンをつけたことで、アレイザ・オキッドが立腹するのには十分な理由があるのだ。母は娘の不適切な振る舞いの正確な意味について言葉で説明することは差し控えている。なぜなら、「スビーチ・アクト」の様式を信じており、それゆえに用心しているからである。「あなたが口に出して言うことに注意を払いなさいよ。本当になつてしまつたらね」(二〇四)と。言葉は魔法のような潜在力を持つので「木に触れる」と同じ意味に匹敵する^③との広東語も、縁起の悪い言い回しやシエスチャイの影響を完全には骨抜きにできないからである。

マキシンは別の価値体系の下で教育されたので、母の振る舞いを「奇妙な」ものとして判断できない。自分自身や自分の身内を友達や知らない人の前でけなすことで、謙虚さを示す(あるいは褒めてもらいたいことをほめかす)といった中国の習慣も理解できない。例えば、母は娘のことを、本当は美

男性移民は概して「変な器量をした下船したての新移民(FOB = Fresh-off-the Boat)であり……ちゃん」と焦点が合っていないような視線で、うさんくさい目つきをしており、口元は締まりがなく、あごの線がくっきりした男らしさが無い」と描写している。さらに、「中国語が、アメリカ人の耳にはチンチョンと聞き苦しく響く様子」(二七一)にも嫌気がさすのである。アレイザ・オキッドと彼女の妹のマー・オキッドを観察しながら、マキシンはアメリカ生まれの兄弟たちも「中国の人たちはとても興味が悪い」(二五八)と結論づける。両親が続いている不可思議な先祖崇拜の儀式と思えるものを描写して、語り手は次のように説明している。

母はカップにシークラマフを注ぐが、しばらくすると、びんに戻すのが習慣であった。決して説明することもなく……もし尋ねたりすれば、大人たちは怒ってこまかし、黙らせようとする。いきなりぶたれて、終日横目で睨みつけられることになるまでは、髪に白いリボンをつけてはいけなさと注意されることもないのだ。(一八五)

この一節で提示されている視点が示すことは、捕らえて置けないインサイダーとアウトサイダーとの区分である。マキシンは一般的にはインサイダーとみなされているけれども、エイミ・リンが別の中国系作家に言及して、「異質な観察者」と呼ぶ見方を取っていたのである。語り手が語っていることはすべて、多くの中国人や中国系アメリカ人の子供たちが彼らの家族で似たような儀式やタグ^④を目撃してきたという意味で、嘘ではないが、主に中国人社会の中で成長した子供たちには、アレイザ・オキッド

しいと思つているのに醜いと言つたり、本当に天才だと思つてもバカな子でと言つたりするかもしれない。マキシーンはグレイヴ・オキッドが「正反対のことを言う」(二〇三)傾向に怒つている。とりわけ、グレイヴ・オキッドが嘘とまことを混淆する話し方に、「何が本当で、何がお母さんの作りものなのか私には区別できない」(二〇二)と怒りを覚える。

次第に、語り手は中国文化とアメリカ文化を対立させ、一方を非難し、他方を正当化していく。母親の過去の「幽霊」に囲まれて生きることにならざりして、マキシーンは厄介なことは何でも中国のなものと切り捨てていくのである。「私は不具者たちを自分の夢の中に押し込める。その夢の世界は中国語で話されていて、中国語とはありえない物語の言語なのだ」(八七)。そして、彼女は「アメリカの標準」(八七)的な……白人の典型的な……生活スタイルの方が好きだと宣言する。

世界を論理的に眺めるために、私は家を出なければならなかった。論理的という新しい視点で。私は不思議なことは説明するためにあるのだと考えるようになった。私は単純明快なことが好きだ。私の口からコンクリートが溢れ出て、高速道路や歩道となって森林をおおう。プラスチックや元素周期表やテレビダイナソーがあればいいのだ。(二〇四)

このようにエスニック文化を完全に拒絶するようになることは、移民の子供たちの間では珍しいわけではない。合衆国の有色の人々の間では特にそうである。グロリア・アンザルドゥアの言葉で言えば「客体である我々が主体になって、我々自身の経験を眺め分析する際に、我々は主人のまなざしを通して

見たり、主人の言語を通して話したり、主人の方法を用いているのかもしれないという危険が生じるのである」(一九九〇、xiii)。

しかしながら、語り手が「アメリカ的な成功を自分だけのシヨールのように」(五二)身にとまとうとすればするほど、支配文化において「他者」であることを思い知らされ続けることになる。やがて、幽霊の中で生まれ……「しかも」幽霊に教育されてきて「(八五)、自分自身の家族から見ると彼女も幽霊になってしまう。マキシーンが女性蔑視の言い回しを聞いて痲癢を起すと、「あの娘はいったいどうしたんだい？」とだれかが尋ねる。「わかりませんね。機嫌が悪いですよ」と彼女の母は答える(四六)。ヤマトのミス・ササガワのように、マキシーンは、白人社会とエスニック・コミュニティの両方から異常と見なされる。どちらの規範からも離れてしまつているからである。どちらの女性もエスニック・コミュニティのジェンダー期待値を満たさないし、両者とも人種のせいで迫害されるからである。(マキシーンは、人種平等会議(CORE)(Congress of Racial Equality)と全米有色人地位向上協会(NACCP)(National Association for the Advancement of Colored People)が日々をほつているレストランで、会社の宴会を開くことを選んだホスに頼まれた招待状をタイプすることを拒否したので解雇される。)

マキシーンとワリー・ササガワはどちらもまれにみる創造的な女性であるのだが、二人が置かれた似かよつた状況は、社会規範と狂気の構築の仕方がいかに連関しているのかをさらに明確にしている。マキシーンは公式に「気違い」と診断されたわけではないけれども、自分はそうではないかと疑つていて。私は、どの家にも狂つた女や狂つた女の子がいるものだ、どの村にも聞抜けがあるものだ、思つ

ていた。私たちの家ではだれがそれにあたるのだろうか？ たぶん、私だ……私の頭の中には冒険好きの人々がいて、その人たちに私は話しかけた……私は皿を落とした……料理をしたり給仕をしながら、鼻をほじった……本当に、私は、日増しにおかしくなっていた（一八九九〇）。活き活きとした想像力の持ち主だったので、家族の者によって自分が嫌入りさせられるのを避けるために、わざと魅力がないように見えるようにしている。実際、自分は変態ではないかと思ひ始める。このときから彼女の関心は中国人の異常者の物語に向けられている^⑤。

少女期の語り手が、中国人の家族とアメリカ白人社会によって押しつけられた強制力から抜け出す道を絶えず闘いつつていかなければならなかったとしても、大人になった著者は二つの文化の下で養育されたことを活用していくのである。マキシソンが中国のルーツを犠牲にして支配文化に次第に同一化していく過程について、私は詳細に論じてきた。彼女は母に「家」から離れると……私は具合が悪くならなくてすむのよ。呼吸できるのね」（一〇八）と告げる。しかし、たとえ委容された形式であっても、中国の伝説を広範に用いていることから判断すると、母の影響のおかげで、これらの物語も同様に語り手の（そして著者の）自己の一部分になってきたのだということを暗示している。これらの物語は、アメリカの学校で彼女が学んだレススンと同じように、彼女の思考法や人格形成の仕方を特徴づけているからである。「チャイナタウンの女武者」を締めくくると伝説は、いまや作家となった語り手が、ついにどちらの文化からも束縛されることなく、両方の文化を豊かに工夫して活用するようになっていったことを示唆している。

『チャイナタウンの女武者』の最終章である「胡笳のうた」において、キングストンは野蠻人に囲ま

れた詩人ツァイ・エンについての中国の伝説を再解釈し、名のない叔母さんと女武者についての物語でも試みたように、オリジナルの伝説の教訓を覆している。その伝説は野蠻人に誘拐されて愛人になり、見知らぬ土地で子供たちを育てることを余儀なくされた一人の女性を描いている。中国版では、彼女がやがてハン族に戻ることを強調している。それに対して、キングストンが語り変えた話は異なる芸術様式の統合を通してのエスニック間の調和を表現している。父祖の地と母語との結びつきや、両親と子供たちとの結びつきは、祖先の土地へと空間的に戻っていくことではなく、発話とその発話に耳を傾けていくことを通してなされるのである。「チャイナタウンの女武者」は語り手が母のトック・ストリーに耳を傾けることで始まり、ツァイ・エンの子供たちが母の歌に耳を傾けることで終わる。しかし、ツァイ・エンの物語もまた、マキシソンがグレイヴ・オキッドのナラティブを引き継いだものであり、母系遺産の伝承を完成させたものである。「ここに私の母が話してくれた物語がある。小さなところにも聞いたものではなく、私もトック・ストリーに聞いたものと母に告げた時に聞いた最近のものだ。始まりは母の話だが、終わりは私のものだ」（二〇六）。

ツァイ・エンはマキシソンの人生に影響を与えた他の女性像に似ているが、同時にそれらの女性像を超えていこうとする人物像でもある。マ・ムランのように、ツァイ・エンは戦場で闘うが、捕われの兵士として闘っていく。彼女はこれまで男性に支配されていた書くことというもう一つの芸術に携わっていくが、彼女は自らの性を偽ったりはしない。それゆえに、書くことが男性の特権であることを暗に否定しているのである。名のない叔母さんのように、ツァイ・エンは強姦され妊娠する。どちらの女性も砂の上でお産をする。しかし、名もないまき村八分にされるのではなく、ツァイ・エンは彼女の

亡命生活について歌うことで不滅の名声を獲得する。アレクザ・オキツドのように、彼女は中国語を理解できない子どもたちに中国語で語るのであるが、子どもたちは野蛮人の言葉を諳ずるので、彼女の方は野蛮人の音楽を楽しむことを覚えていく。

ツァイ・エンの重要性が最大限に示されるのは、両親の中国人世界からもアメリカの白人世界からも疎外されたマキシーンとのアナロジーによってである。野蛮人は素朴な笛を弓矢につけているので、戦いどきに笛がヒューと鳴るのだ。ツァイ・エンは、この恐ろしい音が遊牧民捕獲者の唯一の音楽であると思っていた。しかし、いまや、夜ごとに、彼女はこの笛の音から「砂漠の風のように音楽が響き出て立ちのぼっていく」(二〇八)のを耳にする。

やがて、ツァイ・エンのテントから……野蛮人たちは歌う女性の声を聞いた。まるで赤ん坊に歌って聞かせるように、高くはつきりとした歌で、笛によく合っている……彼女の言葉は中国語のようだったが、野蛮人たちにもその歌声の悲しみや怒りがわかった……彼女は、野蛮人の国から、歌を持ち帰ったが、私たちに引き継がれてきた三つの歌のうちの一つは「胡笳のうたの十八楽節」で、中国人が自分たちの楽器に合わせて歌うようになった歌である。その歌はうまく翻訳できた。(二〇八)

マキシーンは中国に戻らない(し戻りたいとも思っていない)が、彼女は書くことを通して自分自身の祖先の文化と再度つながっていく。彼女にとつてのアジアという過去とアメリカという現在に逆らって葛藤するのではなく、彼女は、いまや異国の音楽に合わせて歌う詩人を見習おうとする。悲しみや怒り

は消えてはいないが、叙情的な結びは、語り手が、この時点までに著者と融合し、彼女の人生の不協和音を一つの歌へと仕上げたことを示唆している。

このように調和した結末に直面して、「胡笳のうた」の章とこの本を締めくくる「その歌はうまく翻訳できた⁽¹⁹⁾という非常に巧みに曖昧にされた文をどのように理解すればよいのかと、読者は当惑してしまいかも。その結末の文章は、表面上は、ツァイ・エンの楽節を指しているのではあるが、明らかに、マキシーン自身の反響し合う「歌」のことをほめかしてもいる。ツァイ・エンが橋渡しをしたように、語り手／著者によって、異なる世界も橋渡しされうると示している。それにして、マキシーンによって翻訳されているものは何なのか(中国語を英語になのか? 中国文化を中国系アメリカ人文化になのか?)、そして彼女は本当にうまく翻訳できるのかどうかと疑問に思うかもしれない。「翻訳」の従来の意味に固執して、翻訳の真価はオリジナルに近いかどうかということにあるのなら、『チャイナタウンの女武者』は中国文化の素材を下手に不正確に描いているものとなる。そうならば、翻訳とは、事実を曲げて中傷したり、間違っただけを語ったり、裏切っただけを語ってもある。これは『チャイナタウンの女武者』に対して、繰り返し浴びせられてきた批判であった。裏切りはもつと個人的なレベルで、アレクザ・オキツドに対して為されている。というのも、娘には幽霊のようだと思える言葉では、母の声は十分に再現されえないからである。『チャイナタウンの女武者』から感じられる痛みは、娘が母を裏切っていることに原因の一端がある」とクリン・ケネディとボラ・モースは書いている。「娘のナラナイは……母の言語と文化の秘密を敵意のある聴衆に暴露していく物語である——その聴衆は、母の知識を『原始的』と呼び、幽霊に対する母の力を『迷信』と呼ぶ

おかあさんの話はどう聞きたくない。全然論理的じゃないんだもの。おかあさんの話は私を混乱させてしまうの。おかあさんはお話で嘘をつくのね。話をするつもりはないと言っておきながら、『これは本当の話だよ』とか『これはただのお話だからね』と言うんだから。私にはその違いがわからない

キッドを批判する。

食い違いがあるときにのみ察知されうる。語り手は、自分をまごつかせたと、辛辣にグレイヴ・オム多くの場合、このような怒りと回顧の対話形式は、語り手が断言していることと著者の戦略との間に情を反映させているわけではないことを次第に理解するようになる。

しても(彼らがよく口にする民族的言い回しで)、それが、自分の娘に対して実際に抱いている感域から脱け出さなければならなかったのだ(五二)。語り手は、自分の家族が表面的には女の子をけなすの母や父の口からそのような言葉が飛び出してくるのを警戒していた……だからこそ、私は憎しみの領らないように気をつける』などというのはいじわるしにすぎないのだからと……それでも、私は、自分の本的に私のことを愛してくれていると信じられる。『洪水で宝物を釣り上げるときは、女の子なんか釣るときには、語り手のこの「二重の声」は連続して発せられる。「距離を置いて考えれば、私の家族は基な感情を思い起こすと同時に、肯定的でかけがえのない価値を授ける距離感をも測っていく(四七七)』。ように、彼女は「幼児期の少女が母や家族やコミュニティ、そしてその神話に対して抱いてきた否定的成熟した著者は、弁証法的なウイジヨンを作品全体に行き渡らせることができる。ラビネが述べている

産に奥行きのある両義性を示している。『チャイナタウンの女武者』の語り手は、この小説の終わりに

日系遺産に批判的であると同時に評価もしているヤマモトのように、キングストンは自らの文化的遺産に奥行きのある両義性を示している。『チャイナタウンの女武者』の語り手は、この小説の終わりに

キングストンは、彼女自身が「新しい型」を仕立て上げてきたのだと暗示しているのである。もしも彼女が彼女の小説を中国系アメリカ人という特殊な観点から、ハイブリッドな語法を用いた中国文化の個人的かつ創造的な置き換えであると判断するのであれば、著者は大胆に、詩的に、かつ壮大に、即興で書きあげてきたのである。翻訳するという概念は、このように、二種類の言語が混ざり合っているテクニストを貫いて維持される緊張と二重のウイジヨンを保ち続けていくことなのである。

のだから(二二八)。

皮肉なことに、『チャイナタウンの女武者』の中国語での翻訳版もオリジナルに忠実ではない。キングストンはこのような翻訳版に対する母の反応について述べている。

の……何が本当でそれがおかあさんの作りものなのかわからない。(二〇二)

語り手が断言していることと著者の戦略との間の食い違いが指摘されるが、多分それよりはつきり表れていることは、マキシーンが母に対して向けた批判こそが、多くのアジア系アメリカ人の知識人たちが『チャイナタウンの女武者』に対して浴びせてきた批判を先取りしているという皮肉な事実である。キングストンはマキシーンの率直な意見表明の効果を彼女自身の語りの様式によって弱めていく。その様式は母系遺産を自由に話すように促すことにより、口に出して表明された反発の言葉の裏で、母系遺産の真価を認めていくサブテクストを準備しているのである。母の言うことはもう絶対に関かないとマキシーンは宣言しているにもかかわらず、著者の方はずっと注意深く母の言うことに耳を傾け続けてきたからである。子供時代のマキシーンは、母が事美と空想をこちゃまぜにすることに嫌悪感を示すが、キングストンの方はためらもなく神話とリアリティを混ぜ合わせ、矛盾した声を彼女のナラティブに入り込ませている。このようにマキシーンは悲しげな少女期の視点を大人の作家の言葉に表さないが肯定的な視点で修正することによって、論理や合理性に挑戦する斬新な語りの手法を用いて、キングストンは少女期の語り手が声高に支持する西洋的価値観に対して暗に疑問を投げかけていくのである。

主題と詩学、表層と深層が配置されているので、『チャイナタウンの女武者』はレイチェル・ブラク・ブクアレーシスが「変化、対照、否定、矛盾から生まれ」て「一個人の被傷性や必要性に連結される」「画義性というヴァイジョン (both/and vision)」と呼んだものを思い起こさせる(一九八五a, 二七六)。ドク

アレーシスは、そのようなヴァイジョンは、「女性の美学」の特徴である一方で、「浸透している支配的な知や理解の形式を批判し、差異化し、覆すことを目論むあらゆる社会実践」(二八五)に共有されるものであるとも書いている。

キングストンは、このような支配的形式を解体するための十分な力が備わっているようである。ジェンダーと人種によって二重に周縁化された者としての有利な立場から世界を見ることが出来るという点に加えて、母系でありバイリンガルであるという例外的な遺産を自由に利用できる。その遺産は一元的言説を批判し、オルタナティブな詩学を構築していくのに役に立つ。著者は「話すことのチャンピオン」(二〇二)であったレイヴ・オーキッドからストリーテリングの技巧を受け継いでいる。レイヴ・オーキッドをモデルとして、彼女は男性の文学伝統からも女性の口承伝統からも同時に書いていくことができるのである。

ヴァージニア・ウルフやドリエンヌ・リッチやルース・イリガライなどの女性作家たちは、書くことと挑んだ初期のこの自分たちの書き物には基本的に父親や男性作家の影響があることを見つけ、生物学的な母や文学上の母の沈黙を嘆いている。しかしながら、多くのエスニックの女性作家たちは母系遺産に対して異なった見方を持っていると指摘されてきた。ヴァージニア・ウルフとアリス・ウォーカーとの違いはジョアン・ラドナーやスーザン・ランサーに注目されている。ウルフは母系遺産を嚴格に文学的遺産という観点からとらえているので、そのような遺産は何もないと結論づけているのに対し、ウォーカーは、彼女の母たちは書かなかつたけれども、「庭や歌やキルトを……創造してきた」(四一四)ことを発見している。キングストンは、明確に言葉による芸術である「トーク・ストーリー」を母から

受け継いでいるという点でどちらの作家とも異なっている。「トーク・ストリー」を通して、文学的

伝統が口承で伝達されているのである。¹⁹

口承が決して流暢なものではないということは認められる。女性の沈黙に関わる中国の格言に「グライヴ・オキッドが払うリツプアライズと彼女の華しいオララルな語りとの間の不協和音は、感受性の強い娘を当惑させる。しかし、トリン・フ・ミンが適切に分析しているように「ホン・キン・グストンが、母について語ってはいないけれども、行間や物語のギャップから読みとることができるとは、自分について我々に語っていることと同じくらい母についても明かしていることである」(一九八九、三三五)。母の影響は公然と表明されているわけではないが、絶えず一貫しないことを言う母は、語り手が矛盾を楽しんだり、絶対的なものを疑ったり、真理を多面的なものとして見たり、経験的な真理や理性の声を想像力という刺激よりも優れたものとして位置づける科学的権威から免れるための能力を培っていくのである。

マキシンは、母から強さを引き出すばかりでなく、二つの文化に由来する自分自身の臨機応変の才も動員していく——中国の流儀を植え付けられたグレイヴ・オキッドが持っている臨機応変の才である。例えば、娘は支配チームが自然の成り行きのままに進んで行くのを許容することもできる。「女性的」になるために中国的なやり方とアメリカ的なやり方の両方があることを知ることは、どちらも絶対的なやり方であると主張できなくすることなのであり、それゆえに「女性性」が本質的なものであるとする見方を脱構築していくのである。中国的な家父長制ルールと欧米の家父長制ルールとを対抗させるることによって、キングストンは、中国と白人文化の権威の双方の力に裂け目を入れていく。

その代わりに、折衷的な解決が結果として起こるかもしれない。少女期のマキシンは、入り組んでいて共同体的な中国的な「我(一)」とアメリカの個人主義の理想の中であまりにも大文字で表されて剥き出しにされたアメリカの「私(一)」とを和解させる難しさを味わった。しかし、このように全く異種のシンティアンは、自己を構成していく異なった方法を意味することになるのである。大人の作家として、とりわけアメリカ的なジャンルである自伝形式を選択したことは、自分を自立した人のように振る舞うことや「家族の秘密を守る」(一九八九、二七五)気遣いを説く中国的な教えに反抗しながら、たゞとどんなに個人主義を主張していても、語り手は彼女の「自伝」に女性たちの共同体を導き入れてきた。一般的に自己表象と見なされるこの作品に、多様な女性先祖の声を与えることによつて、(エレーヌ・シクスーが自らを「女性的複数形」であると宣言していくのと同様なり方で) インターテクスト的な芸術家としての彼女の自己成型に及ぼす家族と文化の影響力を、彼女は認めているのである。自身の芸術を通して、共同体の人々に戻っていき歓迎されたいという願いすら表現している。「女武者と私はまるつきり似ていないというわけでもない。彼らのもとへ戻っていくことができるように、私の民族の人々がすぐにその類似性²⁰に気づいてくれますように。私たちのどちらも持っているのは、背中に彫られた言葉なのです」(五三)。彼女の書物(「その言葉」)は、象徴的な回帰を構成している。彼女の物語は、決して分裂した人格を表しているのではなく、その心が「宇宙のよう」に、とても広いのでたくさん逆説が入り込むスペースがある(二九)複合的な自己を記しているのである。

作目の『アメリカの中国人』のナレーション様式は「男性的」であると論じている。「というも、娘の母に対する関係は、心理的にも言語学的にも、父に対する関係とは異なっているので、この二つ物語の語りも異質なのである」(一七三)。確かに二冊の小説は、異なる志向性を示しているが——一方が女性の祖先を呼び起こしていくのに対し、他方は男性の祖先を再生しようとしている——キングストンのオラテイズの技巧を主題のジェンダーによって分類するのは誤りである。それぞれの作品に登場する最も有名な伝説は、ジェンダーの逆転を軸にして動く。女武者としてのマキシオンは、男性兵士に扮して勇敢な冒険に満ちた男性世界に入る。『アメリカの中国人』の冒頭で書かれている伝説の中心人物であるタン・アオは、女の国で捕われの身となり、オリエンタルな高級売春婦へと変身させられる。家父長制の二分法の図式において負の性質である女性性は、『アメリカの中国人』においては人種的「他者」に押しつけられている。このような「男性たちの物語」をとおして、キングストンは、性的な服従と人種的な服従との結びつきを描き出し、性役割を逆転させることによって家父長的慣習に異化効果を生み出していく。⁽⁵⁾

『チャイナタウンの女武者』が、アメリカ社会で生きていくことができる女性としてのアイデンティティを模索する思春期の少女によって主に物語られているのに対し、『アメリカの中国人』の方は、中国系アメリカ人の人種とジェンダーのもつれを把握する能力があり、フェミニスト的な共感を男性にも広げていくことのできる女性によって提示されている。キングストン自身、次のように述べている。

『チャイナタウンの女武者』の真価をきちんと理解するには、『アメリカの中国人』も読む必要があり

『アメリカの中国人』

我々は、省略で覆われ、悪事に誘うにせもので溢れかえっているみせかけによって隠蔽されてきた空白のスペースに戻っていくのだ。

ミッシェル・フーコー『言語・対抗記憶・実践』

ア・グーンは、鉄道写真には登場していない。

マキシオン・ホン・キングストン『アメリカの中国人』

『アメリカの中国人』は、中国系男性たちについての歴史における描写と中国系移民コミュニティにおける描写にもつばら充てられているが、キングストンのフェミニスト気質も口を閉ざしてはいない。既に指摘したように、『チャイナタウンの女武者』と『アメリカの中国人』を別々に「フェミニスト」のテクストと「エスニック」のテクストであるとか「女性」の物語と「男性」の物語であると批評家たちは見なすが、私の見解は彼らとは異なっている。例えば、スガンス・ジエハスは、キングストンが、第一作目の『チャイナタウンの女武者』では「女性的な」ナレーション様式を展開しており、第二

一重の声を用いた二種類の形式の弊は、冒頭の寓話は中国系アメリカ人の歴史を神話化しながら、人種差別主義者と性差別主義者による抑圧を破綻させる。その伝説は、李汝珍（一七六三—一八三〇）によって脚色された十八世紀の中国の古典『鏡花縁』の政治的アロゴリーであり、おそらく男性によって書かれた最初の「フェミニスト」小説の一つである。キングストンが書き換えた話では、男性主人公のタン・アオは、女の国で捕らえられ、強制的に両足を縛られ、両耳に穴を開けられ、顔に生えた髪は抜かれ、頬と唇には赤い紅を塗られる——要するに、オリエンタルな高級売春婦へと変身させられるのである。その変身はエチキットにまで及んでいる。苦痛に満ちた試練の最中に、タン・アオが話すのを我々はたった一度だけ聞くのであるが、その声に対して、一人の老婆が手に針を持ち、冗談めかしながら両唇を縫い合わせてしまうぞと脅すのである。両唇を縫う代わりに、老婆は彼の両耳に穴をあける。このエピソードは、この作品で探求されることになる話すことも聞くこともできないという沈黙の二つの原因を先取りしている。この作品は、話すことができなかつたり、話すことが許されないうちやいなちや、歴史からその声を抹殺されてしまったチヤイナムンで溢れかえっているのである。

埋もれた文化的伝記を想像力によって再生するために使われるのである。個人的な出来事と国家的な出来事を織り込んでいき、記憶と対抗記憶を紡ぎ合わせることによって、彼女は、家族の年代記ばかりでなく、中国系アメリカ人の叙事詩をも再構築するのだ。リンダ・チン・スレッジが述べたように、アメリカ史において、何十年間もその存在が認知されてこなかった多くのチヤイナムンに声を与える叙事詩である。

著者と語り手との距離は、『アメリカの中国人』ではかなり縮まっている。『チヤイナムンの女武者』の語り手は、社会の拘束力が自分の見方を枠づけていることが充分に意識できていないが、それとは異なり、『アメリカの中国人』の語り手は明らかに成熟した批判意識から語っているのである。中国系アメリカ人男性が沈黙させられていく様子を描いている『アメリカの中国人』は、フェミニスト的な戦略を採用するとともに、ある種のフェミニスト的な先人観を反転していく。著者は、この作品では男性先祖の表象に懐疑的であり、男性と白人の権威のどちらに対してもボリフオニを展開していく。『チヤイナムンの女武者』で注目された二種類の形式の二重の声が『アメリカの中国人』でも平行的に描き出されていく——ジェンダーと人種を重ね合わせる意識を映し出す声と事実と虚構を調停する声である。アメリカでの中国の父たちの去勢化を描写している瞬間でさえ、彼女は、中国文化内部の家父長制による虐待もほめかせていく。どちらの作品も、事実とファンタジーの間を行き来しているが、その戦略は、『チヤイナムンの女武者』では、トック・ストリーという女性の伝統を通じた母系の繋がりを作り上げていくために使われるのに対して、この作品では、『事実』という権威に挑戦し、

まず。「私」が、大人の語り手の声を獲得していることがわかるでしょう……「私」は、他の人々と関係の中でしか「私」になれないのです。『チヤイナムンの女武者』では、「私」は、民族の原型である母を理解していくことで自己探求を始めています。『アメリカの中国人』では、もう一つのジェンダーを理解する能力を持ち合わせているので、「私」はより全体的な存在となっているのです。（一九九二—三）

この作品は、繰り返し、中国を祖先に持つ男性たちが苦しんだ去勢化の形式に言及していく。第一に、星を見つめながら、アー・グーンは「自分が建設している鉄道は自分の家族のもとへ連れて行ってはくれない」と思うと「孤独感が胸が張り裂けそうだと感じた」(二二九)。彼の性的願望は、時間が経つに

象徴していると容易に察しがつくであろう。合衆国で彼らが体験した特異な人種差別は、彼らの男性性批評家たちは、異国の地でタン・アオが受ける恥辱はアメリカ合衆国におけるチャイナメンの去勢化をキングストンが女の国を北アメリカと結びつけているので、中国系アメリカ人の歴史に精通している

のオルターナティブな記述を提示しているのである。この作品は、チャイナメンの「歴史的」構築に挑戦しているばかりではなく、「対抗記憶」として歴史であるかのように提示することで、キングストンはこの小説の中でずっと用いる方法をあらわに小説では各章を始める際に多くのエピソードを用いたことである(ランドナーとランナー四一六)。これは、父家長制伝統の権威をパロディ化すると同時に自己権威化の一形式でもあるのだ。明らかに虚構をまる

タン・アオのストリーは、幾つかのフェミニストの見地から読むことができる。フ・ムラヤ魔性の女武者たちについてのマキシンのフアンタジーは、一目で、女性の「対抗備給」というもう一つの例を生んでいることが分かる。「対抗備給」とは抑圧者をまねることによって抑圧を反転させていく戦略である。しかし、タン・アオが味わう耐えがたい苦痛の描写は——男性読者も女性読者も同じように感じる苦痛であると思うが——著者の方の復讐心というよりは、ジェンダー構築の非対称性を前置化しようとする企てを示唆している。フ・ムラヤが志願して男性領域へと立ち向かっていくのに対し、タン・アオの女性領域への横断は、ドナルド・C・ゴールニクが述べているように、「格下げ」を表わす。「誰も『女性性』ジェンダー役割を果たしたいとは思わないように見える」(一九九、一九二)女性をタン・アオの捕囚人に仕立て上げ、男性性役割と女性性役割を反転させることによって、キングストンは父家長制の慣習に異化効果を生み出していく。『鏡花縁』の著者のように、キングストンは何世紀にもわたって中国の女性たちが被ってきた苦痛に一人の男性を晒すことによつて、性の対象者として中国の女性たちを当たり前のように受け入れられてきたことに反論を唱えているのである。

この寓話をフェミニスト的な書き物として読むだけでは、この寓話の「メタストリー」としての重要性は曖昧なままになってしまふ。物語は次のように終わる。「その『女の国』が発見されたのは、則天武后(西暦六四九—七〇五)の統治時代だったという学者もいるし、それより早い西暦四四一年で、発見されたのは北アメリカだったという学者もいる」(五)。中国人がアメリカを発見したのは五世紀頃(チェン、ツァイを参照)と推測してきた学者もいるが、女の国を北アメリカと結びつけるという発想は、私の知る限りでは、キングストンの純然たる創作である。キングストンが創作を加えた話の出典に言及

つれ大きくなつていく。彼は自分の性器に取り憑かれ、「いったい男は何のためにいるんだ、いったい自分は何のためにベニスを持たなければならぬだ」(一四四)としよちゆう自問するようになる。ある時、橋の支柱を打ち込むために、柳の籠に乗って谷を降りようとしていたのだが、彼の欲望はほとばしりである。

ある美しい日のこと、新しく取りかかった峽谷に刺す陽光をあびてぶらさがっていると、排尿の欲求ではなく性の欲望にひどく取り憑かれて、籠の中で身を屈めた。彼は、自分のベニスに赤満する美しく恐ろしくもある衝動に圧倒されて、身を屈めたのである。彼はベニスをこすって、気持ちを落ち着かせようとした。それから突然、すつくと立ち上がり、空に向かって射精した。「おれは、世界とフアックしているんだ」と彼は言った。世界の臆は大きかった。空のように、谷のように、大きかった。習慣になった。籠に乗って降りていくたびに、彼の血はベニスにとどくと流れていき、彼は世界とフアックしたのである。(二三三)

悲哀とユーモアがこの射精行為に混じり合っている。世界を愛胎させようとするアー・グリンの挑発的な行為は、チャイナムンの耐えられないほどの喪失感を強調すると同時に壮大な想像力で生き残ろうとしてきた彼らの戦略も強調している。柳の籠に乗って降りていくことが文字通り指し示している格下の屈辱感、宇宙の潜在能力が与える高揚感で相殺される。中国人が真面目で散文的であるというステレオタイプを否定しつつ、著者はアー・グリンを不幸にめげない不屈の魂を持ったユーモアに満ちた

人物として描く。アー・グリンは魯迅の『阿Q正伝』の題名となったあの有名な阿Qという人物やナイテイズ・アメリカンの書物に登場する多くのトリックスター(リンカン、一九九三参照)と似ていなくもない。ものを転覆させて見ることができる想像力と遊び心を持っているので、土地を奪われたナイテイズも奪取されてきた中国人移民もハンズイがあるにもかかわらず、生き残ることができたのである。悲劇を喜劇へと著者自身が変容させていく描写方法は、彼女がチャイナムンの属性と感じた特徴を例証している。そして、日雇い労働者のことを真面目に描写するだけではなかなかできない方法で読者の注意を引きつけるのである。⁽²³⁾

単身の夫たちのテーマを悲喜劇的に扱っているもう一つの例は、「中国からやってきた父」の終わり近くで描かれるが、その章は、アメリカで四人の中国人が「バツチエラー」として過ごす若き日々を描写している。語り手の父のエドと三人の男女達はニューヨークでクリーニング店を営んでいる。エドは、当初は「金山は本当に自由で、何の行儀作法も、何の伝統もなく、妻もいない」(六一)と單身男性としての自由を享受している。性的な寂しさをやわらげようと、彼らは週末には、お金のかかる白人女性の踊り子たちと交際しようとする。エキゾチックな東洋人という構築を逆転させて、これらのチャイナムンは、情熱的な叙情詩で使われる「彼女の髪のような黒さ」という言葉を「彼女の髪のような黄色」(六一)という言葉へと変えて、プロソポの女性たちを偶像化する。エドがエロティックな出会いをするがついていて、その節では、華麗な後家に手厚くもてなされた若い男が、やがてこの愛人が女の夢魔であつたことに気づくという中国の寓話が描かれている。

エドの冒険談を「ゴシック」ロマンスの際に配置するという戦略から、著者の解説が隠されていることが明らかになる。エドについての章の「インターテクスト」として、「死霊の愛人」の章は、いくつかのレベルで、あるときにはチャイナマンに同情的に、またあるときには批判的に作用していく⁽²⁾。最も単純なレベルでは、そのロマンスは思いがけない幸運にあがれて家から遠く離れていった男性たちの集合的なフアンタジーを示している。「あなたにお望みのものを差し上げましょう」と寓話の中の後家は言う。その後家は名のない若者に贅沢な食事、心地の良い宿、愛情、富の約束、そしてとりわけ、彼の手工芸の素材となる珍しい未加工の材料をなんでも提供する。「陶芸家がこれまで退せ合わせ得るべきできなかった、青や緑を生地に上塗りする材料を彼女は持ち出してくる。彼が織工になる」と白子羊の羊毛のたばを、詩人になると鹿と柳と山の透かし模様の入った紙を、靴職人や仕立て屋になると幾巻きもの革や布地と虹のような幾か色の糸を持つてくる」(七七、七八)。彼の冒険はニューヨークの四人の中国人独身男性の質素で厳しい生活との対比で際立っている。これらの四人は、「四分半で」(六〇)で夕飯をかき込んで職場に戻り、「アインロンがけのテーグアルをベツドにし」(六三)、長い間女つけなしで暮らすのである。芸術的欲望と性的欲望を満たすことのできる「死霊の愛人」に登場する若者とは違つて、エドはそのどちらでも欲求不満を味わっている。書道の練習をする代わりに、エドはクリーニング店の簿記の仕事にいそしみ、この中国では非常に雄弁だった学問を身につけた者も、アメリカではすっかり寡黙になつてしまつている。「僕の家に来ないかい？」とプロンド娘にためらいがちの英語で尋ねるが、丁重ではあつてもはつきりと断られる。「いいえ、ハニー」と彼女は言った。「いいえなのよ」と(六六)。

しかし、「死霊の愛人」の若者の冒険もまた、ニューヨークでのエドの滞在と様々な点で交差している。家から遠く離れた「若い旅人が……「自由を感じる」(七四)ように、エドもアメリカで自由を楽しんでいる。旅人が「死霊の愛人」を「これまで会つた中で最も美しい女性である」とみなしたように、エドも、プロンドの踊り子の腕の中のばああがつて夢心地になる。もつと重要なことは、エドと彼の男友たちが女遊びをするにつれ、自分の妻や子供たちの記憶を遠ざけていくように(四人の「男性」の誰一人としてプロンド娘に、自分たちは既婚者で父でもあると打ち明けなかつた「六六」)、「死霊の愛人」における若者は、後家の誘惑に屈していく。というのも後家は、彼の「あくせく働き続ける」配偶者よりもずっと魅惑的に思えるからである。「彼の妻は、子供たちのために根や樹皮を料理しながら、家で待つている……彼女は勇敢であつて料理もする妻である。妻は、二人だけのロマンティックな夕食など経験したこともない。彼は妻にそんなに汗をかかずにいられないのかと尋ねなければならぬし、妻の手足のたこも好きにはなれない」(七七)。

著者はこのように間接的に中国のダブルスタンダードを糾弾している。エドのようなハイカラ男性が、プロンド娘の気を惹こうと、一着二百ドルのスーツに次から次へとお金を浪費していく一方で、彼らの妻たちは貞淑を保ち、夫の親戚の世話を一生懸命働くことが期待されている。エドの妻は夫に、「私は道路工事に出なければならぬかとたんですよ……あなたのおとうさんはすつかり頭がおかしくなつて仕事に行けないし、あなたは遠くについてしまったので、二人の男性に代わつて労働者税を払わなければならぬかとたんですよ」(六九)と話す。(いったんニューヨークにやつてきたら、彼女も料理や血洗といった「女性の」仕事を引き受けることになる)このように働きどおした女性も、仕事に疲

さらに、白人労働者は中国人の競争相手を許そうとはしなかったので、パバ(父)やチャイナ・ジョーのようなチャイナメンは、料理人やクリーニング店主やウエイターになることによつて、伝統的に「女性の仕事」とみなされたものを引き受けざるをえなかった。そのような職業へと追いやられて、これらの男性たちは本意な「女性性」を負うがゆえに、嘲笑され搾取されたのである。

キングストンは、チャイナメンの窮状と女性全般の窮状の類似性を強調するのには、文字通りのレベルと比喩的なレベルの双方において、沈黙というモチーフを用いている。ナラナイが本文の冒頭では、父が無気力になつてふさぎ込んでいる様子がかなりの長さになつて描写されている。パバは、中国では詩人であり学者であり教師でもあつたので、コミュニケーションを取らうとしない現在の彼の振る舞いは、大部分がアメリカでの彼の経験が原因であるにちがいない。英語をほとんど話せないクリーニング店主として、彼は以前にシグナーに騙され、それから警官によつていじめられたことがあつた。

シグナーのあはずれ女と警官隊が立ち去つたとき、あなた「パバ」が私たちに八つ当たりしないように、私たちはい子でいて騒がないように気をつけた。あなたが化け物や肉体労働に耐えなければならぬのは、私たちが養つたためだとわかつていたので。あなたが言葉にならない男性の悲鳴をあげるらない、家中のみんなががばつとはね起きたものである……のしりや夜ごとの悲鳴よりも怖かつたのは、あなたの沈黙であつた。あなたは話さないことによつて私たちを罰していたのだから。あなたは私たちを不可視の者たち、存在しなくなった者たちと見なしたのです。(二三一四)

れた外見のせいで避けられたりしがちである。夫を待ち続けた妻たちが、敬えて他の男性と接触したりすれば、『チャイナタウンの女武者』における「名のない女」のような運命となる危険を冒すことになる。それに対して、エドのほうは、何の良心の呵責も感じずに自分の妻にプロンド娘と踊つたことを口に出す。「鬼女と踊つたの?」(七一)と妻は信じられないといった様子で尋ねるが、この質問は死霊の愛人と白人の美女とを直接言葉でつなくせりふを讀者に提供している。中国とアメリカのロマンスを並列させることで、妻の到着までの二エリヨクにおけるエドの無責任なエピソードの実態を暴く。それは愚者の樂園であつただのだ。プロンドの女性たちはチャイナメンから金品を巻き上げることに興味があるだけである。エドの妻に代わつて語るかのように、語り手は「死霊の愛人」の章を「幻想的な愛人は決して長続きしない」(八一)という金言をつけて結んでいる。

チャイナメンと明らかに白人と分かる金髪的女性たちの出会いもまたタン・アオの伝説を思い出させる。中国の伝説とアメリカでの出来事の双方の描写には、フェミニスト意識とエスニック意識との間の絶え間のないずれが認められる。女性が男性を統治するという純然たる空想上の女の国は、北米ではアリスティックな様相を帯びることになる。北米では、実際に白人女性には有色の男性に対して危険な力を歴史的に行使してきたからである。従えとだけ命令することで(一九七六/一九八九、七)名のない女を妊娠させる無名の男とは全く対照的に、北米でのチャイナメンは、ノ一という答えを(女性から)受け取らなければならない。そのノ一という答えは(異人種混交禁止)法にも書き込まれているのである。

去勢化はまた、卑しい仕事にいたり、不可視性を強制されたりする形で生じる。鐵道を建設し、金を掘り、プランテーションを開拓した多くの初期中国人移民の貢献は長く認知されないうままであつた。

語り手が父の「男性の悲鳴」や陰鬱な沈黙を嘆き悲しんでいるときでさえ、彼女は父の不機嫌さを白人社会における屈辱感のせいであるとしている。トニ・モリスンの「青い眼が欲しい」におけるチャヨリー・グリアンドと類似した状況で、この小説では、男性の暴虐が人種の不平等というコンテクストから察される。白人社会で虐待されてきた有色の男性は、自分たちの怒りや自己嫌悪の念を、自分たちの家族の女性や子供たちというもつと力のない人たちに吐き出すことによって、自らの男性性の感覚を取り戻そうとしたくなることが多いのだ。彼らは他の者たちを不可視にすることによって、自らの不可視性と戦うのである。

パバの屈辱感を隠す仮面である沈黙は、語り手の曾祖父で、ハライの臨時労働者であったバク・グーンの場合には文字通り押しつけられたものである。ハライでは、白人のボスたちは中国人労働者に、ジヤングルを切り開いている間は「沈黙すべし」という規則」を遵守するように命令する。「話すことで罰金を科せられた」(二〇〇)バク・グーンは、彼の怒りを表現する巧妙な方法を考えだす。それは例えば、オペラ劇に登場する農夫のように歌うことのほうを好んだとしても、農園の監督に対して咳に見せかけて広東語で毒舌をはくといった工夫なのだ。「吠えるようにぜいぜいというような深く長くやかましい咳は、怒鳴るのと同じくらの満足感を与えてくれた。彼は咳に見せかけて叱責を吐き出した」(二〇四)。音楽の素質が押さえつけられたバク・グーンは、「沈黙する」という誓いを立てなければならな

いとわかっていたら……髪を剃って坊主になっていただろうにな。どうやら、わしらは禁欲の誓いも立ててしまったらしい。ここに群がっているやつらは雄鶏ばかりなのに」(二〇〇)と不平をもらす。沈黙

と実的な去勢化との連関が公然と描かれている。自分自身と病気になるった同郷の者たちの咽に詰まったものを解き放とうと、バク・グーンが一つの話をするときそれが導火線となってこれまで黙っていた男性たちも一斉に言いたいことを吐き出す。男性たちはぱっくりと開いた穴を掘り、その穴を通して、彼らの願いやフラストレーションを中国に向かって叫ぶのである。大騒ぎに驚いて、彼らの白人のボスたちはチャイナメンを放っておくことにする。その穴は、文字通りには、チャイナメンのこれまで押さえつけられてきた声を入れる容器を指し、比喩的には、閉じ込められた性的欲望のための開口部を指し示す(ゴールニクト一九九二―二〇四)。「シヤウト・パレーイ」が終わるとすぐにその穴は埋められる。「言いたいことをすつかり吐き出してしまおうと、彼らは自分たちの言葉を埋めて隠した。『猫が糞に土をかぶせるみたいにな』と、彼らは笑った」(二一八)。

ア・グーンが世界の隘に射撃することも、バク・グーンがオラールに貫通することも——文字通り大地を叩くのであるが——生存のための英雄的な行為であり、潜在的な想像力を示す行為として描写される。しかし、そのような生殖的なイメージと征服のレトリックが結合された描写は、フェミニストの読者には気にかかるものである。キングストンは、意識的に不快感を引き起こすように挑発しているのかもしれないが、このような場面は、『チャイナタウンの女武者』におけるフア・ムラインをめぐる場面とともに、フェミニスト作家にとってさえ、権力とは無縁の英雄像を想像することの難しさを示唆している。この小説の最終章である「ザエトナムの弟」に至るまでは、キングストンはこの難題に正面から向き合っていない。

当座のところは、チャイナメンの身体的・言語的征服への欲求は厳しい抑圧に対する反発として示さ

れていると言及しておくだけで十分であろう。シャウト・パレーのエイソードは、初期のチャイナメンの抑制してはいるが不屈な抵抗の例であり、彼らの声が集团的に「埋葬」されてきた事情を例証している。敬意に満ちた環境の中で生き残っていくために、初期の移民たちは静かで従順に見えるようになければならなかったので、彼らの寡黙さは東洋人の特徴として自然なものと見なされたのである(下二一九七―二一三二)。

もっと象徴的なレベルでは、アジア系アメリカ人の沈黙は、チャイナマンの貢獻(の語)に耳を傾けない白人の歴史家たちによって永続化されていると言えよう。労働を通して彼らがいかに大きな声で語らうとも、彼らの被搾取体験は語られずに認定されないままである。語り手は、このような明からさまざまな省略を修正しようと決意している。バク・グーンについての章は次の呪文のような記述で終わっている。言葉が蒔かれたその地点には、「新しい緑の芽が生えてきて、二年経った時に、妻が黄金色の房をつけてくる頃、風はどんな物語を語るのでしょうか(二一八)。しかし、物語が聞かれうるためには、喜んで聞く人が必要とされる。ひ孫の娘がサンダルウッド山脈に祖先の声を探してやってくるまで、二年ではなく、数世代が過ぎていく。「私は……はるかハブイまで探しにいった。ハブイで私はサトウキビ畑の端のハイウェイに沿って立ちすくみ、曾祖父たちの声に耳をすませた……私には、その土地が歌う声が聞こえたのである(二一九)」。このような挿入とともに、曾祖父の物語として彼女が生き生きと提示しているものは、祖先についてよく知ることによって湧いてきた靈感と区別がつかないものであることを、話し手は明らかにしているのである。(バク・グーンの物語や反乱についての細部は大部分がミスタース王⁽²⁾についてのオウイデイウスの話から引用されている。)

「死霊の愛人」と「中国の父」の章が相互の注釈としての役割を果たすように、「死について」と「ただび死について」とそれぞれ題された二つの短い節は、バク・グーンを描いた「サンダルウッド山脈の曾祖父」の章にインタテキスト的に呼応する。どちらの節でも、人が不滅性を喪失するのは黙ったままでいることができなかつたせいであるとしている。「死について」では、杜子春は、道士が不死の薬を準備できるように、幻覚の状態で何を見ようとも、沈黙の掟を遵守するよう求められる。杜は、彼の妻と自分自身が拷問にかけられるのを見つめながらも、話さないでいることに成功する。しかしながら、自分自身が、唾の女性に生まれ変わることになり、夫が妻の沈黙に飽き飽きして彼らの息子を傷つけようとしたとき、杜は叫び声をあげてしまう。杜は規則をやぶつてしまったので、人類は永遠に死ぬべき運命となったのである。そのテーマは、「ふただび死について」で繰り返される。トリックスターのウイは、男性にも女性にも不滅の命を授けることになる心臓を夜にねくねと出てくる光景がおかしと笑った(二二二)。その笑い声でヒナは目を覚まし、瞳を閉じてウイを殺してしまふ。

沈黙すべしという規則はブランチン・ジョン労働者たちに「死にたくなくなるほどの不快感」を引き起こすのであるが、一つの民話では死ぬべき運命を招き入れることになるのが発話なのである。三つの節を平行的に置くことで、キングストンは、声を出すことの禁止を命じたり、宗教の名の下に女性の従属を確保する家父長制寓話の正体を暴露していく。相変わらず、チャイナマンに対する彼女の共感(フェミニスト的な切れ味を帯びている。特に、バク・グーン⁽²⁾の物語は、杜の物語の性的な非対称性を明らかにし

ている。杜の物語はタン・アオの神話のように、多くの女性が感じてきたことを男性にも感じさせることによって、家長制の道徳規範に対して異化効果を發揮していく。杜が転生するとき、神々も女神たちも、彼が女性に生まれ変わるようにしよう決心する。というのも彼は「あまりにも邪悪なので男性に生まれ変わることはできない」からだ(二一〇)。再び肉体を与えられた(女性の)杜は、最初のうちは、文字どおり唾であるために、夫になる予定の男性から褒められる。「よい妻になるのに……なぜ、話す必要があるのか？ 彼女を女性のお手本とすることしよう」(二一一)。女性の立場に置かされたタン・アオや杜やバク・グインのような男性は、サンダルウッド山脈での曾祖父がそうであったように、女性にとっても、沈黙は苦痛に満ちたものであること、そして語ることも非常に重要であることを知る。(彼らはこのような意外な新事実を決して認めなければいけません)。

このようにエンタータイズされたコンテクストにおいて、道士の沈黙すべしという規則が女性としての杜によって破られていく物語は、更にアイロニツクな考察を促していく。ゴールニクが述べているように、この物語は、神の命令にイヴが従わなかったことが——これもまた(禁断の木の実を食べるといふ)口が犯したものであるが——世界に死ぬべき運命をもたらすという聖書の墮落の話を思い起こさせる。男性としての杜は、並々ならぬ挑発にもかかわらず、発話の誘惑に負けないでいらるが、女性としての杜は、すぐにその試練に失敗する。このように中国の寓話は、女性は男性よりも意志が弱いといふことを表面上は強める。しかしながら、子供を傷つけられる場面で、母が呼び声をあげることは決して弱さではない。それどころか、「母の愛は……男性(女性としての杜)でさえ学ばなければならぬ感情である」(ゴールニク二一九六)。「邪悪な」杜は、彼の性が女性へと変化したことによつて

再生したのであった。多様な家長制宗教が救済のために感情を捨てることが必要であると唱道するが、それよりも人間愛の方が優越であることを、杜が経験する母としての不安が立証している。道士の要求は、サガワラ僧侶の極端な禁欲主義と似ていなくもない——彼自身の子供も含む他の人間への無関心を決め込む宗教的情熱である。ヤモトとキングストンの「伝説」はどちらも、男性は精神性を重んじて女性に情緒に走るといった伝統的思考の階層性が偽りであることを示している。

『アメリカの中国人』は「始めに言葉ありき」という聖書の創世記からの系譜を覆していく。『アメリカの中国人』の始めに(男性の)沈黙ありきだったのである。大部分が、女性のトーク・ストーリーから作り上げられたテクストは、『チャイナタウンの女武者』とともに、男性たちが外部から強制されたり、彼らが自ら課した沈黙に対する抵抗の書であり、キングストンが過去を再構築する際の手助けとなったおしゃべり好きな女性たちに密かに捧げる書である。著者によつて、再生産され再成型された女性の言葉は、中国系アメリカ人の先祖の不滅性を確保するものである。沈黙を永遠の生と同一視し、発話を死と同一視する一つの神話に語られていくのである。キヤロル・ノイバウエルが指摘しているように、『アメリカの中国人』を書く仕事は、前作で取り組んだ仕事よりもずっと困難であつたと思われる。『チャイナタウンの女武者』で、キングストンは大いに中国の民話や伝説を頼みとしたけれども、彼女は、ほぼ無限と言えらるほどの豊かな背景的題材を、彼女の母であるグレイヴ・オキッドという形で所有していたことは明らかである。母は「トーク・ストーリー」という技巧をマスタリーしていた人

結びに置かれた語り手の質問は——中国人男性がアメリカ人として承認される機会について、憂鬱な思いをいだいて考えているのだが——複数民族社会と想定されているアメリカ神話のうそをあばいている。中国での自分の過去の絆を断ち切ってしまうと、パパはくよくよ考え込むことしかない現在に身を委ねている。パパの自虐の思いは、アメリカの学校で味わう娘の思いに類似している。父も娘も同じように、「本物のアメリカ人」になろうと高い代償を払っているのである。

しかしながら、父とは違って、娘は自分のエスニックな誇りと声を取り戻していく。今や大人になった彼女は自分の先祖の過去を掘り起こしたいと思ひ、父に、彼の話をしたいと催促する。

私があなたに望むことは、あのような〔女性蔑視的〕のしりは、中国語では普通の言い回しにすぎ

物なのであるから。しかし、『アメリカの中国人』に関しては、家族史の最も明確な源泉は彼女の父親であるが、彼は沈黙の人であった……最も身近で、潜在的には貴重な目撃者が押し黙っていたので、キングストンは、明らかに限界があると知りつつ、自分自身の記憶に頼らざるを得なかったのである。(二八)

沈黙の権化であったパパは、アメリカでは自分自身を包む鎧として、沈黙を利用して、帰化した国で去勢化されることへの自己嫌悪を吐き出すかのようになり、女性についての猥褻な言葉を吐く以外に、パパはほとんどしゃべろうとしない。彼の気性は他の男性の祖先たちとは、はつきりと異なっている。ク・グーンとアー・グーンも、「白人鬼」によって少なからず虐められ抑圧されているけれども、トク・ストリーや想像的な言い訳をおして自己主張し続けていく。それに比べて、パパは、自分自身の声ばかりでなく、ユーマアさえも失っている。その違いの根は、新しい国でのこれら祖先の男性たちに筆者が与えたさまざまな属性にあるのかもしれない。他の二人の祖父は、いつか中国に帰ろうと自覚している一時滞在者であるのに対し、パパはアメリカに留まろうとしている。永住するということ、結局のところ、残酷な自己回答を必然的に伴うのである。

パパのアメリカに対する幻滅は、彼の精神的視野を縮めてしまったように見える。自分がニューヨーク公立図書館の前の階段で踊っているフレッド・アステアであると想像した男なのだ。語り手は、父が「気分も軽やか」に、愛情に満ちた様子で、子供たち一人一人のために、トンボから「飛行機」を作ってくれた時のことを覚えている(二二)。しかし、世間の方は彼を機嫌良く待遇しない。彼は、仲間の中

危険なものになるかのどちらかとなる。

あなた、わずかな言葉と沈黙で語る。物語もない。過去もない。中国もない。あなたには中国人のよ

うに見えそして中国語でしゃべる人にすぎない。中国服姿の写真も、中国の景色を背景にした写真もない……あなたは、中国の過去を忘れることで本物のアメリカ人になる機会を私たちに与えているつもりですか？(二四)

国人男性も含め、あらゆる肌の色の人々に騙される。そして、ギャンブルハウスの仕事も失ってしまう。次第に、彼は長い鬱状態へと沈んでいく。中国は思いつくには、あまりにも苦痛に満ちたものになるか

ないと教えてくれることなのです。私が女性であることにうんざりさせるつもりではなかつたのだと……あなたに叫び声やのしりの言葉を吐かせるものは何なのか、あなたが何も言わないとき何を考えているのか、私は知りたいのです……あなたの沈黙とわずかな言葉から私が推察したことを話しますので、間違っていたら、そう言ってください。もし、私が誤解しているなら、今度はあなたが本当の物語を語る番なのです。(一四一五)

ここに織り合されているのは、苦痛に満ちた嘆願と共感を抱いた理解であり、フェミニスト的な怒りと押し黙った父に対する(いまやはつきりと発話された)娘の同情である。

語り手の父への頓呼法的な呼びかけ(アポストロフ)は、(沈黙と発話への)二重の恭順な姿勢を記す二重の声の手法を思い起こさせる。その手法は、事実と加工された細部の綱目をからませていく一つの言説をも予見する。『チャイナタウンの女武者』では、グレイヴ・オーキッドが語ることを禁じたことがマクシリンに名のない叔母さんの物語を想像するように駆り立てるのであり、この小説においても、父の寡黙さが娘に父の人生を創作するように駆り立てる。同様に、白人のアメリカ史からチャイナメンが排除されてきたことで、乏しいながらも人手でできる資料を外挿法的に援用していくことによつて、語り手は駆り立てられるようにオルタナティブな歴史を創り出す。逆に言えば、芸術ならばある「リアルな」語りを揺り動かすことができるのだらう。語り手が差し出さした挑発によつて父から言葉を引き出させることに成功したと、キングストンは次のように明かしている。「海賊(中国語)版の『アメリカの中国人』には、かなり広い余白があつたので、父は、その余白に筆による美しい書体で

うになつている。

(一九九二三)。
それに対し、語り手が過去をさかのぼつて調べていくという作業は、彼女が一般に信じられている情報に対して強い不信感を抱いており、伝統的な歴史家の一面的な知識を提供することは避けようとして決意して取り組んでいるために、複雑なものになつている。彼女の母が「本当の物語」と「ただの物語」とを区別しようとしなかつた結果、子供の頃に身につけた懷疑主義は、いまや、世の中では「歴史」と思われているものや広く受け入れられた知識全般に適用されていく。かつて子供のときに感じた困難さは大人になつたときの用心深さへと進化しているので、「事実」を当たり前のこととして受け入れないよ

このような語り手の特徴は、「グリーン・スワンプの沼男」と呼ばれる節にはつきりとみとれる。語り手は、一九七五年にフロリダ州である中国人男性が蚊の群生する沼地で何ヶ月も隠れていたあとで逮捕されたという記事を新聞で読む。中国人の通訳の助けを借りて、警官は、この沼男が台湾にいる人の子供たちを養うために、リベリアの貨物船で働いていたと知ることになつた。彼は、水夫仲間がタシバにある精神病院に彼を収容しようとする、グリーン・スワンプに逃げ込んで抵抗した。アメリカの国境警備隊が台湾に送り返すことを決めたとき、彼は刑務所で首つり自殺した。

しかし、新聞に報告されている事実の表層上の「真実」を読んでも、語り手は習慣となつた詮索を止めようとしない。詮索を止めるどころか、その物語の語り直しに必要な手がかりを差し挟み、その男は本当に狂つていたのかどうかと読者に懐疑の念を抱かせる。彼が捕らえられる前に、住人たちは、他の

人が彼に近づくと「あの男は、外国語で話されているような奇妙な騒音をたてていた」(二三二)と報告していた。しかし、通訳が必要であるということは、その男は外国語で話していたということを意味する。彼が中国人の通訳に話した物語は、主に、彼の以前の雇い主によって追認されたものだ。他の細部描写に関してもさらに公式見解に疑問を投げかけていく。最初のうち、警官は「人食い動物が沼に住んでいたので、人間が沈んでしまうことなく休める場所ほとんどなかった」(二三一)として住民の目撃報告を疑った。他の保安官たちも「誰も沼に住むことなどできやしない。蚊の大群だけでも、彼を沼から追い出すのに十分なくらいだ」(二三二)と結論つけた。やがて、その男が発見されると、彼はまねに見る創意工夫に富んだ人であったことが立証される。

最後に、沼男の写真も公式見解に疑義を差し挟むことになる。ノイバウエルが述べているように、語り手の「注意深い観察眼は、重要な細部を見抜いていく——たくしこんだシャツの裾、白い下着、短い髪は、グリーン・スワンプに隠れていたところを邪魔されたので、一時的にまごついているのかもしれないが、その男は決して『凶暴』ではない」(三〇)のだ。語り手は、家の近くで起きた似たような出来事でのエピソードを結んでいる。「私たちの近くの沼にも沼男がいたが、彼は黒人だったが、彼は黒人だつたにすぎない……新聞は、彼が気違いだと書いていた。警察は長い間彼を捜索中であつたと新聞では説明していたが、私たちは毎日、彼の姿を見ていた」(二三三)。語り手にとっては無害な人に見える二人の有色の男性のエピソードを並列することで、狂気とは解釈の問題なのかもしれないこと、そして皮膚の色は公式見解にある種の役割を果たすのかもしれないということが示唆されている。この男性たちには、人の目につかないように隠れていたという理由が確かにあるのだから。

チャイナムンの「表象」のうち、もつとずつとひどい歪みは、アメリカの年代記に存在すらしていないことである。語り手の父方の祖父であるアー・グーンは、十九世紀に大陸横断鉄道建設現場で働いた。彼は、家族のアルバムに集められた何枚かのスナップ写真には写されているが、鉄道建設の完成を祝って取られた歴史的照片には、中国人労働者は誰一人写っていない。「白人鬼が写真撮影でポーズをとっている間に、チャイナムンは方々に散ってしまった。その場に留まるのは危険だつたからだ。すでに追放が始まっていた。鉄道写真にはアー・グーンの姿はないのである」(二四五)。最後の文は、チャイナムンが甚だしく歴史から消されている事実を簡潔で控え目な表現でとらえている。命がけで山脈に穴を開けた、これらの(『アメリカという国を』一つに東ねて建設した祖先たち)は(二四六)、彼らを出させる目に見える記録もなまま追ひ払われたのである。様々な男性祖先の生き様についてのキングストンの想像力に富んだ描写は、このように歴史では彼らに関する描写が不正確であり不十分であるというキングストンの中で読まれるべきなのである。

キングストンのトーク・ストリーが裏をかこうとしている公的歴史に支配的な声の見本は、『アメリカの中国人』の「関係法」(二五二―五九)と題された節に再現されている。作品の中ほどに置かれたこの節は、ほとんど何の解説もなく、一八六八年のバリンゲイム条約から一九七八年の移民法にいたるまでの中国人に関わる様々な合衆国の制定法を列挙している。これらの法の大部分は、明からさまでに中国人を差別したものである。「一八七八年……『中国人、モソゴル人、インディア人』は何人たりとも法廷で『白人男性に対し有利になる証言も、不利になる証言』もできない……一九二四年、中国人女性と結婚したアメリカ人は誰でもその市民権を失ひ、アメリカ女性と結婚した中国人男性は誰でも

れそのアメリカ女性の市民権を失わしむる」(二五三—二五六)。合憲であると承認されて、これらの制定法はチャイナムを従属種へと貶めていく効力を發揮した。ハワいの畑や鉄道建設現場でのチャイナムを描くキングストンのスケッチは「事実に基づく」ものではないかもしれないが、無慈悲な法律に記されている格下げされたイメージより間違いない現実である。

同様に、アヘンを吸って幻覚に陥ってしまったバク・グーンの体験は支配者である白人の父の法と好対照をなす。中国からハワイにくるまでの荒れた航海の途中で、バク・グーンは退屈さや吐き気、ノスタルジアから解放されようとしてアヘンを吸う。吸ったあとで見た幻覚の中で、自分がすべての人とすべてのものと密接な関係で結びついていると感ずる。「チャイナム人は橋や道路を造るが、その時、我々の手やひれや前足や触角や翼があるかのように感じるのと同様の確かさで、生きとし生けるものすべてを結びつける驚異的な黄金の電気の輪がすでに存在している……甲板にいる鬼たちでさえ光りを放つていた」(九五)。パイプを吸って見たこの夢は、リアリティから三重にずれていて三重の錯覚に基づいているものである。第一に、深い親和関係というのは、ただの錯覚にすぎない。もつと辛辣に言えば、その錯覚はバク・グーンがハワいのگرانテーションで知ることになるリアリティとは明確なコントラストを成す。ハワイで、彼は「白人鬼」に搾取されるばかりでなく、彼と同じ民族の人々にも騙される。最後に、その夢は語り手によって再構築されたものである。しかし、そのエピソードは、非情なりアリナイを非難し、著者自身の平和主義的な世界観と合致するエリートピア的ヴァイジジョンを効果的に提示している。

反戦のモチーフが——当時のアメリカ政府の政策に逆らうものでもあるが——この小説ではずっと繰

り返される。最も注目すべきは、「ヴェトナムの弟」という最後の普通の長さの章である。中国系アメリカ人であることで、語り手の弟はとりわけヴェトナム戦争でまごつくことになる。アメリカの一般人の想像では、中国系アメリカ人の軍人と他のアメリカ人の軍人とのイメージがどれほど隔たっているかを語り手は指摘する。「グラックホーク」(連合軍パイロット飛行隊についての戦争漫画シリーズ)に登場する中国人キャラクターの描写を語り手は思い出す。「チャョップ・チョップだけが、青と黒のパイロットの制服を着用していなかったグラックホークであった……彼は、ブーツのかわりにスリッパを履き、裾からはみ出した下着が見えるバジヤを着て、白いソックスやエプロンを身につけていた。肉切り包丁を手に持っていて、一九一一年に中国人がやめてしまったはずの弁髪をしていた」(二七四)。他のグラックホークたちは、「普通の人間らしく」描かれているのに対し、チャョップ・チョップは「漫画のように見えた」。印刷体でも映像メディアでも普及されたそのような不快なチャイナム人のイメージでは、弟は、たぶん合衆国の軍隊に所属していることに強い自負心を持ってなかつたであろう。

さらに困ったことには、弟は外見上、敵とほとんど見分けがつかない。「黄色人種の戦争で戦うのに黄色人種を送るつもりなのだ」と彼は瞑想する(二八三)。しかしながら、極東での彼の経験は、そこでこの恐怖にもかわらず、あらゆる人やあらゆるものとの絆を感じるバク・グーンのヴァイジジョンを補完する。その兵士は、その代わりとして親族と敵の区分が崩壊する一連の悪夢に取り憑かれる。

彼は剣を取り、切つて捨てながら、敵の中に切り込んでいく。敵は輪になつたり丸まつたりして、ばらばらになつた。彼は齒をくいしばり、狂乱状態となり、手当たりしだいに人間の肉なら何でも切り

つけた。その手を休めてみて、彼は犠牲者も切りつけてしまったことに気づくのだ。彼自身の親戚であつた。数珠つなぎになつてゐる人々の顔は、彼自身の家族の顔である。中国人の顔、中国人の目、鼻、そして頬骨。彼は恐ろしくなつて目を覚ました。(二九一)

この悪夢は間接的にバク・グリンのエピフアニーを確認するものだ。世界中の人々との深い絆を認めることは、友と敵との二分法的な対立を取り消すことであり、最終的には、いかなる戦争であっても自己敗北的な結果をもたらすのだと認識することになるからである。弟の悪夢は、マキシムが語つた女武者のスリル満点のフアンタジーとは全く異なるものだ。第一作で報復の念に取り憑かれていた語り手は、二作目では平和主義者になつたのである。

キングストンの民族詩は、正確さを欠くとか偽証であるとさえ非難されて誤解されることが多かつたので、詳しく議論する価値があろう。歴史や記憶や言語の限界に気づいて、著者はただ過去について、彼女自身が修正したヴァイジヨン⁽⁵⁾を提示しているだけなのである。『アメリカの中国人』では、たとへ沈黙を暴き出して非難するときさえも、彼女は沈黙をその言葉の最大限の意味において象徴的に埋めていく。語り手は、早い段階で、父や祖父たちの物語の大部分は、誤りに陥りがちな回想や証明できない証拠に基づくものであると認めている。中国自体が全くの彼女自身の創作なのである、と我々に告げている。

ありのままの事実と純然たる虚構という区分を曖昧にしていくトク・ストリーに頼りつつ、彼女は過去の取り戻し、さらなる断固とした姿勢で異なる未来を構想するという二つの重要な目的を達成する。キングストンが祖先を再構築していこうとする第一の手法は、類型学に似ている。アメリカで弟の誕生を自撃してしたので、彼女は中国での父の誕生場面を思い描くことができる。一人の教師として腹立たしい思いをした弟の経験を知っていたので(たぶん彼女自身のものである)、彼女は中国の村で元教師であつた父についても同様の状況を作り上げる。キングストンは、父が若かつたときの人生を再構築する際に、中国の民話から細部を織り込んでいくのであるが、中国での場面とアメリカの場面は驚くほど類似している⁽⁵⁾。

キングストンが物語を語っていく第二の手法は、東洋と西洋の双方の寓話を語り直していくことを通じてなのだ。その方法は中国系アメリカ人の批評家たちにかんがひの騒動を巻き起こすことになつた。文学的引喩を用いたり古典的題材を作り直したりすることは、すでに確立された文学実践なのだ。キングストンは、題材を改竄したとして非難の攻撃に晒されることになつたのである。非難は中国の民話を粗悪化したというものから明らかな剽窃であるといふものまで及ぶ。ミルトンやジョイス、ウルブ

クリスタ・ウルフのような作家たちが、古典の題材を自由に作り直していることは、読者の多くが古典や聖書に慣れ親しんでいるので明白であろう。しかし、大部分のアメリカ人読者は中国の伝説を知らないうで、こっそりと中国の伝説を姦奪させていくにあたって、キングストンが読者を誤解させるという罪を犯していると申し立てられる。読者は、中国の伝説に全く未熟で無知なので、キングストンの再話をオリジナルと取り違えてしまうことになるであらうと。そのような二重基準は、知らず知らずのうちをヨーロッパ系アメリカ作家や読者を特権化していく。作家の想像力は潜在的な読者の予備知識によつて制限されるべきではないし、たとえ、キングストンのテクストを豊かなものにする多くの文学的引喩が読者にわからなくても、作者のせいではない。学者や批評家は自分たちに馴染みのない文学への言及であっても、見きわめていく責任を負わなければならない。(例えば、チュア一九九一、S・ウオン一九九一を参照)。

古典的な権威とか民族的純度とか東洋対西洋の二分法を尊重するといった思考は、キングストンには特に相容れないものであり、両方のテクストで伝統的な境界に意識的に反抗している。オリジナルの物語に忠実であれと要求することは、それとは方向性が異なる彼女の目的に反するばかりでなく、最も革新的な——そして比類なく中国系アメリカ人的である——ナラティブの戦略を妨げてしまうことにもなる。その戦略こそが、中国の話のアメリカ化であり、欧米の話の中国化なのである。キングストンは、西洋の伝説ではなく中国の伝説だけを敢えて作り直そうとしていると論じる批評家たちの考えとは逆に、実は彼女はどちらの伝統も豊かに自由に書き換えている。男性将校の物語（その母親は、彼女の背中に言葉を彫っている）をフア・アムランの物語と融合し、タン・アオの神話を北米に移し替えたよ

うに、彼女はミクス王やロビンソン・クルソーの物語を中国の物語に作り変えている。歴史的資料を改訂したり、粉飾したりする際に、彼女はアメリカと中国の文学伝統のどちらにも先例を見つけ出している。前者はウイリアム・カロス・ウイリアムズの『アメリカン・グレインの中に』⁴であり、『アメリカの中国人』⁵は一般にその続編と認められており（パニニ五）、後者は羅貫中の『三国志演義』⁶である。（彩り豊かな中国の叙事詩は、むしろ淡々と記された年代記を基にしている）。そのようなコードの混淆には、文化相互作用が最も活発に行われるので、相当の知識と創意工夫の才を必要とする。もし、ミルトンが、彼の博学を示す引喩のゆえに崇拜され、古典や聖書などの文献からの書き換えた境目が見えないと賞賛されてきたのであれば、二つのもとと異質な文学伝統を操ることのできる著者が「文化的信憑性」の名において評価を落とされるべきではない。

語り手が過去を再創作する三つ目の方法は、祖先の物語についての多様で、ときには相互排他的である作り替への話を幾つか提示していくことである。パバがなかなか沈黙を破らうとせず、アインライの歴史を埋没させようとする編集上の力が振るわれがちな社会では、創作こそ語り手が明白に頼みとする手段である。しかし、著者はこの沈黙をも元テクストとして利用し、家族史を中国系アメリカ人の集合的叙事詩へと変容させ、どれか一つの権威を信頼するのではなく多様な可能性を呼び醒ますのだ。例えば、父のアメリカへの入国に、彼女は二つの全く異なる物語を提示している。非合法的な話では、父はニューヨーク湾に木柙の箱の中に身を隠して密入国する。しかしながら、その生き活きとした描写も反駁の言葉で終わる。「もちろん、父がそんな風にやってくることなどできっこなかったらう」（五三）と。合法的な話では、エンジェル島の移民局でいつまでも待たされた父は、そこで壁に詩を彫って、同

胞たちに「金山の夢」を諦めないように激励している。(そのような詩が実際、エングスタンの拘留所の壁に数多く彫り刻まれていた。)父と同じような男性が合衆国に入国しようとした方法についていろいろ想像していくことによって、キングストンは家族メンバーを原型へと変容させる。父のアメリカ入国に関する経緯を含み込んでいく。個人々の名前の代わりに、「父」、「祖父」そして「曾祖父」といった敬称を用いることによつて、語り手は、個別の家族メンバーを原型へと変容させる。父のアメリカ入国に関する二つの話とともに、チャイナメンに与えられた非人間的な扱いを表すものなのだ。いったん鉄道建設のための労働者が必要なくなれば、チャイナメンがアメリカに不法入国しようとする決意を衰えさせるために、また好まざる彼らを長く滞在させないために、そのような扱いをしたのであった。トリンは「真実は構築物であると同時にそれを超えるものである。語り手が物語の真实性に疑義を申し立て、多様な解答を提示しながらそのバランスは取られるのである」(一九九一、二二)と書いている。キングストンの「多様な解答」によつて、単一の事実説明が提示できることよりも、豊かでそれゆえに真実により近い歴史的状况を思い描くことが可能になるのである。

最後に、トック・ストリーは、純然たるフアンタジーへの移行を可能にする(おまよひ、バック・グーンがアヘンを吸って見た夢のように)。チャイナメンを歴史の忘却から回復させるというキングストンの衝動は、抑圧的な社会規則によつて束縛されることのないオルターナティブな世界を映し出していこうとする同様に強い願望によつて相殺される。これは『アメリカの中国人』における歴史家としての彼女の役割を強調してきた批評家たちが見逃しがちであった観点である。たとえ彼女に系統学的に正確に描写したいという気持ちがあつたとしても、歴史を修正したいという欲望のほうに、彼女自身の夢

を彼女の「先駆者たち」へと投影させていくのである。キングストンは、他の女性作家たち(例えば、シャロット・パーキンズ・ギルマン、ドリス・レスリング、ジヨアンナ・ラス)がサイエンス・フィクションや歴史的ロマンス、あるいはエートピア小説を「あり得たはずの世界を視覚化すること」のために用いるのと同じ方法でフアンタジーを利用している(『ユアレスス一九八五b』一七九)。

幾多のチャイナウイメン/チャイナメンにまつわる物語は、語り直される前に、熱心に耳を傾けようとする語り手によつて「聞かれ」なければならなかつたように、トック・ストリーは——戦略として——も伝統としても——聞き手の注目に基づくものである。『アメリカの中国人』はそれゆえに適切にも「聞く」という節で結ばれている。第一作では(フェミニスト的な)自己表現に固執していた語り手も、この節では他者(Other/Others)の声を聞くことも同じように重要であると強調している。パーティーで、彼女は、フイリピンやメキシコ、そしてスペインなどのいろいろな場所に金山を探しにいった中国人祖先たちの多種多様な物語を告げられる。語り手がある伝説について質問すると、語り部は答えを手紙に書いて送つてくれると約束する。「よかつた」とはつとして、「これで耳を傾けてくれる青年たちを眺めていられるのだから」(三〇八)という、たぶん彼女自身の聴衆に聴くことを奨励するようなコメントで結んでいる。

この箇所を示されている聴くことの概念には、『チャイナタウンの女武者』の結末における翻訳の概念と同様に豊かな解釈の可能性がある。翻訳することも聴くこともどちらとも、一つ以上の言語が存在すること、一つ以上の物語が存在することを前提としている。このように二冊の小説を締めくくる際に、キングストンは今日フェミニストたちが直面している最も緊急な課題の一つに色々影響を与える戦略を

考え出したのだと私は思う。それは、女性と男性との間の協力はもちろんのこと、人種が異なる女性間の協力をいかに作り上げるかという課題である。

ブレイヴ・オキッドは、正気と狂気について子供たちに教えながら、「正気な人々はトク・ストリーを語るときも多様性があるのよ。狂った人々は一つの物語しか持っていないので、それを何度も繰り返し話すの」（一九八九、二五九）と説明している。母の教訓はキングストンの小説のどちらでも実行されるが、とりわけ『アメリカの中国人』の結末部で、著者は巧妙にも一つの金山の物語を複数の異なる話でずらしていく。E・サン・ジエアン・丘が指摘したように、「これらの異説のどれも特権化されないので、権威的で公式な見解を求める『私（I）』が投げかける質問は決して最終的な答えを得られない。そこで、唯一の頼みとなる方法は、聴くという美徳を認め、政治秩序の単一理論を覆すために辛抱強く行い闘いが生み出す可能性を進んで取り入れる美徳を高く評価することである」（五六〇）。

しかし、単一理論を転覆していくことは、聴くことの一つの用法にすぎない。『チャイナタウンの女武者』と『アメリカの中国人』の結末はどちらも、キングストンのフェミニスト的な好みであるオープンエンディングと多様性を反復している。さらに、翻訳することや聴くことを支持する彼女の姿勢にも同様に暗示されているのは、差異性を超えた連携への願いだである。違う言語から翻訳し、一つの物語の筋に固執せず聴くことは、平凡な視野を越えて手を差し伸べ、他者のまなざしで眺め、多様な経験に自らを解放し、相互主体的なネットワークを紡いでいくことでもある。トク・ストリーを通して連携したいという祈りは、双方のテクニクを通して耳にすることができる。『チャイナタウンの女武者』において、語り手は名のない女について次のように書いている。「彼女の人生が私自身の人生へと枝を広

げてくるのを理解できなければ、彼女は私に何の先祖としての助けも与えてはくれない」（八）と。『アメリカの中国人』においては、親族は血族関係も超えて「甲板上の鬼でさえ、光を放った」。キングストンに対する私の読みは、彼女のフェミニストでありエスニックでもある感性が互いを強化し合っていて、彼女はチャイナメンへの歴史的抑圧を暴くために、フェミニスト的な戦略を用いている。二分法も覆しているのだと提案している。彼女のフェミニズムは男性に広げていくが、中国やアメリカの家父長制に広げられたのではない。バインガルドでバイカルチエラルではあったけれども、キングストンは伝統的な題材やマスタナライザの反復に着手しているのではない。『チャイナタウンの女武者』の語り手がインタナショナルな「私（I）」を擁護しているように、『アメリカの中国人』の語り手は、結末がオープンであるような中国系アメリカ人の伝統を（脱）主張している。一つの遺産を別の遺産より優先することによって、二つの遺産を単純に混淆することによって、そして、家父長制の支配や植民地的支配から自らを解放しながら、二つの伝統の中で自分自身を回復させているのではない。アジアと西洋の神話の両方を作り直し、それによって古くからの権威を追い払い、家父長制の支配や植民地的支配から自らを解放し、二つの伝統の中で自分自身を回復させているのである。彼女は、古ぼけた規則や文化一元論的な強制力や二分法とは無関係の世界を呼び醒ますために、寓話や夢やファンタジーを再配備しているのである。

非難している。ベンジャミン・R・トンは、「白人に認められることを念頭に置いて書かれたフェミニズムの流
行にのっかった作品」(一九七二〇)と呼んでいる。否定的な批評の多くは、『チャイナタウンの女武者』を
似てきている。小説家は実際の歴史上の人物が虚構上の登場人物に話しかけるように創作する。回顧録作者は、
小説の中で描写のように、先祖の思考や会話を劇化させていく。自伝作家はドラマの技巧を利用していくこ
とで、(一族に伝わってきたこと)最も根源的な意味、魂の不可解な危機体験、形として現れない遺産さえも、
かつて出来た以上に、本質的に一言い換えれば、より真実を表せるように取り扱っていくことができるようになっ

ていく。さらに、アルフレッド・S・ウンは、『アメリカの中国人』に登場する男性人物像を「中国大衆文化
に登場する関公、劉備、張飛といった英雄たち」になぞらえて、「マキシオン・ホン・キングストンの卓越した
男武者たち」(二七)と呼んでいる。

(4) エズニナイに関わる信憑性という厄介な議論については、トリン一九八九、八九一九七、そしてウーを参照。
(5) 『チャイナタウンの女武者』を酷評するパロディにおいて、フランク・チンはこの作品の民族誌学的地位に
ついて中傷し、キングストンを「白人の自己イメージの中で、不気味で、吐き気をもよおさせるあらゆるもの
が本当は中国の的なものであるような白人の空想」(一九八四、二二)を道認する。ウー、マンチエーやチャー
リー・チャンの創作と同じ仲間であるとしている。ジェフリー・ポール・チャンは、この本を「小説として
ではなく伝記」(その本は明らかにフィクションである)(一九七七、四一)として出版したとしてクランプ社を
非難している。ベンジャミン・R・トンは、「白人に認められることを念頭に置いて書かれたフェミニズムの流
行にのっかった作品」(一九七二〇)と呼んでいる。否定的な批評の多くは、『チャイナタウンの女武者』を
似てきている。小説家は実際の歴史上の人物が虚構上の登場人物に話しかけるように創作する。回顧録作者は、
小説の中で描写のように、先祖の思考や会話を劇化させていく。自伝作家はドラマの技巧を利用していくこ
とで、(一族に伝わってきたこと)最も根源的な意味、魂の不可解な危機体験、形として現れない遺産さえも、
かつて出来た以上に、本質的に一言い換えれば、より真実を表せるように取り扱っていくことができるようになっ

(1) マキシオン・ホン・キングストンは、一九四〇年、カリフォルニア州ストックトンに生まれた。彼女は、カ
リフォルニア州立大学バークレー校を一九六二年に卒業し、現在はバークレー校で教えている。彼女の作品は、
ノンフィクション部門の全米批評家賞を獲得した『チャイナタウンの女武者』(一九七六)、ノンフィクション
部門の全米賞を獲得した『アメリカの中国人』(一九八〇)、スケッチ風散文集『ハライのひと夏』(一九八七)、
最初の小説である『トリップマスタール・モンキー』(一九八九)がある。その小説で取り上げられている問題は、
キングストンの最初の二冊の(自)伝記的虚構作品を連結する問題とはかなり違っている。本章では「ト
リップマスタール・モンキー」は扱わないことにした。

(2) この二重の衝動はエック・ウインツァグのフェミニスト的忠告と一致する。「思い出すよう努力しなさい。
あるいは、思いだせないのであれば、発明しなさい」(八九)。しかし、そのような発明という概念は、我々が
抱いている伝統的な「歴史」の概念にさらに疑義を差し向けることになる。ロバート・G・リーによれば、
「キングストンの『チャイナタウンの女武者』は、自伝的なので歴史書として扱われることを主張してはいるが、
同時に、中国系アメリカ人の歴史についての新しい領域が探求され、信憑性に関わる慣習が覆されていくこと
も要求している。信憑性に関わる慣習によって、そのような歴史は枠づけられていくのであるから」(五二)。
(3) リンダ・チン・スレッジは「家系を継続させるといふ理想が、男性性を試すための困難で『叙事詩』に描か
れているような試練に打ち勝ち力をつこの男性たちに与えている。家族の中の男性メンバーに与えられた伝統的

(15) 薬剤師が間違つてある薬を彼女の家に配達したときに、グレイヴ・オーキッドがかつと怒りだすエピソード『である』(四九一)。

的行為は男性の領域に属すからである。キングストンが『妙に勝ち取る』と踏みだすのは秘密の『父の場』

キングストンにおいては「ストリー・テリング」という社会的行為は女性の領域に属し、書くことという社会

のような「象徴的ジェンダー」が常に「社会的ジェンダー」と同一の広がりを持つとは限らない。というのも、

対話法に、話し言葉をフェルスコ中心主義と結びつける。しかし、レスリー・ラズネが指摘するように、

(14) フランス系フェミニストの多くは、パロルとエクリチュールのテリグの区別に基づき、書くことを女性的

と軍事的英雄行為との緊張関係の議論については、チャン一九〇bを参照。

然に述べられた言葉にすぎなかつたけれども、キングストンが次に出版した『アメリカの中国人』と『トリック

アスター・モンキー』では、この表現は完璧な平和主義者の表現へと進化していくことになる。フェミニズ

(13) 『チャイナタウンの女武者』では、好戦的な英雄行為を描く伝統的なコトへの幻滅感を示すこの表現は偶

参照。

(12) 自己概念について、日本人とアメリカ人では同じような差異があることについては、コンドクニ六十三を

参照。

議論も参照。

のバイリンガルに対する評価に見下したような態度があると思える。これから分析していくように、キング

スト自身は、バイリンガルという遺産を抛り所としながら、独特のスタイルと見方を創り出していることし

ている。「バイリンガリズムをフェミニスト的な「超絶的実践」(三三七六)の一例と見なすイエガーの

(11) しかしながら、私は二つの観点から、レイコフに同意できない。第一に、レイコフが「中性的な言語」を特

権化していることに、私は反対である。そのような言語は一元論的科学的言説の匂いがする。第二に、レイコ

フのバイリンガルに対する評価に見下したような態度があると思える。これから分析していくように、キング

スト自身は、バイリンガルという遺産を抛り所としながら、独特のスタイルと見方を創り出していることし

ている。「バイリンガリズムをフェミニスト的な「超絶的実践」(三三七六)の一例と見なすイエガーの

可された母のような中国の女性たちの間でそのような伝統が続いていたことを描写しているのである(九一)。

という強い伝統が生ずることになった。キングストンは、長期間に渡る排斥期間に合衆国に入国することが許

を背負わされた。それゆえに、広東人たちの間では、女性だけで自己充足してかつ強引にやっつけていかれるのだ

(10) スレツジが述べているように、「広東省の女性性、村の男性が外国に移民したあと、家族全体の管理責任

上の命』で、多くの文化一元論的な教育基準が今日まで続いていると指摘している。

(9) IQテストの仕組みを全て暴露する批判については、グループを参照。リチャード・ロドリゲスは、自伝

『記憶への渴望』において、同じように、問題児と診断されたことを告白している。アイク・ロイスは、『境界

する織り糸から紡がれるもっと大きな芸術的織物の一部を形成している。

(8) 言語能力や言語を用いることの困難さを、巧妙にも、巧妙にも、同じ原因としてこのエピソードは、実際は、交差

は、彼女は、あらゆる人種差別にも隠蔽された人種差別にも、もっとはつきり批判している。

出版社のまなざしに警戒していたのかもしれない。『アメリカの中国人』と『トリックアスター・モンキー』で

えられるように、キングストンは、最初の作品である『チャイナタウンの女武者』を書くにあたって、主流の

れない。『伝説』の微妙な語り、白人のまなざしに対するヤンモトの感受性を部分的には反映していると考え

(7) キングストンは、芸術的理由とともに政治的理由もあって、支配文化に対する批判を覆い隠してきたのかも

(6) マキシントンとキングストンとの区別については、私のイントロダクションの注8を参照。

てきたのである」と書いている(一九八二四)。イーキンも参照。

- (16) しながら、グレイザ・オキッドの妹のアン・オキッドの症例のように、個人の気質と外部からの解釈とが一致しなければ、実際に、狂気を引き出してしまふこともあり得よう。アン・オキッドは従順な中国人妻の役割を演じてきたが、彼女もまた、外から押しつけられたアインシュタインの犠牲者となつてしまふ。「東の女帝」(二四三)の役割を押しつけようとするホヌの姉と彼女のことを「ずいぶん前に「彼が」読んだ本の中の」(二五四)登場人物とみなす西洋化された夫の間で身動きがとれなくなるのである。グレイザ・オキッドもアン・オキッドの夫も、アン・オキッド自身の気持ちには少しも注意を払っていない。他人が作った虚構的な役割に安住することができず、アン・オキッドは次第にリアリティとの接点を失っていく。(17)「翻訳」という言葉に私の注意を喚起してくれたナンシー・K・ミラーに感謝する。
- (18) 文学的伝統と口承の伝統という区分自体、中国文学という観点からは疑わしい。その多くは「アラ・ムランの歌」も含め)記憶に留められたものが書き記されたのである。
- (19) 自らのエスニック・コミュニティを離れたいと思つと同時に回帰したいというこの二重の願望は、サンドラ・シスネロス著『アングロ通りの家』の語り手であるエスプランザによつても表現されている。「いつか、私は自分の鞆に本と紙を詰めることになるだろう。いつか、アングロ道りにさようならを言うだろう。私の意志はとても堅いので、ここに永遠に閉じ込めておくことはできないのだ。いつか、私は出て行こう。友達や隣人たちは……私は戻ってくるために出て行ったのだと分らないだろう」(一〇一一)。どちらの例でも、回帰は書くことを通して象徴的に済むられる。女性の小説における女のコミュニティという回帰的なモチーフについては、アトバックも参照。
- (20) 「チャイナメン (Chinamen)」の含意は時間とともに変化してきた。「中国系アメリカ人の歴史の初期には、男性たちは、自分たち自身のことを、ちょうど、他の新参者たちが『イングリッシュメン』とか『フレンチメン』と呼んだのと同じように『チャイナメン』と呼んだ。その言葉は彼らを中国市民のままでいる『中国人』と彼らと区別し、また彼らがアメリカ人として認められていないことも示していた。のちに、当然のことながら、その言葉は侮蔑となった。今日では、若い世代の中国系アメリカ人たちは、その言葉が政治的、歴史的な意味において正確であるので、その言葉を取り戻し、辱めるためではなく威厳をもつて用いられるよう要求している」(キンガストン一九七八、三七)。一九九〇年のビル・モイヤーズとのテレビのインタヴューで、キンガストンは、その言葉を二語「チャイナメン (Chinamen)」に分け、強強格のリズムを持つ広東語の性質をまねるとともに、彼女の使い方と伝統的な吐物とを区別すると説明した。キンガストンのタイトルの進化については、グレイザ・リット (四八二―八四) も参照。
- (21) 『鏡花縁』の翻訳者であるリン・タイは、その本を「社会的論評であり人間風刺の本」であり、「グリム童話」「ガリヴァー旅行記」「インツァ寓話」「オデッセイ」に、適度に「不思議の国のアリス」を合成したような性質を持っている」(六)と呼んだ。女の国の節はヴァージニア・ウルフの『オーランド』、ジェーン・バインズの『夜の森』やモニク・ウイテイングの『グリラ』とも響き合っている。中国の作品では女たちによつて捕らえられるのはタン・アオではなく、彼の従兄弟のリン・チャンであり、婚礼の夜、女王との性的関係を避けらるために、リンは性的不能であるかのようなふりをする。
- (22) アルフレッド・S・ウオンは『アメリカの中国人』の「明確な三つの去勢化パターン」を、一、社会で支持されているパトナールレベルでの格下げ。二、集団的利害グループによつて引き起こされる集団的奴隷化。三、法律で認可される性的剥奪」(二八)に類型化している。

- (33) そのような偏見を抱いているのはアメリカ人だけではない。語り手の母方の祖父の第三夫人として、中国に連れていかれた黒人女性の痛ましい経験について、語り手は述べている。「中国に来たとき、彼女は『モンキーのようにわけのわからないことをべらべらしゃべった』が、誰も彼女に返答しなかった。『いずれにせよ、彼女がしゃべっていることを誰がわかるというのか?』そこで、彼女は何も言わなくなってしまった」(八六)。この出来事も沼男の出来事も、他者に押しつけたおぞましい見方は、人種的、言語的差異性と関連していること
- (32) キングストンが聖書の始まりのせりふを利用してしていることに気づかせてくれたノマ・アラルコンに感謝する。こうと読める(リ・フアン・ニー、チャンの翻訳)。
- (31) 夫の性差別的発言は両方とも中国のオリジナル版に基づいている。二つ目の発言を逐語訳すれば「高潔な妻に発語の必要性などあるだろうか? 彼女〔社〕をおしゃべりな〔すなわちがみがみ言〕女性の美例としてオリジナル版において、次第に父を怒らせることになるのは、しゃべらない妻ではなく、息子の沈黙の方である。
- (30) この物語は、リ・フアン他編『太平広記』(二〇九一二)の中の中国のおどぎ話「杜子春伝」に基づく。「カンタベリ物語」、九五―一八二)。
- では、女性の沈黙遵守の規則に逆らって、夫の耳についての秘密をもらしてしまうのはミスター王の妻である。が、その場所から生えた雑草が風にその秘密をささやく(『婆身譚』、一一七四―一九三)。「パースの女房の話」ののだが、その床屋は秘密を黙っていられず、地面の穴に向かって叫ぶ。彼はその穴をあけて埋めるのだ(29) オウイデウスのアポロは、ロバの耳を与えて、ミスター王を罰する。王の恥辱は彼の床屋だけが知っていた。私のお嬢さんの学生のスレイチェル・リーに感謝する。

- (28) キングストンが、領土的征服をレイプの一形式として着目し、いかに性的イメージを用いているのか指摘しに鋼をたいたことと比較されるかもしれない(ラット一八三)。
- (27) バク・グーンごまかしは、白人監督者の注意を逸らすことをコード化する戦略の一例であり(ラドナーとランサー四一七―一八)、アフリカ系アメリカ人の奴隷たちが「あゝ自由よ」のような大胆な歌を隠蔽するため(26) アジア系アメリカ人研究の進展のおかげで、事態はここ数十年で変化してきている。初期の中国人移民の歴史についての詳細な説明に関しては、スー・チヨン・チャン(一九八六―一九九一)、チェン、ライ他、二一と二一、フアンを参照。
- (25) この類似に私の注意を向けてくれたゼドリック・ロビンソンに感謝する。黒人男性のリンチの正当化につながった「黒人レイプと神話」が広められていくときに果たした白人女性の共犯関係については、例えば、アンジェラ・デイヴィスを参照。
- (24) 並列というコード化の技巧については、第二章の「十七文字」における私の議論を参照。「死霊の愛人」と「不死について」についての洞察と、「インクステート」という用語の用い方については、私の学生のシェー・メイ・シーに感謝する。
- (23) キングストンはインタヴァエーで、アジア系アメリカ人は、あまりにも真面目すぎてエーモアのセンスを欠いているというステレオタイプに意識的に抗って書いているのだと暴露している。「中国人や中国系アメリカ人がどれほど騒々しい人々なのかを示そうとして、強調しすぎてしまっただかもしれないと思います……また実際、『アメリカの中国人』と『トリックスター・モンキー』では、そのような特徴を強調するのに本当に深入りしてしまっただ(フイッシュキン七八)。

を暗示している。

- (34) 第二次世界大戦中の白人が描いた表象では、日本人も同様にひどい描き方をされた。ジョイ・コガワは戦争中の漫画本では「ジャップはからし色の顔と出っ歯だ(一〇一)」とされたと『失われた祖国』の中で書きとめている。しかし、これらの表象は、少なくとも「沈黙」に対する描写であった。アメリカ大衆文化におけるアジア系男性の「去勢化」についての詳細な議論は、チン・イ・チンとチャンを参照。

- (35) フレデリック・ウエイクマン・止は『アメリカの中国人』の書評で、著者が直接知っているわけではない祖先の生活を再現するために本書では繰り返し用いていると、その方法について始めて指摘した(四二)。「アメリカの中国人」の結末部分で、彼女はハウイの老人から、彼の最大の喜びは「青々とした苗木が育つていく」としてときにサトウキビ畑で働くこと(三〇六)であったと知らされたと語っている。キングストンは、たぶん、このような細部から、バック・グリンが新しいサトウキビに驚嘆する場面を再現しているのであらう。
- (36) 『アメリカの中国人』では、ロビンソン(タルソン)は、ロ・ブリン・スンになっている。彼は「大豆を育て豆腐として油を作った」(二二七)。彼は、食人種を救って、シン・カインと名づける(広東語で「フライデイズ」)。

- (37) 歴史主義者の批評家にはノイバウアー、スレッジ、ワグが含まれる。対照的に、アインザイット・リッ、サン・ジリアン、リッ、そしてコルニク(一九九二)は、キングストンが、歴史的、文学的原典を軽蔑的に用いていく方法に注意を喚起している。

訳注

- * 1 『鏡花縁』は、中国清代中期の空想的長編小説。李汝珍作。天界を追放された百人の花の精が異国に流れ着く。それを主人公・唐敖が友人の林之洋、多九公と一緒に各地を旅して探検し、中国に連れ戻すという話である。「中国版ガリバー旅行記」といわれることもあり、主人公たちは君子国、女兒国、無腸国、黒蘭国といった様々な国々を旅する。

- * 2 ギリシア神話：手に触れる物をこごとく黄金と化したフレイギアの王。

- * 3 『杜子春伝』は、中国、晩唐の伝奇小説。李復言の作。作者の小説集『続玄怪談』のなかの一編。六朝時代の杜子春という男は情けのかけらもない冷酷な放蕩者で、家財を使い果たし、道士に助けられても浪費癖が直らない。そんな自分に嫌気がさした杜子春は金鏡が幸福をもたらさないと悟り「あなたのような道士になりたい」と申し出る。すると老人は、道士になるためには並大抵の覚悟でなれるものではない、これからいかなることがあっても沈黙を守らなければならないと言って、杜子春に地獄・猛獸・悪鬼などさまざまな恐ろしい体験をさせる。地獄に落ちた杜子春は閻魔様の命令によって女に生まれ変わるか、相愛わらず道士との沈黙の約束を守り、結婚して子を産んでも喜びの声一つ発しなかつたため、怒った夫が赤ん坊を叩き殺す。妻への拷問でさえ平然と座禪していた杜子春であったが、女になった妻(杜子春)は悲鳴を上げた。杜子春が声を出したのは、母が子を思う「愛」の気持ちからであった。

『杜子春』は、中国の古典『杜子春伝』を童話化した芥川龍之介の短編小説。一九二〇年に雑誌『赤い鳥』に発

表された。芥川の杜子春は、独身の若者のイメージで描かれ、地獄で拷問を受ける人物は杜子春の母親へと変更されていく。そこで、杜子春が沈黙の約束を守れずに声を漏らしたのは、子が母を思う「孝」の気持ちからとなる。

* 4 『アメリカン・グレンインの中に』（一九二五）は散文で、アメリカ人の気質に内包される相反する二つの側面、未知の大陸にヨーロッパの価値観を押し付けようとする態度と、ヨーロッパ的精神を捨てて新大陸の独自の風土に合わせて自己を変革しようとする態度の系譜をアメリカ史に沿って著した。

* 5 『三国志演義』は、中国の明代に書かれた、後漢末・三国時代を舞台とする時代小説・通俗歴史小説である。四大客書の一つに数えられる。後漢末・三国時代を舞台とする説話や譚話は古くからあり、すでに北宋の時代には劉備と蜀漢を善玉、曹操と魏を悪役とするイメージが定着していたという記録がある。『三国志演義』は、蜀漢を正統・善玉とする譚話の潮流を維持しながらも、それまでの説話や譚話にあった極端な荒唐無稽さや歴史年代を無視した展開・要素を排し、黄巾の乱から呉の滅亡までの後漢末の重要事件と陳寿の『三国志』の扱っ範囲を収めている。「漢王朝の血を引く高潔な主人公劉備」と「王朝を支配し専横を振るう曹操」という対立軸を中心とした高い物語性、史書への精通に裏打ちされた逸話の巧みな選択と継承、白話（口語）と言いなからも洗練された文章で人気を博した。

* 6 『太平広記』は、北宋時代に成立した類書のひとつ。『太平御覧』、『文苑英華』、『冊府元龜』とあわせて四大書と称される。太宗の勅命を奉じて太平興国二年（九七七年）から翌三年にかけて編纂したもので、全五百巻、目録十巻。前漢から北宋初期までの奇談に類されるもの七十篇余りを集め、神仙・方士・名賢など九二類に分類整理しており、小説の類書としては現存する最古のものである。日本にも伝えられて翻訳・翻案され『怪談全書』が作られた。

第四章 氣遣いの沈黙——ジョイ・コガワの『失われた祖国』

を映している」と述べている(三〇)。
 ドナルド・C・ゴールニクトは、このような日系カナダ人の歴史体験のミメティックな読みには限界があると指摘した。彼は、このテクニクトは「歴史を再構築するという行為自体をフイクシヨンの創作に
 なぞらえることによつて問題にしているのだ」と述べる(一九八九、二八七-二八八)。ゴールニクト(二八八)も
 モーニナ・ジョーンズ(二二四)も間違ひなく『失われた祖国』を「史料編纂のメタ・フイクシヨン」

多くの批評家はジョイ・コガワの『失われた祖国』を言語と沈黙という二項対立のヒエラルキを用
 いて論じてきているが、この小説はまさにその二項対立を攪乱するものである。この小説に充満して
 いる沈黙に注目する批評家は、しばしば全く否定的な言葉を使つて沈黙というこのテーマを論じてい
 る。エデリス・ミルトンは、『失われた祖国』は「痛ましい沈黙について書かれた作品であり、不可避
 な状況に対して疑問を抱きしめないもの当惑しつゝそれに服従することを描いた作品」(一)である
 と言う。デイスヴィッド・ロウは、「明らかに、コミュニケーションの重要性と沈黙し続けることの危険
 性について書かれた小説である」(二)と見る。ジョイス・ウエインは、この作品は「抑圧された者た
 ちの従順な沈黙についての話」(三)であると論じる。沈黙と対照的に、言語は真実を伝える媒体とし
 て、「沈黙という悲劇」(ロウ)の解決策として、いとも簡単に受け入れられてきた。言語表現を無条件
 に是認する背後には、言葉は透明であり、『失われた祖国』自体は単なる歴史小説であるという想定が
 ある。J・R・モリタは、「この小説は必ずしもすべてが事実ではないが、歴史的真実に基づいており、
 この作品の力はそこにあるのだ」(五一六)と書いている。同じ様に、B・A・セント・アンドリュース
 も、「一つの家族とその親族の歴史であり……第二次世界大戦の戦中戦後の日系カナダ人の体験の歴史
 を映している」と述べている(三〇)。

ジョイ・コガワ、『失われた祖国』

たとなる。言葉は、地下の水流を捜し求める敵なのだ。

た言葉は一つもない。私の耳に届くのはただ音だけだ。白い音。言葉は落下すると、地上のあは
 石が割れて語ることがないならば、種が花を咲かせて話すことがないならば、私の人生に生き

……

からやつて来る。その声に耳を澄ますことは、その不在を抱きしめること、そう聞こえてくる
 草の下で夢が語り、その夢の下には感覚の海がある。人を開放する発語はあの羊水の深い奥

話そうとしない沈黙がある。

話すことができないう沈黙がある。

トリン・T・ミンハ、『女性・ネイネイザ・他者』

制の狭間に存在するのである。

各々の社会にはそれぞれ真実の政治力学がある。だが他方では、真実は真実を司る全ての政治体

ジョイ・コガワ、スーザン・イムとのインタビュで

……三世は、沈黙は敵と危険な協調関係を結ぶことだと見ています。

一世にとつて、名譽と威厳は沈黙によつて表現されます。それはまるで風に揺る小枝のようです。

つまり、リンダ・ハッチョンが言う「世界との関与をミクナイックに刻み込み、次にはそれを転覆していく」ジヤンルと見ている。それは「ミクス」を拒否するものではない……しかし芸術の言説を歴史の言説に対峙させることによつて、リアリズムやレアリズムという単純な概念を根本から変えてしまふのである」(一九八七・二五)。

沈黙を批判的に見る批評家が非常に多い原因には、言語そのものに対して先入観があるのかも知れない。ポラー・ガン・アレンが述べているように、「言語は、それが属する文化に内在する言語化されていない想定と志向性を具現化している」ということである(二二五)。英語では「沈黙」はしばしば「発話」の対意語であるが、中国語と日本語における「沈黙」を表す最も一般的な表意文字(*漢字)の静は「平穩」と同義語であり、そして「音」「騒音」「動き」「激動」の反意語である。アメリカでは、沈黙は受動的であると一般的に見なされるが、中国と日本では、沈黙は伝統的に思慮深さ、用心深さ、または優美さを示すものである⁽¹⁾。

「沈黙」に関する西洋と東洋の考えの違いは、西洋中心主義的な見解によつて覆い隠されることが余りにも多い。修正主義的な批評家ですらその見解に屈して違いが見えなくなつてしまふかもしれない。チャンドラ・タルペイト・モハンティが論じたように、「第三世界」の抑圧された女性という表象を西洋フェミニストたちは描くが、その表象の多くに対立するものは、西洋の女性は教育があり束縛から解放された女性である(そして、言葉で自己主張する女性だと私は付け加えたい)という暗黙の自己表象である。「こういった識別は、一つの特定集団を規範または指示対象として特権化することに基づいて行われる」(三三七、スピアック一三四五三も参照)。これと同じ様な基準によつて、たがが人種

的フェミニリティの評価が決定される。マリン・ラッセル・ローズは、オリエンタリストの言説の危険性を明確に意識している優れた批評家であるが、それにもかかわらず、『失われた祖国』の中に描かれた犠牲者を、「この東洋のフェミニリティは沈黙することが、不用意にも虐待を正当化する西洋人のヘゲモニーへの服従を示してしまうほど『オリエンタリズム』を深く内面化しているのだ」と過剰なほど非難している(一九八七・二九三)。オリエンタリズムに抵抗するということは、西洋が行うアジア的特質の矮小化や同質化を問題視することであつて、必ずしもそのアジア的特質自体を否定したり非難したりすることではない。明らかに日系人は政治的搾取を受けてきた。しかし、彼らの搾取を単なる西洋のステレオタイプの内面化として見なすと、この小説に描かれる沈黙に関する「他の(Other)」理解を無視することになるのだ。

西洋と東洋の文化が交わる文化的背景を持つコガワは、『失われた祖国』の中で、言語と沈黙の両方に対して多様な態度を示しており、またロクス中心主義を崩す方法で言語も沈黙も再評価している。言説が持つ力の強さと限界、そして沈黙して耐えることの強さと限界を同じように明らかにする。そうしながら、言語表現と非言語表現には相補的機能があると主張する。確かに、言葉は人を解放することができるが、歪めたり傷つけたりすることもできる⁽²⁾。そして、沈黙は人を遮蔽するかもしれないが、その一方で、救いを与えたり、慰めたり、思いを伝達することもできるのである。この作品のテーマと文

を特徴づけるコガワの抑制した言語表現は、無言でいることに特有な苦悩だけでなく、ゲイル・K. フジタが語り手の日系特有の遺産として表すものを明らかにしている。それは、「他人に心配りする」という非言語の流儀、一言で言えば「気遣う姿勢 (attentance)」(三四)である。フジタは「気遣う姿勢」

という言葉で幾つかの形態の沈黙を一括りにしているが、コガフはそれらを、保護的な沈黙、ストイックな沈黙、そして気遣いの沈黙 (affektive Stille) と區別している (そして、それらを様々な態度で見ている) のだと、私は思う。日系人が検閲を受け不可視性を強制されて沈黙したことを、コガフは遺憾に思っている。コガフ同様、私も沈黙それ自体を是認しない。ただし、発話を特権化するこれまで優勢であった批評傾向を修正する方法として、私はこの作品の中で非言語的な振る舞いが積極的に使われていることを強調したい。

発語と沈黙のテーマとその詩的描写が、この小説にしっかりと織り込まれている。テーマのレベルでは、主人公が、二人のおばさんに具現される無言であることと声を上げることの二つの間で折衝を重ねていく。同様に、この小説の文体も「二つの音調」という遺産を明らかに示している (グライツ一九八四、四)。「この幻を書き、これを読みうるようにせよ (*「ハバクク書」二章二節)」という聖書の命令が小説の中で反復されるが、この命令が、スタンフオード・ライマンが二世の間接的行動として特徴づけたもの (第二章で述べた²³) によって穏やかに実行されていくのである。コガフは、第二次世界大戦中の日系人に対して行われた暴力的不法行為に声を上げることなく立ち向かう。声高に語る代わりに、子供特有のもの見方、断片的な記憶や空想、西洋や日本の寓話といったような省略技法を取る。これは、この小説のフレイクシオン性を際立たせると同時に、小説の中に挿入された戦時中の公的記録よりもずっと奥深いところを流れる「真実」をあらわにする表現技法である。読者は、このナラティブの中のギャップに気づき、語り手の気遣い (attentiveness) に相当する注意深さを持つことが求められるのである。

昔と石

コガフは『失われた祖国』を、第二次世界大戦中の彼女自身の体験と当時の手紙、日記、公文書を基にして書いている²⁴。一九四一年十二月の日本による真珠湾攻撃の後、日本人を祖先に持つ二万二〇〇人以上のカナダ人 (その内の一万七〇〇〇人はカナダ生まれ) が、権利と財産を剥奪されて、強制的にアリゾナ州のヘイステインクス・コロンビア州沿岸の自宅から立ち退かされた。まずバンクーバーの当局的公園に送られ、その後アリゾナ州のヘイステインクス・コロンビア州の内陸部の様々なゴーストタウン (戦時の当局によつて居住用地に急遽再建設された) に追いやられた。強制退去に抵抗した者はオンタリオ州のアングラーにある強制労働キャンプに収監された。小説は強制退去を誘発した人種差別を暴露する。「ドイツと日本に対する戦争で、我々の政府はカナダ生まれの『日系』カナダ人の財産や家を没収するのに、何故ドイツ生まれのドイツ人の家は没収しないの?」と登場人物の一人は問う (三八)。アリゾナ州のヘイステインクス・コロンビア州の内陸部に留まっていた日系カナダ人は、一九四四年までにロッキーマウンテン脈以東に再移住するの、ほとんどの者が一度も見ださぬ日本に国外追放されるののどちらかを選択するように迫られた。戦後すぐに西海岸へ戻ることができた日系アメリカ人と違って、日系カナダ人は一九四九年までアリゾナ州のヘイステインクス・コロンビア州に居ることが許されなかつたのである²⁵。

小説は三十六歳の小學校教師ナオミ・ナカネの視点から語られる。『失われた祖国』の語り手は、『チャイナタウンの女武者』の語り手と同様に、過去と現在の間を、子供と大人の視点の間を行き来する。

の数年後に死亡したことを小説の終末部で初めて知るのである。彼女は死ぬ前に子供に真実を告げないようにとオバサンとオジサンに頼んだのだ。ゴドモ、タメニ(子供のために)という語句が小説全体で反復される。大人たちは、母の死を子供たちに告げないことを完璧にやりとげる。それで、ナオミは三十年以上もの間母親の運命を探り出せないでいるのだ。

小説には何も知らず語ることもできない子供の哀れな状態が描かれる。子供時代と青年期のナオミは内気な性格であった。おとなしい性格は、理由が明かされない母親の不在と関係しているようである。少女時代、ナオミは母親について何度も問うのであるが何も答えを得られない。大人になるにつれて彼女は問うことを思いとどまる。なぜならヤマトの「十七文字」の結末部分で描かれるロージのよう「に、知ることをひどく恐れるからである。A・リン・マザンソンが述べたように、「ナオミの二つの事件は彼女の言語的不安と密接に絡んでいる。この言語的不安は、他者から、彼女の文化的素性から、彼女が思い続けている不在の母親から、そして過去からの疎外感の提喻として機能するようになる」(五八)。マキシーンと同様に、ナオミも日系文化とそれに対立する敵意に満ちた白人支配文化という二重文化の下で育ったので、言葉の上でもまた個人としても最初に苦痛と混乱を体験することとなったのである。どちらの語り手も自分の痛みを力に変換するために苦闘しなければならぬ。

この苦悩を解決しようとするなかで、ナオミは戦時中の悲惨な体験に対する二人のおばさんの相反する反応に影響を受ける。彼女を養育している無口な伯母であるアヤオバサンは、忘れることと許すことを勧める。政治活動家のエミリーオバサンは、日系カナダ人に行われた不正を徹底的に批判したいという誰にも止められぬ強い思いを表す。彼女は姪のナオミに「考えを書いてそれを明らかにするように

物語は一九七二年(*長崎の原爆投下の日である八月九日)に始まる。当時、ナオミのオジサンのイサム物語に付きまとうのだ。彼女は戦争勃発直前に実母に付き添って日本に行った。ナオミが五歳の時だった。ナオミとステイアン(そして読者)は、彼らの母親が長崎への原爆投下の際に酷い傷を負い、それは結核で亡くなった。父方の祖父母は身体的精神的ストレスで死亡した。ナオミと兄のステイアンは最初はスロウカンへ、それからアルバータ州南部へ追放されるにつれて崩壊していった。ナオミの父親二つの編み針のように、その二つの家族を注意深く編んで一つの毛布にした」(二〇)。しかし、家族は、カナ家とカトウ家はとも親しかつた。お餅みたいにべったりとくっ付いていたわ……。私の両親は、ラブラになってしまったことに思いを沈ませる。ナオミの家族と親族は非常に親密に結ばれていた。「ナオミは嫌だと思いつつも、戦時中から戦後にかけての過去の出来事、特に家族が強制退去させられ、バオミの母親に宛てて書かれたが、結局送られなかったものである^⑤。この包みの中身を吟味しながら、十二月から一九四二年五月の間に書かれたエミリーの日記が入っている。その日記は、日本に行ったナオミの母親に宛てて書かれたエミリーの日記が入っている。その中には戦時中の書類や手紙や、一九四一年はエミリーオバサンから送られてきた小包を見つける。その中には戦時中の書類や手紙や、一九四一年う二人のおばさんの人生の結びつきを語るものである」(ツタ四一)。(アヤ)オバサンの家で、ナオミ「人も意味する。従って、題名は暗に「全ての女性の人生、ナオミや彼女の母親やアヤとエミリーとい原題は *Obsan* 「オバサン」である。「オバサン」とは日本語で「叔母／伯母」のことであり、また「女のアヤオバサンを慰めに行く。アヤオバサンとはこの本の題名となった人物である(*『失われた祖國』のはアルバータ州のグラントンで存命中であったが、その一ヶ月後に亡くなり、ナオミは未亡人となった物語は一九七二年(*長崎の原爆投下の日である八月九日)に始まる。当時、ナオミのオジサンのイサム

コガワは主にナオミを通して文書や歴史についての疑念を表明する。ナオミは言葉がびっしり詰まったエミリーの小包を受け取った時、その内容を読み古傷をまた開けることに最初は抵抗する。「過去の記憶は過去の痛みである」(四五)。過去のことは忘れようと必死に試みるけれども、夢にも出てきたように、過去の深い悲しみは不気味に心の奥に潜む。夢はまた何年も前にナオミとエミリーの間で交わされた議論をそのままのように繰り返す。

白い音と生きている言葉

ほうがムーン・オーキッドよりはるかに我慢強いのであるが、マキシンが母親の支配に憤慨してムーン・オーキッドの臆病を嘲るように、ナオミはエミリーの言葉に反抗ししてオバサンの沈黙に悩む。だが、アイロニーで彼女はエミリーが放つ論争の効果を弱め、オバサンの内的な雑話を聴こうと耳を澄ますのである。

私の二人のおばさんはなんと違っていることか。一人は昔の中に生きており、もう一人は石の中に生きていた。二人のおばさんは、『チャイナタウンの女武者』に登場する無力なムーン・オーキッドと、もう一人の言葉の戦士であって文字通り勇敢なグレイサ・オーキッドを思い起こさせる。ただし、オバサンの専攻の学士で公明正大な大義を専門とする開業医である。(三二)

は正義を求める旧約聖書の予言者を思い起こさせる。オバサンは謙遜や許しや慈悲心を説く新約聖書の教えを思い起こさせる。両者のこのような振る舞いもまた日本文化にその源がある。ミチコ・ラムバートンが指摘したように、「日本人の思考方法には二つの柱がある。一つは受容と忍耐と克己という宿命論的態度であり、もう一方の柱は正義感と名誉と公明正大を大切にする気持ちである」(九四)。オバサンの振る舞いは、キリスト教徒的であり仏教徒的でもある。彼女はキリスト教式葬儀と仏教式葬儀のいずれの場合でも、いつも人に尽くせるようにと奉仕の手(serving hand)を準備して落ち着いて行動する。エミリーの行動主義はカナダの学校教育に因るものである。しかし彼女の行動主義は、モモタロウという日本の寓話に関するコガワの解釈も反映している。モモタロウとは残酷な盗賊たちから勇敢に大事な人々を守る少年である(フジタ四〇―四一)。ナオミは言う。

「死者の埋葬は死者にまかせたのだろうか？」
 「死者って？」と彼女は問うた。「私は死んでいないわ。あなたも死んでいない。誰が死んでいるっていうの？」
 「でも国家とは聞えないわよ」と私は言った。
 「私たちが国家なのよ」と彼女は答えた。(四二)

ほとんどの批評家はエミリーの考えに同意し、オバサンやナオミを受身の無方であると見なす。しかし、コガワが言葉に対して抱く忠誠心はるかに複雑なのである。この小説は、過去をたどる時の表現の重要性を認識しているが、また言語が仕掛けるあのかの多くの落とし穴も暴露する(ゴールニクト一九九二一九一九四)。まず初めに、言語は知らぬ間にジェンダー化されているので、それゆえに、例えば「spinst(er) (独身女性)」と「bachelor (独身男性)」のような同義語は意味合いが全く異なることとなる。ロビン・レイコフが指摘したように、「bachelor」はしばしば誉め言葉として使われるが、「spinst(er)」は通常侮蔑的な言葉である。「bachelor」の隠喩的意味は一般的に男性が性的に自由であることを示すが、「spinst(er)」の隠喩的意味は、女性の性的潔癖主義とか禁欲主義である(三三三)。ナオミが生徒の一人から「spinst(er)」と呼ばれた時、彼女はその嘲りの言葉に対するエミリーの異議を思いつく。「もしその言葉の否定的な意味合いがきちんと洗い流されているなら、その言葉を身につけるわ。でも、その言葉には文化的な意味が付着しすぎて気持ちが悪いのよね、とエミリーは言う(一八)。言葉は昔からの偏見を負わされて、家父長制イデオロギを永続させる方法を身にまもっているのである。

ナオミの心には言語は悪用されるという思いが痛ましく刻み付けられている。子供の時にガウアーおじさんという隣人に性的な悪戯を受けたからだ。「彼は、私のひざに引っかけ傷があるから治してあげると言って私を持ち上げる。これは嘘だとわかってる。傷はほとんど見えないうし痛くもない」(六三)。子供のナオミは、ガウアーの言動に衝撃を受け、セクシュアリティと言語の二重性を同時に知ったのであった。

その出来事とその後の影響についての描写は精神分析的な含みが濃厚である。ガウアーと出会う前は、ナオミは母との一体感を感じていた。「私は母の脚にしがみついている。その脚は大地から音った生身の柱。木の幹。私はそこから伸びる枝……母の脚は私の身体の柱、そして、私は母の思いだ」(六四)性的悪戯をされた後ナオミは切斷されたと感じる。「秘密はすでに私たちを切り離れた。……私の脚は二つに引き裂かれていく」(六四一六五)。母親が「この頃に」(六六)姿を消すということが次章で語られる。マグナツンは次のように述べる。

母親との離別神話を描くコガワの表象は、ソシュールの言語理論と構造言語学を用いてジャック・ラカンが行ったフロイト再解釈に酷似している……この解釈では、母親の身体からの分離という危機は、言語の指示対象の不在が前提となる象徴界への参入と一致する。ゆえに言語によって仲介される関係の世界に入るとは永遠に切望し続ける世界に入ることである。(六一)

しかし、ナオミの象徴界へ参入は二重に現実から引き離される。それは、ガウアーの言葉の中にある意

「この国は最も良い国だ。食べ物がある。薬がある。年金がある」(四九)。彼らの記憶もそれぞれ違っているが、オジサンとオバサンは自分たちを受け入れてくれた国にひたすら感謝の念を抱いている。ナオミの家族の間でも意見が分かれている。エミリー・オバサンは「フアンスト」のカナダと戦いたいと強制退去について正反対の思いを抱いているのは、白人カナダ人の役人と日系人市民だけではない。され、後に没収されるのであるから。

ということである。確かなことは、財産を奪われた日系カナダ人ではないことである。彼等の家は略奪シは文字通りシクベイで病気になる。さらに不思議なことは、誰が「保護区域」で保護されるのか。ナダ人は動物のように扱われて、「逃げられないようにされていた (kept at bay)」。(ナカネのオジンチャリハビヤリクリエーションの地域のように聞こえる場所が柵で囲われた檻だと分かり、そこで日系カ

だ。(七七)

シクベイとは、やがてわかつたのだが、全然浜辺ではなかつた。そして、プールと呼ばれた場所は泳ぐために水を張ったプールではなく、バンクーバーのヘイスティンクス公園と呼ばれている展覧会館敷地に作った収監所であつた。州の沿岸百マイルの带状地域は「保護区域」と名付けられ、バンクーバー郊外に住む男の人や女の人や子供もその「保護区域」から展覧会館の敷地に集められ、そして州の内陸部にある道路建設キヤンプや強制収容所に輸送されるまで、動物のようにそこに留められ

図的な欺瞞が記号本来の捉えどころのなさと結合するからである。社会・政治領域の言語も同様に知らぬ間に作用する。ただし、その言語もたらず結果はあまりにも現実的である。ゴールニクトが指摘しているように、「言語は、加害者と犠牲者の両方にとってのリアリティを単に反映するよりもむしろリアリティを形成する。つまり、言語を採った結果は経験の具体的行動になるのである」(一九八九、二九一)。口汚い中傷がニュースとして抑圧的な布告が法として、まかり通る時、言語は特に信頼できない。エミリーは、「ラジオをつけたり新聞の見出しを見たりして、『ジャップ』と言う言葉が我々に向かって叫んでくる時はいつもこの恐ろしい感情が沸いてくる」と書く。彼女はさらに続けて、新聞は「真つ赤な嘘」を書き立てていると述べる。「フリキの弁当箱を持った二世の少年の写真が載っていて、無線送信機を持つスパイだと書いてあつた」(八五)。同様に、日本人居住者が保安上の危険分子であると主張して、強制退去を正当化したのであつた。しかし、反逆罪に問われる事件はひとつも起きていなかった。

もっと巧妙なのは、制度化されたトリックに埋め込まれた人種差別主義者の嘘である。戦時中、カナダ政府の官僚は言葉を使って、日本人を祖先に持つ人々に対する非常に侮辱的な行為をカモフラージュしたのだ。二世は、カナダ生まれの市民であるのに、「敵性外国人」と名づけられた(九二)。強制収容所は「内陸居住プロジェクト」と粉飾して呼ばれた。「そのような言葉でどんな犯罪も偽装できるのよ」と、エミリーは怒りをあらわにする(三四)。ゴールニクト(一九八九、二九二)が述べたように、ナオミの家族の人々は「シクベイ (Sick Bay)」、「プール (Pool)」と言う名前の場所に監禁されるが、この小説の中で生命を与えるイメーজである水は、そこには明らかに無いのである。

ではない」とナオミは述べる(七九)。そして人の見方も時と共に移ろう。エミリーは以前「騎馬警察隊員を尊敬して」おり、彼らのモットーの「法を遵守せよ(Maintiens le droit)」を振りかざすほどであった。しかし、かつてのヒロイックがブル(収監所)で日糸人をあまりにも手荒に扱うのを見てぞっとする。以前の「法を遵守せよ」というモットーはそのまま「正義を維持せよ、じゃないの？」(二〇〇)という辛つな問いへと変わっていく。

いわゆる事実すらもいかようにも解釈される。言語は、欺くために使われようと使われまいと、部分的で主観的なリアリティしか伝えない。語り手は驕々しい叔母から距離を置く。「心に描いたヴァイジョンを実践するので、「エミリー」にひとつそのヴァイジョンは真実なのである。彼女が預言者ハバククのよう証言に召喚されたとき、彼女の証言は、二世の生活の中で、自分はカナダ人だと必死に証明しようとしている彼らの中で、そのたくましく温かな精神の中で、輝いている光を証明するものだ。でも、私にとつての真実は、もっとどんよりして、影のように、灰色をしている」(三二)。

ヤズモトやキンクスンやコガワも、真実についてナオミと同じ感覚を抱いている。彼女たちは透明な言語観、透明な歴史観を疑問視する。だが、彼女たちの問いと多様な答え自体が真実を掴むための策略となるのである。トリン・Ｔ・ミンハは効果的な語り一般についてこう述べる。「真実は……語りにおいて、ロゴス中心主義的な確かさでは獲得されないのだ。……嘘と真実の境界が……増殖され、転覆され、置換されるが、嘘の概念も真実の概念も無意味になることはない。物語が語る真実は、直接的に疑問を抱かればはするが、間接的にはなんら疑問の余地がないものなのだ」(一九九一、三二一四)。「ロゴス中心主義的な確かさ」に対して逡巡するこれら三人の作家の作品に、この意見は等しく当てはまる。

これらの作家は左記のトリンの懷疑主義を共有している。

ある種の置換作業が行われないと、「なにかについて話す」という行為は、区分化された知識が拠り所にする二項対立体系(主体/客体、私/それ、我々/彼ら)の維持に加担するのみである。「なにかについて話す」という行為は己自身と作品との間に意味論的距離を置く。……それは話し手に支配的地位を確保する。……真実とは支配の道具なのだ。既知なるものの折り目になかに未知なるものを寄せ集めたとき、私(話し手)はその未知なるものにその支配の道具を使用するのである。(一一二)

第三章で見たとように、言語化そのものは話し手が発話を抑制する根源に触れるものではないのかもしれない。言語を駆使しようとするマキシムの試みは、彼女が抱く言語上の不安を募らせるだけである。威圧的な発話をよく知っているナオミは、権威者の発話をまねることに對して非常に用心深い。真実は濁っていると彼女は主張するが、それは支配することを放棄する彼女のやり方である。ナオミは自分自身と自分が語っている物語の間に「意味論的距離」を置くことを拒否するので、自分の考えを「明白」にできない。

ナオミの明白でない思いのひとつは、スローカンについての思い出に関することである。幼い心中では、さびれたゴーストタウンですら、オジサンがナオミたちに合流した後は樂園のような性質を帯びる。「オジサンは前庭にロックガーデンを作る。小さな川と滝の水が岩底のところで曲がりくねって小さな池に流れている」(二三八)。二度目の「追放場所からの追放」(一九七)をまだもや経験するまでは、

生活は「静かで心地よい休日」(二三八)となる。

事實は、一九四五年のスロークアの庭は素晴らしいことだ。……事實は、すでにばらばらにされ離散させられていた家族が永遠に破壊させられたということ。ロッキーマン脈以東に行くか日本に行くかという選択が提示されたが、別れさせられた親と子には相談する時間もなかった。選択ができないうと非協力であるとしてレッテルを貼られたのだ。(二八三)

「レッテルを貼られた」という言葉は、「事實」が言説的に作り上げられるということを暗示している。そしてこの文節の他の部分は主観的な性質を帯びていることが明らかである。実際にはナオミは崩れかけた掘り立て小屋に住んでいるのだが、ノスタルジックに思い起こすスロークアの姿は印象主義派的な絵画といえよう。しかし、ナオミは、身内の勤勉さによって荒地が牧歌的な環境に変えられたという事實や、アルバータ州のビート畑と比べるとスロークアは美は失われた楽園であるという事實を、上手く伝えている。そしてスロークアの美しさが苦勞して得られたものであるからこそ、二度目の強制退去はそれだけいっそう痛ましいものとなる。

その後、言葉では言い尽くせないほど痛ましく身の毛立つ経験をする。全てを語れというエミリーの命令に苛立ちながらも、ナオミはアルバータ州の「かまど」のような暑さの中で這い^這つて働いた艱難辛苦の体験を思い出し、そして言葉に詰まる。「私はこの時期のことを話すことができない。……身体が話そうとしないのだ」(一九六)。しかし言うに言われぬこのような苦難は長崎の大虐殺に比べると些

細なものとなる。その惨事を述べようとする祖母の試みは「混沌としており」、「詳細は時系列的な一貫性がなくてはばらばらである」(二三六)。筆舌に尽くしがたい出来事は發話に緊張を強いるのである。最終的に語り手は言語の有効性そのものに疑念を抱く。ナオミはエミリーの論争からなにか実体のあるものが生じるのかと疑う。

エミリーオバサンの言葉や書類、電報や嘆願書の全部は、納屋の前庭にある掻き集めみたい。必死に引つ掻いてぼろぼろとなった鍵爪のようなエミリーオバサンの沢山の活動の証だ。でも、それがどんないことをしてくれるのか私には分からない——タイプで打ったあの黒い小さな言葉——雨のような言葉、雲から滴り落ちる言葉。それらは、私たちが移植されたこのアルバータ州に居る私たちの心動かさない。……それらの言葉は生身の言葉とならない。……私の祈りはぜんぶ空の彼方に消えていく。(二八九)

ナオミにとって、エミリーの収集した事實や説教くさい分析は騒々しいだけである。実際の苦しみをほとんど和らげることもないし、救いをもたらさずグライジョンを抱かせることもない。ましてや、「心の安らぎをもたらす」(四二)こともない。コガワは自分自身の執筆について語ったとき、次のように述べた。「書類や事實は、偏見に満ちた心を導くように意図されているのですが、それ自体で方向性を与えることはめつただにありません。莫大な量の書類を持っていますが、私が必要とするものはそこから得るグライジョンであり、関係性が分かっているグライジョンなのです。愛のない事實は我々をどこに

も導くことがないのです。(レゾコフ一五)

これらの例でわかることは言語の矛盾する側面である。言語は、そのシニリアンが転嫁していき、シニリアンが指し示す「真実」は部分的なものであるので、しばしば曖昧となる。その一方で、言語の効果は話し手で変わる。権力を持たないものによって語された言葉には影響力はない。それらは「祈り」が空の彼方に消えていく(一八九)ように、ただ人をじらすだけである。しかし、権力を持つものが発した言語は一種の発語行為となって遂行を命令する。エミリーは次のように書く。

あの小さな公園に、二二〇人から一三〇〇人の女性と子供のための宿舎を作っている(あいつらはそう言う)！官僚たちは書類上ではそれはとても簡単に行くと思つて、それを手当たり次第に行動に移す——そして、その結果生まれたまきれもない地獄は、一般市民には「極秘内容」とされる。だから、ジャックに「賢況」が与えられたと一般市民はあれこれ言っているのだ。(九二)

収容所のことを振り返つて、エミリーは言う。「それはまさしく疎開という排泄だったのよ。……パンクパーから流し出されたのよ。糞のように。ウジ虫のえさね。……我々は誰一人としてその呼称から逃られなかつた。我々は見ただ目で定義され特定されたのよ。」と述べる。グリナイッシュ・コロソビエ州の新聞に、日系カナダ人は「カナダ人の鼻につく悪臭」で、「それだから肥だめに追いやられたのだ」と描かれた(一一八)。意味の操作が政治を形成し変形させるのである。

言語は、いかに不正確でそして歪められていようと、具体的な結果をもたらすものである。だから

気遣いの沈黙

こそ嘘の矛盾は暴かれなければならない。言説は、権力に結びついているけれども、権力の乱用もまた明らかにするかもしれない。フーコーの言葉には、「言説は権力を伝達し生産する。権力を強化するが、また、権力を傷つけ暴き、弱体化させ、くしくいこともできる」(一九七六/一九八〇、一〇一)とある。しかし、エドワード・サイードはフーコーの権力遍在の主張の中に或る限界を見る。「もし権力が抑圧し支配し操作するならば、権力に抵抗するものすべては道徳的に権力と同等ではありえない。かつ、中立的にまた単純にその権力に対抗する武器とはならない。同様に、抵抗は、権力に取つて代わる敵対的勢力になることも、権力に依存する機能になることもできない」(一九八三/二四六)。

エミリーは(マキーンがするように)、「象徴界の鎧を身につけ、その法を名乗りつゝ、その同じ法を使って法を攻撃しようとする(ジャルダン三三二)。しかし、ナオミは全く異なる言語手段を見つけたいと思つている。それは、「道徳的に権力と同等でない」もの、強制的であるとか教条的であるとか思われずに聞き手を引き止め聴いてもらえるもの、「白い音」を「生きている言葉」に変容させるものである。

言語に対する懷疑主義やコンセンサスに疑問を抱くという点で、多くの女性作家やポストモダニズムの思想家たちとコガワが伍するならば、フジタが示唆するように、沈黙のスペクトラムを映し出す彼女的能力は二重の文化を受け継いでいる境遇に起因するものである。この特異な感性を調べるためには、

小説の中にある沈黙の色調を見逃してはならない。確かに、主人公は抑圧的な沈黙に苦悶する。また、一世の保護的でストライクな自制心は、彼女を子供の時は保護したが大人になると無力な状態にするので、一世の自制心に対して彼女は分裂した感情を抱いている。それにもかかわらず、ナオミはオバサンやオカササソという先駆者の女性たちの静かな気遣いを大事にし続ける。この様々の形態の沈黙について

では個別に述べられなければならない。

小説の中の抑圧的な沈黙は個別の形態と集団の形態を取って女性も男性も苦しめる。ナオミに性的悪戯をしたあとで、ガウアーおじさんは彼女にその暴行を漏らすことを禁じる。「お母さんに言っただけだよ」と、彼は私の耳にささやく(六四)。後にカナダ政府が日系カナダ人を抑圧したとき、エミリーはこう書いている。「全てのハガキや手紙は検閲される。……労働キャンプからの言葉は一語たりとも記録文書にならない。すべてはのみ消される」(二〇一)。

ベネタイクト・アンダーソンは、活字メディアには読者たちの「想像上の共同体」を作り出して人びとを結集させる手段があると言う(四七、四九)。この意見は説得力があるが、コガワはその反対の現象もありうると示唆する。ある共同体の民族が一般の報道の中で声を剝奪される時、彼らはより大きな共同体から除外されるのだ。つまり、その民族の新聞や他の議論の場を破壊することは、結束した共同体を強制的に粉砕し、その文化的アイデンティティを抹消することとなるのだ。「私たちは車やラジオやカメラや一切のコミュニケーションの手段を奪われて、無言にさせられ軽蔑された者なのだ」(二二)とナオミは嘆く。そのような沈黙させる行為は、「その種族がさらに繁殖するのを防ぐためである」(九八)と或る新聞に発表された意図と一致する。ナオミはこのことを皮肉る。「何世紀も繁殖し続ける

家族もいる。頑丈で目立ち、子供もよく産む。でも、一言も囁くことなく地上から消えていく家族もあるわ」(二二)。

ナオミの家族の衰退をたどることで、ヤマモトやキングストンのように、コガワはジェンダーと人種のマトリックスについてさらなる洞察を行う。それは、アイノリテの女性がさらされているジェンダーと人種という明白な二重の危険性と男性を強力な家長と一般的に等式化する考えを超越する洞察である。「失われた祖国」では、日系カナダ人の男性もまた迫害からまったく免れることができない。ナオミの祖父と父と代理の父(オジサン)は、「白人の」支配的父の法「(ゴールニク・ト一八九九、二九八)に服従しているばかりか、カナダ帝国婦女子愛国結社の「悪意」にも服従している。エミリーの記録によると、その団体は「我々(日系人)はみんなスパイで破壊工作員だと言った」(八二)のである。その三人の日系の父は「特別な」待遇を受けるために選び出される。彼らは突然家族から切り離され、道路建設労働キャンプで働かされるかまたは収監される。戦争時に子供であったステイプスは、たどる目に見えなくとも、消えることのないダメージを負う。そのため、彼は日本文化に完全に背を向けるのである。

各々の男性登場人物が支配者によって負わせられた沈黙は、女性の交流が主になされた小説の中で、無言ながらも独特の緊張感を作り出す。バンクバーで舟の設計と舟大工をしていたオジサン(イサム・ナカネ)は、愛する海岸からアルバータ州に移動させられる。オジサンは海への思慕を癒すために大草原の波打つ草を海と見なす。彼の父(オジサン)は養子である)が日本を去る際に海の中に永遠の慰めを見出したことを思い起こせば、彼が海から強制的に引き離されたことはますます辛いものとなる。

「慣れ親しんだ島を去るとき、彼は異国人の島へ航海する異国人となった。しかし海は常に彼の友であつた。その怒り、その嘆き、その寛大さを彼は理解していた」(一八)。故郷からそして海から乾いた音しか聞こえぬ不毛の地へど、オジサンはこのようにして二度追放されたのである。

ところで、オジサンと頻繁に結びつけられる「技」は「石のように固いパン」である。「船」から「石のように固いパン」への変化は、職業の喪失と強制的な飢い馴らしを示している。それは、社会から遠く引きこもる原因のひとつとなった非情な体験である。しかし、「石のように固いパン」はまた彼自身の頑丈さを示す。ナオミの目には、オバサンに負けないほどオジサンも最期の日に至るまで無骨な忍耐を表すアイコンである。「オジサンはインディアンのシツテイング(座す)・ブル(雄牛)酋長だと言つてもいいだろう。……彼と同じように、大草原で日焼けして、頬の皺は干し上がった川底のように濃い茶色の溝ようだ」(二二)。

オトウサン(アーク・ナカエ)は、オジサンやオバサンとは違つて戦争を生き残れない。自分の家族を守ることができなくて、おそろくオジサン以上に深い屈辱感を味わつているだろう。彼がだんだん話さなくなるとは彼の無能感を示し、彼の最期を予兆する。歌が素晴らしく上手く、「曲を耳で聞いただけでどんな楽器であつても奏でる」(五一)多才な演奏力を持つオトウサンは、戦時中に結核を患う。道路建設労働キャンプの環境によつて病氣は悪化して、やがて死んでしまう。彼の身体の衰えは聴覚的な方法で伝えられる。「豊かなバリトンの声は、あだかものどに痛みがあるかのように弱く細い」(二七七)。しかし、病氣のせいで音楽への熱意が鈍るということはない。エミリーの言葉から垣間見るオトウサンの姿は心打つものだ。エミリーは、道路建設労働キャンプから送つてきた彼の手紙について

批評する。「正気ではないわよ。考えることについてたらステイブンの音楽のレッスンのことしかないよ」(一〇五)。オトウサンは、勝ち目は無くとも、自分から受け継いだ息子の音楽の才能を守りた

いと思つているのは確かである。

父親が気遣つたにも関わらず、ステイブンも文字通りかつ比喩的な意味でも沈黙させられる体験をする。真珠湾攻撃の後、彼は白人の男の子たちに攻撃されパイオリンを壊される。アルバスター州では、干上がるような暑さでフルートがひび割れしてしまふ。やがて、ステイブンは西洋クラシック音楽の音楽家として広く知られるようになり、頻繁にヨーロッパを演奏旅行する。しかし、それは生来受け継ぐ日本文化を放棄するという犠牲を払わなければできなかったのである。ステイブンは、彼以外のすべての家族の者の特徴つけている思いやりのある振る舞いから逸れて、抑圧者側の偏見と手荒いやり方を取り入れる⁽²¹⁾。彼はますます自分の民族と文化をにべもなく拒絶していくようになる。オバサンに「きちんと話す」(八一)ように言い、ナオミの言うことにも再三再四耳を貸さない。叔父さんが日本語の詩を暗唱するのを聞くとかさず、彼は「何だよ、それ?」(二二七)とそつげなく詰問する。反対に、妹は「俳句よ。十七文字の言葉で描く絵よ」(二二七)と難なく理解した応答ができるのである。強制収容の直前に(身内の日本的なやり方から徐々に距離を置き始めた頃に)ステイブンは足を引ぎずるようになったが、それは日系人として彼が感じる社会的ハンデの身体的記号のように見える。⁽²²⁾「犬ももま」の白いギプスは「蘭」(二二)に喩えられ、彼が自分の周りに作つた防壁の殻を具現化しているのだ。理由もなく罰せられることへの怒りをあだかも発散させるかのように、ステイブンはスロークアンに到着するとすぐにむちゃくちゃに暴力をふるう。蝶々を松葉杖で乱打するのである。「瞬く間に、傷

つけられてばらにされた蝶々で地面も草も震えている」(二三三)。成長すると彼は家族から逃げていく。ほんの一回、離婚層のあるフランス人女性を連れてグラントンを訪れ、午後わすかなひと時を過ぎす。その時、オバサンは「できる限り日本的でない」食事を用意した。「しかし、二人は食べずに去っていった」(二三三)。彼が再び姿を現したのは八年後であつて、オジサンの葬式のとまである。

オジサン、オトウサン、それにステイアンの体験は、権力を持つ男性と権力を持たない女性という一般的なフエニミスト批評の二項対立を崩す。「ミス・ササガラ伝説」や「アメリカの中国人」と同様に、「失われた祖国」でも、人種差別による虐待は性的悪戯と同じように重苦しい。これら二つの抑圧の類似性はナオミによつて明らかにされる。ステイアンが白人の男の子たちに叩かれたとき、怪我の理由をナオミに語ることを彼は拒んだ。ナオミは「私がガウアアおじさんのバスルームで感じたように、お兄ちゃんも恥ずかしいのかしら」(七〇)と直感する。エリカ・ゴットリーブが指摘するように、レイプは「あらゆる種類の暴力のメタファー」としてこの小説で使われているのである。カナダ政府から受けた、ローズが言うところの「政治的精神的レイプ」(一九八八、二三四)を、ステイアンのように多くの日系カナダ人は語ることを拒絶する。

虐待と抑圧の関係がメタファーによつて効果的に作られている。レイプのほとんどの犠牲者は、征服者への怒りを声に出す代わりに恥じて口をつぐむ。子供のナオミは、母親と信頼し合ってきたのであるが、性的悪戯を受けたあと秘密を心に抱き始める。それは母親から彼女を分離させることとなった。財産を奪われ戦後は国中に離散させられて、多くの日系人は自立たぬようになつたために、支配文化にはやく同化しようとした。「今日の私の友達はどれも日系カナダ人ではない」とナオミは明かす(三八)。

彼女はまず過去を忘れただけなのである。「歴史の犯罪は……歴史の中だけに残ればいい……こういふた書類全部から生まれる問いや過去に起こつた騒乱に言及する問いは、社会を不必要に動乱させることだ」(四一、四五)と言う。ナオミが抱く諸念は終局的には社会的健忘症と共謀する。彼女が自分に課した沈黙は外部から課された沈黙を増長させる。

ナオミの忌避は、心理学で「心的外傷後ストレス障害」の典型として容易に分類されるものであり、性的虐待や政治的虐待を實際に受けた犠牲者の多くにも見受けられるものである。「恐ろしい出来事を拒否しようとする意志と声に出してそれを公表しようとする意志との間の葛藤は、心理的トラウマの中心となる対立である」と、心理学者のジエナイス・ルイス・ハーマンは述べる。「一般的な反応は……意識からそれらを追放することである。社会契約があまりにもひどく侵害された場合には、それを声に出して語ることができなくなるのだ。これが口^にできない(unpeakable)という言葉の意味である」。しかし、こういった体験は「葬り去られることを拒否する。……恐ろしい出来事の真実を思い出し語ることは、社会秩序の回復のためにも個々の犠牲者の治療のためにも不可欠な条件である」(二)とハーマンは強調する。同様に、ナオミは過去を棚上げしておくことはできないこと、そうすることは自己破壊につながることを学ぶ。エミリーは、「思い出さなければならぬのよ。……あなたはあなたの歴史なのよ。もしその一部を切り取ってしまうえば、手足を切断されたのも同様なの。過去を否定してはいけな

い。すべてを思い出しなさい。辛いならば、辛いままでもいいなさい。大声を上げなさい。叫びなさい。否定は癩^{えん}痘と同じよ」(四九五〇)とナオミに警告する。

だが、ナオミは一世と二世の保護でストイックな沈黙のもつて育てられたために、叫び声をあげる

力は抑え込まれてしまっていた。子供の頃に、彼女は大きな白い雌鶏がくちばしで黄色いヒヨコたちを突き殺すのを（起りつつある人種間の大きな動きを明らかに予兆する出来事である）見たが、その重大事件の時、オカアサンは直ぐに助けにやって来る。「指を巧みに動かして、オカアサンは生きていく口をつぐんだオバサンにいつも落胆させられる。「知りたいたいと私がしつこくすればするほど、オバサンの沈黙はいつもますます深くなつた。いくらせかしても手がかりを引き出せないだろ」（四五）。オミが日本語で書かれた手紙——長崎の原爆の様子を述べる手紙だったのだが——について尋ねた時、それに答える代りにオバサンは、日本へ向かう前に母親と一緒に撮ったオミの写真を取り出す。辛い事実の代りに優しい思い出を出して、オバサンはオミの母親の願いに従う。しかし、この大人同士の共謀した沈黙はより大きな苦惱を引き起こしたのである。アインクル・アレン著『アラト山への道』についての論評の中でアインクル・フレイシャーが指摘するように、「痛ましい過去の体験を子供に知らせないようにすることによつて、親はしばしば子供の中に強迫的な空虚感を作りだす。しかし、それは探され満たされなければならない」（二〇四）。『チャイナタウンの女武者』と『アメリカの中国人』に関し

何も知らなくてよいと強要する形のこのような沈黙は、相手を幼児扱いしてしまうこととなる。成人したオミはこの保護を相反する思いで見える。母親についてもつと教えて欲しいと執拗に求めるが、堅く口をつぐんだオバサンにいつも落胆させられる。「知りたいたいと私がしつこくすればするほど、オバサンの沈黙はいつもますます深くなつた。いくらせかしても手がかりを引き出せないだろ」（四五）。オミが日本語で書かれた手紙——長崎の原爆の様子を述べる手紙だったのだが——について尋ねた時、それに答える代りにオバサンは、日本へ向かう前に母親と一緒に撮ったオミの写真を取り出す。辛い事実の代りに優しい思い出を出して、オバサンはオミの母親の願いに従う。しかし、この大人同士の共謀した沈黙はより大きな苦惱を引き起こしたのである。アインクル・アレン著『アラト山への道』についての論評の中でアインクル・フレイシャーが指摘するように、「痛ましい過去の体験を子供に知らせないようにすることによつて、親はしばしば子供の中に強迫的な空虚感を作りだす。しかし、それは探され満たされなければならない」（二〇四）。『チャイナタウンの女武者』と『アメリカの中国人』に関し

である。一世のストイックな沈黙の表象も、沈黙への理解と批判が同じように入り混じっている。第二章で見してきたが、一世は我慢、つまり静かに堪え、威厳を持つて黙することが美德だと信じている。戦時中、一世たちは計り知れないほどの力を奮つて、白人の偏見に耐え、強制収容の惨禍を乗り切り、そしてとりわけ子供たちに身体的精神的危害ができる限り及ばないようにした。ワカコ・ヤマウチは、二世にも受け継がれたこの静かな強さについて雄弁に語る。

三世は我々（二世）が強制退去の経験について語るうとしないと非難する。そして、それはその通りだ。……だが、強制退去のあの古い写真を見ると……ほとんどの者は涙をこらえることができない。その涙には自己憐憫の気味が多々あるのだが、多分そういう涙のどこか裏で、これが我々の人生の道を変えた出来事であるとわかつている。そして、もつと洞察力があり、もつと勇気がある者も二世

の中にはいたけれども、どのような道を選ぼうとも、我々は生き延びたのだ——全体が。多分、それが我々多くの者が収容所の経験について黙ったままでいる理由である。多分、我々は、生き延びたということで、敬意を払って欲しいと無言のうちに頼んでいるのである。……生き延びたという事実は、我々の勇気の証である。そして、それで充分なのだ。(一九七九、ix)。

シヤニス・ミリキタニ著『沈黙を脱ぎ捨てて』の中の一世の祖父はさらにこう言う。「沈黙は強さのつかたち。／無言の抵抗によって／より多くのことが語られる」(二七三頁)。しかし、支配文化の目には、そのような沈黙は被支配者の受動性として映り、従って彼らを思うままにすることができるのだと映るのだ。

コガワは沈黙に対するこのような相反する認識を二つの連続したイメージに内包させる。「私たちは石から語る沈黙である。……私たちは露のようににも要求せず未来に消える」(一一二)。石はたくましき、忍耐、堅固を暗示する。露は、対照的に、もろさ、はかなさ、傷つきやすさを指し示す。これら二つの比喩を並べて、日系人の「逞しくて優しい精神」を具現する。このイメージはまた日系カナダ作家コガワの複雑な態度もあらわにする。彼女は一世の精神的身体的強さを認識している。スロロカンというゴーストタウンやアルバータ州のビート農場のような厳しい環境で生き残るためには、心を鋼鉄や石のように硬くしなければならぬのだ。オバサンやオジサンに例示される沈黙は、耐える強さと許す力の両方の証である。それと同時に彼らの寛大さは、もう片方の頬を向けるというキリスト教の信仰によって倍加され、支配文化によっていよいよ利用される結果をもたらす。彼らは露のよう

に簡単に「拭い去られて」しまうのである。

それでも、コガワは沈黙が内包する肯定的な面にその肯定的な面が埋没しないよう描いていく。沈黙を肯定的に描いた中で最も心和らくものが、氣遣いの沈黙である。この形態の沈黙は察しという日本的な概念、つまり「話し手からのサインを掴み取る精神的機能」(ニシダ四七)や以心伝心、つまり「ラビラー」または「共感、暗黙の理解」(ネルソン二二六)に関係しているようだ。名詞の察しという言葉は、「推測、推理、憶測、判断、そして人やサインが意味することを理解すること」だと翻訳できる。動詞の察するでは、「その用法は『想像する、推測する、さらにまた共感する、思いやる、斟酌する』という意味にまで広がる」(ニシダ四七)。以心伝心の語句は、文字通りには「心対心によって」ということだが、その起源は中国語にあり(クニヒロ五七)、それは「心から心へと(真実を)直に伝達すること」と「暗黙の了解」を意味する。(クスタ五五六)。

『失われた祖国』の中の氣遣いの沈黙には、察しが暗示する視覚的感受性と予知反応、以心伝心に暗示される直観的理解、その両方に暗示されている共感力、これらすべてが含まれている。フジタが述べているように、バンクーバーにあつた戦前の家に飾られていた額を通じて、ナオミには「氣遣う姿勢」が幼児のころからしみ込んでいる(三八)。「淡い青色のパッチワークのキルトが掛けられた私のベッドの上には、ひざの上に本を置き一羽の鳥がとまっている木を見上げている幼い女の子の絵がある。その子は、片手を半分ほど挙げて、その鳥を氣遣いながら(atending)眺めそして鳴き声を聴いている」(五二―五三)。この「見ている(looking)」と「眺めている(watching)」という言葉は、ヤブモトの「ミス・ササガワ伝説」の中のミス・ササガワに向けてられた凝視(stare)とは全く正反対の言葉である。凝視は

私たちはいつも自分自身の願いよりも他の人の願いを尊重しなければならぬ。感情を抑えることでやり方を滑らかにするのだ。オバアチャンとオジイチャンには居て欲しいと思っけど、二人が行くの見守らなければならぬ。他の人たちの願いを無視して自分の要求を叫ぶことは、「ワガワ」である。利己的で思いやりのないことだ。オバサンはいつもみんなの要求に注意を払いつ

める。ナオミは次のように振り返る。

オカアサンとオバアチャンの「鋭敏で適切な認識」には、はっきりとした要求もあからさまな問いも含まれていない。ナオミの祖父母が病院に連れて行かれた時点でも、オバサンは同様に言葉を出さずに慰

撫する言葉である。(五六)

「ヨク キガ ヌクネ」とオバアチャンは応じる。それは感受性があり適切な行動をしたことを評バアチャンが居心地悪そうに体をずらせば、私は座布団を持つていく。
なる。……寒いと思う前にセーターが被せられ、そしてもし痛ければ、すぐ治療してくれる。もしお腹が空いた時、なにか欲しいと頼む前に食べ物が出てくる。もし疲れていれば、どこでもベッドと

をさらに強化して伝える。

アチャン、オカアサン、オバサンによって再現される。彼女たちはまたナオミのためにそのメッセージ配慮の心とすぐに対応できるような身体の準備の両方を内包しているのだ。その絵のメッセージはオバ

「他者」を対象物に変える。気遣って眺めることは (attentive watching) は、他者の内部に入り他者の要求を予測しようとする。『失われた祖国』の語り手は、失礼にならないように見ること、じつと見つめること、保護するように見ること、次のように語って区別する。「私のお母さんは伏し目がちに床を見る、……公共の場では一瞥することすら失礼になる場合があるからと言って。でも凝視はどうなの？ どのような無礼なことは……街中で裸でいるのと同じくらい考えられないことなのだ(四八)。おちにナオミは、母親が彼女の要求を感じしそれに応えられる能力を持っていると語る。「彼女の目はしっかりと落ちて着いている。日本の母親の目だ。踏み込むことも裏切ることもしない。子供の心の奥底に隠されたものを庇って守ろうとする目である(五九)。しかし、相手の様子を見て気遣うこと (signal attentance) は、守る盾になること以上のことをする。それはまた感情を探りもするのだ。家族が今回はスロークンからアルバタ州に再移動させられることをナオミが知った日に、彼女から目をそむけて空をじつと見据えている父の目を見て、トラグルを察知する。「オトウサンの目でわかるわ……心ここにあらざうという目だもの(一七二)。何年後に、エミリーオバサンに母と祖母のことを尋ねた時も、言葉がなくなるとも伝えられたことをナオミは理解する。「オカアサンとオバアチャンのことに触れた時、彼女の目の奥のどこかでシヤツターがカチツと開きして閉じられたのを感じることができた。それは、まるで私の思いがけない質問が、すぐに消されなければならない突然の痛みと光線であるかのようだった(一八六)。隠しきれぬサインがこれ以上問うことを止めさせるのである。」

相手の様子を見て気遣うことは、寝室の絵に描かれていたように、少女の思慮深さと空に浮かせて構えている手と切り離せられないものである。この形態の沈黙は、受動性を示唆するどころか、用心深い

他の人々の「世界」に旅することを通じて発見することは、横柄な認識の犠牲者が実際には主体であり、活発な存在であり、抵抗者であり、認識の構築者である「世界」が存在するということだ。たとえ主流社会構造の中で、横柄な認識者によってのみ生かされ、それ故、曲げられ、折り重ねられ、整

法である。

それには、アリア・ルゴネスが提唱する「世界」に旅すること('world' traveling)がより良い方法である。

(二三四) ベイカー夫人のような態度も取らないように用心すべきなのだ。

ソのような態度を取らないように用心しなければならぬ。また、「オバサンを見下すように一瞥した」^①よう強いることはしないのである。読者として、我々はオバサンの日本的なやり方を嘲るステレオタイプ「語るべきでない沈黙」を聴くようにと率直に訴えている。しかし、オバサンにエミリーを真似る「何とも言わず耐えているから服従のターゲットになりやすいが、コガロは読者にオバサンの中にある彼女はずっと抑圧されたままでしょう」と、コガロはインタビューで述べている(ウエイン二二三)。オバサとしたのは、彼女が「全く無口な人である」からで、「もし我々がオバサンを本当に分からなければ、オバサンである。この伯母の中には沈黙の苦惱と不思議さが一体となっている。本の題名をオバサオバアチヤンもオカアサンもナオミが幼い頃に^②いなくなると。成人になるまでナオミに影響を与えるに本当になることができるのだと、キングストンもコガロも暗示する。

の夢の一つを思い起こさせるエピソード的な性質がある。懐しさと共感が充分にあれば他人は身内同士か呼びかけて(二二二)、親近感を育む。その場面には『アメリカの中国人』のバク・グーソンのパイプ

対照的に、列車のなかの日系カナダ人は、「見知らぬ人にも『オジサン [uncle]』とか『オバサン』と(二一九)それによって、屈辱感が高まり、アメリカ社会の他者であることをさらに意識するようになる。レゼントを貰った収容者は、「外部」の慈善を施した者に「おれの手紙を書く」ことを特に要求される取る人びとはきまりが悪い思いをしなくても済む。ヤマモトの物語では、「慈善」によるクリスマス『失われた祖国』では、気持ちを押し量つてなにかをする行為は無言でなされるから、その好意を受け

こういうた行為は、「ミス・ササガラ伝説」に描かれた教会の人びとの慈善とまったく対照的である。を兄のポケットに滑り込ませるのである(二一六)。

ちになる。兄の不機嫌さに気がつき、「急に気前よくなって」アレゼント(彼女のお気に入りのポール)サンの例にならう気持ちを抱かせる。幼いナオミはこのような行為を評価して、彼女自身も寛大な気持ちその母親の前にタオルと果物が入った包みを黙って置く。この親切な行為はもう一人の老婦人にオバ一つも持っていない。オバサンは、「苦痛が分かりそして優しさが必要であること」(二二三)に気づき、うに、肉親以外の者にも気遣いの沈黙は向けられる。乗車直前に出産した若い女の人は赤ちゃん用品を育ちである。さらに、バンクーパーからスロウカンへの列車の中で起きた出来事からはつきり分かるよそれをオバアチヤン、オカアサンそして代理母であるオバサンから学んできた。彼女たちはみんな日本

(二二八) ガマでないうと教えてくれる。それだからこの橋の上で私の側について辛抱強く待っているのだ。

理整頓され、分類されがちであろうとも。(四〇二)

語り手自身は決してオバサンを傲慢な態度で見ない。スナイーゲンや『チャイナタウンの女武者』のフキシン(二人とも自分たちの民族を異国人として見なすように「教育を受けて」きた)と異なるのは、皮肉にも、北アメリカの学校教育を受け始めたが運かたからかもしれない。スローカンに移住させられた時はまだ就学前のことで、そのでの生活はしばらくの間「静かな楽しい休日」(二三八)であった。一九四三年五月、ナオミは七歳になって「初めて学校に行った」(二三八)のだった。学校教育に代わってオバサンのやり方が植え付けられていたので、大人になっても、あの「沈黙の領域」へとまだ旅することができるのである。

このようなオバサンとの親密な触れ合いがあったので、ナオミはその沈黙に殊のほか尊敬の念を抱いている。オバサンの無口の裏にある語らねない意味を見抜き、そして「オバサンの思いが詰まった野蔵庫」(二二六)に入りたいと願う。ナオミは聞かえないものを言語化する。「オバサンの嘆きの言語は沈黙である。彼女はその言語を、そのイナイオムを、そのニエアンズをよく身につけてきた。幾年にも渡って、彼女の小さな身体の中にある沈黙は大きくそして力強くなってきたのだ」(二四)。小説の中の最も無口なオバサンは、最も気遣いのある人でもある。トシオ・モリの「見事なトーナツを作る女」に出てくる老いた女性のように、オバサンは自立たぬがゆえに自立つのである。(彼女は、ワースワースが「インタン・アビル」という詩の中で、あの「ささやかで、名もなく、覚えられることのない親切と愛の行為」と讃えたことを行うのだ)。この小説の顕著な功績は、無口な人を忘れがたい人物にしたコ

るのだ」(三二六)。

この一節は、コガラの父であるゴードン・ナカヤマ著『一世——日系カナダ人開拓者物語』に寄せたコガラの序文に照らして読むとよい。「私は一世のことを美化して話したくないが、彼らの生涯を通して、彼らの手の中で、その沈黙の中で、あんなに深いエネルギイを持って輝いていたものが何であったかを、謙虚な気持ちで感謝の念を持って知りたいのである」(一九八四、七)。ナオミがオバサンの身体で語っているということを示すものである。気遣う姿勢を身につけて、ナオミは大人なつてもそれを体現し続ける。オバサンが屋根裏部屋に上がるのを眺めながら、ナオミは、寝室の総の中の少女がしていたのと同じ姿勢をして、オバサンの後をついていく。「左手で手すりを持ち、もし彼女がつかまざらば受止められるように右手を上げて構えていた」(二三三)。オジサンのお通夜の時、ナオミはエミリーの日記を漁り読みたという衝動を覚えるが思いどまる。日記は「過去からの声で重く感じられる……でも今は、もつと差し迫って語っている声は、そして私が耳を澄まざなければならぬ(attend)声は、もうう亡くなったオジサンの声なのだわ」。その声は、彼女に「オバサンを世語る」ように「オバサンを大事に」(四六)するように命じる。オジサンはもう物理的に存在していないので、ナオミの意思疎通

は以心伝心の一例である。それは語ることもなく身振りもなく行えるものである。従って、ナオミは静かにオバサンの側で見守る。「私はオバサンを抱きしめたいという気持ちで一杯になっているけど、抱擁は彼女をびくりさせるわ。ただできることは、オバサンの側に静かにただ座って、目を覚ますささやかなサインを待つていることね。」(二七)。

氣遣いの沈黙にさえも不安定で否定的な側面がある。氣遣いを無条件に是認すると伝統的規範(また母性と結びつく規範など)を再強化してしまうことになりうる。まさにその伝統的規範がフランスの特性を有するがゆえに、特に女性を束縛しているのである。人が何を必要としているかと常に注意を払うことは、通常母親に要求されることであるが、しばしば大きな犠牲を払わせる。オバサンはいつも人のために尽くしているので、明らかに自分のことは十分にかまわないうた。内的な強さがあるにもかかわらず、年を取るにつれ彼女は視力や聴力が極端に弱くなりめったに話さなくなっていた。このよくなハンディキャップは(盲人は見えるなどというような)古典的なバラストックスを彼女に実際に演じさせてもいるが、もう一面では、それは、彼女が自粛していることばかりでなく社会政治的な抑圧を受けていることを物語っている(独身時代は琴の名手だったが、もう弾かなくなつた)。語り手は、エミリオオバサンやオトウサンのように文化的にバイリンガルであり、「目の言語においてバイリンガル(visually bilingual)でもあるので(四七)、オバサンの氣遣いを信頼することも、氣遣いのためにオバサンが扱われた代償に氣づくこともできる。

小説のクライマックスでは、沈黙が人に行動を起こさせる力を持つ側面ばかりでなく沈黙の破壊的な側面も総括している。ナオミはついに(祖母の手紙から)母が身傷して醜い姿になつたことを知る。狼

変えるのである(六六)。

マグナツンは、「このような過去の修正は、沈黙より発話に特権を与えるのである。言語に不正確な点があるにもかかわらず、欺瞞的な無言がもたらす安全よりも言語は上位にあることとなるのだ」(六六)と結論づけているが、私はマグナツンのこの結論に賛成しない。第一に、言語と沈黙の二項対立は(これらの二つの言葉が普通に使われているので、私自身が完全にはこの対立から抜け出すことができていないのだが)、コガラの小説の中でしばしば崩壊する。この小説では、沈黙はいわば発話の文彩となるのである(「オバサン」の嘆きの言葉は沈黙である。「エミリオオバサンと父は……目の言語においてバイリンガルだ」「無言の言葉」。第二に、『失われた祖国』の中の沈黙は、私が示して来たように、「欺瞞的な無言がもたらす安全」よりももっと多くのことを内包している。最も重要なことは、コガラはこの作品に現れる全ての沈黙よりも発話に決して「特権を与えて」いないことである。

語り手は保護的な沈黙に対して抗議しつつ、「氣遣う姿勢」を持てるように祈願する。それは、フジ

「失われた祖国」が出版されたのは、日系カナダ人が強制収容に対する賠償を求めており、ヨーロッパに合図。ナオミはあらゆる政治的策略について疑念を表明するが、作品には政治的な暗示が満ちている。ナオミの女武者^②と同じく、明示的なナラティブの声と暗示的なナラティブ行為とがしばしばつ

明確にはあまり分らないが、語り手の声は彼女自身のナラティブによって弱められている。「チャコガラの小説の中に多層的な認識を生み出すことになる。

手紙の併置によって、公的言説と私的言説の間の境界が浸食される。このように互いに互いに連結された声は、ほかの有名なハリエル・キタガラが書いた実際の手紙から再構築されたものである。公的文書と私的な日記の日記の中に出てくる多くの引用はカナダ公文書館のファイルからの抜粋であり、彼女の個人的な日記指摘したが、小説の大部分は「歴史の出来事に基づいており、作中人物の多くは実名である」。エミリア・ジャクソン^③のものと詩的なものを混ぜ合わせ、相克する声（声）を小説の中に取り入れている。序説でル六八、フォルニカト一九八九、二九四、リム一九九〇、二九一も参照。キングストンと同じく、コガラは『失われた祖国』を「文学的と同時に歴史のかつ理論的な作品」であると述べている（二四、ナオミは、この『失われた祖国』における言語の多彩性はしばしば注目されてきた。マリーナ・ジョーンズは、多重の声で語る言説を用い、また沈黙させられた人々が持つ力を利用して省略技法を多く使う言説にも沈黙にも潜在している矛盾に合わせて、コガラは、リアリティの多面性を表現するために

話す夢

ナオミは「心伝心」「心から心へ」という手段によって、「骨だけ」の手紙に生命を吹き込む。想像力に富む共感を通して不在の存在を捉えられたのは、入念な注意深さが彼女の中に育っていたからである。彼女は遂にあの謎めいたエピソードを解く鍵を発見する。「人を開放する発語はあの羊水の深い奥からやって来る。その声に耳を澄ますことは、その不在を抱きしめること、そう聞こえてくる。」

子供にとって、肉体がなければ傍にはいないのだと思っています。でも、あなたはここにいないけれども、あなたがいるとわかるのは、多分私よりも子供ではないからでしょう。今夜ここにある手紙は骸骨の骨。骨だけしかない。でも大地は眠っている花でまだ鼓動している。愛は私たちのお墓の傍の木々の根を通して流れているわ。（二四三）

タが述べたように、「最も助けが必要な時にナオミを支えてくれる」（三九）からである。その行いはナオミに癒しの過程をもたらす。「だんだん部屋は静かになっていく。まるでオジャサンとまた一緒にいるみたい。今までのずっとそうしてきたように、私はなにも言わない大地になにも言われない空の声にずっと耳を傾けた。……オカアサン。私は聴いているの。あなたの声が聞こえるように私を助けて」（二四〇）。このように声を聴こうとすると、彼女には「記憶に残る……あの吐息、無言の言葉」（二四二）が聞こえてくる。ナオミは母の存在を呼び出すことができ、共感力が母との元の絆を取り戻すのだ。「長崎にいる若いオカアサン、私はそのにいないの？ いえ、一緒にいるのですよね」（二四二）。母との霊的交感性は

パと北アメリカでは反核運動が勢いを増していた時代であった。そんな時代にこの本が出現したのは偶然ではないであろう。ハーマンによると、「人権を求める強力な政治運動が行われていなければ、証言するという行動は必然的に忘却するという行動に屈してしまふ。抑圧、分離、それに否定は、個人的な意識ばかりでなく社会的な意識の現象である」(九)。エミリー／キタガワが関わる政治的行動主義は、ナオミ／コガワが個人的な沈黙を破るための必要な状況を与えている。『失われた祖国』は、本来のナライヴで終わらず、「日系カナダ人に関する協同委員会」によってカナダ上院・下院へ一九四六年四月に送られた覚書きからの抜粋(二四八)で終わっている。日系カナダ人の国外追放に抗議するこの文書を挿入して、作家は正義のために闘った多くの政治活動家たちに無言のうちに感謝の意を表しているのだ。

ナライヴの声とナライヴ行為の分裂は歴史を評価する時も起る。小説全体を通して、ナオミは歴史を知ることが不可能だと主張する。「普通の物語は時が経つと変わってしまう。現在が過去によって作られるのと全く同じように、現在によって変えられてしまふ」(二五)からである。しかし、「歴史は……この小説の第一章から早くも出現し始めているのである」(ロイス一九八七、二九二)。このような二重性がある特殊な例は、人は「事実をはっきりさせる」(二八三)ことができるというエミリーの確信にナオミが疑問を呈する時に出てくる。前に見たように、ナオミはエミリーの小包の中に新聞の切り抜きと「アルバタ州の疎開者に関する事実」と記された索引カードを見つけた。切り抜きには積み上げたジトの周りに笑顔を浮かべて立っている家族の写真が載っている。説明には「幸せな満面の笑み」(一九三)とある。だが、ナオミ自身のアルバタ州の思い出は全く異なっている。

とても辛くて暑くて涙腺が燃え尽きる。……粘土質の泥のかたまりが長靴にこびりついて脚が重くなる。そして長靴を履いている脚の皮膚は、膝の下のふくらはぎのところで真つ赤になり硬くなつて痒い……。
 醜くなつていくのが嫌だと思ふ。
 収穫の時期が嫌だし、手首のひび割れを防ぐためにぼろきれで縛つた手と手首が嫌だつた……エミリーオバサン、私はこの時のことを話せない。身体が語るとしないの。(一九六)

彼女はその写真の説明に戻つて顔をしかめて締めくくる。「幸せな満面の笑み」ですつて……？ そういふお話もあるでしょうね。でも、あの時はそんなものではなかったわ」(一九七)。ナオミは印字された事実と反論するときでさえ、別の「お話」を提示する。それは強制移住についてより真実の姿を映し出す「お話」である。ナオミの身体中に刻まれた事実は、エミリーですら(彼女は強制退去の前に父親と一緒にバンクーバーに引越した。*トロントに引越した)見ることができないものである。コガワはナオミ自身に体験を語らせ、小説に記録するという手段を使って歴史が事実を操作していることに論駁する。社会的記憶に対抗してナオミの個人的回想を提示するのである。

作者はこの個人的記憶と社会的記憶に対する適切な反応とは何かについて異なる見解を提示する。小説の中でつとエミリーとナオミは言い争っている。エミリーは語り手の中立的姿勢を批判する。「ものごとのあらゆる面を見るのに忙しすぎて、どつちつかずの関心しか抱かず必要な行動を取らなくなつ

この意味で、エミリーの論争の有効性に疑問を抱く語り手は、彼女自身で「適切な言葉の組み合わせ」に近づきつつある。ゲアリー・ウイリスは、この小説の「感動」はナラティヴの力、つまり、「言説的論争の力よりもっと大きな力」(二四九)から生まれているとする。しかし、その力は特にコガワの無言のレトリックから、すなわち、言葉と言葉の間に沈黙を差し挟む彼女のやり方から来ていると私は信じている。打ち砕かれた心象がナオミの思い出に染み渡っている。これらの思い出は、「断片の断片」としてまた「物語の切れ端」(五三)として描かれる時であれば、「夢のイメージ」(一一二)として描かれる時もある。読者は語られていない繋がりに気を配り、ばらばらになつた断片を繋ぎ合わせなければならぬ。言葉と言葉の間の空間に意味が充滿しているからである。

父の言葉、つまり、主体が世界や他の主体と結ぶ相互関係の基盤そのものを決定しようとするとき用いられる政治的、宗教的、道徳的な世界での権威ある言説とは極めて対照的に、モラガは愛という言葉を差し出す。……この慈しみの言葉は、いかなる権威の後ろ盾もなく、それ自体イデオロギイの言説だとすら認識されず、あらゆる特権が否定されている。(一九七)

てしまう……そういう人はいるものね」(三五)。知的に如才なくなると政治活動の邪魔をするとエミリーはほめかすのだ。ナオミはその批判を心に留めておくけれども、エミリーの言葉による強硬な改革運動は、社会悪を矯正するのにそれほど効果があるのであるうかと疑う。「貪欲、身勝手、憎悪つて人間の様相として常にあるものでないのかしら？ それとも、ロビイ活動をして法律を制定したり、演説をしたり、物語を語ったりすることで、ばかげたやり方から私たちが解放されようとも思っているのかしら？ そんな楽観主義になれる証拠はあるの？」(一九九)。エミリーの抗議はむなしとナオミは暗に言う。あんなに努力しているにもかかわらず、変革されたことはほとんどなかった。「社会悪を追求するための適切な言葉の組み合わせ (de good mix) を見つけようとして、消したり、書き直したり、下線を引いたりしている」エミリーの姿をナオミは思い浮かべる。「エイミーはキエロピッドのように心を射ようとしている。でも、心はそこにはなかつたわ」(四〇)と思う。

言葉と弓矢に暗示されるアナロジーは、言語は武器であるとするネイトイブ・アメリカンとフエニストの言語観を思い起こさせる(バックウ 四〇、リンカン一九八三四四、ジャーゲイン 二三一、参照)を思い起こさせる。しかし、ここでの語り手の語る詩的表現がより意味深いのは、射手のイメージがキエロピッドであることなのだ。エミリーは法律を委えるために言葉を使うことに満足してけれども、語り手/作家はとりわけ読者の「心」を射たいと願っている。それでは「政治的」には不十分であると感ずる読者もいるかもしれないが、コガワの静かな文体は政治的言説に抜本的に代わる選択肢を提示している。ラモン・サルグレイヴァルがチエリー・モラガ著『戦時に愛して』について述べたことは、『矢われた祖国』にも当てはまる。

の反応でわかるように、言葉も同様に記憶を解き放つ。

その言葉を見ると……痛みと優しさが同居する妙な感覚が私の中に食い込んでくる。それは「姉」という意味で、エミリーオバサンがいつもオカアサンをそう呼んでいた。カトウのオバアチャンも、特にエミリーオバサンと話しているときにオカアサンを「ネエサン」と時々呼んでいた。私が一度オカアサンを「ネエサン」と呼んで、カトウのオバアチャンが笑いこけたのを思い出す。(四六)

「ネエサン」というその言葉は、文字通りの意味のせいでなく母親や祖母を連想させるせいで、また思い出すにはあまりにも至福だった時とも関連しているせいで、ナオミの心をかき乱すのである。エミリーの日記に出てくる全ての言葉の中で、この言葉はいつも簡単にナオミの心に忍び込む。比喩となつたキルトのように、語り手の言葉はしばしば寓話や夢という形を取って間接的に挿入される。寓話と夢は連携して言葉と感情が入り込まれた共鳴模様を織るのである。

キングストンのように、コガワは西洋と東洋の寓話の両方を効果的に配置して、過去と現在を結び、空想と現実を対比させる。キングストンは伝説を題材として使い、それを自己達成の空想(チャン一九〇a)に変えるが、一方、ゴールディングス物語を二重の意味で語るように、コガワはおとぎ話を書き換えて家族や過去へのナオミの思慕の情を一層引き出す。

ステイブンが持っていた本の一冊に、ゴールディングスと呼ばれる長い金色の巻き毛の子供の物

語がある。ある日その子は熊の家族が住む森の中の古風な家にやって来る。明らかに、私たちは森の真ん中にあるこの寂かな家に住むあの熊の家族だ。私は赤ちゃん熊だ。私の椅子をゴールディングスは壊し、私のおかゆを食べてしまい、私のベッドで寝てしまう。多分、そうじゃないかもしれない。結局、本当は私がゴールディングスなのだ。朝になって、私は森から出て私の部屋に戻る道が見つからないということにならないのかしら？ 絵の中の鳥が私のベッドの上で鳴いて、そして開け放たれた寝室の窓の側には本物の桃の木があって本物の鳥がとまって鳴いている、あのマールのお部屋に戻る道か？ (二二六)

ナオミは、その物語が本来対象とするアンダグロ・サクソンの読者とは違つて、すぐにはゴールディングスと自分とを同一視しない。事実、このおとぎ話を思い出したのは、スローカンで「金髪に混じった銀髪」という母親のお気入りのレコードを聞いたからである。ナオミは、「なぜオカアサンはこの歌を好きだったのかという疑問さえ私は抱きもしなかった。私たちには金髪に混じる銀の髪なんてないに」(二二六)と言う。ゴールディングスの「長い金色の巻き毛」も持つていない。それゆえ、ナオミは最初は自分自身を茶色の他者、つまりゴールディングスが快適な思いをするために犠牲となった赤ちゃん熊として見なす。しかし、犠牲者の役割に対して本能的にナオミは嫌悪感を抱いたので(直観的に犠牲者と同一化しているにも関わらず)、すぐに自分自身をヒロイン役に替えてしまう。もし自分がゴールディングスだったらすべては上手くいくだろうに、ナオミは推測する。そうならば、戦前の樂園時代の家に戻れるだろう。そこで、絵に描かれた鳥と実際の鳥がびつたりと一致し、

生き生きと語られるこの描写は、『失われた祖国』の中の幾つかの別れの場面を示すものだ。オカアさんとオバアチャンが日本に旅立つとき、オトウサンのスロークアンを去るとき、ナカネのオジイチャンとオバアチャンが入院のために出発するとき、そしてステイーンがフロントへ去るとき。これらのいずれの場合にも涙は流されない。そして交わされる言葉もほとんどない。しかし、モモタロウと違って、これらの別れて行った人たちは実は誰一人として帰って来ないのである。

モモタロウが旅立たなければならぬ時が来て、沈黙が雪の羽毛のように和紙の小さな家の上に降る。家の中では、手はゆくりと動く。おばあさんは食卓に座って、湿らせた指の先で粘っこいご飯を握っておにぎりを作っている。おにぎりを小さな風呂敷で包み、それを丸めた両手にのせて胸の前で持ち、旅のお弁当としてモモタロウに差し出す。涙もこぼさず、体に触れることもしない。おじいさんとおばあさんは、旅立ちに際して自分たちの悲しみでモモタロウの荷物が重くならないように気遣う。霧深い山々にまた二人きりになって、その年寄りたちは待つのである。(五六)

純であるが、語り手が思い起こした細部はそれぞれ引續に満ちている。桃から飛び出したモモタロウを見た老夫婦の喜びは、ナオミ自身の戦前の幸せな子供時代に匹敵する。その頃は、大人がみんな彼女に愛と関心を惜しみなく与えてくれて、ただ「いるだけで子供は喜びである」(四五)という時期だった。モモタロウが親元を離れて長い危険に満ちた旅に出る日も、またナオミの体験とよく似ている。別離の寂しさや悲しみの抑制が精緻に描かれている。

ナオミが好きな語であるモモタロウという日本の寓話は、彼女の生活をもっと忠実に語る。コガラがそれを語り直すとき、その話はナオミと読者の感情を波立たせ始める。フジタは、「気遣う姿勢が明らか……モモタロウの語に繋がっている」(三八)ことを明らかにした。モモタロウの語とは、桃の中から現れ出て子供のない老夫婦を大喜びさせた男の子の物語である。モモタロウは大人になって、盗賊と戦うために近くの島に行く。彼は戦いに勝って年老いた里親に名譽をもたらす。プロットはまったく単

に遠い先のことだと予感させる。「どんなに願おうとも、私たちは家に戻れないのだ」(二六)。シニアアンとシニアエが共鳴するのだ。しかし、ベコラが最も青い眼を持つことができないように、ナオミもコルゲイロックスになることはできない。絵に描かれた少女と実際の少女は一致しないし、一致するようになることもないだろう。それが不可能であるということは、彼女が戻れるのは遥かに遠い先のことだと予感させる。「どんなに願おうとも、私たちは家に戻れないのだ」(二六)。

コルゲイロックス物語は、ナオミのもう一つの痛いとこを最も擦るようである。子供の頃からずっとナオミは、我が儘でないように利己的で思いやりのないことがないようにと、教えられてきた。病気の曾祖母を看病するためにオカアサンは日本に行かなければならぬと聞かされた時、ナオミは心の内の抗議を隠して黙っている。「ひいお祖母さんは私のお母さんが必要としている。お母さんは私を必要としないの？ この宇宙のどの市場で、私の必要とひいお祖母さんの必要とを交換した取引が行われるのかしら？」(六七)。しかし、一度もナオミは自らの望みを言葉に出したり行動に移したりすることはない。他者に対して思いやりのないおとぎ話の少女とほとんど違っていることか！罰せられもせず(少なくともナオミが読んだ版では)、その子は心地よい家で目覚める。一方、自分の要求を良心的に抑えようとした幼いナオミは、辺鄙な場所の慣れないベッドで目覚めるのである。

この寓話が多様な意味を持つようになるのは、今や「ナオミ」が子供の頃知っていた祖母よりも年をとり、そして今、「彼女が知っている」どの人よりも老けている（五四）オバサンに関わる場合である。オバサンとオジサン夫婦もまた子供がいない。オバサンがステイブンとナオミの後見人となった時、彼女も彼らを我が子として扱った。エミリーは日記の中でナオミの母親にこう語る。「あの子どもを彼女に託してくれたので、あなたが戻ってくるまで自分の子供だと彼女は言っています」（〇八）。モモタロウへの老夫婦の愛は、言葉や触れ合いではなく、おばあさんの手のゆっくりとした動きを通して表される。これと同じように、オバサンも「人のために尽くす奉仕の手によってオバサンらしさが明らかになれる」。老夫婦の思慮深い沈黙は、ステイブンとナオミを悲しみから守ろうとしたオカアサン、オジイちゃん、オジサン、そしてオバサンの行動と共鳴するのである。

しかし、コガワはオバサンとステイブンの関係においては、この話に悲しい一捻りを加える。おばあさんからモモタロウに渡されたおにぎりには、列車の一場面を想起させる。オバサンはステイブンにおにぎりを渡すが、彼は「そんな食べ物は嫌だ」とすねて、彼女の気持ちを拒否する（二五）。このエピソードはステイブンが養母を含めて日本的なものをすべてを拒否するようになることを予告する。音楽学校へ出立する日、ナオミは兄を「世界を征服しに行くモモタロウ」（二四）のようだと考える。オバサンは、あの物語の「おばあさん」のように悲しみを見せないようにしている。その代わり彼女は「彼が去っていった後も同じ場所に立ち続けていた」（二四）。しかしステイブンの長い旅の動機はモモタロウの動機にはほど遠い。彼はコンサートピアニストとして音楽界で成功して名声を得るかもしれないが、年老いた里親に栄養を与えることは決してない。モモタロウの物語の中の沈黙は相互の思い

やりを表すが、ステイブンは益々素っ気なくなるのは反駁なのである。彼は「いらいらして、オバサンとはほとんど口をきかなくなる」（二五）。しかし、そのオバサンは「彼が決して身につけることがないのに、古い靴下やシャツを何度も繕い、彼が食べないことも多いのに、食べ物を食卓に用意する」（二五）。彼はついにオバサンをまったく避けるようになる。「彼女の心が内向していった深さに耐えられなくて……」「彼は地の果てに逃げて行った」（二四）。「なにかが『日本の過ぎる』ときはいつも不快だと感じる」ので（二七）、ステイブンはエミリーが簡潔明瞭に述べたポイントを掴めなかったのだ。あった。「モモタロウはカナダのお話なの。我々はカナダ人だよな？ カナダ人がすることはすべてカナダのごことなるのよ」（五七）。

フジタは、エミリーその人がモモタロウ精神の実例となっていると述べている。さらに、語り手は「エミリーオバサンがずっと調べてきた書類のような文書」で小説を終わらせて、エミリーの言葉による闘争に参加し、「第十巻で途中までしか語られなかったモモタロウの話に結末をつけるのである」（三八、四〇）とフジタは言う。盗賊と戦うために家を出たモモタロウのように、エミリーは不正義と闘うためにカナダとアメリカを飛び回る。コガワは、モモタロウの勇気をエミリーに移すことで、この小説で描く平和主義という趣旨に合わせて伝統的なヒロイズムも再定義してきたのである。彼女は武勇を称賛することを拒み、ナオミ版寓話では身体を使う戦闘の描写をすべて取り除くのだ。そうすることで、『チャイナタウンの女武者』のキングストンのように、コガワは伝統的な話の中に新しい意味を注入したのである。キングストンは男性の將軍の伝説を女武者のフアンタジーに接合させる。コガワはモモタロウの属性をエミリーに授ける。キングストンは武力で戦う女性を言語で戦う女性に容れさせる。コガ

フはモモタロウの戦鬪をエミリーの「紙による戦鬪」(一八九)に変える。脚本でこのように変えてしまえば、女性の家父長制社会の軍事的な精神に賛同することなく公的な闘争の舞台に立つことができるのである。

最後に、モモタロウの話のおじいさんとおばあさんが寂しく待つ姿は、母親の痛遷を待ちこがれるオミ自身の痛みを示すものである。「五歳の私にとって重大なのは、母が去らなければならぬ理由ではなくて、待つことの静寂なの。……しばらくすると、その静寂は影となるほど私につきまといだんだん大きくなって空気のようになりに私を取り囲む」(六六)。幼いオミは、自分自身の欲求より他の者の欲求に注意を払う方がずっと難しいと思う。彼女が気遣う姿勢に達する道程は険しいのである。

このように、コガワは半ページも使わずに、登場人物が互いに隠している様々な感情をモンタージュでまとめ上げ、そのような自己抑制の根は人格形成期に読んだ話にあるとする。作者自身はその話の教訓を十分に学んできた。記憶や感情を呼び起こす彼女の文体は、無味乾燥な公文書やエミリーの感情をあらわにしたレトリックとは対照的である。表現できないことを把握するためには、読者は精巧な文の深層を探らなければならぬ。

コガワは「話す夢」を通じて、子供の頃「全く語さなかった」(五七)語り手の埋もれた感情も伝える。三つの特別な夢がオミの成長を印す。その子はガウアーおじいさんと会ったあとに繰り返し悪夢に襲われる。「子供の頃見た夢の中で、山が大きく口を開けて裂け、その亀裂が広がっていく。私の母はその亀裂の一方の側にいる。私は別の側にいる。お互いに手が届かない。私の脚は鋸で真二つに切られていくのだ」(六五)。その夢はオミの身体が切断される感覚と、「この頃あたりに」(六六)母が居なくなっ

たために彼女が感じるようになった母からの心理的疎外感と結びつく。オミの悪夢と母親の不在が連続的に配置されているのは、子供のオミが「母親に捨てられたのは、自分が犯した口に出せない罪、犠牲者であるオミが罪と恥の意識に取り憑かれていたことは、成人した後すらも繰り返し見る別の悪夢さらに示される。この夢では、三人の美しい東洋人女性が、数人の英国人兵士に捕われて監視され、泥だらけの道に裸で横たわっている。三人の女性のうちの一人が——「憎悪と欲情との間にその身を横たえさせられて」——兵士を誘おうとすると、兵士たちは彼女たちの足を撃つて楽しむのである。「兵士たちにどうしたって勝つことはできない。恐怖とひどい嫌悪が女性たちを切り裂いた」(六二)とオミは書く。この夢は、罰と性的な誘惑とを再度結びつけて、夢を見ている者の自己卑下を際立たせている。

沈黙に対してどうあるべきかを示す最も教示的な夢は、ドストエフスキの『カラマゾフの兄弟』の中の大陪審員をほめかす夢であるが、それはオミが長崎での母親が味わった苦難をついに知る直前に見たものである。その夢の中で、大陪審員(ガウアーおじいさんに似ている)がオミの目と母の口をこじ開けようとしている。

知りたいから話せという彼の要求は、判決であり聞くことを拒否することであった。「オカアサン」に尋問すればするほど、彼はますます彼女を責め殺すこととなった。彼女は彼女を殺せば殺すほど、彼女の沈黙はますます深くなった。大陪審員が今まで全く知らなかったことは、発話の道と沈黙の道は繋

がっていることだ。私の母の声を聴き、彼女の語りに耳を傾け、石の音に耳を傾けるためには、まず彼は黙らないといけない。全てを遺棄した彼女の世界に入ったときのみ、彼自身の遺棄の苦しみから解放されるであらう。(二二八、強調はチャン)

大陪審員がナオミの目をこじ開ける拷問について、ゴットリーブはこのように評している。「これは、邪悪を暗闇と結びつける伝統的(西洋的あるいは伝奇的)連想とはいかに異なっていることか。この小説では、邪悪の神秘が最も日常的に表現され強烈な真昼の光を浴びている中で、我々はそれと直面するのである」(四一)。発話と沈黙の階層的対立がこれと同じように再配置される。話すことを強制することは、『チャイナタウンの女武者』に出てくる喋らない女の子とマキシオンとの対決を思い出させるばかりでなく、エミリーがナオミに施す想像上の手術も思い出させる。

エミリーオバサン、あなたはフオルダーやフアンカドや全部を知るべしという主張をマスにして、私の頭皮を切り刻む外科医なのですか？記憶は私の両頬を伝って流れ落ちますが、それでは充分でないのですか？あなたは手を私のお腹につこんで、腸壁から腫瘍を引つ張り出しているけど、麻酔医を連れ戻してよ、エーテル管を開いてガスマスクをつけさせてクロロフォルムを嗅かせてよ、エミリーオバサン、この手術はいつ終わるの？(一九四)

アリン・ローズは、この手術はナオミにとって必要で有益であると見なしている(一九八、二二三)。

確かにエミリーはナオミに良いことをしてやりたいだけである。しかし大陪審員の夢と照らし合わせて読むと、ナオミの苦痛はエミリーのこのやり方ですら取り除けないと思わせる。すべてを知りたいとしてナオミが話すのを助けたいと必死になっている際に、ナオミの内なる発話や明瞭に話すことを妨げている心理的障害に注意を充分払っていない点では、エミリーに罪があるかもしれない。ナオミはこの叔母との対話を想像したり回想したりすることで沈黙を破るのだと思っ人がいるかもしれない。しかし、ナオミは夢からエビフアーニーを得る。自分が無意識のうちは大陪審員の役割を引き受け、母親から強引に答えを引き出そうとしていたと思いたるのだ。「私はオカアサンの愛を疑ったのかしら？オカアサンを非難しているのかしら？」(二二八)と自問する。夢はナオミに、彼女も「オカアサンを非難する者として罪を犯している」という認識を抱くように促し、他人の苦しみを思いやって、捨てられたように見えても母の愛を信じるようにと促す(フジタ三九)。ナオミは「尋問」をあきらめることを決心した時点で真実を知る。沈黙の道と発話の道と結合するのである。

これらの夢は、この章の初めに論じた様々な形態の沈黙を思い出させる。第一番目の夢は、ナオミが話してはならないと言われたことをドラマ化したものである。第二の夢は、彼女の抑圧された感情の源は子供時代の恥と罪意識にあることを示す。第三の夢は、気遣いの沈黙を勧めるたとえ話を生み出す。最初の二つの夢の中では犠牲者たちは、自分たちの苦痛に意識を集中している。最後の夢では、ナオミは母親もまた自分と同じ苦悩者であるとして見ている。いったん焦点を自分自身の傷つきやすさから母親の苦しい体験に移すと、自分は我が儘だったということを理解する。それは自己中心的な要求をして

いたという罪なのだと分かる。他の人の要求と自分の要求を並べてみて、自分自身の埋もれた悲しみが、あるにもかかわらず他の人を氣遣うとき、ナオミは日本の舞とオバサンというお手本に忠実であるのだ。逆説的に言えば、「石が大きく割れて口を開ける」のは、まさに「石の首に耳を傾け」ようとするナオミの意志によるのである。その次の章で彼女は長崎の惨事を知らされる。それは愕然とすることであつたけれども、それを知つてこそナオミは、長年苦しめられてきた疑いと人には話すことができない。罪の意識から解放されるのである。

水と石

『失われた祖国』の結末では、『チャイナタウンの女武者』と同じように、母と娘、過去と現在、生と死、そしてとりわけ、オバサンとエミリーに具現化された非言語表現様式と言語表現様式の間での多数の和解放成立する。しかしながら、これらの和解放成される前には容赦のない疲労感が表現される。

私は疲れてしまった。たぶん、このようなこと全てから逃げ出したいからなのだろう。過去とこれらの書類全てから、現在から、記憶から、数々の死から、エミリーオバサンと彼女の沢山の言葉から。重くのしかかるアインテリナイから、拒絶されているという証拠から、言葉に表されていない情熱から、誤解されてしまった礼儀正しさから、私は死と葬式の間を行き来して、礼節を背負い、叫ぶことも歌うことも踊ることもできない、わめくことも罵ることもできない。

笑うこともできない、大きく音を立てて息を吐くこともできない日々を生きるのにうんざりしている。(一八三)

この嘆きのすぐ後で、ナオミはカトウのオジイチャン宛てに書かれたカトウのオバアチャンからの手紙で母親の運命を知る。先に見たように、手紙は「愛」によって生命が吹き込まれていない「骸骨」として彼女のものとやつて来る。しかし、ナオミは沈黙の言葉で常に愛について考えてきた。彼女は中国の詩から引用する。「愛は隠すものだ」と知っていましたか？／あまりに貴重なので摘み取ることができないと思われる花のように」(二二八)。この引用は、言葉に対して、特に利己的であると思われる言葉に対して、ナオミ自身が抱く不安感を伝えている。「自分が犠牲者になつたことについて多くを語る人々を不快に思う。まるで自分たちの苦しみを、ある種の武器や勳章として使っているようである」(三三四)からだ。オバアチャンも「このようなことを書いて負担をかけることとなりお許しください」(三三六)と、自分たちが被つた惨事を書くことを謝罪している。

しかし、手紙それ自体は、ストイクで保護的で思慮深い沈黙と自傷的で利己的で攻撃的な語りという二項対立が偽りであることを示す。「細いけど頑丈で、メロドラマのような言葉や大袈裟な言い方を全然使わない」人だとナオミが覚えているオバアチャンは、「感情をほとぼらして」原爆の大火に上る余波を書き述べる(三三四)。祖母の手紙は、耐え難い思いを書くことは、その時は身を切られるように辛かるうとも悲しみを放つことができ、それを書いた者が「過去の呪縛から抜け出す」(三三六)のを助けられるということを、またナオミに教える。そのように辛い思いを表すことは、オカアサン

が守ってきた「沈黙の見守り (Guard of silence)」（二二六）より確かに役立つ。その「沈黙の見守り」を、ナオミは母から捨てられた証拠だと長い間誤解していたのだ。皮肉にも、ナオミが祖母と母親の「深い愛」（二二三）を知るのは、配慮がなくして申し訳ないと自ら認めつつ書いたオバアチャンの語りを通してである。

なぜなら、オバアチャンの手紙からは恐怖以外のものが浮かび上がって来るからである。オバアチャンは爆発のあと意識を取り戻すとすぐに姪の子供二人を必死になつて救出しようとしたことを、ナオミはその手紙から知る。「カトウのオバアチャンは自分自身が負ったにちがいない傷について、一言も述べていない」（二三八）。重傷を負ってひどく醜くなったオカアサンは、死んだ赤ん坊を火葬するために薪を積み上げていてるところを発見される。残虐行為に直面してもこのような思いやりを示す例は、ナオミが以前から発していた問いに対して肯定的な答えを与える。人間の様相の一部である強欲、憎悪、利己主義は将来もずっと存在するだろうが、そんな愚かさに人間は囚われないのだという楽観主義の証拠をナオミは今受け入れることができたのである。

このようにしてオバアチャンの手紙は、ナオミの個人的な沈黙と家族の沈黙について書くための私的な理由（過去の呪縛から抜け出すこと）と公的な理由（ストリー・テリングによって、愚かなやり方から脱することができると）を彼女に示してくれるのだ。しかし、ナオミの（もしくはコガワの）「歴史家」としての有能さは、多くの伝統的な歴史家とはまさに彼女が著しく異なっている点にある。バーバラ・オモルトは従来の歴史家の手法について痛烈に非難した。

（二八六）

自分の低い者の往來を監視するために、ペンとメモ帳そして望遠鏡や本を持たせて監視者を象牙の塔の中に置くことは、西洋的思考の中心位置に立つことである。……距離の機能は、監視者が表向きには被監視者を客観視できるようにすることだが、実際は彼らを支配できるようにすることである。このようにして、監視者・学者は征服者・奴隷の主人と結び付けられるようになった。というのは、彼の監視は被監視者を支配することを弁明し正当化するための有益なツールとなったからである。

対照的に、ナオミはためらいがちに話を進めながら、事実のみが歴史を作るわけではないと主張する。彼女は歴史の風景をゆつくりと横断して、虐げられたもの言わぬ者たちを微視的に虫瞰するのである。ナオミの文は、裸眼では見えないそして通常の耳では聞えない感情の動きの跡を追って行く。彼女の文が瞬間的に映し出すのは、恐怖と願望をほめかすイメージのコレクションであり、人間が持つ残酷性と愛という矛盾した潜在能力を映し出す自然の中から取られたシンボルである。

『失われた祖国』は一家族と特別な一時期に焦点を当てているけれども、この作品には個人的そして政治的な悲劇を超えた普遍性がある。キングストンが登場人物に尊称を与えることで家族の歴史を国家的叙事詩に変えたように、コガワも登場人物をオバサン、オジサン、オトウサン、オカアサン、オバアサンと呼ぶことで、彼らに時間を超越した性質を与える。特にオバサンは、多くの日本の伝説に登場する年配の女性に例えられるばかりでなく、「世界のどんな小さな村にもいる……大地の真の正当な所有者であるすべての年取った女性」（二五一六）にもなぞらえられる。コガワ自身はオバサンから「見

系は、「日系」の中の系(ゲン)のように、家系、系統(*家の繋がり)を意味する。この系統という字は、「情熱的な愛」(*戀)を表す漢字の一部分も形成する糸という部首でほとんどが作られている。過去を解きほぐすことにより、戦争と批散によってばらばらにされた家族を編み直すことや分散された日系社会をカナダの歴史のタペストリーに縫い合わせる事が、語り手は象徴的にできるのである。

小説そのものの叙情的な終末部において、沈黙と言葉は再び連結する。それは、オジサンと一緒に長崎原爆記念日に毎年訪れていた峡谷に(以前は、その巡礼の理由はナオミには隠されていたが)ナオミが行こうと決心する時である。そこで彼女は象徴的な洗礼を受けて精美な景色を思い描く。「木々の上では絶白な石である。月影が川面^{かわづら}で漣^{なみ}となって揺れている——水と石が踊っている。それは静かなバリエーションのように音がしない」(二四七)。ゴールニクトが述べるように、このエピソードは「巧みに調和された緊張感で……沈黙の『石』と言語の『流れ』をしっかりと捉えている」(一九八九-一九七)。

このような調和は小説の文体に満ちている。過去を回想し記録することで、ナオミ/コガワは、エミリー/キタガワの公に表現しなさいという呼びかけに答える。静かな表現の本、イメーシと感情のニュアンスを氣遣った本を書くことで、作者はオバサンの沈黙が正しいことも立証する。小説の中の最も効果的な文章は、エミリーの日記から再現された解説的で激情的な記載事項ではなく、幾ページにも渡るナオミの控えめな文のほうである。コガワは、公然と告発することや要求を率直に口にすることは必要であるが充分ではないと示唆する。エミリーのように大声で正義を求めても、人びとが心から関心を寄せるまで何の問題も解決しないであろう。ナラナイヴの中の詩情を心に留めることによって、そしてオバサンのような一世の静かな強さを目の当たりにすることによって、読者の心が変化することは十分

知らぬ戸口の鍵や驚くべき地下道のネットロクへの鍵」を継承したようである。彼女もまた、明らかに何年間も静かに吸収し蓄積してきた「人生の数限りない個人的な委曲を所有する人」である(二六)。

小説の終わりに近づくと、「愛」という言葉を表す二つの表意文字(*漢字)をナオミが調べた時のように、沈黙と発話はますます相補的なものとしてイメーシされる。ナオミが述べた最初の漢字(*愛)は「心」「手」「行動」という基語を含むものであった。つまり、両手と心を一緒に動かすという意味を示す愛である。「情熱的な愛」を表すもう一つの漢字(*戀)は、「心」「話すこと」「長い糸」(二二八)で形成されるものであった。愛は、オバサンの人のために尽くす奉仕の手やエミリーの(そしてオバアちゃんの)情熱的な語りの形を取るのかもしれない。「心が表しているのは、オバサンの麻ひもに結ばれ、エミリーオバサンの小包にも結ばれた一本の長い糸だ」(二二八)からである。

『失われた祖国』そのものが長い糸のようにほじけていく。その糸は作品の中の様々な強さを持った女性たちを結んでいる。細紐のイメーシは小説全体に広がっているが、冒頭では、それはナオミを罵にかける蜘蛛の巣とかなり頻繁に連結する。蜘蛛の巣で彼女は過去に「捕獲される」のだ。「オバサント私は、死者の思い出によって畏にはまっている。……古い蜘蛛の巣の糸のようにまだネバネバして宙に浮いて、過去は私たちが屈服するかそこから離れるのを待っている。まったく思いがけない時に、記憶は闇の中から軽快な足取りでやって来て、糸を出して空中に網を張り、私に飛びつき、今にも古い複雑な難問の畏にかけようとしている」(二二六)。しかし、物語の結末までには、獲物を捕らえようとするこれらの蜘蛛の巣は、支え合う女性たちの関係性でできた入り組んだネットロクに、一見異質に見えるナラナイヴの糸を集めて言葉の共鳴と沈黙を編んでいくネットロクに変わっていく。日本語の漢字の

ら論じた。

(3) もちろん、作者の文体を説明する唯一のものとして文化的な態度を使うことはしないほうがいだろう。ヤンモトの場合で私が論じてきたように、ナライヴの間接用法の使用には多くの理由がある。作者の特別な気質、他の作家の影響、そしてジェンターや階級や人種から生じる制約である。しかし、コガワ自身は、一貫して言語の間接用法をより伝統的な日系人、特に日本で生まれ育つたりした人びとと結びつけて考えている。題名となった登場人物で一世であるオバサンは、間接用法を使う典型的な人物である。「彼女の答えはいつも遠回しであつて、お話の全体は決して直線では現れない」(一八)。コガワ自身のナライヴ文体を説明するのにこの同じ言葉を使つてもよい。この小説では、キリスト教も仏教も喚起されるが、それらは言葉と沈黙に対して相反する姿勢を取っているのである。キリスト教における予言の伝統は声の重要性を強調しているが、仏教の瞑想は沈黙への尊敬の念を明らかに示している。座禅についての解説に関しては、ワッツ一五四一七三を参照。

(4) 作者のジョイ・ソフィ・コガワは、一九三五年アリゾナ・コロネビア州バンクナーパーで一世の高親あるゴーストタウンだったスロリーカンに強制移住させられた。家族が移住させられた時、コガワは六歳だった。小説の語り手のナオミより一歳年上である。ナオミの家族と違い、コガワの家族は別れ別れにならなかつた。「牧師である父と母と兄は一緒に移転を生き延びて、その後アルバート州の小さな町に移住した」(イムD)。コガワは一九五四年にアルバート州大学に入学、一九五六年にアンソニー女子養成短期大学音楽学校に入学、一九六八年にサスカチワン大学に入学した。オタワでは、学校教師として、また、知事室のスタッフライターとして働いた。一九七九年以降トロントに在住。『失われた祖国』は、彼女の最初の小説で、一九八一年にカナ

(1) この表意文字の静は、中国語でジン(jing)、日本語ではジョ(じょ)、セイ(sei)と発音される。この字の様々な「活用形」については『中国語大辞典』(Cihai)三、四五五とホルン一七四を参照。ツカサ・ニシタによると、「日本人が第一に関心を抱くことは人と人とのコミュニケーション状況である。それは、相手の気持ちや感情を『捉える』ことであるが、それも、言語表現を通してだけでなく、言葉を使わない表現や目の動きや顔の表情などの様々な手がかりをもとに捉えるのである。日本では言葉よりも行動に重きを置く格言が多い。例えば、『言実行』……『秘すれば花』など。……言語化は臆病さや悪意や弱さを隠すためのひとつの手段だと考えられる」(四五四六)。日本人と日系アメリカ人の文化の間にある連続性とその相違に関しては、第二章を参照。また『失われた祖国』の中の「沈黙という感受性」についてはフジタを見よ。コガワの言語に対する二律背反した感情に関しては、ワグナソンとゴールニク一八九九を参照。

(2) ナルガドとツグの二人は、ヘイトスピーチが人種差別主義の犠牲者に与えた酷い危害について法的観点か

注

ありうるのである。

大工仕事について話す時、ナオミはこのように述べる。「日本の職人技は基本的に違っているよ。方を入れて押すよりもむしろ加減しながら引くの」(二四)。この観察は日系人と支配的なカナダ人のやり方によって力を抑えた文体を刻み上げたのであつた。

- ゴールニクト 一九八九で最初に注目されたものである。
- (9) コガワはインタビュでオバサンとオジサンは他の一世と同じであると明らかにした。「自分たちは殺されたかった」とアリス・ウォーカーの『カラー・パール』でも起こる。
- (11) エミリーは読者に攻撃的の印象を与えるかもしれないが、彼女は大変面倒見のよい親戚である。オジサンとオバサンは心配して長距離電話でオオミにオバサンのことを尋ねる。オオミは心の中で思う。「彼女が私の心配を分かち合ってくれていると感じると、ほっとする」(七八)。オオミのこの言葉の根底にある意味は、唯一残っているもう一人の身内のステイアンが血縁に対して冷たく無関心になってしまったということである。
- (12) そのような内面の傷は、戦争によって与えられたり、あるいは悪化させられたりしたのであるが、モニカ・ソネの『二世娘』の語り手もまたそれを持っている。「古い傷が再び口を開けた。気づくと、敵の血である日本人の血から離れて自分が内側へと縮んでいくのだった」(一四五―一四六)。「二世娘」と『失われた祖国』との詳細な比較については、リム一九九〇を参照。
- (13) コガワは彼女自身の経験から書いているようだ。「自分のエスニシティから隠れようとして、私がしたように森の中に逃げていった日系カナダ人がまだ沢山います。私たちは互いを避け、そして日系カナダ人の集まり

- ダ文学新人賞(The Books in Canada First Novel Award) 一九八二年にカナダ作家協会年間最優秀賞(The Canadian Authors Association Book of the Year Award) 一九八二年にビョナア・コロングアス財団全米図書賞(The Before Columbus Foundation American Book Award)を受賞。他の作品には、『失われた祖国』の児童向けの本、『オオミの道―ある日系カナダ人少女の記録』(Naomi's Road, 1986)と四冊の詩集、『裂けた月』(The Splintered Moon, 1967)、『夢を選ぶ』(A Choice of Dreams, 1974)、『ジェリコへの道』(Jericho Road, 1977)、『森の中の女』(Woman in the Woods, 1985)がある。二作目の小説で『失われた祖国』の続編の『ツツカ』(Tsuka)は一九九二年にカナダで出版されたが、残念なことにこの本では論じるには遅かった。
- (5) 戦時中の日系カナダ人の処遇に関する詳しい議論については、アグチ、グロートフット、スナハラ、ピーター・W・オオトドを参照。同時代の日系アメリカ人の処遇については、タカキ、ウエグリンを参照。ダニエルスはアメリカとカナダ両国の日系人の経験について論じている。
- (6) エミリーのカナダ政府に対する抗議の手紙は、日系カナダ人活動家であるアリエル・キタガワの実際の手紙に基づいている。コガワはキタガワの書き物を調査したいという衝動が夢の中で湧いてきたと述べている(ウエイン三三)。
- (7) ミン・オキツトとオバサンの人物描写の違いは、部分的には語り手たちの見方の相違によるところがあるかもしれない。若いマキシンはオオミよりもっと西洋化されているので、物静かなオバサンは弱々しく卑屈な女性に見えることだろう。
- (8) このテーマは、キングストンの『アメリカの中国人』の中に似たものが非常に多くある。アメリカの法的言説における曖昧表現については、パンスホリエを参照。このセクションで引用された言語操作の幾つかの例は、

- をケットーに追いやられたカチヨウの群れと見るようになりました。私がエスニナイを再発見する転機の一つが訪れたのは、私か実際に日系カナダ人の友達を持つことができた時でした(一九八五、六〇)。
- (14) 察し及び以心伝心と『失われた祖国』との関連性を指摘してくれた教子のバーバラ・ヤングに感謝する。クニヒロは、概して同族社会である日本では、「言語手段による説明はしばしば不必要となり、同じ屋根の下で暮す家族の中で発達するような直観的、非言語コミュニケーションが、社会全般に広がっている」と述べる(五八)。しかし、クニヒロはまた「言葉を使わない表現手段によるこの微妙なコミュニケーションを発達させた伝統」は、「ロジックに重きを置き過ぎる現代文明」(五八)によってある程度鎮まれてしまったとも言っている。そのような伝統の衰退は、日系社会では多分もっと早い速度で起こっているであろう。常に西洋の規範に晒され、それによって判断を下されているからである。
- (15) コガワが目によるコミュニケーションを強調することは、「言葉にしない形のコミュニケーション」と共鳴する。例えば腹芸(繊細なコミュニケーションの技)や目は口程にものを言ひ(目は口と同じくらい多くを語る)というふうなもので、日本では「非言語手段によって対人関係を円満に保つために」常に使われるコミュニケーションの形である(クニヒロ 五八)。
- (16) フジタはこの日本語を「You really notice/are aware/are attentive, aren't you?」(本当によく気がつくね/分かっているね/気遣いができるね)と英訳したが、その語句は、「鳥を気遣っている (attending)」少女の絵を思い出させる(三九)とも述べている。マクナッソン六一もまた参照。
- (17) コーデイルとワインスタイン一九六九は、日本では母親と幼児の関係はアメリカほどには言葉を使わないものであると述べている。
- (18) ナオミにオバサンが与えた様々な影響については、ゴットリーブ五二、フジタ四〇、リム一九九〇、二〇三三も参照。
- (19) ヒューストンは、日系アメリカ人と白人アメリカ人は、人に奉仕することに對してしばしば異なる姿勢を取ると述べている。「私の家族の中では、他の者に仕えることは精神を高揚させること、己を高める優しい振る舞いとなった。多くの白人アメリカ人にとって、他の者に仕えることは、品位を下げることであり、従属性や性格の弱さを示すものであって、社会的地位が低いように思える。非常に気配りがあることは、『自立たぬようにしている』とか弁解がましいということになる」(二〇)。そのような姿勢が優勢であるので、多分あのよう多くの批評家がオバサンは魅力がないと思っただのであろう。
- (20) コガワはインタビューで、母親の不在を神の遺棄(*神から見捨てられること)と結びつけていると言った。「愛の存在はその力が剥ぎ取られたときのみ理解されて、逆説的に、我々を癒す愛の力はその無力さを我々が受け入れる時にやってくる」(レデコップ一七)。
- (21) ハーモンは、心理的トラウマの体系的研究もまた「政治運動の支援に影響される」と証明している。ヒステリーの研究は、フランスで十九世紀末に起きた反教権主義政治運動から育った。戦場神経症の研究は、ベトナム戦争後に頂点に達した反戦運動の間に始まった。性暴力や家庭内暴力の研究は、フェミニスト運動の間に出現した(九)。
- (22) ゴットリーブとフジタは小説の中の同じような夢について論じている。
- (23) 語り手自身は、小説の初めの部分で、男やめとナイトに出かけたとき、彼の過度でしゃべりな質問に苛立ちを表す。「男やめは質問ばかりしていたので、ひよとすると彼が身分証明書を見せよう求めたのではな

私が『アジア系女性作家論——沈黙の声を聴く』の着想を得た頃から、大学内では小さな革命が起こっている。多くの有色人種による作品がカリキュラムに取り入れられ、その結果多様なエスニック・アイリテアの文学が時にキヤンと並んで教えられている。私は「多文化主義を唱道する笛吹き」の調べに合わせて踊る」けれども『失われた祖國』二二六、コガワが描いたナオミのような思いも依然として抱いている。彼女はエミリーおばさんの文書に対して、その誠実な取り組みを評価しつつも、心の中

アトサイダーの存在に特に特徴的なのは、主流の人生の構築から彼女がいくらか「慣れ親しんでいる」他の人生の構築へと変える時に見せる習得的な柔軟性である。この柔軟性はそのアトサイダーに必要なものであるが、主流社会で安逸にしている人だちにも発揮できるものである。私はこの柔軟性を意図的に使用することを「世界」旅行と呼び、それを推奨する。

「遊び心、『遊び心』、ルゴ・ルゴ・ルゴ、『世界』旅行、そして愛情ある認識」

結び 彼女らが明らかにした沈黙とは……

いかと思つた」(七)。

(24) ナオミの教養の一人が「愛した(Beloved)」ことがあるのかと尋ねて彼女をからかったとき、彼女はそれに

答える代わりにクワスの生徒の注意を前置詞に向ける。「愛したですって？ 愛について語るときなせ前置詞の

『』を使うのだと思いませんか？」(六)。

(25) ケイ(采)の様々な活用形に関してはネルソン八九を参照、ケイの語源に気づかせてくれたユキコ・キンシ

タに感謝する。

心に響く「適切な言葉の組み合わせ (fitting mix)」（四〇）を欲して探しているのだ。私の場合の「適切な言葉の組み合わせ」とは、テクニストと教育学、芸術と政治、そして何よりもまず、フェミニズムと文化的特異性をどう組み合わせるかである。

フェミニスト研究やエスニック研究において、それぞれの研究者たちが多元性や異種性を強調し、対立が生じている。以前は白人の家長長制が共通のターゲットであったが、現在では周縁化されたグループそのものに亀裂が生じている。第三世界と第一世界のフェミニストの議論や有色の男性作家と女性作家の議論も弱まることなく続いている。こうした意見の対立の中にあつて、私は多様性に対してもっと進んだアプローチを求め、人種、ジェンダー、そして学問においても差異を越えてつながる可能性を指摘してきた。

これまで排除されてきた作家の作品を含めることは、キャンソを開かれたものにするための最初の重要な一歩である。差異を逸脱としてひとまとめにする認識グリットのなかに、これらの作品を位置づけるには危険が伴う。実質的にカリキュラムを築くためには、考え方を柔軟にして批評の技法を再編成する必要がある。多様な著者の作品を読むことによつて、深く根差した思い込みや教授法を——特に話ができるのは誰か、聞いてもらえないのはどんな話かに関して——変革できるようにしなければならぬ。『チャイナタウンの女武者』と『失われた祖国』についての私の分析が示すように、発話の禁止だけではなく、発話の強制も明確な発話を妨げる可能性がある。語り手二人の経験がまったく似ているからそうなるのではない。ナオミの発話への抑制には幾層もの要因、つまり、性的、文化的、政治的な要因が関係している。マキシソを沈黙させる主な原因は、二つの文化を持つ生徒のニーズに対

応できないアメリカの学校教育にある。北アメリカでは発話と沈黙の位置関係は一律ではないが、多くの人が発話を（自己）表現と、沈黙を受動性と同一視する傾向にある。この本で明らかにした抑圧的沈黙と表現的沈黙のイメーヂはこうした認識を不安定にする。私は、ジェンダー、文化、人種によつて押しつけられた沈黙を打破しなければならぬ女性経験した複合的な困難に注意を向けつつ、言語で自己主張をする第一世界のフェミニズムを唯一の実行可能なモデルとして無条件に認めることから距離を置く。また、アジア的な物静かさを女性性や不可解さと関連づけることに私は異議を唱える。どんな人間の文化もその文化の中で生きようとする人だけに開かれているわけではない。しかし、その文化をどのくらい理解できるかは、社会的に認められた言語や知識を定期的に保留できるかどうかによるだろう。三人の著者のテクニストは沈黙している人々に声を与え、多彩な沈黙を提示している。私は分析において、異文化間の平等な対話を試みることで、マリア・ルゴーネスが『世界』旅行」と称するものが円滑に進むように努めた。彼女が指摘するように、そのような旅は「アウトサイダー」に義務づけられてきたが、インサイダーも参加できるのだ。

エスニック研究やフェミニスト研究においても対面通行が必要である。『アジア系女性作家論——沈黙の声を聴く』はフェミニストとエスニックの詩学（そして政治学）を交差させながら、「女性の書き物を読む」ための新しい方法を探している。また、女性のテクニストからフェミニストのメッセージを聞き出す解釈的戦略が明らかにするのは、転覆的で控えめな表現という別の形式である。例えば、「ミス・サガワラ伝説」では、家族、コミュニティ、国家の統制的なメカニズムが互いを映しだしているが、

手は少女を過小評価する移民社会に怒りを感じている。その怒りは当然であるが、そのためにアメリカの三つは沈黙が深まっていく度合いで提示されている。『チャイナタウンの女武者』において、語り手は少女を過小評価する移民社会に怒りを感じている。その怒りは当然であるが、そのためにアメリカの教育機関が教え込んだ堅固な人種の自己嫌悪が見えなくなっている。

ヤマト、キングストン、そしてコカフは、支配文化およびそれぞれのエスニック文化の両方において機能する家父長的な力に抵抗している。彼女らは一般的に受け入れられている歴史的、法的、文化的「真実」を打ち壊す。伝統的な制約を避けるナラナイザ戦略を用いることで、言語の共犯性を暴露する。ナラナイザ上のギヤップ、矛盾、および断片を通じて、権威を再占有するのではなく、それを問いただし、脱中心化し、散逸させることで、この三人の作家は過去を再構築している。「伝説」「アメリカの中国人」、「失われた祖国」は、いずれも私的な歴史と公の歴史、及び事実とフィクションの境界線をなくすことで、アングロ・アメリカの一般的な史料編纂の慣習を破っている。これらの作家たちは、自分たちの主体性を否定したり転覆的なエネルギを減少させるいかなる方法においても、「代表」として振舞うことを拒否する。彼女らの登場人物は、効果的な証拠とともに、公文書という人を均質化する鑄型が誤りであることを示している。

三人の著者は歴史を修正しているだけではなく、エスニテイをも変容させている。競合する文化がメンバートにくだす任務を並置することで、彼女らはアジア人と白人のアメリカ人が抱くモノクロ的な考え方をぐらつかせる。この道は、エスニックの特殊性を避ける同化主義者か、または英雄的なアジア人という思考の遺産を無批判に再利用することを求める文化的民族主義者によって提示された道ほど、単純ではない。三人が取った困難な道は、東と西、エスニテイとフェミニズム、同化主義と自民族中心主義といった曖昧な対立項においてであらうと、二者選択の二分法を回避している。作家は主流の力を意識しているが、「本物」のアジアの神話が特に家父長制のエトスを維持している場合は、その神話を復活させることで主流に反論しない。俳句、フレイ・ムーン、またはモモタロウを使用しようと、重要なのは決して原典にはもどらず少し変えて語っていることである。簡潔さの力を用いながら十七文字という制限にいらだつこと、武者の身体的な武器を言葉の矢で置き換えること、モモタロウの話では、小説の平和主義的な調子に含ませて戦いの場面を抑えることがそれにあたる。彼女らはアジアとアングロ・アメリカの伝統から自由に描いているが、どちらかの伝統で定義されたり、それに限定されることを拒んでいる。

私も批評家としてこれらの伝統の中を慎重に歩いている。日本人と日系アメリカ人の伝達方法に連続性があることを説明したが、それはオリエンタリズムの考え、つまり、「東」と「西」の二分法を存続させるもの、という印象を与えるかもしれない。さらに、西欧のフェミニズムとポスト構造主義者の理論を自由に使うことは、アジア系アメリカ人のテクニクに対して「帝国主義」的であると受け取られるかもしれない。私が示そうとしたのは、この三人の女性作家の書き物を特徴づけているのは明らかにこうした異質な伝統であるが、さらに重要なことには、その伝統が彼女たちによって変容させられ、解釈されていることである。

私がフェミニズムかナショナルリズムかの選択をしざるは、ひとつには男性の沈黙を明らかにするためにフェミニストの解釈的戦略を使うからである。男性間の差異も認識されるべきだ。初期のアジア系男性移民が受けた人種差別的扱いは歴史的にジェンダー化されてきた。アメリカの法律や大衆メ

アジアにおいて「表象」されているように、フランク・チンの言葉を借りれば、アジア系アメリカ人は、「女らしい人種だから好かれた」のだ（一九七二、六六）。テクストに登場するアジア系アメリカ人の父は、威厳のあるアジア人となよよとした東洋人、家庭での威圧的な家長と職場での従順な異国人、ストイクで英雄的な人生のサバイバーと無抵抗の犠牲者といったように、相反する沈黙の表象に位置づけられている。彼らの無口な優しさすらもしばしば表現力のなさとして誤解される。これらの相反する表象を検証すると、異なる文化において（特権にもかかわらず）男らしさが強制されることだけでなく、男性性のコードが支配文化のコードと異なる男性が直面している独特の苦境が見えてくる。アメリカの白人社会では、彼らの「男らしい」控えめさが歴史的で政治的な不可視性を増大させてしまうからである。性を二極化しすべての男性や女性を均一化する理論では、これらのテクストに固有のドラマが薄まってしまふ。

人種による沈黙と性別による沈黙の両方に焦点を当てては差異を消すことではない。しかし、人種、ジェンダー、文化の絡み合いに注意を向けることで、支配的な男性と沈黙する女性という安易な定式化を防ぐことができる。さらに重要なことに、これらの絡み合いに関わることで、有色の女性と白人フェミニストの間、およびアジア系アメリカ人の男女の間に共感が生まれるかもしれない。単に女性の抑圧を暴露するのではなく、フェミニストの政略は「女性化」を強いられてきた他のグループに対しても関心を向けることができるのだ。

「非合法化」されたグループは『逆転』の言説とフーコーが称するものを使用するが、「自分たちが」不資格であるとした同じカテゴリーを用いて、同じ語彙で「合法性を要求する場合は注意が必要で

ある（一九七六／一九八〇、一〇一）。例えば、有色の男性は、男らしさを身につけることで女性化されたステレオタイプに抵抗している、女性を沈黙させることで「男らしさ」を取り戻している、と非難されてきた。そして、時にそのことに罪の意識を感じてきた。「女性化」に苦しんできた人々は、男性が持つ特権を長い間否定されてきた女性のフラストラーションを知るべきだ。そうすれば、白人の支配と男性の支配を同時に解体できるのだから。

人種化され、性化された他者の人生を理解するには、彼らの世界、それは地図上にはないことが多いのだが、そこへ旅することが求められる。その世界に入る度合いは様々であり、コミュニケーションの方法（またはコミュニケーション障害）は多種多様であるため、周縁上にいる人々のすべてが発話できるか、または発話しようとするわけではない。「民主主義」において彼らの声が届くようにするには、誰かが彼らの沈黙の言説を学び、その沈黙の声を聴こえるようにする必要があるだろう。この本で論じてきた三人の作家は、彼女らが明らかにした沈黙、そして様々な沈黙の表現によって、他者の内部の風景へと私たちを連れて行ったと私は思っている。

「賢者には一言で足る」

『アジア系女性作家論——沈黙の声を聴く』は、*Articulate Silences: Hisaye Yamamoto, Maxine Hong Kingston, Joy Kogawa* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1993) の全訳である。筆者キンコック・チャンが本書で分析しているのは「沈黙と発話」の狭間に作用する権力の解明であり、その狭間で往還されながらも、いかに新たな行為^{行為}体を再構築していくのかという「歴史性」からの脱却に向けての道筋を模索することである。例えば、ガヤトリ・チャクラヴァルティ・スピヴァックは、フェミニズムとポストコロニアルの問題の交差する地点から、発話の場に作用するポリティクスについて注意を喚起するために、『サバルタンは語る事ができるか』との挑発的な問いを投げかけた。この問いは、西洋という認識主体を立ち上げるための不可欠な「他者」として、「自ら語る主体」の位置を奪われ、歴史の場から抹殺されてしまう「サバルタン（＝従属的地位）」存在について注意を喚起するため、言説の場に作用する不均衡な構造やその権力関係における他者表象の問題性を提示したものであった。ジェンダー／セクシュアリティ・人種・文化のカテゴリーによって三重の抑圧作用、周縁化作用を受けらる有色の女性の問題を抱った理論書、文学批評書はこれまでも何冊か出版されてきたが、スピヴァック

にせよ、『女性・ネイティブ・他者』のトリン・ミンハにせよ、抽象的理論に傾きすぎていて具体的コネクタストが見えにくく、個別のコネクタスト分析に関しては難解な印象を与えがちであった。しかし、本書でチャンは、そのような難解な理論を整理しつつ、その難解さの一因ともなっていた東洋の歴史・社会・文化に対する西洋側の書き手／読み手の情報不足を詳細な資料との照らし合わせによって丁寧に補い、個々のテクストの精緻な読みを展開している。フェミニズムやオリエンタリズム、ポストコロニアリズムなどに関わる文学理論を整理し、「発話」を「沈黙」よりも上位に位置づける西洋中心主義的価値に対して異議を申し立て、ヤモト、キングストン、コガワの三人の作品の中で描かれる沈黙が持つ力について考察する趣旨を述べた〈序〉に続いて、各章は次のような構成となっている。

第二章 沈黙の修辭性を読む（原題は *Rhetorical Silences*）

白人フェミニストたちは、家長長制の下で沈黙させられた女性の声を問題にしてきたが、日系二世の作家、ヒサエ・ヤモトの作品における女性の沈黙にはジェンダーだけでなく、アメリカ社会の人種的マイノリティに対する人種差別や日系コミュニティからの圧力など多重の抑圧が関係していることが明らかにされている。チャンが分析している「十七文字」「ヨネコの地震」「ミス・ササガラ伝説」が発表された五十年代は、反日感情がまだ激しかった時期であり、ヤモトが白人の視線を意識しながら、アメリカ社会の人種差別への抵抗を書き込むには修辭上の工夫が必要だったのである。「十七文字」と「ヨネコの地震」では、一世の両親のもとで暮らす二世の少女が自分の家族に起きた出来事を語っておおり、「ミス・ササガラ伝説」ではミス・ササガラと同じ収容所で暮らした二十歳になる語り手が収容所での出来事を語っている。どの作品にも、表面的には語り手の限定的な視点から家族や収容所で起

こつた出来事が語られている(明らかなプロット)が、抑圧された両親の物語や強制収容を批判するプロットが表面下に隠されているのである(隠されたプロット)。この沈黙の物語としての「隠されたプロット」を発見し、その外側のコンテクストを読み解いていくことによって、ヤンモトの三作品における「沈黙」の修辞性には多量抑圧構造があることが明らかにされている。

第三章 沈黙に揺さぶりをかける(原題は Provocative Silences)

『チャイナタウンの女武者』と『アメリカの中国人』は、多重抑圧に苦しむ有色の少女が、「沈黙」へと追いやるうとする「権力作用」に抵抗して、語る主体の位置を模索する試行錯誤の軌跡を描き出した自伝的小説である。キングストンは二つの物語において、様々な沈黙の様式を提示しているが、『チャイナタウンの女武者』では、アメリカ主流社会と伝統的中国社会における低い女の位置にもなつて被る二重の抑圧とその抑圧に対する怒りが中心に描出されている。それに対して『アメリカの中国人』では、その沈黙は、女たちの排除だけではなく、ハワイにおけるサトウキビプランテーションや鉄道建設に携げられたチャイナマンの労働力がアメリカ主流社会の歴史から不可視化されてきたことも示すように「沈黙」の範囲が広がられている。「男たちの物語」の語り手は、「女たちの物語」の語り手と比較すると、成熟した視点を獲得しており、白人中心主義の歴史によつて沈黙させられたチャイナマンの苦悩に対して共感のまなざしを向けていることも特徴的である。白人中心主義のアメリカにおいて格下げされたチャイナマンのエスニチテイゆえの抑圧と女に対するジェンダー/セクシュアリティの抑圧作用をパラルレルに描きながら、双方の作品において、語り手は中国と白人主流社会の伝統に裂け目を入れ、

ジェンダーとエスニチテイの結び目において、支配関係ではなく、相互性に基づく関係性を築いていくような主体位置を模索している。

第四章 気遣いの沈黙(原題は Ateghive Silences)

先住民やマイノリティが権利と社会的平等と各民族独自の文化の尊重を求めて声をあげていた一九七〇年代、カナダにおいても第二次世界大戦時中の政府による日系カナダ人への不正行為に対して謝罪と賠償を請求するリドレス運動が始まつており、この運動に『失われた祖国』は大きな影響を与えた。多くの批評家は、時代背景とオリエンタリズム言説や言語中心主義の観点から、『失われた祖国』に描かれた日系カナダ人の「沈黙」は、人種差別がまかり通る支配社会に服従している悲劇的な形態を表すものであると論じる。しかし、チャンは、「沈黙」の無刀性と危険性を認識し「発話」の必要性に同意しつつも、コガワはこの作品で「発話」を「沈黙」より優位に置く言語中心主義に修正を促し、両方を相補的に機能させていると指摘する。日系人に表象されている多様な「沈黙」の中でも、チャンは語り手ナオミが一世のアオバサンから受け継いだ、黙つて相手の思いを直感し、その心の奥底にある声に耳を傾け、その思いに応えようとする姿勢に焦点をあて、それを「気遣いの沈黙」と名づける。ナオミの姿勢に象徴される「気遣いの沈黙」こそが、支配社会に抑圧され沈黙を強いられた者の内に在る語られない言葉を聴くことを可能にするものであり、自己の開放を可能にする「発話」への入り口であると考察している。

本書は、アメリカにおける英文科、ジェンダー研究、文化研究、グローバル研究などの授業において、アジア系女性作家の作品を読み解く上での必読書として挙げられる優れた批評書となっている。

二〇一五年六月

訳者を代表して 和泉邦子

中国語の英語表記について、金沢大学中国語中国語中国語中国語の大滝幸子先生から多大なるご助言をいただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げます。また、『英語圏女性作家のジェンダー・エスニシナイ表象』(二〇一三)に続き、彩流社の茂山和也さんには、多岐に渡るご尽力を賜った。最初の企画書提出の段階から諸事情で思いもかけず長い時間が経ってしまったが、ようやく出版にこぎつけることができたことに感謝を申し上げます。

なお、第三章については、中国語の英語表記をどのように邦訳するかという問題(漢字か片仮名か)や、その中国語についても北京語と広東語表記の差をどうするかという問題にあっかつた。例えば、チャンによる中国語の英語表記で“Guān Gong, Lin Pei, and Chang Fei”となっていて、そのものは、本書では、片仮名表記ではなく、漢字で「関公 劉備、張飛」と記すことにした。『杜子春伝』『三國志』として中国文学・文化が日本に伝わったときの漢字表記の方が日本人には馴染み深いからである。それに対して、キングストンの二作品の藤本和子訳では、“*Guan Gong*,” “*Bak Gong*”が「阿公」「伯公」など漢字表記されていたが、本書では、読みやすさを重視して、片仮名表記にした。

現になるように努めた。
分担箇所をそれぞれ訳出した上で、お互いにチェックし合い、訳語の統一を計ったり、読みやすい表

謝辞・用語・第四章(中根久代)

第三章(和泉邦子)

第二章・結び(小松恭代)

序章(和泉邦子・小松恭代・中根久代の三分割)

訳出にあたっての三人の分担は、以下の通りである。

願っている。
日本の英文科の学生たちのガイドブックとして大いに活用され、日本人であるにもかかわらず、日系文学やアジア系文学を軽視しがちであったこれまでの英文科の偏向性を正すことにも役立つことを

- 〈ア行〉
『アインアイーラアジア系アメリカ人作家選集』 *Aiiieeee! An Anthology of Asian-American Writers* 20
アイロニー irony 15, 17, 134, 221
アトキンス、ボーマン・K Atkins, Bowman K. 59
アナロジー analogy 123, 158, 254
アバナー、ウイリアム・M O'Barr, William M. 59
アルチエセル、ルイ Althusser, Louis 151
アレン、ポーラ・ガッ Allen, Paula Gunn 16, 214
アンザルドゥア、グロリア Anzaldúa, Gloria 126, 154
アンダーソン、ベネデイクト Anderson, Benedict 232
イーグルトン、テリー Eagleton, Terry 46, 126, 133
遺産 legacy, heritage 22, 30-31, 33, 36, 40, 54, 92, 131, 157, 160, 162-63, 199, 201, 203, 215-16, 282
イシグロ、カズオ Ishiguro, Kazuo 86
石の音 the sound of stone 264, 266
石のように固いパン stone bread 23, 234
異種混雑性 hybridity 34
以心伝心 *ishin-denshin* 241, 248, 250, 276
イチオカ、ユウジ Ichioka, Yuji 4, 84, 118, 120
一元的自己 unitary self 34-35
一世 Issei 8, 48, 59, 61, 63-64, 89, 92, 118-20, 212, 232, 237, 239-40, 247, 271, 273, 275
イデオロギー ideology 55, 126, 133-35, 151, 222, 255
意味論的距離 semantic distance 227
移民 immigrant(s) 8, 19-20, 23-24, 30, 32, 38, 43, 48-49, 51, 54, 60, 84, 120, 129, 131, 133, 152, 154, 166, 171, 173, 176, 179-80, 189, 195, 202, 206, 282-83
イム、ヌーザン Yim, Susan 212, 273, 275
イリガライ、ルース Irigaray, Luce 47, 144, 163
ウイリアムズ、ウイリアム・カーロス Williams, William Carlos 195
『アメリカン・グレインの中』 *In the American Grain* 195

- ウイリス、デブリー Willis, Gary 255
ウェイソン、ジョイス Wayne, Joyce 213, 245, 274
ウェグリン、ミチ Weglyn, Michi 107-08, 110-12, 114, 274
ウェッツェル、パトリシア・J Wezel, Patricia J. 59
ウォーカー、アリス Walker, Alice 47, 163, 178, 275
『カラー・パープル』 *The Color Purple* 275
『グレンジ・コーラソンの第三の人生』 *The Third Life of Grange Copeland* 178
ワード、J・A Ward, J. A. 15, 274
ヴェナン、エリザベス Venant, Elizabeth 86
英国人兵士 British soldiers 263
エスニック ethnic 7-8, 14, 28, 38-39, 55, 127, 133, 201, 275-76, 282
エスニック ethnic 14-16, 19, 23, 25-26, 29-30, 34, 37-37, 40, 53-54, 62-63, 129-31, 138, 150, 154-55, 157, 163, 166, 176, 185, 199, 204, 279-82
遠慮/エンリヨ *enryo* 63-64, 91
オオモリ、エミコ Onori, Emiko 60
『暑い夏風』 *Hot Summer Winds* 60
オカダ、ジョン Okada, John 22, 116
『ノー・ノー・ボーイ』 *No-No Boy* 116-17
オモレード、バーバラ Omolade, Barbara 268
オリエンタリスト Orientalist 17, 215, 283
オリエンタリズム Orientalism 31-32, 215,
オルセン、テアラー Olsen, Tillie 17, 46, 58, 68
『沈黙』 *Silences* 17, 58
オルターナティブ alternative 163, 171, 186, 196
〈カ行〉
懐疑主義 skepticism 18, 25, 27, 47, 187, 227, 231
ガウアーおじさん Old Man Gower 223, 232, 236, 262-63
重ね書き手法 palimpsest techniques 29, 53, 115
家長長制 (の) patriarchy, patriarchal 16, 23, 42-43, 47, 59-60, 82-84, 90, 92, 111, 113, 129-30, 134-35, 144-47, 164, 167-68, 170-71, 181-83, 199, 222, 262, 280, 283
紙による戦闘 paper battles 262

- 間接的コミュニケーション implicit communication, indirect communication 15, 63
- 間接的手法 method of indirection, technique of indirection 30, 59-60, 65-66, 118
- 間接的表現 indirection 18, 36, 134
- 我慢 *gaman* 91, 239
- 記憶 memory 24-26, 29, 44, 51, 53-54, 59, 75, 126, 132-33, 166, 169, 171, 175, 184, 192, 202, 204, 216, 221, 225, 239, 250, 253, 255-56, 262, 264, 266, 270
- 聴く (こと) listen(ing) 148, 197-98, 245
- キタムラ、アケミ Kikumura, Akemi 24, 48, 59, 61, 64,
- キタガワ、ムリエル Kitagawa, Muriel 251-52, 257, 271
- キタノ、ハリー・H・L Kitano, Harry H. L. 64
- 気遣い (気遣う) attendance, attentiveness 36, 39, 44, 165 215-16, 232, 241-42, 246-49, 258-59, 262, 271, 276
- 忌避 evasions 237
- キム、エレイン Kim, Elaine 6, 33, 39, 51, 53, 56, 83, 118
- 『鏡花縁』 *Flowers in the Mirror* 169-70, 205, 209
- 共感/共感力 empathy 35, 62, 167, 181, 186, 241, 245, 250, 284
- 狂気 insanity, madness 61-61, 95, 99, 113-15, 124, 135, 155, 188, 198, 204
- 強制収容 internment 23, 41, 44, 54, 59, 62, 105-06, 108-09, 116, 122, 235, 239, 251
- 強制収容所 prison camps, concentration camps 24, 94, 97, 105, 111, 224-25
- 強制退去 evacuation 217-18, 224-25, 228, 238-39, 253
- 去勢 (化) emasculation 23, 46, 85, 168, 171, 176, 179, 184, 205, 208
- キルト quilt 163, 241, 255-56
- ギルマン、シャーロット・パーキンス Gilman, Charlotte Perkins 114-15, 197
- ギャップ gap 14, 41, 47, 126, 164, 216, 275, 282
- キングストン、マキシン・ホン Kingston, Maxine Hong 6, 14, 16, 18-19, 23-27, 29-32, 34, 36, 38, 42-44, 47, 50-51, 55, 114, 127-34, 136, 141, 143-44, 148, 153, 156-57, 159-60, 162-64, 166-67, 169-71, 177, 179, 181, 183-84, 186-90, 192-94, 196-203, 205-08, 226, 233, 245, 251, 256, 261, 269, 274, 282
- 『アメリカの中国人』 *China Men* 6, 23-24, 26-27, 32, 42-43, 52, 125, 127, 129, 131, 150, 166-68, 183-84, 186, 189, 192, 196-203, 205-06, 208, 236, 238, 245, 274, 282
- 『チャイナタウンの女武者』 *The Woman Warrior* 19, 26, 32, 42, 45, 47, 51, 125, 127, 129, 131-33, 148, 156-57, 159-60, 162, 166-68, 176, 179, 183, 186, 197-203, 217, 220, 238, 246, 251, 261, 264, 266, 280, 282
- 空想/ファンタジー fantasy 18, 47, 132, 136, 138, 141, 144-46, 150, 162, 168, 170, 174, 176, 192, 196-97, 199, 201, 209, 216, 256, 261
- 寓話 fable 27, 33, 53, 127, 131, 169-70, 173-74, 181-82, 193, 199, 205, 216, 220, 256, 258, 260-61
- クリスチャン、バーバラ Christian, Barbara 40
- クリステヴァ、ジュリア Kristeva, Julia 46-47, 144
- グリュッサン、エドゥアール Glissant, Edouard 128
- クロウ、チャールズ・L Crow, Charles L. 26, 82, 121-22
- ケネディ、コリーン Kennedy, Colleen 159
- 検閲 censorship 17, 46, 59, 116, 118, 216, 232
- 権力の遍在 the ubiquity of power 131
- 権力の乱用 the abuse of power 231
- ゲイツ、ヘンリー・ルイス・ジュニア Gates, Henry Louis Jr. 28, 30, 52, 216
- 言語的帝国主義 linguistic imperialism 44
- 言語的不安 linguistic anxiety 219
- 言語の二重性 linguistic duplicity 223
- 言語表現 verbal expression 49, 213, 215, 266, 272
- 口承 (性) oral, orality 127, 143-44, 163-64, 204
- コード (化) code, coding, coded 17-18, 22-23, 29, 50, 59, 71, 87, 91, 117-19, 129, 195, 203, 206, 284
- コガワ、ジヨイ・ノゾミ Kogawa, Joy Nozomi 14, 16, 18-19, 22-25, 27, 29, 30, 33, 36, 39, 43-44, 114, 127, 208, 212-13, 215-17, 220-23, 226, 229, 231-33, 240-41, 245-47, 249, 251-56, 258, 260-62, 268-69, 271-77, 279, 282
- 『失われた祖国』 *Obsasan* 19, 22-23, 25-27, 32-34, 43-45, 53, 55, 208, 212-13, 215, 217-18, 233, 236, 241-42, 244, 249, 251-52, 254, 259, 266, 269, 271-76, 279, 280, 282
- 国外追放 deportation 217, 252
- 言葉の戦士 word warrior 32, 148, 220, 265
- コトモノタメニ Kodama no tame ni (for the sake of the children) 219
- コロニアリズム言説 discursive colonialism 43
- ゴールドアイロックス Goldlocks 256-58
- ゴールニクト、ドナルド・C Goelricht, Donald C. 4, 24, 52, 170, 179,

- 182, 208, 213, 222, 224, 233, 251, 271-72, 275
 ゼットリナー、エリカ Gottlieb, Erika 236, 263-64, 277
- 〈サ行〉
- サード、エドワード Said, Edward W. 30, 231
 サルテイザール、ラモン Saldívar, Ramón 54, 254
 サン・ジュアン、E. Jr. San Juan, E. Jr. 198
 作家であることへの不安 anxiety of authorship 41, 62
 察し/察する *sass, sassuru* 241, 276
 『三国志演義』 *Romance of the Three Kingdoms* 195, 210
 視点 point of view 16, 18, 22, 29, 36, 43, 46, 61, 67, 78-79, 92-94, 114, 130-31, 133, 152, 154, 162, 217
 シニファアン the signifier 165, 230, 255, 258
 シニフイエ the signified 258
 支配 (的) domination 19, 23, 29, 30, 33, 35, 37, 43, 49, 51, 53, 70, 83, 85, 113, 120, 129, 131, 135, 142, 144, 151, 157, 163-64, 189-90, 199, 210, 221, 227, 231, 233, 240, 269, 272, 282, 284-85
 支配文化 dominant culture 17, 20, 30, 34, 43, 62, 112, 117, 131, 148, 151, 155-56, 202, 219, 236, 240, 282, 285
 支配的言説 dominant discourse 17, 47, 134
 社会的健忘症 social amnesia 237
 周縁性/周縁 (化) marginality, marginalized 29, 33, 41, 63, 85, 280, 285
 修辞性/修辞的 rhetorical 31, 40-42, 61, 64, 93
 修正主義者 (的) revisionist 14, 22, 128, 214, 247
 シューラー、フリニ Schuller, Malini 129
 宿命論的態度 fatalistic attitude 220
 象徴界の鎧 symbolic armor 134, 231
 象徴界へ参入 entry into the symbolic order 223
 ショーウォーター、エライン Showalter, Elaine 29, 46, 53, 59, 83
 省略 ellipses 14, 17, 35-36, 41, 50, 87, 118, 128, 140, 166, 180,
 省略技法 elliptical devices, elliptical style 61, 216, 251
 史料編纂のメタ・フイクション historiographic metafiction 44-45, 213
 真珠湾 Pearl Harbor 7, 24, 62, 113, 120, 217, 235
 心理的トラウマ psychological trauma 19, 237, 277

- 信憑性 authenticity 14, 20, 28, 52, 101-02, 109, 130, 132, 195, 200-01
 ジェイムソン、フレドリック Jameson, Fredric 27, 108
 ジェンセン、J. ヴァーノン Jensen, J. Vernon 15
 ジェンダー gender 16, 18, 30, 40-41, 46-47, 55, 60, 83, 89, 97, 99, 114, 127, 131, 135, 139, 141, 155, 163, 167-68, 170, 182, 203, 222, 233, 273, 280-81, 283-84
 自己卑下 self-contempt 263
 自己抑制 self-restraint 85, 262
 自伝 autobiography 26, 28, 35, 45, 52, 96, 129, 133, 165, 200-02
 自民族中心主義的 ethnocentric 16, 282
 写真花嫁 picture bride 84
 ジャーディン、アリクス Jardine, Alice 134
 受動性 passivity 22, 36, 240, 242, 281
 女性化 feminized 16, 284-85,
 女性蔑視 (主義者) misogynist 19, 155, 185
 ジョーンズ、マニナ Jones, Manina 213, 251
 人種 (的) race, racial 7-8, 14, 16, 18-19, 20, 29-30, 39, 41, 43, 45-46, 54, 59, 62, 86, 111, 114-15, 117, 124, 131, 133, 135, 150-51, 155, 163, 167-68, 171, 178, 178, 198, 207, 217, 233, 238, 273, 280-82, 284-85
 人種差別 (主義者) racism, racist 20, 23, 43, 46, 48-49, 55, 85, 115-16, 130, 134, 149, 169, 171, 202, 217, 224, 236, 239, 247, 272, 283
 スタウト、ジヤニス・P Stout, Janis P. 15, 17, 46, 63, 134
 ステイナー、H. スミダ Stephen H. Sumida 21, 129
 ステレオタイプ stereotype 14, 21, 26, 32-33, 63, 99, 109, 120, 130, 172, 206, 215, 285
 ストーリー・テリング story-telling 163, 203, 268
 スピヴァク、ガヤトリ・チャクラボルティ Spivak, Gayatri Chakravorty 214
 スミス、シドニー Smith, Sidonie 141, 146
 スミダ、ステイナー・H. Sumida, Stephen H. 21, 129
 政治的精神的レイプ political and spiritual rape / abuse 236
 性的悪戯 molesting, sexual molestation 223, 232, 236, 275
 正統性 orthodoxy 42, 131
 生物学的内部者 biological insiders 25
 生物学的内部者主義 biological insiderism 38
 西洋中心主義的 Eurocentric 14, 40, 92, 214, 247
 「世界」に旅すること / 「世界」旅行 'world'-travelling 245, 279, 281
 セクシュアリテイ sexuality 97, 223

- セント・アンドリュース、B. A. St. Andrews, B. A. 213
 相互排除 mutual exclusion 32
 ソシユール、フェルデアナン・ド Saussure, Ferdinand de 223
 ソネ、モニカ Sone, Monica 12, 275
 『二世娘』 *Nisei Daughter* 275
 ソラーズ、ワーナー Sollors, Werner 36, 38, 55
- 〈タ行〉
 対折記憶 counter-memory 29, 53, 126, 166, 169, 171
 対抗備給 counterinvestment 144, 170
 対話的思考 dialogic vision 37
 タカキ、ロナルド Takaki, Ronald 109, 110, 118, 120, 274
 多言語テクスト polyglot textualization 36
 多元的意識 multiple consciousness 34
 他者 other(s) 20, 32, 38, 58, 93, 155, 167, 197-98, 207, 212, 219, 242, 244, 257-58, 285
 多重の声で語る言説 multivocal discourses 251
 多重表象 multiple re-presentations 29
 第三世界 Third World 27-28, 43, 53, 108, 214, 280
 大陪審員 Grand Inquisitor 263-65
 男性性／男らしさ masculinity, manhood 21, 46, 60, 83, 85-87, 89-91, 152, 170-71, 178, 200, 284-85
 チャイナマン Chinamen 169, 171-174, 176-177, 179-181, 186, 189-191, 196-197, 199, 204-205
 『一杯の茶を喫べよ』 *Eat a Bowl of Tea* 22, 120
 チン、フランソワ Chin, Frank 4, 34, 201, 284
 沈黙 (silence)
 気遣いの沈黙 attentive silence 40, 43-44, 216, 241, 244, 248, 265
 禁止の沈黙 inhibitive silence 44
 ストイックな沈黙 stoic silence 44, 216, 237, 239
 修辭的な沈黙 rhetorical silence 42, 93
 沈黙の見守り vigil of silence 268
 服従的な沈黙 submissive silence 91
 保護的 (な) 沈黙 protective silence 44

- 抑圧的 (な) 沈黙 oppressive silencing, oppressive silence 44, 281
 両親の沈黙 parental silence 42
 歴史の沈黙 historical silence 42, 131
 ツァイ・エン Ts'ai Yen 157-59
 敵性外国人 enemy aliens 224
 適切な言葉の組み合わせ the right mix 254-55, 280
 テリダ、ジャック Derrida, Jacques 15, 203
 杜 (子春) Tu Tzu-chun 181-83, 207, 209-10
 同化する assimilate 133, 148, 236, 282
 同質化 homogenization 215
 道路建設キャンプ road-work camps 225, 233, 235
 トーク・ストーリー talk-story 43, 142, 157, 163-64, 168, 183-84, 189, 193, 196-98
 トリン・T、ミンハ Trinh T. Minh-ha 37, 58, 164, 196, 201, 212, 226-27
 ドウヅレーシス、レイチェル・ブライラウ DuPlessis, Rachel Blau 18, 162-63
- 〈チ行〉
 内面化 internalization 19, 21, 34, 43, 131, 148, 215
 内陸居住プロジェクト Interior Housing Projects 25, 224
 ナショナルイズム nationalism 39, 43, 283
 ナラテイヴ narrative 16, 18, 26, 41, 46, 59, 61, 87, 109, 117, 128, 130-31, 141, 157, 159, 162, 177, 199, 216, 252, 255, 270-71, 273, 282
 ナラテイヴ技法 narrative technique 42-43, 167
 ナラテイヴ形式 narrative forms 40
 ナラテイヴ行為 narrative act 251-52
 ナラテイヴ戦略 narrative strategies 27-28, 44, 128-29, 133, 194, 282
 ナラテイヴの権威 narrative authority 18
 ナラテイヴの声 narrative voice 251-52
 ナレーション narration 29, 35-36, 166-67, 251
 二項対立、二分法 dichotomy, dichotomous opposition, binary opposition 35, 53, 91, 112, 127, 130, 144, 167, 192, 194, 199, 213, 227, 236, 249, 267, 283
 二項対立のヒエラルキー hierarchical opposition 213
 二重人格 dual personality 30-31, 35, 40
 二重の遺産 double heritage 30-31

- 二重の語り double-telling 61, 75, 77, 90, 92
 二重の系譜 dual lineage 30
 二重の声 double voice, double-voicing 29-30, 36, 40, 42, 131, 161, 168-69, 186
 二重の声の言説 double-voiced discourse 30, 59, 83, 130-31, 135
 二重文化的な語法 bicultural idiom 38
 二重の文化を受け継ぐこと bicultural heritage 231
 二世 Nisei 8, 24, 30, 36, 59-64, 85, 92-93, 113, 116-19, 123-24, 224, 226, 237, 239, 275
 二世の間接的行動 nisei indirection 216
- 〈ハ行〉
 ハーマン、ジュゼイヌ・ルイス Herman, Judith Lewis 237, 252, 277
 俳句 haiku 5-6, 19, 23, 50, 66-72, 74, 76-77, 85, 87-88, 113, 235, 283
 ハイロン付きの作家 hyphenated writers 30
 はぐらかし/ハツジンズ hedging 17, 82
 発話 (する) speech, articulate, articulation, articulating 13-17, 19, 22, 26, 32, 35, 40, 45, 49-50, 59, 83, 133, 139-41, 148, 150, 157, 181-83, 186, 207, 212, 214, 216, 221, 227, 229-30, 249-50, 263-65, 270, 280-81, 285
 ハツチョン、リンダ Huchneon, Linda 27, 214
 ハバクク Habakkuk 27, 226
 バイリンガル bilingual 30, 139-40, 163, 199, 203, 248-49
 目の言語においてバイリンガル visually bilingual 248-49
 バウア、デイル Bauer, Dale 18
 バツチエラー (社会) bachelor (society) 171, 173
 バルト、ロラン Barthes, Roland 40
 控え目 (さ) reticence 15, 17, 21-22, 26, 30, 32, 46, 63-64, 70, 77, 86, 119, 215, 271, 284
 控え目な表現 understatement 15, 134, 189, 281
 非言語コミュニケーション nonverbal communication 59, 63
 非言語的行為/振る舞い nonverbal behavior 44, 216
 非言語表現 nonverbal expression 7, 215, 266
 人に行動を起こさせる力を持つ側面 enabling aspects 248
 ファ・ムーラン Fa Mu Lan 144-46, 157, 170, 179, 194, 204
 ファンタジー fantasy 18, 47, 132, 141, 144-46, 168, 170, 174, 192, 196-97,

- 199, 261
 フーコー、ミシェル Foucault, Michel 15, 26-27, 40, 52-53, 123, 126, 166, 231, 284
 フイシャー、マイケル・M・J Fischer, Michael M. J. 3, 238
 フェミニスト feminist 3, 14, 17, 19, 23, 29, 39-43, 46-47, 53, 55-56, 59-60, 62, 65, 69, 83, 92, 117, 127, 129-31, 134-35, 148, 166-70, 176, 179, 181, 186, 197-200, 203, 214, 236, 254, 277, 280-81, 283-84
 フェミニストの対話 feminist dialogics 18, 130
 フォルマリズム formalism 40, 52
 不可視性 invisibility 17, 20, 22, 24, 176, 178, 216, 284
 フジタ、ゲイル・K. Fujita, Gayle K. 22, 59, 215, 218, 220, 231, 241, 258, 261, 265, 272, 276-77
 二つの音調 two-toned 30, 216, 272
 フリードマン、スusan Stanford フリードマン, Susan Stanford 46, 59, 62
 フロイト、ジークムント Freud, Sigmund 59, 223
 文化的アイデンティティ cultural identity 232
 文化一元論的 monocultural 19, 129, 134-35, 199, 202
 文化的帝国主義 cultural imperialism 44
 文化的ヘゲモニー cultural hegemony 37
 フロット plot 29, 53, 67, 71-73, 78, 82-83, 118, 135, 258
 明らかなフロット manifest plot 61, 65, 78
 隠されたフロット veiled plot 59, 61, 78, 84
 中断されたフロット suspended plot 67, 93,
 無言のフロット muted plots 17, 41
 並置 juxtaposition 29, 71, 118
 ヘンダーソン、マエ・グwendolyn ヘンダーソン, Mae Gwendolyn 18
 ペコラ Pecola 20, 149, 258
 奉仕の手 serving hand 220, 247, 260, 270
 翻訳 (すること) translate, translation 158-60, 197-98, 204, 241
 母性の伝統 maternal tradition 244
- 〈マ行〉
 マグナスソン、A・リン Magnusson, A. Lynne 219, 223, 249, 272, 276
 マスター・ナラティブ master narrative 18

- マツカフエリ、ラリー McCaffery, Larry 27
 ミストリ、ゼノビア・バクスター Mistry, Zenobia Baxter 69
 ミメシス mimesis 214
 ミメテイワツクな分析 mimetic analysis 26
 ミメテイワツクな読み mimetic reading 213
 ミヤモト、S・フランク Miyamoto, S. Frank 62, 85, 119
 『沈黙を脱ぎ捨てて』 *Shedding Silence* 49, 240
 ミルトン、エデイス Milton, Edith 213
 モース、デボラ Morse, Deborah 159
 モデル・マイノリテイ model minority 16, 45
 元テクスト pre-text 42, 141, 195
 モハンテイ、チャンドラ・タルペイト Mohanty, Chandra Talpade 43, 214
 モモタロウ Momotaro 33, 220, 258-62, 283
 モリタ、J・R Morita, J. R. 213
 モリスン、トニ Morrison, Toni 20, 47, 99, 148, 178
 『青い眼が欲しい』 *The Bluest Eye* 148, 178

〈ヤ行〉

- ヤナギサコ、シルヴァニア・ジュンコ Yanagisako, Sylvia Junko 24, 61, 75, 86,
 89, 118, 120
 ヤマウチ、ワカコ Yamauchi, Wakako 53, 85, 118, 122, 239
 『ハンカチ』 "Handkerchief" 85
 ヤマモト、ヒサエ Yamamoto, Hisaye 14, 16, 18, 23-27, 29-30, 36, 39, 41-42,
 44, 53, 57-65, 69-70, 77, 83, 85, 87, 90-93, 105-06, 109, 114-19, 121-24, 127-28,
 155, 160, 183, 202, 219, 226, 233, 241, 244, 273, 282
 『十七文字』 "Seventeen Syllables" 18, 23, 25, 41, 45, 57, 60-61, 64, 74,
 77-78, 82-84, 91-93, 95, 103, 113-14, 121, 206, 219, 235, 283
 『ハイヒール』 "The High-Heeled Shoes" 60, 122
 『ミス・ササガワラ伝説』 "The Legend of Miss Sasagawara" 24, 27, 34,
 41, 45, 53, 55, 57, 61, 93, 281
 『ヨネコの地震』 "Yonoko's Earthquake" 23, 41, 57, 60-61, 64, 77, 78-81,
 83, 89, 91, 93, 95, 103, 114
 『私もまたアメリカに生きぬ』 "Et Ego in America Vixi" 58
 『ハイヒール』 "The High-Heeled Shoes" 60, 122

- ヨギ、スタン Yogi, Stan 4, 25, 53, 77, 83, 89-90, 98, 101-02, 118, 122
 抑圧 repression 19, 23, 35, 41-44, 46, 48, 59, 62, 65, 75, 83, 91-92, 113-14, 128,
 130, 134, 169-70, 179, 184, 196, 199, 213-14, 224, 231-32, 235-36, 245, 248,
 252, 265, 281, 284

〈ラ行〉

- ライマン、スタンフォード・M Lyman, Stanford M. 64, 85, 119, 216
 ラカン、ジャック Lacan, Jacques 223
 ラドナー、ジヨアン Radner, Joan 18, 29, 46, 59, 69, 71, 82, 118-19, 163, 171, 206
 ラビネ、レスリー・W Rabine, Leslie W. 129, 142, 161, 203
 ラムバートソン、ミチコ Lambertson, Michiko 220
 ランサー、スーザン・スニダー Lanser, Susan Sniader 18, 29, 46, 59, 69,
 71, 82, 115, 118-19, 163, 171, 206
 リアリテイ reality 25-26, 28-29, 47, 132, 162, 190, 204, 224, 226, 251
 両義性という見方 both/and vision 18
 ルーベンスタイン、ロバート Rubenstein, Roberta 131
 ルゴエネス、マリテ Lugones, Maria 245, 279, 281
 霊的交感 communion 250
 レイコフ、ロビン Lakoff, Robin 59, 63, 139, 202, 222
 歴史主義 historicism 40, 52, 208
 レデコップ、マダレイン Redekop, Magdalene 33, 230, 277
 レブラ、タキエ・スギヤマ Lebra, Taktie Sugiyama 86
 ロー、デイヴィッド Low, David 213
 ローズ、マリリン・ラッセル Rose, Marilyn Russell 215
 ローター、ポール Lauter, Paul 62
 ログス中心主義 logocentrism 14-16, 203, 215, 226

〈ワ行〉

- ワガマヤ／我が儘 waganama 243, 258, 265

〈日本語英語表記対照リスト (索引以外の人名と作品名)〉

〈ア行〉

アダチ、ケン Adachi, Ken
 アーレン、マイケル Arlen, Michael
 『アララト山への道』 *Passage to Ararat*
 アンジェロウ、マヤ Angelou, Maya
 『歌え、翔べない鳥たちよ』 *I Know Why the Caged Bird Sings*
 イーガー、パトリシア Yaeger, Patricia
 イーキン、ポール・ジョン Eakin, Paul John
 イスラス、アルトゥーロ Islas, Arturo
 ウイッチイグ、モニク Wittig, Monique
 ウェイクマン、フレデリック・ジュニア Wakeman, Frederic, Jr.
 ウォード、ピーター・W Ward, Peter W.
 ウォン、アルフレッド・S Wang, Alfred S.
 ウォン、ジェイド・スノウ Wong, Jade Snow

〈カ行〉

キノシタ、ユキコ Kinoshita, Yukiko
 ギブソン、ドナルド・B Gibson, Donald B.
 ギルバート、サンドラ・M Gilbert, Sandra M.
 カニヒロ、マサオ Kunihiro, Masao
 グーパー、スーザン Gubar, Susan
 コーデル、ウイリアム Caudill, William
 コッペルマン、スーザン Koppelman, Susan
 コロドニア、アネット Kolodny, Annette
 コンドウ、ドリン・K Kondo, Dorinne K.
 〈サ行〉
 サビル・トロイク、ムリエル Saville-Troike, Muriel
 サンキスト、エリック・J. Sundquist, Eric J.
 サンジュアン、E・Jr. San Juan, E., Jr.

シクスー、エレーヌ Cixous, Hélène
 シスネロス、サンドラ Cisneros, Sandra
 ジェレン、マイラ Jehlen, Myra
 ジュハス、ヌザンヌ Juhasz, Suzanne
 シュヴァイク、スーザン Schweik, Susan
 ジョーンズ、アン・ロザリンド Jones, Ann Rosalind
 ジョソフソン、ダイアン Johnson, Diane
 スー、ダイアン・M Sue, Diane M.
 スー、デイヴィッド Sue, David
 スナハラ、アン・ゴーマー Sunahara, Ann Gomer
 スレッジ、リンダ・チン Sledge, Linda Ching
 ソンタグ、ヌーザン Sontag, Susan

〈タ行〉

タルボート、ステイヴン Talbot, Stephen
 タンネン、デボラ Tannen, Deborah
 チェスラー、フェイス Chesler, Phyllis
 チヤウ、C・ロック Chua, C. Lok
 チヤン、ヌーチヨン Chan, Sucheng
 チン、フランク Ching, Frank
 デュプレシス、レイチェル・ブラウ Duplessis, Rachel Blau
 デルガード、リチャード Delgado, Richard
 トン、ベンジャミン・R Tong, Benjamin R.

〈ナ行〉

ナカヤマ、ゴードン・G Nakayama, Gordon G.
 『一世—日系カナダ人開拓者物語』 *Issei: Stories of Japanese Canadian Pioneers*
 ニシダ、ツカサ Nishida, Tsukasa
 ニューマン、キャサリン Newman, Katharine
 ネルソン、アンドリュース・ナサニエル Nelson, Andrew Nathaniel
 ネイラー、グローリア Naylor, Gloria
 『アリエースター・グレイスの女たち』 *Women of Brewster Place*
 ノイバウアー、キャロル・E Neubauer, Carol E.

〈ハ行〉

ハーストン、ゾラ・ニール Hurston, Zora Neale
 『彼らの目は神を見ていた』 *Their Eyes Were Watching God*
 バットウ、キース H. Basso, Keith H.
 バブ、テイモシイ Pfaff, Timothy
 プラット、アニス Pratt, Annis
 パラソボリエー、テイザイト Palumbo-Liu, David
 パルビンスカス、ヘレン Palubinskas, Helen
 ビューズトン、ジーン・ワカツキ Houston, Jeanne Wakatsuki
 フェルマン、シヨシヤチ Felman, Shoshana
 フョードル、ドストエフスキー Dostoyevsky, Fyodor
 『カラマゾフの兄弟』 *The Brothers Karamazov*
 プラウゼェルト、Wm・サタケ Blauvelt, Wm. Satake
 ブロードフット、バリー Broadfoot, Barry
 ホアソ、テイザイツ・ヘンリー Hwang, David Henry
 ポーチ、ステイーン・R. Porch, Stephen R.

〈マ行〉

マクドナルド、ドロシー・リツコ McDonald, Dorothy Risuko
 マクドウェル、デボラ・E McDowell, Deborah E.
 マスダ、コウ Masuda, Koh,
 マスダ、マリ・J Masuda, Mari J
 マツウラ、シノブ Matsuura, Shinobu
 マツモト、バトリー Matsumoto, Valerie
 マルクス、ガブリエル・ガルシア Marquez, Gabriel Garcia
 『百年の孤独』 *One Hundred Years of Solitude*
 メリベイル、P Merivale, Patricia
 モイヤーズ、ビル Moyers, Bill
 モリ、トシオ Mori, Toshio
 『見事なドーナツを作る女』 "The Woman Who Makes Swell Donuts"
 モラガ、チェリー Moraga, Cherie
 『戦時に愛して』 *Loving in the War Years*

〈ヤ行〉

ヤング、バーバラ Jung, Barbara

〈ラ行〉

リ、フアン Li Fang
 リー、テイザイツ・レイウエイ Li, David Leimei
 リー、ロバート・G Lee, Robert G.
 リッチ、アドリエンヌ Rich, Adrienne
 リン、エイミー Ling, Amy
 リン、タイイ Lin Tai-yi
 リンカン、ケネス Lincoln, Kenneth
 レイトン、アレクサンダー・H Leighton, Alexander H.
 ローズ、マイク Rose, Mike
 ロー、リサ Lowe, Lisa
 ロドリゲス、リチャード Rodriguez, Richard
 ロドリゲス、バーバラ Rodriguez, Barbara

〈ワ行〉

ワードスワース、ウイリアム Wordsworth, William
 『ティンテン・アビー』 "Tintern Abbey"
 ワインスタイン、ヘレン Weinstein, Helen
 ワン、アルフレッド・S Wang, Alfred S.

- Adachi, Ken. 1976. *The Enemy That Never Was: A History of the Japanese Canadians*. Toronto: McClelland & Stewart.
- Ahmad, Aijaz. 1987. "Jameson's Rhetoric of Otherness and the 'National Allegory.'" *Social Text*, no. 17, 3-25.
- Allen, Paula Gunn. 1986. *The Sacred Hoop: Recovering the Feminine in American Indian Traditions*. Boston: Beacon.
- Althusser, Louis. 1971. "Ideology and Ideological State Apparatuses." In *Lenin and Philosophy and Other Essays*, Trans. Ben Brewster, 127-86. New York: Monthly Review Press.
- Anderson, Benedict. 1983. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso.
- Angelou, Maya. 1969. *I Know Why the Caged Bird Sings*. New York: Random House.
- Anzaldúa, Gloria. 1981. "Speaking in Tongues: A Letter to Third World Women Writers." In *This Bridge Called My Back: Writings by Radical Women of Color*, ed. Cherrie Moraga and Gloria Anzaldúa. 165-73. New York: Kitchen Table Press.
- . 1987. *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza*. San Francisco: Spinsters/Aunt Lute.
- , ed. 1990. *Making Face, Making Soul/Hacienda Caras: Creative and Critical Perspectives by Women of Color*. San Francisco: Aunt Lute Foundation Books.
- Ardener, Shirley, ed. 1975. *Perceiving Women*. London: Malaby Press.
- Auerbach, Nina. 1978. *Communities of Women: An Idea in Fiction*. Cambridge: Harvard University Press.
- Axford, Roger W. 1986. *Too Long Silent: Japanese Americans Speak Out*. Lincoln, Neb.: Media.
- Baker, Houston A., Jr. 1980. *The Journey Back: Issues in Black Literature and Criticism*. Chicago: University of Chicago Press.
- Bakhtin, M. M. 1981. *The Dialogic Imagination: Four Essays by M. M. Bakhtin*.

- Ed. Michael Holquist. Trans. Caryl Emerson and Michael Holquist. Austin: University of Texas Press.
- Basso, Keith H. 1983. "Stalking with Stories: Names, Places, and Moral Narratives among the Western Apache." In *Text, Play, and Story: The Construction and Reconstruction of Self and Society*, ed. E. Bruner and S. Platter, 19-55. Washington, D.C.: American Ethnological Society.
- Bauer, Dale M. 1988. *Feminist Dialogics: A Theory of Failed Community*. Albany, N.Y.: SUNY Press.
- Bhabha, Homi. 1984. "Representation and the Colonial Text: A Critical Exploration of Some Forms of Mimeticism." In *The Theory of Reading*, Frank Gloversmith, 93-122. Totowa, N.J.: Barnes & Noble.
- Blauvelt, Wm. Satake. 1989. "Hisaye Yamamoto Recalls Miss Sasagawara." *International Examiner Literary Supplement*, 19 July, 19.
- Boelhower, William Q. *Through a Glass Darkly: Ethnic Semiosis in American Literature*. New York: Oxford University Press.
- Bouchard, Donald F. 1977. Preface to *Language, Counter-Memory, Practice: Selected Essays and Interviews*, by Michel Foucault. Ithaca: Cornell University Press.
- Broadfoot, Barry. 1977. *Years of Sorrow, Years of Shame: The Story of the Japanese Canadians in World War II*. Toronto: Doubleday Canada.
- Brodzki, Bella. 1985. "She Was Unable Not to Think: Borges' Emma Zanz and the Female Subject." *MLN*, March, 330-47.
- Bruchac, Joseph, ed. 1983. *Breaking Silence: An Anthology of Contemporary Asian American Poets*. Greenfield Center, N. Y.: Greenfield Review Press.
- Butler, Judith. 1991. "Imitation and Gender Insubordination." In *Inside/Out: Lesbian Theories, Gay Theories*, ed. Diana Fuss, 13-31. New York: Routledge.
- Cage, John. 1961. *Silence: Lectures and Writing*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press.
- Carby, Hazel. 1987. *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist*. New York: Oxford University Press.
- Carroll, David. 1983. "The Alterity of Discourse: Form, History, and the Question of the Political in M. M. Bakhtin." *Diacritics* 13.2:65-83.

- Castillo, Debra A. 1992. *Talking Back: Toward a Latin American Feminist Literary Criticism*. Ithaca: Cornell University Press.
- Caudill, William, and Harry A. Scarr. 1962. "Japanese Value Orientations and Culture Change." *Ethnology* 1:53-91.
- Caudill, William, and Helen Weinstein. 1969. "Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America." *Psychiatry* 32.1:12-43.
- Chan, Jeffery Paul. 1977. "Letters: The Mysterious West." *New York Review of Books*, 28 April, 41.
- Chan, Jeffery Paul, Frank Chin, Lawson [Fusao] Inada, and Shawn Wong. 1981. "Resources for Chinese and Japanese American Literary Traditions." *Amerasia Journal* 8.1:19-31.
- , eds. 1991. *The Big Aiiieeee! An Anthology of Asian American Writers*. New York: New American Library/Meridian.
- Chan, Sucheng. 1986. *This Bittersweet Soil: The Chinese in California Agriculture, 1860-1910*. Berkeley: University of California Press.
- . 1989. "On the Ethnic Studies Requirement, pt. 1: Pedagogical Implications." *Amerasia Journal* 15.1:267-80.
- . Asian Americans: An Interpretive History. Boston: Twayne-Hall.
- Chen, Jack. 1981. *The Chinese of America*. San Francisco: Harper & Row.
- Chesler, Phyllis. 1973. *Woman and Madness*. New York: Avon.
- Cheung, King-Kok. 1988. "Don't Tell: Imposed Silences in *The Color Purple* and *The Woman Warrior*." *PMLA*, March, 162-74.
- . 1990a. "Self-fulfilling Visions in *The Woman Warrior* and *Thousand Pieces of Gold*." *Biography: An Interdisciplinary Quarterly*, Spring, 143-53.
- . 1990b. "The Woman Warrior versus the Chinaman Pacific: Must a Chinese American Critic Choose between Feminism and Heroism?" In Hirsch and Keller, 234-51.
- . 1991. "Double-Telling: Intertextual Silence in Hisaye Yamamoto's Fiction." *American Literary History* 3.2:277-93.
- . 1991-92. "Thrice Muted Tale: Interplay of Art and Politics in Hisaye Yamamoto's 'The Legend of Miss Sasagawara.'" *MELUS* 17.3:109-25.
- . 1994. "Attentive Silence in Joy Kogawa's *Obasan*." In *Listening to Silences: New Essays in Feminist Criticism*, ed. Elaine Hedges and Shelley Fisher Fishkin, 113-29. New York: Oxford University Press.
- Chin, Frank 1972. "Confessions of the Chinatown Cowboy." *Bulletin of Concerned Asian Scholars* 4.3:58-70.
- . 1984. "The Most Popular Book in China." *Quill* 4:6-12.
- . 1985. "This Is Not an Autobiography." *Genre* 18:109-30.
- . 1991. "Come All Ye Asian American Writers of the Real and The Fake." In Chan et al. 1-92.
- Chin, Frank, and Jeffery Paul Chan. 1972. "Racist Love." In *Seeing through Shuck*, ed. Richard Kostelanetz, 65-79. New York: Ballantine.
- Chin, Frank, Jeffery Paul Chan, Lawson Fusao Inada, and Shawn Wong, eds. 1974/1983. *Aiiieeee! An Anthology of Asian-American Writers*. Washington, D.C.: Howard University Press.
- Ching, Frank, and Frank Chin. 1972. "Who Is Afraid of Frank Chin, or Is It Ching?" *Bridge* 2.2:29-34.
- Christ, Carol P. 1980. *Diving Deep and Surfacing: Women Writers on Spiritual Quest*. Boston: Beacon.
- Christian, Barbara. 1987. "The Race for Theory." *Cultural Critique* 6 (Spring): 51-64.
- Chu, Louis. 1961/1979. *Eat a Bowl of Tea*. Seattle: University of Washington Press.
- Chua, C. Lok. 1981. "An Exorcism: Two Asians in America." *Massachusetts Review* 22.2:361-67.
- . 1991. "Mythopoeisis East and West in *The Woman Warrior*." In Lim 1991, 146-50.
- Chai: The Encyclopaedic Chinese Dictionary*. 1979. 3 vols. Shanghai: [Ci Shu]; Hong Kong: Joint.
- Cisneros, Sandra. 1988. *The House on Mango Street*. Houston: Arte P & Publico Press.
- Cixous, Hélène, and Catherine Clément. 1986. *The Newly Born Woman*. Trans. Betsy Wing. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Clément, Catherine. 1980. "Enslaved Enclave." In Marks & Courtivron, 130-36.
- Crow, Charles L. 1984. "Home and Transcendence in Los Angeles Fiction." In *Los Angeles in Fiction: A Collection of Original Essays*, ed. David Fine, 189-205.

- Albuquerque: University of New Mexico Press.
- . 1986. "The *Issei* Father in the Fiction of Hisaye Yamamoto." In *Opening Up Literary Criticism: Essays on American Prose and Poetry*, ed. Leo Truchlar, 34-40. Salzburg: Wolfgang Neugebauer.
- . 1987. "A MELUS Interview." *MELUS* 14.1:73-84.
- Daniels, Roger. 1981. *Concentration Camps, North America: Japanese in the U. S. and Canada during World War II*. Malabar, Fla.: R. E. Krieger.
- Dannenhauer, Bernard P. 1980. *Silence: The Phenomenon and Its Ontological Significance*. Bloomington: Indiana University Press.
- Davis, Angela Y. 1983. *Women, Race & Class*. New York: Vintage/Random House.
- Dearborn, Mary V. 1986. *Pocahontas's Daughters: Gender and Ethnicity in American Culture*. New York: Oxford University Press.
- Delgado, Richard. 1982. "Words That Wound: A Tort Action for Racial Insults, Epiphets, and Name-Calling." *Harvard Civil Rights-Civil Liberties Law Review* 17.1:133-81.
- Diamond, Irene, and Lee Quinby, ed. 1988. *Feminism & Foucault: Reflections on Resistance*. Boston: Northeastern University Press.
- Dostoyevsky, Fyodor. 1958/1982. *The Brothers Karamazov*. Trans. David Magarshack. New York: Viking.
- Douglas, Mary. 1973. *Natural Symbols: Explorations in Cosmology*. London: Barrie & Jenkins.
- Duplessis, Rachel Blan. 1981/1985. "For the Errusicans." In *The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature, and Theory*, ed. Elaine Showalter, 271-91. New York: Pantheon.
- . 1985. *Writing beyond the Ending: Narrative Strategies of Twentieth-Century Women Writers*. Bloomington: Indiana University Press.
- Eagleton, Terry. 1976. *Marxism and Literary Criticism*. Berkeley: University of California Press.
- Eakin, Paul John. 1985. *Fictions in Autobiography: Studies in the Art of Self-invention*. Princeton: Princeton University Press.
- Felman, Shoshana. 1991. "Women and Madness: The Critical Phallacy." In *Feminisms: An Anthology of Literary Theory and Criticism*, ed. Robyn R.

- Wahol and Diane Price Herndl, 6-19. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press.
- Fischer, Michael M. J. 1986. "Ethnicity and the Post-modern Arts of Memory." In *Writing Cultures: The Poetics and Politics of Ethnography*, ed. James Clifford and George E. Marcus, 194-233. Berkeley: University of California Press.
- Fishkin, Shelley Fisher. 1991. "Interview with Maxine Hong Kingston." *American Literary History* 3.4:782-91.
- Foucault, Michel. 1976/1980. *The History of Sexuality*. Trans. R. Hurley. New York: Vintage.
- . 1977/1980. *Language, Counter-memory, Practice: Selected Essays and Interviews*. Ed. Donald F. Bouchard. Ithaca: Cornell University Press.
- . 1979. *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. Trans. Alan Sheridan. New York: Vintage/Random House.
- Friedman, Susan Stanford. 1989. "The Return of the Repressed in Women's Narratives." *Journal of Narrative Technique* 19.1:141-56.
- Fujita, Gayle K. 1985. "'To Attend the Sound of Stone': The Sensibility of Silence in *Obasan*." *MELUS* 12.3:33-42.
- Gates, Henry Louis, Jr. 1991. "'Authenticity,' or the Lesson of Little Tree." *New York Times Book Review*, 24 November, 1, 26-30.
- . ed. 1984. *Black Literature and Literary Theory*. New York: Methuen.
- Gibson, Donald B. 1989. "Text and Counter-text in Toni Morrison's *The Bluest Eye*." *LIT: Literature Interpretation Theory* 1.1-2:19-32.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. 1979. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale University Press.
- Gilman, Charlotte Perkins. 1892/1973. *The Yellow Wallpaper*. New York: Feminist Press.
- Glissant, Edouard. 1989. *Caribbean Discourse: Selected Essays*. Trans. J. Michael Dash. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Goellnicht, Donald C. 1989. "Minority History as Metafiction: Joy Kogawa's *Obasan*." *Tulsa Studies in Women's Literature*, Fall, 287-306.
- . 1991. "Father Land and/or Mother Tongue: The Divided Female Subject in

- Kogawa's *Obasan* and Hong Kingston's *The Woman Warrior*. "In *Redefining Autobiography in Twentieth-century Women's Fiction: An Essay Collection*, ed. Janice Morgan and Colette T. Hall, 119-34. New York: Garland.
- . 1992. "Tang Ao in America: Male Subject Positions in *China Men*." In *Reading the Literatures of Asian America*, ed. Shirley Geok-Lin Lim and Amy Ling, 191-212. Philadelphia: Temple University Press.
- Gottlieb, Erika. 1986. "The Riddle of Concentric Worlds in *Obasan*." *Canadian Literature* 109 Summer: 34-53.
- Gould, Stephen Jay. 1981. *The Mismeasure of Man*. New York: Norton.
- Griffin, Susan. 1981. *Pornography and Silence: Culture's Revenge against Nature*. New York: Colophon/Harper.
- Gubar, Susan. 1981. "'The Blank Page' and the Issues of Female Creativity." *Critical Inquiry* 8:243-63.
- Hall, Edward T. 1959. *The Silent Language*. New York: Doubleday.
- Henderson, Mae Gwendolyn. 1989. "Speaking in Tongues: Dialogics, Dialectics, and the Black Woman Writer's Literary Tradition." In *Changing Our Own Words: Essays on Criticism, Theory, and Writing by Black Women*, ed. Cheryl A. Wall, 16-37. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press.
- Herman, Judith Lewis. 1992. *Trauma and Recovery*. New York: Basic Books.
- Hirsch, Marianne, and Evelyn Fox Keller. 1990. *Conflicts in Feminism*. New York: Routledge.
- Horn, Marlon, K. 1984. "A Case of Mutual Exclusion: Portrayals by Immigrant and American-Born Chinese of Each Other in Literature." *Amerasia Journal* 11.2:29-45.
- . trans and ed. 1987. *Songs of Gold Mountain: Cantonese Rhymes from San Francisco Chinatown*. Berkeley: University of California Press.
- Homans, Margaret. 1983. "'Her Very Own Howl': The Ambiguities of Representation in Recent Women's Fiction." *Signs* 9.2:186-205.
- . 1986. *Bearing the Word: Language and Female Experience in Nineteenth-Century Women's Writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- hooks, bell. 1984. *Feminist Theory from Margin to Center*. Boston: South End Press.

- Houston, Jeanne Wakatsuki. 1985. *Beyond Manzanar: Views of Asian-American Womanhood*. Santa Barbara, Calif.: Capra.
- Hsu, Kai-yu, and Helen Palubinskas, eds. 1972/1976. *Asian-American Authors*. Boston: Houghton Mifflin.
- Hutcheon, Linda. 1980. *Narcissistic Narrative: The Metafictional Paradox*. Waterloo, Ont.: Wilfrid Laurier University Press.
- . 1987. "Beginning to Theorize Postmodernism." *Textual Practice* 1.1:10-31.
- . 1988. *A Poetics of Postmodernism: History, Theory, Fiction*. New York: Routledge.
- Hwang, David Henry. 1983. *FOB. In Broken Promises: Four Plays*, 3-57. New York: Avon.
- . 1989. "Afterword." In *M. Butterfly*, 94-100. New York: Plume/Penguin.
- Ichiooka, Yuji. 1980. "America Nadeshiko: Japanese Immigrant Women in the United States, 1900-1924." *Pacific Historical Review* 59.2:339-57.
- . 1988. *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924*. New York: Free Press.
- Irigaray, Luce. 1985a. *Speculum of the Other Woman*. Trans. Gillian C. Gill. Ithaca: Cornell University Press.
- . 1985b. *This Sex Which Is Not One*. Trans. Catherine Porter with Carolyn Burke. Ithaca: Cornell University Press.
- Islas, Arturo. 1983. "Maxine Hong Kingston: From an Interview between Kingston and Arturo Islas." In *Women Writers of the West Coast Speaking of Their Lives and Careers*, ed. Marilyn Yalom, 11-19. Santa Barbara, Calif.: Capra.
- Iwata, Edward. 1990. "Word Warriors." *Los Angeles Times*, 24 June, E1.
- Jameson, Fredric. 1981. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. Ithaca: Cornell University Press.
- . 1986. "Third-World Literature in the Era of Multinational Capitalism." *Social Text*, no. 15, 65-88.
- JamMohamed, Abdul R., and David Lloyd, eds. 1990. *The Nature and Context of Minority Discourse*. New York: Oxford University Press.
- Jardine, Alice. 1981. "Pre-texts for the Transatlantic Feminist." *Yale French Studies* 62:220-36.

- Jehlen, Myra. 1981. "Archimedes and the Paradox of Feminist Criticism." *Signs* 6.4:575-601.
- Jensen, J. Vernon. 1973. "Communicative Functions of Silence." *ETC.: A Review of General Semantics* 30.3:249-57.
- Johnson, Barbara. 1978. *The Critical Difference: Essays in the Contemporary Rhetoric of Reading*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Johnson, Diane. 1977. "Ghosts." Review of *The Woman Warrior*, by Maxine Hong Kingston. *New York Review of Books*, 3 February, 19.
- . 1982. "Anti-autobiography." Maxine Hong Kingston, Carobeth Laird, and N. Scott Momaday, in *Terrorists and Novelists*: 3-13. New York: Knopf.
- Jones, Marina. 1990. "The Avenues of Speech and Silence: Telling Difference in Joy Kogawa's *Obasan*." In *Theory between the Disciplines: Authority/Vision/Politics*, ed. Martin Kreiswirth and Mark A. Cheetham, 213-29. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Juhasz, Suzanne. 1985. "Maxine Hong Kingston: Narrative Technique and Female Identity." In Rainwater & Scheick, 173-89.
- Kammer, Jeanne. 1979. "The Art of Silence and the Forms of Women's Poetry." In *Shakespeare's Sisters: Feminist Essays on Women's Poetry*, ed. Sandra Gilbert and Susan Gubar, 153-64. Bloomington: Indiana University Press.
- Kennedy, Colleen, and Deborah Morse. 1991. "A Dialogue with(in) Tradition: Maxine Hong Kingston's *The Woman Warrior*." In Lim, 1991, 121-30.
- Kikumura, Akemi. 1981. *Through Harsh Winters: The Life of a Japanese Immigrant Woman*. Novato, Calif.: Chandler & Sharp.
- Kikumura, Akemi, and Harry H. L. Kitano. 1981. "The Japanese American Family." In *Ethnic Families in America: Patterns and Variations*, ed. Charles H. Mindel and Robert W. Habenstein, 2d ed., 49-60. New York: Elsevier.
- Kim, Elaine H. 1982. *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*. Philadelphia: Temple University Press.
- . 1987. "Defining Asian American Realities through Literature." *Cultural Critique* 6:87-111.
- . 1990. "'Such Opposite Creatures': Men and Women in Asian American Literature." *Michigan Quarterly Review*, Winter, 68-93.

- Kingston, Maxine Hong. 1976/1989. *The Woman Warrior: Memoirs of a Girlhood among Ghosts*. New York: Vintage/Random House.
- . 1978. "San Francisco's Chinatown: A View from the Other Side of Arnold Genthe's Camera." *American Heritage*, December, 35-47.
- . 1980/1989. *China Men*. New York: Vintage/Random House.
- . 1980. *Du jian xiu xian er ban ti* [a Chinese edition of *China Men*]. Trans. Zhang Shi. Taipei shi, Taiwan: Huang Guan chu ban she. [The edition in which Kingston's father wrote commentary in the margins.]
- . 1982. "Cultural Mis-readings by American Reviewers." In *Asian and Western Writers in Dialogue: New Cultural Identities*, ed. Guy Amirthanayagam, 55-65. London: Macmillan.
- . 1983. "Imagined Life." *Michigan Quarterly Review* 22-4 (Fall):561-70.
- . 1987. *Hawai'i One Summer*. San Francisco: Meadow.
- . 1989/1990. *Trampmaster Monkey: His Fake Book*. New York: Vintage/Random House.
- . 1991. "Personal Statement." In Lim 1991, 23-25.
- Kitagawa, Muriel. 1985. *This Is My Own: Letters to Wes & Other Writings on Japanese Canadians, 1941-1948*. Ed. Roy Miki. Vancouver: Talonbooks.
- Kitano, Harry H. 1969. *Japanese Americans: The Evolution of a Subculture*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Kogawa, Joy. 1981. *Obasan*. Toronto: Lester & Orpen Denny's; Boston: David R. Godine, 1982.
- . 1984. Preface to *Issei: Stories of Japanese Canadian Pioneers*, by Gordon G. Nakayama. Toronto: NC Press.
- . 1985. "The Japanese-Canadian Dilemma." *Toronto Life*, December, 29-33, 58, 60.
- . 1988. Excerpt from a sequel to *Obasan*. *Seattle Review* 11.1:115-25.
- . 1992. *Isuka*. Toronto: Viking.
- Kolodny, Annette. 1975. "Some Notes on Defining a 'Feminist Literary Criticism.'" *Critical Inquiry* 2.1:75-92.
- . 1980. "A Map for Rereading; or, Gender and the Interpretation of Literary Texts." *New Literary History* 11.3:451-67.

- Kondo, Dorinne K. 1990. *Crafting Selves: Power, Gender, and Discourses of Identity in a Japanese Workplace*. Chicago: University of Chicago Press.
- Koppelman, Susan, ed. 1985. *Between Mothers and Daughters*. New York: Feminist Press.
- Kristeva, Julia. 1980. *Desire in Language: A Semiotic Approach to Literature and Art*. Ed. Leon S. Roudiez. New York: Columbia University Press.
- . 1981. "Women's Time." Trans. Alice Jardine and Harry Blake. *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 7.1:13-35.
- Krupat, Arnold. 1989. *The Voice in the Margin: Native American Literature and the Canon*. Berkeley: University of California Press.
- Kunihiro, Masao. 1976. "The Japanese Language and Intercultural Communication" In *The Silent Power: Japan's Identity and World Role*, ed. Japan Center for International Exchange, 51-73. Tokyo: Simul Press. ,
- Lacan, Jacques. 1977. *Écrits: A Selection*. Trans. Alan Sheridan. New York: Norton.
- LaCapra, Dominick. 1985. *History & Criticism*. Ithaca: Cornell University Press.
- Lai, Him Mark, Joe Huang, and Don Wong, eds. 1980. *The Chinese of America, 1785-1980*. San Francisco: Chinese Culture Foundation.
- Lakoff, Robin. 1975. *Language and Woman's Place*. New York: Harper & Row.
- Lambertson, Michiko. 1982. Review of *Obasan*, by Joy Kogawa. *Canadian Woman Studies* 4.2:94-95.
- Lanser, Susan Sniader. 1981. *The Narrative Act*. Princeton: Princeton University Press.
- . 1989. "Feminist Criticism, 'The Yellow Wallpaper,' and the Politics of Color in America." *Feminist Studies* 15.3:415-441.
- Lauter, Paul. 1985. "Race and Gender in the Shaping of the American Literary Canon: A Case Study from the Twenties." In *Feminist Criticism and Social Change: Sex, Class, and Race in Literature and Culture*, ed. Judith Newton and Deborah Rosenfelt, 19-44. New York: Methuen.
- Lebra, Takie Sugiyama, and William P. Lebra. 1984. "Nonconfrontational Strategies for Management of Interpersonal Conflicts." In *Conflict in Japan*, ed. E. S. Kraus, T. P. Rohlen, and P. G. Steinhoff, 41-60. Honolulu: University of Hawaii Press.

- Lee, Robert G. 1991. "The Woman Warrior as an Intervention in Asian American Historiography." In Lim 1991, 52-63.
- Leighton, Alexander H. 1945. *The Governing of Men: General Principles and Recommendations Based on Experience at a Japanese Relocation Camp*. Princeton: Princeton University Press.
- Lentricchia, Frank. 1983. *Criticism and Social Change*. Chicago: University of Chicago Press.
- Li, David Leiwei. 1990. "China Men: Maxine Hong Kingston and the American Canon." *American Literary History* 2.3:482-502.
- Li Fang et al., comps. 1974. *T'ai-p'ing kuang chi*, vol. 1. Taiwan: T'ai-nan ping ping ch'u-pan-she.
- Li, Ju-Chen. 1965. *Flowers in the Mirror*. Trans. Lin Tai-yi. Berkeley: University of California Press.
- Lim, Shirley Geok-lin. 1990. "Japanese American Women's Life Stories: Maternality in Monica Sone's *Nisei Daughter* and Joy Kogawa's *Obasan*." *Feminist Studies* 16.2:289-312.
- . ed. 1991. *Approaches to Teaching Kingston's "The Woman Warrior"*. New York: Modern Language Association.
- Lincoln, Kenneth. 1983. *Native American Renaissance*. Berkeley: University of California Press.
- . 1992. *Indi'n Humor: Bicultural Play in Native America*. New York: Oxford University Press.
- Ling, Amy. 1990. *Between Worlds: Women Writers of Chinese Ancestry*. New York: Pergamon.
- Lionnet, Françoise. 1989. *Autobiographical Voices: Race, Gender, Self-portraiture*. Ithaca: Cornell University Press.
- Low, David. 1983. Review of *Obasan*, by Joy Kogawa. *Bridge* 8.3:22, 28.
- Lowe, Lisa. 1991. "Heterogeneity, Hybridity, Multiplicity: Making Asian American Differences." *Diaspora* 1.1:24-43.
- Lu Xun. 1972. *Selected Stories of Lu Hsun*. Trans. Gladys Yang and Yang Hsien-yi. Beijing: Foreign Languages Press.
- Lugones, María. 1990. "Playfulness, World-Travelling, and Loving Perception." In

- Anzaldia 1990, 390-402.
- Lyman, Stanford M. 1971. "Generation and Character: The Case of the Japanese Americans." In *Roots: An Asian American Reader*, ed. Amy Tachiki et al., 48-71. Los Angeles: UCLA Asian American Studies Center.
- . 1988a. "On Nisei Interpersonal Style: A Reply to S. Frank Miyamoto." *Amerasia Journal* 14.2:105-8.
- . 1988b. "American Interpersonal Style and Nikkei Realities: A Rejoinder to S. Frank Miyamoto." *Amerasia Journal* 14.2:115-23.
- Lytard, Jean-François. 1984. *The Postmodern Condition: A Report on Knowledge*. Trans. Geoff Bennington and Brian Massumi. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- McCaffery, Larry. 1982. *The Metafictional Muse: The Works of Robert Coover, Donald Barthelme, and William H. Gass*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- McDonald, Dorothy Ritsuko, and Katharine Newman. 1980. "Relocation and Dislocation: The Writings of Hisaye Yamamoto and Wakako Yamachi." *MELUS* 7.3:21-38.
- McDowell, Deborah E. 1988. "'That Nameless ... Shameful Impulse': Sexuality in Nella Larsen's *Quicksand* and *Passing*." In *Black Feminist Criticism and Critical Theory*, ed. Joe Weixmann and Houston A. Baker, Jr., 139-67. Greenwood, Fla.: Penkevill.
- . 1989. "Negotiating between Tenses: Witnessing Slavery after Freedom—*Dessa Rose*." In *Slavery and the Literary Imagination*, ed. Deborah E. McDowell and Arnold Rampersad, 144-63. Baltimore: John Hopkins University Press.
- Machery, Pierre. 1978. *A Theory of Literary Production*. Trans. Geoffrey Wall. New York: Routledge.
- Magnusson, A. Lynne. 1988. "Language and Longing in Joy Kogawa's *Obasan*." *Canadian Literature/Littérature Canadienne* 116 (Spring):58-66.
- Marks, Elaine. 1978. "Women and Literature in France." *Signs* 3.4:832-42.
- Marks, Elaine, and Isabelle de Courtivron, eds. 1980. *New French Feminisms*. New York: Schocken.
- Masuda, Koh, ed. 1974. *Kenkyusha's New Japanese-English Dictionary*. 4th ed. Tokyo: Kenkyusha.
- Matsuda, Mari J. 1989. "Public Response to Racist Speech: Considering the Victim's Story." *Michigan Law Review* 87.8:2320-81.
- Matsumoto, Michihiro. 1988. *The Unspoken Way [Haragei: Silence in Japanese Business and Society]*. Tokyo and New York: Kodansha International.
- Matsumoto, Valerie. 1991. "Desperately Seeking 'Deirdre': Gender Roles, Multicultural Relations, and Nisei Women Writers of the 1930s." *Frontiers* 12.1:19-32.
- Matsura, Shinobu. 1986. *Higan: Compassionate Yow*. Trans. Matsuura family. Berkeley, Calif.: Privately printed.
- Mertvale, [Patricia]. 1988. "Framed Voices: The Polyphonic Elegies of Hébert and Kogawa." *Canadian Literature/Littérature Canadienne* 116 (Spring):68-82.
- Miller, Nancy K. 1981. "Emphasis Added: Plots and Plausibilities in Women's Fiction." *PMLA* 96:36-48.
- . 1986. "Archonologies: The Woman, the Text, and the Critic." In *The Poetics of Gender*, ed. Nancy K. Miller, 270-95. New York: Columbia University Press.
- Milton, Edith. 1982. Review of *Obasan*, by Joy Kogawa. *New York Times Book Review*, 5 September, 8, 17.
- Mirkikani, Janice. 1981. *Shedding Silence: Poetry and Prose*. Berkeley: Celestial Arts.
- Misri, Zenobia Baxter. 1990. "'Seventeen Syllables': A Symbolic Haiku." *Studies in Short Fiction* 27.2:197-202.
- Miyamoto, S. Frank, 1986-87. "Problems of Interpersonal Style among the Nisei." *Amerasia Journal* 13.2:29-45.
- . 1988. "Miyamoto Reply to Stanford Lyman." *Amerasia Journal* 14.2:109-13.
- Miyoshi, Masao. 1974. *Accomplices of Silence: The Modern Japanese Novel*. Berkeley: University of California Press.
- Mohanty, Chandra Talpade. 1984. "Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses." *Boundary 2* 12.3/13.1:333-58.
- Mori, Toshio. 1949/1985. "The Woman Who Makes Swell Donuts." In *Yokohama, California*, 22-25. Seattle: University of Washington Press.
- Moria, J. R. 1983. Review of *Obasan*, by Joy Kogawa. *World Literature Today*

- 57.3:516.
- Morrison, Toni. 1970. *The Bluest Eye*. New York: Washington Square Press.
- Nakayama, Gordon G. 1984. *Issei: Stories of Japanese Canadian Pioneers*. Preface by Joy Kogawa. Toronto: NC Press.
- Naylor, Gloria. 1982. *The Women of Brewster Place*. New York: Penguin.
- Nee, Victor G., and Brett de Bary Nee. 1973/1981. *Longtime Californ': A Documentary Study of an American Chinatown*. New York: Pantheon.
- Nelson, Andrew Nathaniel, comp. 1974. *The Modern Reader's Japanese-English Character Dictionary*. 2d rev. ed. Rutland, Vt.: Charles E. Tuttle.
- Neubauer, Carol E. 1983. "Developing Ties to the Past: Photography and Other Sources of Information in Maxine Hong Kingston's *China Men*." *MELUS* 10.4:17-36.
- Niyya, Brian T. 1990. "Open-Minded Conservatives: A Survey of Autobiographies by Asian Americans." M.A. thesis, University of California, Los Angeles.
- Nishida, Tsukasa. 1979. "Comparing Japanese-American Person-to-Person Communication: A Third Culture Approach." Ph.D. diss., University of Minnesota.
- Nomura, Gail M., Russell Endo, Stephen H. Sumida, and Russell C. Leong, eds. 1989. *Frontiers of Asian American Studies: Writing, Research, and Commentary*. Pullman: Washington State University Press.
- O'Barr, William M., and Bowman K. Atkins. 1980. "'Women's Language' or 'Powerless Language'?" In *Women and Language in Literature and Society*, ed. Sally McConnell-Ginet, Ruth Borker, and Nelly Furman, 93-110. New York: Praeger.
- Ogawa, Dennis M. 1978. *Kodomo no tame ni* [For the sake of the children]. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Okada, John. 1957/1984. *No-No Boy*. Seattle: University of Washington Press.
- Olsen, Tillie. 1965/1972. *Silences*. New York: Dell.
- Omi, Michael, and Howard Winant. 1986. *Racial Formation in the United States: From the 1960s to the 1980s*. New York: Routledge.
- Omolade, Barbara. 1990. "The Silence and the Song: Toward a Black Woman's History through a Language of Her Own." In *Wild Women in the Whirlwind: Afro-American Women and the Contemporary Literary Renaissance*, ed. Joanne M. Braxton and Andrée Nicola McLaughlin, 282-95. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press.
- Orenstein, Gloria Feman. 1990. *The Deflowering of the Goddess*. New York: Pergamon.
- Osojima, Keith. 1988. "Asian Americans as the Model Minority: An Analysis of the Popular Press Image in the 1960s and 1980s." In *Reflections on Shattered Windows: Promises and Prospects for Asian American Studies*, ed. Gary Y. Okhtiro et al., 165-74. Pullman: Washington State University Press.
- Ostrker, Alicia Suskin. 1986. *Stealing the Language: The Emergence of Women's Poetry in America*. Boston: Beacon.
- Palumbo-Liu, David. 1990. "Discourse and Dislocation: Rhetorical Strategies of Asian-American Exclusion and Confinement." *LIT: Literature Interpretation Theory* 2:1-7.
- Petersen, William, Michael Novak, and Philip Gleason, eds. 1982. *Concepts of Ethnicity*. Cambridge: Belknap/Harvard University Press.
- Plaff, Timothy. 1980. "Talk with Mrs. Kingston." *New York Times Book Review*, 15 June, 1.
- Picard, Max. 1948/1952. *The World of Silence*. Trans. Stanley Godman. Chicago: Henry Regnery.
- Porch, Stephen R. 1985. *Literature's Silent Language: Nonverbal Communication*. New York: Peter Lang.
- Pratt, Annis. 1976. "The New Feminist Criticisms." In *Beyond Intellectual Sexism*, ed. Joan Roberts, 175-95. New York: David McKay.
- Pryse, Marjorie, and Hortense Spillers, eds. 1985. *Conjuring: Black Women, Fiction, and Literary Tradition*. Bloomington: Indiana University Press.
- Rabine, Leslie W. 1987. "No Lost Paradise: Social Gender and Symbolic Gender in the Writings of Maxine Hong Kingston." *Signs* 12:471-92.
- Rabinowitz, Paula. 1987. "Eccentric Memories: A Conversation with Maxine Hong Kingston." *Michigan Quarterly Review* 26.1:177-87.
- Radhakrishnan, R. 1990. "Ethnic Identity and Post-structuralist Difference." In *JanMohamed & Lloyd*, 50-71.

- Radner, Joan, and Susan Lanser. 1987. "The Feminist Voice: Coding in Women's Folklore and Literature." *Journal of American Folklore* 100:412-25.
- Rainwater, Catherine. 1985. "Anne Redmon: The Fugal Procedure of *Music and Silence*." In Rainwater & Scheick, 69-83.
- Rainwater, Catherine, and William J. Scheick, eds. 1985. *Contemporary American Women Writers: Narrative Strategies*. Lexington: University Press of Kentucky.
- Rayson, Ann. 1987. "Beneath the Mask: Autobiographies of Japanese-American Women." *MELUS* 14.1:43-57.
- Redekop, Magdalene. 1989. "The Literary Politics of the Victim." *Canadian Forum*, November, 14-17.
- Rich, Adrienne. 1979. *On Lies, Secrets, and Silence: Selected Prose, 1966-1978*. New York: Norton.
- Rodriguez, Richard. 1983. *Hunger for Memory: The Education of Richard Rodriguez*. New York: Bantam.
- Rose, Marilyn Russell. 1987. "Hawthorne's 'Custom House,' Said's *Orientalism*, and Kogawa's *Obasan*: An Intertextual Reading of an Historical Fiction." *Dalhousie Review* 67.2/3:286-96.
- . 1988. "Politics into Art: Kogawa's *Obasan* and the Rhetoric of Fiction." *Mosaic* 21 (Spring):215-26.
- Rose, Mike. 1989/1990. *Lives on the Boundary: A Moving Account of the Struggles and Achievements of America's Educational Underclass*. New York: Penguin.
- Rowe, Karen E. 1986. "To Spin a Yarn: The Female Voice in Folklore and Fairy Tale." In *Fairy Tales and Society: Illusion, Allusion, and Paradigm*, ed. Ruth B. Bottigheimer, 53-74. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Rubenstein, Roberta. 1987. *Boundaries of the Self: Gender, Culture, Fiction*. Urbana: University of Illinois Press.
- Russ, Joanna. 1983. *How to Suppress Women's Writing*. Austin: University of Texas Press.
- Said, Edward W. 1979. *Orientalism*. New York: Vintage/Random House.
- . 1983. *The World, the Text, and the Critic*. Cambridge: Harvard University Press.
- St. Andrews, B. A. 1986. "Reclaiming a Canadian Heritage: Kogawa's *Obasan*." *International Fiction Review* 13.1:29-31.
- Saldívar, Ramón. 1990. *Chicano Narrative: The Dialectics of Difference*. Madison: University of Wisconsin Press.
- San Juan, E., Jr. 1991. "Beyond Identity Politics: The Predicament of the Asian American Writer in Late Capitalism." *American Literary History* 3.3:542-65.
- Schenck, Celeste. 1988. "All of a Piece: Women's Poetry and Autobiography." In *Life/Lines: Theorizing Women's Autobiography*, ed. Bella Brodzki and Celeste Schenck, 281-305. Ithaca: Cornell University Press.
- Schneller, Malini. 1989. "Questioning Race and Gender Definitions: Dialogic Subversions in *The Woman Warrior*." *Criticism* 31.4:421-37.
- Schweik, Susan. 1989. "The 'Pre-Poetics' of Internment: The Example of Toyo Suyemoto." *American Literary History* 1:89-109.
- Showalter, Elaine. 1982. "Feminist Criticism in the Wilderness." In *Writing and Sexual Difference*, ed. Elizabeth Abel, 9-35. Chicago: University of Chicago Press.
- Sledge, Linda Ching. 1980. "Maxine Hong Kingston's *China Men*: The Family Historian as Epic Poet." *MELUS* 7.4:3-22.
- Smith, Sidonie. 1987. "Maxine Hong Kingston's *Woman Warrior*: Filiality and Women's Autobiographical Storytelling." In *A Poetics of Women's Autobiography: Marginality and the Fictions of Self-representation*, 150-73. Bloomington: Indiana University Press.
- Smith, Valerie. 1987. *Self-discovery and Authority in Afro-American Narrative*. Cambridge: Harvard University Press.
- Sollors, Werner. 1986. *Beyond Ethnicity: Consent and Descent in American Culture*. New York: Oxford University Press.
- Sone, Monica. 1953/1979. *Nisei Daughter*. Seattle: University of Washington Press.
- Sontag, Susan. 1966. *Styles of Radical Will*. New York: Farrar, Straus.
- Spelman, Elizabeth V. 1988. *Inessential Woman: Problems of Exclusion in Feminist Thought*. Boston: Beacon.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. 1988. *In Other Worlds: Essays in Cultural Politics*. New York: Routledge.
- Stout, Janis P. 1990. *Strategies of Reticence: Silence and Meaning in the Works*

- of *Jane Austen, Willa Cather, Katherine Anne Porter, and Joan Didion*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Sue, Diane M., and David Sue. 1988. "Asian Americans." In *Experiencing and Counseling Multicultural and Diverse Populations*, ed. Nicholas A. Vacc, Joe Wittmer, and Susan B. DeVaney, 2d ed., 241-62. Muncie, Ind.: Accelerated Development.
- Sunida, Stephen H. 1989. "Asian American Literature in the 1980s: A Sampling of Studies and Works." In Nomura et al., 151-58.
- . 1991. *And the View from the Shore: Literary Traditions of Hawaii*. Seattle: University of Washington Press.
- Sunahara, Ann Gomer. 1981. *The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians during the Second World War*. Toronto: James Lorimer.
- Sundquist, Eric J. 1988. "The Japanese American Internment: A Reappraisal." *American Scholar* 58:529-47.
- Suzuki, Bob H. 1977. "Education and the Socialization of Asian Americans: A Revisionist Analysis of the 'Model Minority' Thesis." *Amerasia Journal* 4.2:23-51.
- Tajiri, Vince. 1990. Review of *Seventeen Syllables and Other Stories*, by Hisaye Yamamoto. *Amerasia Journal* 16.1:255-57.
- Takaki, Ronald. 1989. *Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans*. Boston: Little, Brown.
- Talbot, Stephen. 1990. "Talking Story: Maxine Hong Kingston Rewrites the American Dream." *Image* [magazine of the *San Francisco Examiner*], 24 June, 6-17.
- Tannen, Deborah, and Muriel Saville-Troike, eds. 1985. *Perspectives on Silence*. Norwood, N.J.: Ablex.
- Tate, Claudia. 1986. "On Black Literary Women and the Evolution of Critical Discourse." *Tulsa Studies in Women's Literature* 5.1:111-23.
- tenBroek, Jacobus, Edward N. Barnhart, and Floyd W. Mason. 1954. *Prejudice, War, and the Constitution: Japanese American Evacuation and Resettlement*. Berkeley: University of California Press.
- Tong, Benjamin R. 1971. "The Ghetto of the Mind: Notes on the Historical Psychology of Chinese America." *Amerasia Journal* 1.3:1-31.
- . 1977. "Critic of Admirer Sees Dumb Raacist." *S.F. Journal*, 11 May, 20.
- Trinh T. Minh-ha. 1989. *Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism*. Bloomington: Indiana University Press.
- . 1991. *When the Moon Waxes Red: Representation, Gender, and Cultural Politics*. New York: Routledge.
- Tsai, Shih-shan Henry. 1986. *The Chinese Experience in America*. Bloomington: Indiana University Press.
- Tsushima, Yuko. 1989. "The Silent Trader." Trans. Geraldine Harcourt. In *The Graywolf Annual Six: Stories from the Rest of the World*, ed. Scott Walker, 1-11. Saint Paul, Minn.: Graywolf Press.
- Uchida, Yoshiko. 1982. *Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family*. Seattle: University of Washington Press.
- Ueda, Makoto, ed. and trans. 1976. *Modern Japanese Haiku: An Anthology*. Toronto: University of Toronto Press.
- Venant, Elizabeth. 1990. "Atypically English." Review of *The Remains of the Day*, by Kazuo Ishiguro. *Los Angeles Times*, 8 November, E1, E18-19.
- Wakeman, Frederic, Jr. 1980. "Chinese Ghost Story." Review of *China Men*. *New York Review of Books*, 14 August, 42-45.
- Wald, Alan. 1987. "Theorizing Cultural Difference: A Critique of the 'Ethnicity School.'" *MELUS* 14.2:21-33.
- Walker, Alice. 1970. *The Third Life of Grange Copeland*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- . 1982/1983. *The Color Purple*. New York: Washington Square.
- . 1983. *In Search of Our Mothers' Gardens*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- Walker, Nancy. 1989. "Language, Irony, and Fantasy in the Contemporary Novel by Women." *LIT: Literature Interpretation Theory* 1.1-2:33-57.
- Wang, Alfred S. 1988. "Maxine Hong Kingston's Reclaiming of America: The Birthright of the Chinese American Male." *South Dakota Review* 26.1:18-29.
- Ward, J. A. 1985. *American Silences: The Realism of James Agee, Walker Evans, and Edward Hopper*. Baton Rouge: Louisiana State University Press.

- Ward, Peter W. 1982. *The Japanese in Canada*. Ottawa: Canadian Historical Association.
- Washington, Mary Helen. 1984. "'Tanning All That Anger Down': Rage and Silence in Gwendolyn Brooks's *Maud Martha*." In Gates 1984, 249-62.
- Watts, Alan W. 1957. *The Way of Zen*. New York: Pantheon.
- Wayne, Joyce. 1981. "Obasan: Drama of Nisei Nightmare." *RIKKA* 8.2:22-23.
- Weglyn, Michi 1976. *Years of Infamy: The Untold Story of America's Concentration Camps*. New York: William Morrow.
- Weizel, Patricia J. 1988. "Are 'Powerless' Communication Strategies the Japanese Norm?" *Language in Society* 17.4:555-64.
- White, Hayden. 1978. *Tropics of Discourse*. Baltimore: John Hopkins University Press.
- Willis, Gary. 1987. "Speaking the Silence: Joy Kogawa's *Obasan*." *Studies in Canadian Literature* 12.2:239-49.
- Wittig, Monique. 1969/1985. *Les Guérillères*. Trans. David Le Yay. Boston: Beacon.
- Wong, Jade Snow. 1945/1989. *Fifth Chinese Daughter*. Seattle: University of Washington Press.
- Wong, Sau-ling Cynthia. 1988. "Necessity and Extravagance in Maxine Hong Kingston's *The Woman Warrior*: Art and the Ethnic Experience." *MELUS* 15.1:3-26.
- . 1991. "Kingston's Handling of Traditional Chinese Sources." In Lim 1991, 26-36.
- . 1993. *Reading Asian American Literature: From Necessity to Extravagance*. Princeton: Princeton University Press.
- Woo, Deborah. 1990. "Maxine Hong Kingston: The Ethnic Writer and the Burden of Dual Authenticity." *Amerasia Journal* 16.1:173-200.
- Yaeger, Patricia. 1988. *Honey-Mad Women: Emancipatory Strategies in Women's Writing*. New York: Columbia University Press.
- Yalom, Marilyn. 1985. *Maternity, Mortality, and the Literature of Madness*. University Park: Pennsylvania State University Press.
- Yamamoto [DeSoto], Hisaye. 1941. "Et Ego in America Vixi." *Current Life*, June, 13.

- . 1976a. "... I Still Carry It Around." *RIKKA* 3.4:11-19.
- . "Writing." 1976b. *Amerasia Journal* 3.2:126-33.
- . 1988. *Seventeen Syllables and Other Stories*. Latham, N.Y.: Kitchen Table Press.
- Yamauchi, Wakako. 1966/1983. "And the Soul Shall Dance." In Chin et al., 232-39.
- . 1976. "Songs My Mother Taught Me." *Amerasia Journal* 3.2:63-73.
- . 1977. "Handkerchief." *Amerasia Journal* 4.1:143-50.
- . 1979. "The Poetry of the Issei on the American Relocation Experience." In *CALAFIA: The California Poetry*, ed. Ishmael Reed, lxxi-lxxvii. Berkeley: Y'Bird Books.
- Yanagisako, Sylvia Junko. 1985. *Transforming the Past: Tradition and Kinship among Japanese Americans*. Stanford: Stanford University Press.
- Yarborough, Richard. 1986. "Breaking the 'Codes of Americanness.'" *American Quarterly* 38.5:860-65.
- Yasuda, Kenneth. 1957. *The Japanese Haiku: Its Essential Nature, History, and Possibilities in English, with Selected Examples*. Rutland, Vt.: Charles E. Tuttle.
- Yim, Susan. 1984. "In a Hailstorm of Words." *Honolulu Star-Bulletin*, Evening ed., 20 September, D1, D8.
- Yogi, Stan. 1988. "Legacies Revealed: Uncovering Buried Plots in the Stories of Hisaye Yamamoto and Wakako Yamauchi." M.A. thesis, University of California, Berkeley.
- . 1989. "Legacies Revealed: Uncovering Buried Plots in the Stories of Hisaye Yamamoto." *Studies in American Fiction* 17.2:169-81.

著者紹介

キングコク・チャン King-Kok Cheung

キングコク・チャン King-Kok Cheung
カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校英文科教授。Ph.D. (カリフォルニア州立大学バークレー校)。Asian American Literature: An Annotated Bibliography (共著 1988)、An Interethnic Companion to Asian American Literature (編著者 1996) など、アメリカのエスニック文学、アジア系アメリカ文学の先駆的研究で著名である。特に、本書『アジア系女性作家論—沈黙の声を聴く』(1993) は、エスニシティやジェンダーの問題を学際的視点から問い直したアジア系女性作家論として高く評価され、現在でもアジア系アメリカ文学の重要な研究書として位置づけられている。2013年春に、優秀な大学教師として The C. Doris and Toshio Hoshide Distinguished Teaching Prize in Asian American Studies at UCLA を受賞した。

アジア系女性作家論——沈黙の声を聴く

2015年7月15日 第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

著者 キングコク・チャン

訳者 和泉 邦子

小松 恭代

中根 久代



発行者 竹内 淳夫

発行所 株式会社 彩流社

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2

電話 03 (3234) 5931 FAX 03 (3234) 5932

http://www.sairyusha.co.jp

e-mail:sairyusha@sairyusha.co.jp

Printed in Japan, 2015

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

ISBN978-4-7791-2142-5 C00098

本書は日本出版著作権協会 (JPCOA) が委託管理する著作物です。複製 (コピー)・複製、その他著作物の利用については、事前にJPCOA下さい。 (03-3812-9424, e-mail:info@jpcoa.jp, net) の許諾を得て下さい。なお、無断でのコピー、スキャン、デジタル化等の複製は著作権法上での例外を除き、著作権法違反となります。

訳者紹介

和泉 邦子 (いずみ くにこ)

金沢大学教授。論文『Governing the Governess: The Turn of the Screw における社会的、歴史的コンテクスト』、『英文学研究』(1990)、『英語青年』特集『アメリカ小説を支える(女)たち』、『男』の闘い、『女』の闘い…闘いのフロンティアとMaxine Hong Kingston』(2005)、共著『国際学への扉』(2008)、共著『英語圏女性作家のジェンダー・エスニシティ表象』(彩流社、2013)他。

小松 恭代 (こまつ やすよ)

石川工業高等専門学校教授。博士 (文学)。論文『Julie Otsuka のWhen the Emperor Was Divine を日系少年のカウンター・ベルドワンクスロンとして読む』、『New Perspective』(2014)、『Transformation of the Desert Representation: from the Internment to a Symbol of Multicultural Society in Japanese-American Literature』、『金沢大学』、『人間社会環境研究』(2013)、共著『英語圏女性作家のジェンダー・エスニシティ表象』(彩流社、2013)他。

中根 久代 (なかね ひさよ)

福井医療短期大学准教授。論文『Tsuka が暗示する多文化主義国家主体像—ナオミのライデンネイテイ再生を通して』、『東海英米文学』(2008)、『Sophia Jane, or The Grandmother, at the Crossing Point of Porter's Paradoxical Wishes』、『東海英米文学』(2010)、共著『英語圏女性作家のジェンダー・エスニシティ表象』(彩流社、2013)他。

英語圏女性作家のジェンダー・エスニテイ表象 4-7791-1883-8C0098(13-05)

境界から検証する近代のまなざし

和泉邦子 編著

「(女)が置かれた権造的他者という位置ゆえに生ずる矛盾と葛藤…」近代国家と近代核家族の
パフオーマンスへの批判的洞察！ジェンダー／セクシュアリテイ表象、日系というエスニ
テイ表象、メキシコ及びアメリカとカナダのエスニシティ表象…。四六判上製 2500円＋税

アメリカ・マイリテイ女性文学と母性 4-7791-1275-1 C0098(07-06)

キングストン、モリスン、シルコウ

杉山直子 著

《母親の声》を積極的に作品に取り入れた現代アメリカを代表する3人のマイリテイ女性作家、
マキシン・ホン・キングストン、トニ・モリスン、レスリー・マーモン・シルコウの多様性に
満ちた作品の魅力に迫る。四六判上製 2800円＋税

コーラス・オヴ・マツシユルム 4-7791-2131-9 C0097(15-06)

ヒロミ・ゴトー 著, 増谷松樹 訳

祖母と孫娘が時空を超えて語り出す——マツシユルムの手法で描く、日系移民のアイ
デンティテイと家族の物語。コモンウェルス処女作賞・加日文学賞を受賞した「日系移民文学」
の傑作！ヒロミ・ゴトー氏、来日記念出版。四六判上製 2800円＋税

モンキーブリッジ 4-7791-1446-3 C0097(09-10)

ラン・カオ 著, 麻生享志 訳

これは新たな戦争小説の登場である！アメリカが初めて敗北したベトナム戦争の裏側で、
ベトナム系移民の人々にまだに続く「心の戦争」——アメリカの生活のなかに参み出る
戦争の影を、母娘の心の葛藤を通して描く本格的な作品。四六判上製 2000円＋税

抑留まで戦間期の在米日系人 4-7791-1943-9 C0022(13-11)

ユウジ・イチオカ (市岡雄二) 著, ゴードン・H・チャン 編他

日本人移民の歴史は「敵対的な土地で生き抜くのに苦労した少数派人種の歴史」であって「成
功物語どころではない」。1960年代に既存の日系アメリカ人史に明確に異議を唱え、「パワ
ラム・シフト」促した歴史家の選稿選集。A 5判上製 3600円＋税

ユリ・コチヤマ回顧録 4-7791-1545-5 C0023(10-08)

日系アメリカ人女性 人種・連帯を語り継ぐ

篠田佐多江、増田直子、森田幸夫 訳

大戦中の収容所暮らしから子育て、1960年代の反戦運動、マルコムXとの交流、マイリテイ
政治犯の支援、キューバ訪問、ベルーの反体制運動との連帯……。アメリカの日系人社会が
生んだ希有な社会活動家の生き方の記録。四六判上製 2800円＋税